

日向市所在

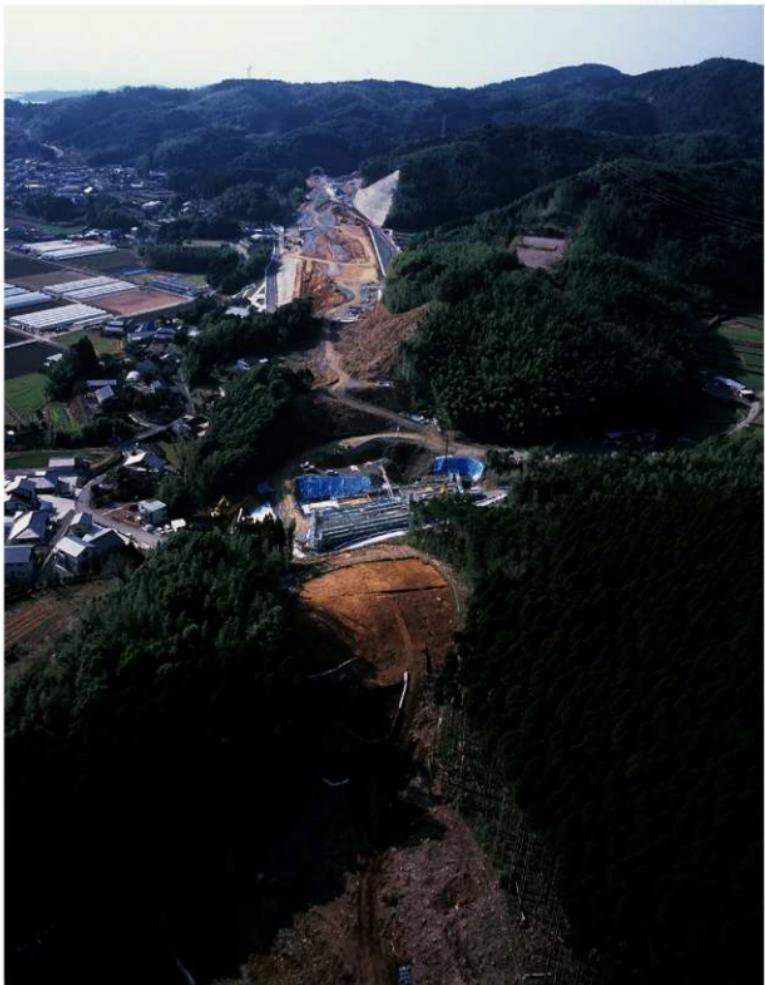
おか  
**岡遺跡 (第16次調査)**

まごめ  
**馬込遺跡第2地点**

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12



卷頭図版 1



馬込遺跡第 2 地点から岡遺跡方面を臨む（北から）

卷頭図版 2



馬込遺跡第 2 地点 弥生土器

## 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成 20 年度から実施して参りました。本書は、平成 24 年度に実施した日向市大字平岩に所在する岡遺跡（第 16 次調査）と馬込遺跡第 2 地点の発掘調査の成果を記載しております。

今回報告する岡遺跡（第 16 次調査）では、後期旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺構・遺物が確認されました。主に後期旧石器時代では縄群、縄文時代早期では集石遺構や炉穴などの遺構が検出されています。

馬込遺跡第 2 地点では、主に縄文時代早期の集石遺構、炉穴、土坑、弥生時代の遺構などが検出されています。

今回の調査で得られた多くの成果が、今後、当地域の歴史を解明する上で非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 向井 大藏

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い、平成24年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した日向市大字平岩所在の岡遺跡（第16次調査）、馬込遺跡第2地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
  - 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により、宮崎県教育委員会が調査主体となり、同県埋蔵文化財センターが実施した。
  - 3 岡遺跡（第1～17次調査）は、高森川を挟み北側の字名が岡、南側の字名が谷口・平尾である。『日向市遺跡詳細分布調査報告書』1985によると、岡遺跡の所在地は遺跡番号6005の岡遺跡と6006の平尾遺跡に分けられる。このことから高森川より南に位置する岡遺跡（第3・4・5・7・12・14・15・17次調査）は、遺跡名を平尾遺跡と変更する。
  - 4 現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。

基準点	グリッド杭等の設置
馬込遺跡第2地点	・・・・・・・・(株)ケイディエム
空中写真撮影	
馬込遺跡第2地点	・・・・・・・・(有)スカイサーべイ九州
  - 5 現地での遺構図作成・写真撮影については、各遺跡の担当者が行った。
  - 6 整理作業は、各遺跡の担当者が、整理作業員の協力を得て宮崎県埋蔵文化財センターで行った。なお、一部の石器実測及びトレースについては、岡遺跡（第16次調査）、馬込遺跡第2地点とともに（株）バスコへそれぞれ業務委託した。
  - 7 自然科学分析として、放射性炭素年代測定・樹種同定を（株）古環境研究所に委託し、その成果報告については、二方和也・新谷清が編集して掲載した。
  - 8 本文の執筆は分担して行い、第I章は松林豊樹・二方和也・新谷清、第II章は二方和也、第III章は新谷清・飯田博之、第IV章は長津宗重が執筆した。
  - 9 本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、二方和也が編集した。
  - 10 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
  - 11 出土した陶磁器の分類については、埋蔵文化財センター福田泰典、柳田晴子の協力を得た。

凡 例

- 1 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に掲載記述した。
  - 2 本書で「尾鈴山溶結凝灰岩」としたものは、「尾鈴山酸性岩類」の主体をなす溶結凝灰岩(WT1・WT2)を示す。遺跡で認められる「尾鈴山酸性岩類」には、他に花崗閃緑斑岩・火山角礫岩などが含まれるが、遺物や遺構の一部として「尾鈴山酸性岩類」が利用される場合、厳密な岩石名の特定が困難なことが多い。このため、本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」と記載した資料には、溶結凝灰岩を主体としつつも、他の「尾鈴山酸性岩類」を含む可能性がある。
  - 3 本書に使用した主な略記号は次の通りである。

SC = 土坑	SE = 溝状遺構	SI = 繼群・集石遺構	SP = 炉穴	SZ = 性格不明遺構
Gr = グリッド	Tr = トレンチ			
  - 4 本書で使用した標高は海拔高であり、方位は座標北(G.N.)を基本として一部の平面図・遺構実測図は磁北(M.N.)を用いた。
  - 5 石器の節理面は1点鎖線で、敲打痕の認められる部分は波線の○で表示した。
  - 6 石器実測図への表現として以下のようにした。  
※図面上で明示できない範囲については矢印とコ・ス・マ・ト・ビで示した。  
コ = 敲打痕 ス = 磨痕 マ = 摩擦 ト = 破痕 ビ = 微細剥離  
※実測図中の網掛けは磨面・底面20%、磨減痕10%、強い磨減痕30%、ガジリは黒塗りで表す。
  - 7 遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。

# 本文目次

## 第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第4節 調査の概要	7

## 第Ⅱ章 岡遺跡（第16次調査）の成果

第1節 調査の方法と経過	11
第2節 後期旧石器時代の遺構と遺物	16
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物	25
第4節 その他の時代の遺構と遺物	38
第5節 自然科学分析	41
第6節 小結	45

## 第Ⅲ章 馬込遺跡第2地点の成果

第1節 調査の方法と経過	49
第2節 旧石器時代の遺物	53
第3節 縄文時代の遺構と遺物	54
第4節 弥生時代の遺構と遺物	88
第5節 その他の時代の遺構と遺物	96
第6節 自然科学分析	98
第7節 小結	102

## 第Ⅳ章 東九州自動車道建設に伴う調査成果

報告書抄録

卷末

# 挿図目次

## 第Ⅰ章 はじめに

- 第1図 東九州自動車道（日向～都農間）  
関連遺跡位置図 ······ 3  
第2図 岡遺跡・馬込遺跡及び  
周辺遺跡分布図 ······ 5  
第3図 岡遺跡・平尾遺跡調査区 ······ 7  
第4図 馬込遺跡調査区 ······ 9  
第5図 岡遺跡・馬込遺跡及び周辺地形図 ··· 10

## 第Ⅱ章 岡遺跡（第16次調査）の成果

- 第6図 岡遺跡 第9・16・6次調査区  
基本土層比較図 ······ 13  
第7図 土層断面図 ······ 14  
第8図 遺構分布図 ······ 15  
第9図 後期旧石器時代の遺構・遺物分布図 ··· 16  
第10図 磚群実測図 ······ 17  
第11図 磚群・散磚分布図及び接合状況 ······ 19  
第12図 小グリッド重量別個体数 ······ 20  
第13図 後期旧石器時代石器実測図(1) ······ 22  
第14図 後期旧石器時代石器実測図(2) ······ 23  
第15図 後期旧石器時代石器実測図(3) ······ 24  
第16図 繩文時代早期の遺構・遺物分布図 ····· 25  
第17図 繩文時代早期集石遺構  
・ 土坑実測図 ······ 26  
第18図 繩文時代早期SP1・2・3実測図 ······ 28  
第19図 繩文時代早期SP4~8・9実測図 ······ 29  
第20図 遺構内出土遺物実測図 ······ 31  
第21図 繩文時代早期土器実測図 ······ 31  
第22図 繩文時代早期石器実測図(1) ······ 33  
第23図 繩文時代早期石器実測図(2) ······ 34  
第24図 繩文時代早期石器実測図(3) ······ 35  
第25図 繩文時代早期石器実測図(4) ······ 36  
第26図 その他の時代遺構分布図 ······ 38  
第27図 その他の時代溝状遺構  
・ 土坑実測図 ······ 39

- 第28図 その他の時代陶磁器実測図 ······ 40  
第29図 历年校正結果 ······ 42  
第30図 炉穴出土の炭化材 ······ 44  
第31図 岡遺跡・平尾遺跡調査区全体  
遺構分布図 ······ 47・48  
第32図 岡遺跡・平尾遺跡調査区全体  
縄文時代早期遺構分布図 ······ 47・48  
第33図 岡遺跡・平尾遺跡調査区全体  
中世～近世遺構分布図 ······ 47・48

## 第Ⅲ章 馬込遺跡第2地点の成果

- 第34図 調査区グリッド配置図 ······ 51  
第35図 基本土層図 ······ 52  
第36図 旧石器時代石器実測図 ······ 53  
第37図 縄文時代遺構・遺物分布図 ······ 54  
第38図 集石遺構分布図 ······ 56  
第39図 SI1実測図 ······ 57  
第40図 集石遺構実測図 ······ 58  
第41図 S12~S17実測図 ······ 59  
第42図 S18・S19実測図 ······ 60  
第43図 S110・S111実測図 ······ 61  
第44図 S112~S122実測図(1) ······ 62  
第45図 S112~S122実測図(2) ······ 63  
第46図 S123・S124実測図 ······ 65  
第47図 S125~S128実測図 ······ 66  
第48図 S129・S130実測図 ······ 67  
第49図 S131~S134実測図 ······ 68  
第50図 S135実測図 ······ 69  
第51図 土坑・炉穴実測図 ······ 69  
第52図 縄文時代早期土器実測図 ······ 71  
第53図 縄文時代晚期土器実測図 ······ 72  
第54図 縄文時代石器実測図(1) ······ 75  
第55図 縄文時代石器実測図(2) ······ 76  
第56図 縄文時代石器実測図(3) ······ 77  
第57図 縄文時代石器実測図(4) ······ 78

# 表目次

第58図	縄文時代石器実測図(5)	79
第59図	縄文時代石器実測図(6)	80
第60図	縄文時代石器実測図(7)	81
第61図	縄文時代石器実測図(8)	82
第62図	縄文時代石器実測図(9)	83
第63図	縄文時代石器実測図(10)	84
第64図	縄文時代石器実測図(11)	85
第65図	弥生時代以降の遺構分布図	88
第66図	SZ1実測図・土層断面図(1)	89
第67図	SZ1土層断面図(2)	90
第68図	SZ1埋納土坑平面図	91
第69図	SZ1埋納土坑出土遺物実測図	91
第70図	SZ1出土弥生土器実測図(1)	93
第71図	SZ1出土弥生土器実測図(2)	94
第72図	SZ1出土弥生土器実測図(3)	95
第73図	溝状遺構・竪穴状遺構実測図 ・土層断面図	97
第74図	竪穴状遺構遺物・青磁実測図	98
第75図	曆年較正結果	101
第76図	馬込遺跡第2地点の炭化材	101

## 第IV章 東九州自動車道建設に伴う 調査成果

第77図	東九州自動車道(県境~北川間) 関連遺跡位置図	108
第78図	東九州自動車道(門川~都農間) 関連遺跡位置図	110
第79図	東九州自動車道(都農~西都間) 関連遺跡位置図	112
第80図	東九州自動車道(西都~清武間) 関連遺跡位置図	114

## 第I章はじめに

第1表	東九州自動車道(日向~都農間) 関連遺跡一覧表	4
第2表	調査別遺跡対照表	8

## 第II章 岡遺跡第16次調査の成果

第3表	砾群一覧表	17
第4表	IV層散在重量別個体数	21
第5表	後期旧石器時代石器計測表	24
第6表	縄文時代早期集石遺構一覧表	30
第7表	縄文時代早期炉穴一覧表	30
第8表	縄文時代早期土器観察表	37
第9表	縄文時代早期石器計測表	37
第10表	その他の時代陶磁器観察表	40
第11表	測定試料、前処理・調整法 および測定法	42
第12表	放射性炭素年代測定法結果	42
第13表	樹種同定結果	44

## 第III章 馬込遺跡第2地点の成果

第14表	旧石器時代石器計測表	53
第15表	縄文時代集石遺構一覧表	69
第16表	縄文土器観察表	86
第17表	縄文時代石器計測表	87
第18表	弥生土器観察表(1)	95
第19表	弥生土器観察表(2)	96
第20表	測定試料、前処理・調整法 および測定法	100
第21表	放射性炭素年代測定法結果	100
第22表	樹種同定結果	100

## 第IV章 東九州自動車道建設に伴う 調査成果

第23表	東九州自動車道 調査成果一覧表	126~132
第24表	東九州自動車道(県境~清武間)発掘 調査に伴う報告書刊行一覧	133~134

# 写真図版

巻頭図版 1 馬込遺跡第2地点から

　岡遺跡方面を望む（北から）

巻頭図版 2 馬込遺跡第2地点 弥生土器

図版 1 岡遺跡第16次調査区 ······ 137  
　調査区全景、作業風景、Tr1・2・3土層断面

図版 2 岡遺跡第16次調査区 ······ 138  
　VI層散礫、SI1、SI2、SI3、SI4、

SP2掩土検出、SP1・2・3完掘

図版 3 岡遺跡第16次調査区 ······ 139  
　SP4~8完掘、SP9、SI5、SI6、SI7、

II層下段完掘、SE2完掘、SC3完掘

図版 4 岡遺跡第16次調査区 ······ 140  
　後期旧石器時代石器

図版 5 岡遺跡第16次調査区 ······ 141  
　炉穴（第2群）出土遺物、縄文早期土器、

縄文早期石器30~60

図版 6 岡遺跡第16次調査区 ······ 142  
　縄文時代早期石器61~76、陶磁器

図版 7 馬込遺跡第2地点 ······ 143  
　調査区全景、調査区、作業風景

図版 8 馬込遺跡第2地点 ······ 144  
　土層断面、散礫、SI1、SI1完掘、SI2~4

SI5~7、SI5~7配石

図版 9 馬込遺跡第2地点 ······ 145  
　SI8、SI9、SI10~11、SI12~22、

SI12~SI22完掘

図版10 馬込遺跡第2地点 ······ 146  
　SI12~SI22配石、SI24、SI24配石、

SI23~SI24完掘、SI25、SI26~SI28、

SI26~SI28配石・SI26~SI28完掘

図版11 馬込遺跡第2地点 ······ 147  
　SI29、SI30、SI31~SI32、SI31~SI32完掘、

SI33、SI34、SI35、SI36

図版12 馬込遺跡第2地点 ······ 148  
　SI37~SI40、SP1完掘、SC1、SZ1、

埋納土坑出土遺物

図版13 馬込遺跡第2地点 ······ 149  
　SZ1土層断面図、SZ1完掘、SE1、SE1・堅穴状遺構

図版14 馬込遺跡第2地点 ······ 150  
　旧石器時代石器、縄文時代早期石器(1)~(5)

図版15 馬込遺跡第2地点 ······ 151  
　縄文時代早期石器(6)~(13)

図版16 馬込遺跡第2地点 ······ 152  
　縄文時代早期石器(14)~(15)、縄文時代早期土器

図版17 馬込遺跡第2地点 ······ 153  
　縄文時代晚期土器、SZ1埋納土坑出土遺物(1)~(2)

図版18 馬込遺跡第2地点 ······ 154  
　弥生土器(1)~(8)

図版19 馬込遺跡第2地点 ······ 155  
　弥生土器(9)~(14)

図版20 馬込遺跡第2地点 ······ 156  
　弥生土器(15)~(21)

図版21 馬込遺跡第2地点 ······ 157  
　弥生土器(22)~(29)

図版21 馬込遺跡第2地点 ······ 158  
　弥生土器(30)~(37)、青磁、堅穴状遺構出土台石

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点として大分・宮崎両県の東海岸部を経由し鹿児島県鹿児島市に至る総延長436kmの自動車専用道路である。宮崎県内では延岡～清武間が平成元年2月に基本計画決定されて以降、平成13年3月に西都～清武間、平成22年7月に高鍋～西都間、平成22年12月に門川～日向間の供用が開始されている。現在、上記を除く各区間において、有料道路方式と新直轄方式の併用により、道路建設事業が進行中である。

岡遺跡・馬込遺跡が所在する日向市は東九州自動車道の日向～都農間に含まれ、平成9年3月に整備計画区間（門川～西都間）が決定された。平成10年12月には門川～都農間34kmについて施行命令が発令され、事業が本格化している。

宮崎県教育委員会では、国の補助を得て、平成3年度に西都～清武間、平成6年度に延岡～西都間及び延岡道路、平成9年度に清武～日南間を対象とした広域的な分布調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の周知化を図るとともに各区間にに関する路線協議を進めた。平成17年度には、日向～都農間の計画路線19.7km区間を対象として、更に詳細な分布調査を実施し、306,700m<sup>2</sup>の調査対象面積を道路公団（現西日本高速道路株式会社）に提示した。その後、暫定二車線化や工法変更による対象面積の変更等協議を重ねた結果、道路建設によって影響を受ける32遺跡261,400m<sup>2</sup>について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。平成20年7月には西日本高速道路株式会社九州支社長と宮崎県知事の間で『埋蔵文化財発掘調査協定書』が締結され、同年から調査に着手し、平成25年3月末で調査は全て終了した。

岡遺跡は調査対象面積が40,000m<sup>2</sup>と広く、用地買収や家屋移転等の関係から全面的な調査は不可能であったため、ある程度まとまった面積が確保できた時点で、細切れに調査を実施している。平成22年1月に第1次調査を開始し、平成24年5月の第17次調査で全ての調査を終了している。

馬込遺跡の第1地点と第2地点は高速道路の工事状況や用地買収の状況に応じて細切れに調査を実施した。第1地点は平成22年5月に第1次調査を開始し、平成24年11月までに調査を終了している。第2地点は平成24年11月に第1次調査を開始し、平成25年3月までに調査を終了している。馬込遺跡第2地点第2次調査の終了とともに、東九州自動車道（日向～都農間）の遺跡の発掘調査のすべてを終了した（第1図、第1表）。

なお平成24年度に行われた調査の詳細については、第4節を参照されたい。

## 第2節 調査の組織

岡遺跡の調査・整理報告作成に係る組織については、平成23年度に刊行された『宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第212集』「岡遺跡第Ⅲ章」、平成24年度に刊行された『宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第223集』「岡遺跡第Ⅰ章第2節」において第15次調査までの組織を明記している。

ここでは、平成24年度の第16次調査、第17次調査及び馬込遺跡の組織を示す。

事業主体 西日本高速道路株式会社

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 飛田 洋（平成24・25年度）

教育次長 高原みゆき（平成24・25年度）

長濱美津哉（平成24年度）

山本真司（平成24年度）

西立野康弘（平成25年度）

中野通彦（平成25年度）

事業調整 宮崎県教育庁文化財課

文化財課長 田方浩二（平成24・25年度）

課長補佐 壱岐 進（平成24・25年度）

主幹兼埋蔵文化財担当リーダー

主幹 谷口武範（平成24・25年度）

主査 今塙屋毅行（平成24・25年度）

調査実施 宮崎県埋蔵文化財センター

所長 北郷泰道（平成24年度）

向井大藏（平成25年度）

副所長	佐々木真司	(平成24年度)
	長津宗重	(平成25年度)
総務課長	坂上恒俊	(平成24・25年度)
調査第一課長	長津宗重	(平成24・25年度)
総務担当リーダー		
副主幹	高園寿恵	(平成24・25年度)
調査第一担当リーダー		
主幹	飯田博之	(平成24・25年度)

#### 岡遺跡

(第16次調査)

調査第一課 調査第一担当

主任主事	二方和也	(平成24年度)
主事	大嶋昭海	(平成24年度)
主査	日高広人	(平成24年度)

(第17次調査)

調査第一課 調査第一担当

主査	新谷 清	(平成24年度)
主事	中川みな子	(平成24年度)
主査	日高広人	(平成24年度)

#### 馬込遺跡第1地点

(第4次調査)

調査第一課 調査第一担当

主査	新谷 清	(平成24年度)
主査	竹下昭彦	(平成24年度)

#### 馬込遺跡第2地点

(第1次調査)

主査	日高広人	(平成24年度)
主査	松浦朋彦	(平成24年度)

(第2次調査)

主査	新谷 清	(平成24年度)
主事	大嶋昭海	(平成24年度)
主査	竹下昭彦	(平成24年度)
主査	日高広人	(平成24年度)

(整理作業及び報告書作成)

主任主事	二方和也	(平成24・25年度)
主査	新谷 清	(平成24・25年度)
主事	大嶋昭海	(平成24年度)
主査	日高広人	(平成24年度)
主査	柳田晴子	(平成24年度)

主幹	飯田博之	(平成25年度)
主査	橋本英俊	(平成25年度)
主査	松浦朋彦	(平成25年度)
主事	沖野 誠	(平成25年度)

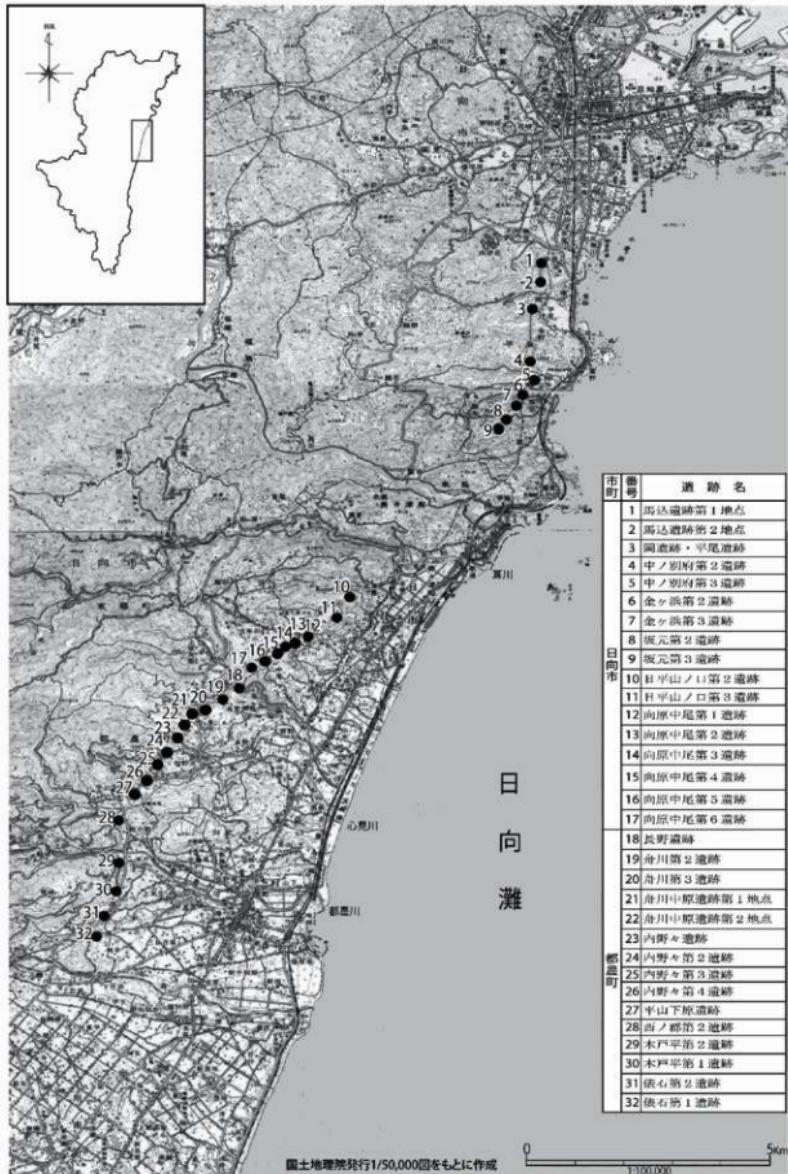
### 第3節 遺跡の位置と環境

#### 3-1. 地理的環境

岡遺跡・馬込遺跡は、日向市大字平岩に所在する。日向市は宮崎県の北東部に位置し、東は日向灘を臨み、西は九州山地が海岸近くまで迫る起伏に富んだ地形を呈する。海岸線の多くは入り江の多い沈水海岸の様相を呈しており、美々津や細島など、古くから良港として利用されている。現在の日向市街地が広がる日知屋から財光寺付近の低地は、中央を東流する塩見川による開析や完新世の海成冲積等によって形成されたもので、財光寺には小倉ヶ浜と平行する数条の自然堤防がみられる。この冲積低地を取り囲むように迫る沈水型山麓線の据部には狭小な海岸段丘がみられる。市内の大部分を山地が占め、海岸線の直近まで迫り、平野や扇状地は極端に狭く散在的である。陸地の基盤にあたるのは、主に四万十累層群と尾鈴山酸性岩類である。日向層群は、それまで海底にあったものが新生代古第3紀～新第3紀にかけて陸地化したもので、砂岩、泥岩、頁岩から構成されている。一方、尾鈴山酸性岩類は、流紋岩、石英斑岩、凝灰岩等の特徴を示しており、日向岬一帯～耳川北城の海岸線では波蝕を受けた柱状節理を見ることができる。この2つの基盤は、東郷地区の坪谷から塩見地区の坪谷川、耳川、塩見川南岸に続く遠見山断層線によって分かれ、この断層の北部が四十万累層群、南部は尾鈴山酸性岩類であり、岡遺跡・馬込遺跡が所在する平岩地区は、断層よりも南部に位置している。

岡遺跡は、標高約20m～30mの海岸段丘上に立地しており、遺跡の南側には吉野川の支流である高森川が遺跡を横切るように流れている。

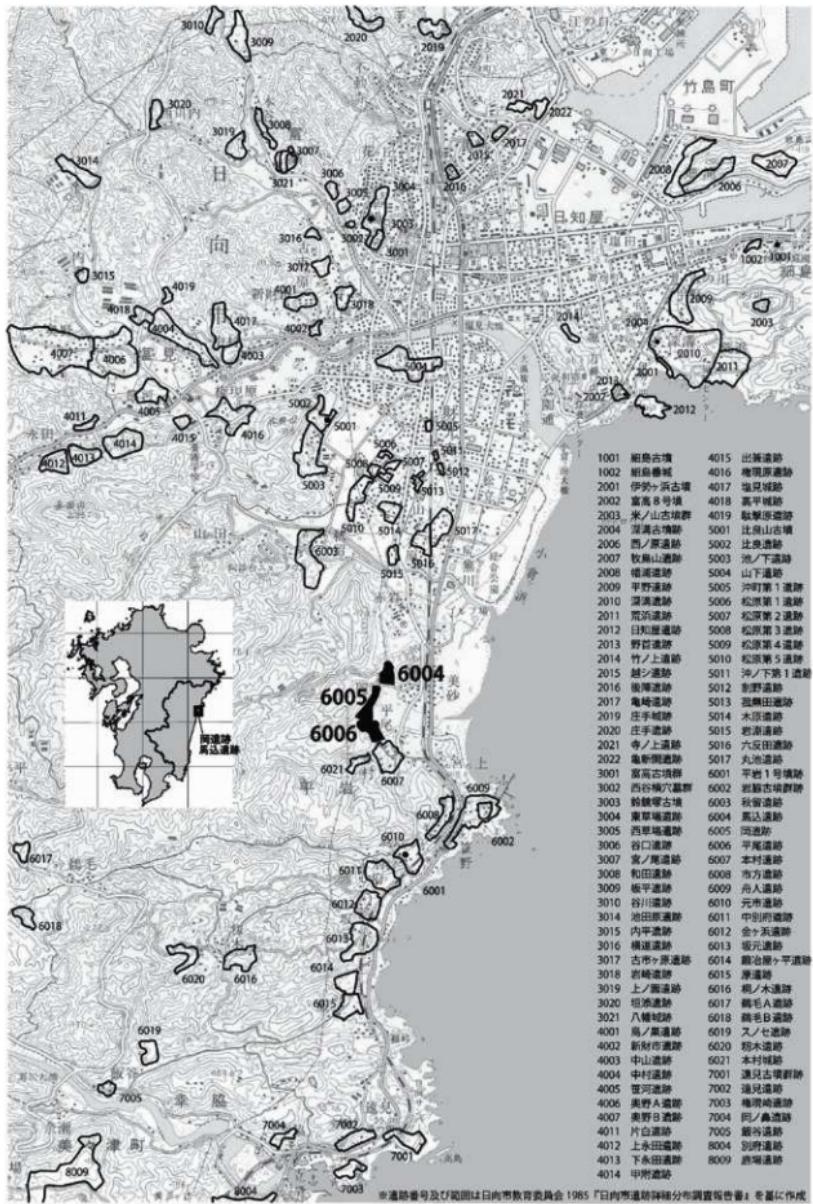
馬込遺跡は東側に日向灘を望み、北の赤石川や南の馬込川に挟まれた場所に位置しており、標高179.7mの山塊から南東に派生する標高約52mの丘陵上と北側の平坦地により構成された遺跡である。



第1図 東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図

第1表 東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡一覧表

古文 書 類 名	遺 跡 名	所 在 地	遺跡面積 (m <sup>2</sup> )	遺跡深度 (m)	層 度	種別	主な遺構・遺物の年代	調査期間	
								西	東
1	馬込遺跡第1地点	日向市大字平岩字馬込・字清水ノ元	7,900		139.22 70.22 150.23 30.24 200.24	1次 2次 3次 4次 1次	-	H22. 5. 17 ~ H22. 5. 21 H22. 12. 20 H22. 11. 21 ~ H22. 11. 22 H22. 11. 12 ~ H24. 11. 13 H24. 11. 12 ~ H24. 11. 21 H24. 12. 21 ~ H25. 3. 29	
2	馬込遺跡第2地点	日向市大字平岩字馬込	1,800		1,600.24	2次	縄文〔早・晩〕、弥生〔終末〕	H24. 12. 21 ~ H25. 3. 29	
3	岡遺跡 平尾遺跡	日向市大字平岩字岡・字谷口・字三船歩・字平尾	40,000		140.21 120.21 400.21 100.22 60.22 1,870.22 3,360.22 1,000.23 2,100.23 60.23 150.23 20.23 1,230.23 100.23 1,000.23 1,000.24 120.24	1次 2次 3次 4次 5次 6次 7次 8次 9次 10次 11次 12次 13次 14次 15次 16次 17次	古石器、縄文〔早・晩〕、弥生、古墳 古代、近世	H22. 1. 14 ~ H22. 1. 15 H22. 2. 16 ~ H22. 2. 18 H22. 3. 10 ~ H22. 3. 11 H22. 6. 7 ~ H22. 6. 8 H22. 6. 17 ~ H22. 6. 9 H22. 7. 1 ~ H22. 7. 25 H22. 12. 21 ~ H22. 12. 22 H22. 12. 22 ~ H23. 11. 7 H23. 4. 22 H23. 7. 6 ~ H23. 7. 8 H23. 8. 1 ~ H23. 8. 3 H23. 8. 29 ~ H23. 11. 28 H23. 9. 6 ~ H23. 9. 7 H23. 9. 26 ~ H23. 12. 27 H24. 4. 9 ~ H24. 8. 10 H24. 5. 8	
4	中ノ原府第2遺跡	日向市大字平岩字コウ地	200		60.21	1次	-	H21. 12. 16	
5	中ノ原府第3遺跡	日向市大字平岩字ミコノ子	1,900		80.22	1次	-	H22. 9. 29	
6	金ヶ浜第2遺跡	日向市大字平岩字金ヶ浜・字加添	300		30.21	1次	古石器、縄文、古墳以降	H21. 12. 15	
7	金ヶ浜第3遺跡	日向市大字平岩字加添	200		10.22	2次	-	H22. 5. 25	
8	坂元第2遺跡	日向市大字平岩字ナガソ・字中高島	2,000		25.21 10.21 50.22	1次 2次 2次	縄文〔早〕、弥生、古墳	H21. 12. 14 ~ H23. 6. 3	
9	坂元第3遺跡	日向市大字平岩字中高島	200		15.22	1次	-	H21. 12. 14	
10	日平山ノ口第2遺跡	日向市東郷町山陰字日平	1,600		25.20	鹿頭骨分	-	H20. 11. 5 ~ H20. 11. 10	
11	日平山ノ口第3遺跡	日向市東郷町山陰字日平	4,300		10.20	鹿頭骨分	-	H21. 3. 4 ~ H21. 3. 19	
12	向原中尾第1遺跡	日向市東郷町山陰字山ノ口	9,300		140.20 1,025.22	1次 2次	古石器、縄文〔晚〕、弥生、古墳 近世	H22. 16. 2 ~ H21. 1. 6 H22. 5. 28 ~ H22. 12. 24	
13	向原中尾第2遺跡	日向市東郷町山陰字山ノ口	2,400		1,200.22 500.24	2次 2次	古石器、縄文〔早〕、弥生	H22. 9. 2 ~ H22. 12. 28	
14	向原中尾第3遺跡	日向市東郷町山陰字山ノ口・字向ノ原	6,500		280.20	1次	弥生、古墳	H20. 12. 2 ~ H20. 12. 15	
15	向原中尾第4遺跡	日向市東郷町山陰字山ノ口	11,000		60.21 5,430.22	1次 3次	古石器、縄文〔早〕	H20. 11. 17 ~ H20. 12. 1 H22. 4. 26 ~ H22. 12. 28	
16	向原中尾第5遺跡	日向市東郷町山陰字山ノ口	2,100		40.24	1次	鹿頭骨分	H20. 11. 17 ~ H20. 12. 1	
17	向原中尾第6遺跡	日向市東郷町山陰字山ノ口	2,300		200.24	1次	古石器、縄文〔早〕	H24. 4. 21 ~ H24. 10. 5	
18	長野遺跡	都農町大字北宇佐道谷	8,400		100.23 4,700.24	1次 2次	古石器、縄文〔早〕、弥生	H22. 5. 2 ~ H23. 11. 2	
19	舟川第2遺跡	都農町大字北宇佐道谷・舟川	10,600		400.21 3,000.21	1次 2次	古石器、縄文〔早〕	H21. 8. 5 ~ H21. 8. 31	
20	舟川第3遺跡	都農町大字北宇佐舟川	16,800		350.22	1次	古石器、縄文〔晚〕、弥生	H22. 4. 26 ~ H22. 12. 28	
21	舟川中原遺跡第1地点	都農町大字北宇佐舟川中原	2,600		15.22	1次	古石器、縄文〔早〕	H22. 4. 21 ~ H24. 10. 5	
22	舟川中原遺跡第2地点	都農町大字北宇佐舟川中原・字舟川尾立	5,000		70.20 45.21	2次 2次	古石器、縄文、古墳	H21. 9. 8 ~ H21. 9. 10	
23	内野々遺跡	都農町大字北宇佐内野後原・字西尾立・字樺谷	14,700		4,700.21 20.22	1次 2次	縄文〔早・中・後〕、弥生	H22. 4. 23 ~ H22. 4. 26	
24	内野々第2遺跡	都農町大字北宇佐内野後原	6,300		4,100.21	1次	古石器、縄文〔早・後〕	H21. 1. 13 ~ H21. 1. 14	
25	内野々第3遺跡	都農町大字北宇佐西尾立	2,700		280.22	1次	縄文、弥生、古墳	H22. 5. 17 ~ H25. 5. 24	
26	内野々第4遺跡	都農町大字北宇佐源瀬	2,200		20.20 900.21	鹿頭骨分 1次	古石器、縄文〔早・前〕、弥生、古墳	H21. 1. 15 ~ H21. 1. 23 H21. 5. 11 ~ H22. 1. 7	
27	平山下遺跡	都農町大字北宇佐下源・字下平	18,900		6,660.21 910.22	2次 3次	古石器、縄文〔早〕	H20. 11. 25 ~ H20. 12. 12 H21. 8 ~ H22. 7. 6	
28	西ノ郡第2遺跡	都農町大字北宇佐西ノ郡	18,800		150.20 570.21	1次 2次	古石器	H21. 1. 26 ~ H21. 1. 27 H21. 2. 28 ~ H21. 2. 2	
29	木戸平第2遺跡	都農町大字北宇佐木戸ノ平・宇佐崎平・宇馬塚口・字生垣尾立	8,400		40.20 760.21 1,780.21	1次 2次 3次	古石器、縄文〔早〕、弥生、古墳	H21. 1. 6 ~ H21. 1. 14 H21. 7. 13 ~ H21. 9. 2 H21. 10. 13 ~ H22. 1. 18	
30	木戸平第1遺跡	都農町大字北宇佐木戸ノ平・宇佐崎平・宇馬塚口・字生垣尾立	29,500		500.20	1次	古石器	H20. 12. 15 ~ H20. 12. 25	
31	礫石第2遺跡	都農町大字北宇佐礫石	10,000		60.21 3,320.22	1次 2次	古石器、縄文〔早〕	H22. 4. 1 ~ H23. 2. 17	
32	礫石第1遺跡	都農町大字北宇佐車田	12,500		2,445.20 9,000.21	1次	古石器、縄文〔早〕、弥生	H20. 11. 4 ~ H21. 3. 31 H22. 11. 1 ~ H22. 11. 2	
					250.22	2次		H22. 11. 1 ~ H22. 12. 24	



第2図 岡遺跡・馬込遺跡及び周辺遺跡分布図 (1:50,000)

### 3-2. 歴史的環境

岡遺跡・馬込遺跡が所在する旧日向市域では、細島地区1、日知屋地区17、富高地区18、塩見地区18、財光寺地区17、平岩地区21、幸脇地区5、美々津地区20の合計117遺跡が確認されている（第2図）。

#### 後期旧石器時代

平岩地区には、後期旧石器時代の遺跡は5箇所で確認されている。標高20mの海岸段丘上に位置している中別府遺跡では、小型のナイフ形石器が出土している。本市で出土した石器の石材の多くは、本県の五ヶ瀬川流域から採取される無斑晶流紋岩や大分県姫島産黒曜石などが使われており、この時期から既に大分県との交流が行われていたことを窺わせる。また、岡遺跡（第9次調査）では、日向市内で3例目となるAT層下位の石器が確認されている。石器の量は多くないものの当該時期に生活の場または狩猟の場として利用された可能性を示唆する。

#### 縄文時代

平岩地区では、縄文時代の遺跡は10箇所で確認されており、その多くが海岸段丘上に位置している。金ヶ浜遺跡は、2基の集石構造が無文土器を伴う層から検出され、中別府遺跡では、塞ノ神式土器が出土している。平岩地区の南に隣接する幸脇地区的権現崎遺跡では、押型文土器が出土し、7基の集石構造が円弧を描くように検出され、その中心付近から柱状岩が立った状態で出土している。

後期から晩期になると、本市内では遺跡数が増加する傾向にあるが、集落跡の発見例は未だなく、東草場遺跡で円形プランの堅穴建物跡が1軒検出されているのみである。

#### 弥生時代

平岩地区では、中別府遺跡で中期の下城式とみられる甕形土器が出土しているのみである。この他、秋留、馬込、本村、坂元、原、鶴毛Bなどの遺跡が散布地として知られている。隣接する財光寺地区では、松原第3～第5遺跡では表採ではあるが、方形石庖丁が確認されている。

#### 古墳時代

市内には、28基の古墳が確認されていたが、多

くが滅失している。6基あったとされる前方後円墳についても1基を残すのみである。

平岩地区においては、平岩小中学校の敷地に旧県指定岩脇2号墳～7号墳が所在し、そこから南西約1kmに1号墳がある。いずれも墳丘の大部分を失っているが、これらのうち5基が前方後円墳であったとされている。2号墳からは鉄劍、鉢身、刀子が出土している。隣接する幸脇地区には、旧県指定岩脇8号墳～11号墳があり、いずれも円墳であったとされている。10号墳とみられる墳丘跡から6世紀後半～末の須恵器壺と提瓶を採集している。この他、近隣には、財光寺地区的比良山古墳があり、5世紀後半～6世紀初頭とみられる須恵器の高杯を採集している。

#### 古代

布痕土器が、本市内において越シ遺跡、岩州遺跡、岡遺跡（第6・7・9次調査）から出土している。本市内には『延喜式』に記載された西海道のルートが通っていたとされ、周辺には刈田、美弥といった駅の想定地があり、美弥駅が美々津に比定されている。平岩地区は、刈田～美弥間に所在しており、官道のルートは、おおむね現在の旧国道10号線沿いを通っていたとも言われているが、はつきりとはしていない。官道の構造を考慮すると、上記遺跡が地図上で直線的に結ばれることは、その可能性を窺わせる。また、地区内には官道関連地名として、坂ノ下、馬込、峠、馬溝等の地名がみられる。

#### 中世

市内には、伊東氏48城の一つである日知屋城、門川城とともに「日向三城」と呼ばれた塩見城跡や中山遺跡があり、中世の掘立柱建物跡や輸入陶磁器等が確認されている。

平岩地区には、本村城が所在し、現在も残る本村という地名から、かつて平岩の中心地であったともされている。本村城は、丘陵の先端付近を削平し、3箇所の曲輪を設け、3つの堀切を刻んでいるが、周辺との比高差は大きくない。この本村城跡の約200m東には、曹洞宗幸福寺が所在し、文禄5(1595)年に松葉源之丞景守が創建した古刹と伝えられている。平岩地区では、この他に秋留城、初木

ノ城の城跡がある。

### 近世

近世の遺跡は調査例が少なく、詳細は不明であるが、岡遺跡（第7・9・13次調査）では、中世または近世と思われる掘立柱建物跡が9棟検出されており、柱穴の埋土からは青花皿や青磁碗の小片、備前焼、洪武通寶や寛永通寶といった銭貨が出土している。現在の日向市域は、江戸時代初期に県藩（延岡藩）に属していたが、元禄3（1690）年に発生した山陰・坪屋村百姓逃散一揆による政道不行届を問われ、藩主有馬氏が元禄5（1692）年に越前国糸魚川に転封になった。それとともに、日向市域のほとんどが幕府領となり、以後、幕府直轄の代官所支配を受けて幕末に至っている。

（参考・引用文献）

宮崎県・1987『土地分類基本調査』「日向」

宮崎県埋蔵文化財センター・2004『中山道筋』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書  
第93集

宮崎県埋蔵文化財センター・2013『岡遺跡（第9・13・15次調査）』

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第22集

日向市教育委員会1985『日向市遺跡部級分布調査報告書』

日向市史編さん委員会2006『日向市史 自然編』日向市

日向市史編さん委員会2009『日向市史 資料編』日向市

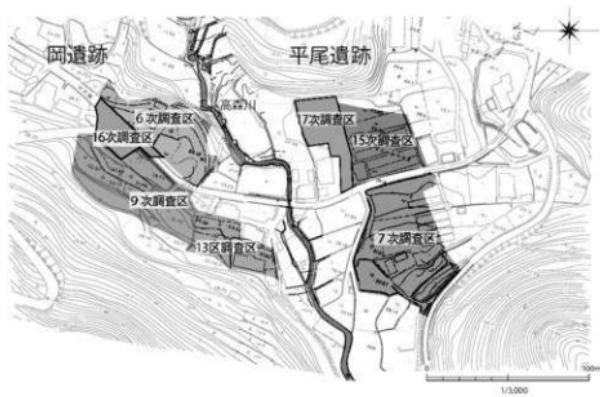
日向市史編さん委員会2010『日向市史 通史編』日向市

### 第4節 調査の概要

#### 岡遺跡

岡遺跡は全体の調査対象面積が40,000m<sup>2</sup>を測る。調査面積を確定するため、用地交渉がまとまった箇所から発掘調査を随時行うこととなった。第1～3次調査は平成21年度に実施し、平成22年度に第1次調査が第6次調査として継続された。第4～8次調査は平成22年度に行われ、第5次調査が第7次調査として継続された。平成23年度には第9～15次調査が行われ、第11次調査が第13次調査として、第12次調査が第15次調査として継続された。以下、平成24年度に調査された第16次調査、第17次調査の概要について述べる。

第16次調査は、第6次調査、第9次調査に隣接し、平成24年4月9日から平成24年8月10日まで1,000m<sup>2</sup>を対象に調査を実施した。第9次調査の結果から、もともと緩やかな斜面地であったところを畑や道路とするために大きく改変したことが明らかになった。層序は近接する調査区と同様の傾向であったが、大きく削平されていた道路下では上層のほとんどが残存していない状況であった。調査区内からは後期旧石器時代や縄文時代早期の遺構・遺物を確認した。詳細については、第II章で記述する。



第3図 岡遺跡・平尾遺跡調査区

第17次調査区は、第15次調査区に隣接しており、平成24年5月8日、調査対象面積965m<sup>2</sup>を調査した。調査区は直前まで、宅地として利用されていたため、表土には木屑や瓦などが散在していた。調査では隣接する第15次調査区の遺構・遺物の確認状況から、トレーニングを東側を中心に5本、西側に2本の計7本設定し、土層堆積状況や遺構・遺物の有無を確認しながら、重機による掘削を行った。層序はI層からXIV層に分けられ、土層堆積状況から西側から東側に向けて傾斜する起伏のある地形であると考えられた。いずれのトレーニングでも遺構・遺物が確認できず、第15次調査で認められるような包含層も確認できなかったため調査を終了した。

なお、例言でも述べたとおり岡遺跡は高森川を挟んで字名が間である岡遺跡と字名が谷口と平尾である平尾遺跡とに分けられる。以下にこれまで行ってきた岡遺跡の各調査と岡遺跡・平尾遺跡との対照表を記す。

第2表 調査別遺跡対照表

	岡遺跡	平尾遺跡
第1次調査	○	
第2次調査	○	
第3次調査		○
第4次調査		○
第5次調査		○
第6次調査	○	
第7次調査		○
第8次調査	○	
第9次調査	○	
第10次調査	○	
第11次調査	○	
第12次調査		○
第13次調査	○	
第14次調査		○
第15次調査		○
第16次調査	○	
第17次調査		○

\* 調査の詳細について第1次調査～第8次調査までは、「宮崎県埋蔵文化財センター報告書212集」に、第9次調査～第15次調査までは、「宮崎県埋蔵文化財センター報告書223集」に掲載してある。

## 馬込遺跡

馬込遺跡第1地点、第2地点の調査対象面積は9,700m<sup>2</sup>を測る。工事状況や用地買収等の関係から用地交渉がまとまり次第随時発掘調査を行うことになった。以下、調査区ごとに概要を述べる。

### 第1地点

第1次調査は平成22年5月17日から平成22年5月21日まで、600m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査区は丘陵を削平して、平坦地となっており果樹園に造成されていた。調査区に7箇所のトレーニングを設定し、重機による掘削を行い、遺跡の内容を確認した。層序はI層の黒褐色土（表土）、II層の暗褐色土（客土）、III層の黄褐色土（地山）となっており、どのトレーニングからも遺構・遺物は確認されなかった。

第2次調査は平成22年12月20日に第1次調査区の北側隣接1,800m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査区は丘陵の尾根部にあたる部分を切って平坦地としており、果樹園として利用されていた。調査区に東西方向3箇所のトレーニングを設定し、重機による掘削を行い、遺跡の内容を確認した。層序はI層の明褐色土（現耕作土）、II層の暗褐色土、III層の黒褐色土、IV層の黒褐色土となっており、どのトレーニングからも遺構・遺物は確認されなかった。

第3次調査は平成23年11月21日から翌22日まで、3,000m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査区は西から東に向かっている傾斜地を造成して段々畑として利用されていた。調査区に12箇所のトレーニングを設定し、重機による掘削を行い、遺跡の内容を確認した。層序はI層の表土、II層の明褐色土、III層の黒色土、IV層の明褐色土（地山）となっており、表土の下に厚い礫を含んだ土層が多く見られるなど、土層の堆積状況が悪く、どのトレーニングからも遺構・遺物は確認できなかった。

第4次調査は平成24年11月12日から翌13日まで、1,000m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査地点は以前、なだらかな傾斜地を造成して牛小屋が作られ、近年まで使用されていたため、西側のトレーニング付近には大量の造成土が堆積していた。調査では東側の崖下から30cmほどの鬼界アカホヤ火山灰層が確認されていたため、遺物包含層の可能性がある東側を中心にして3

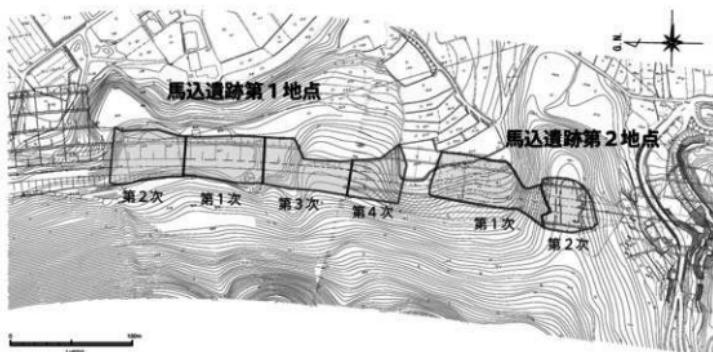
本、西側に1本のトレンチを設定し、重機による掘削を行い、遺跡の内容を確認した。層序はI層の表土、II層の明黄褐色土から黄褐色土、III層の黒褐色土、IV層の黑色土となっている。どのトレンチからもI層（表土）とIII層（黒褐色土）が確認され、鬼界アカホヤ火山灰層（II層）は2箇所のトレンチから確認されたものの遺構・遺物は確認されなかった。

## 第2地点

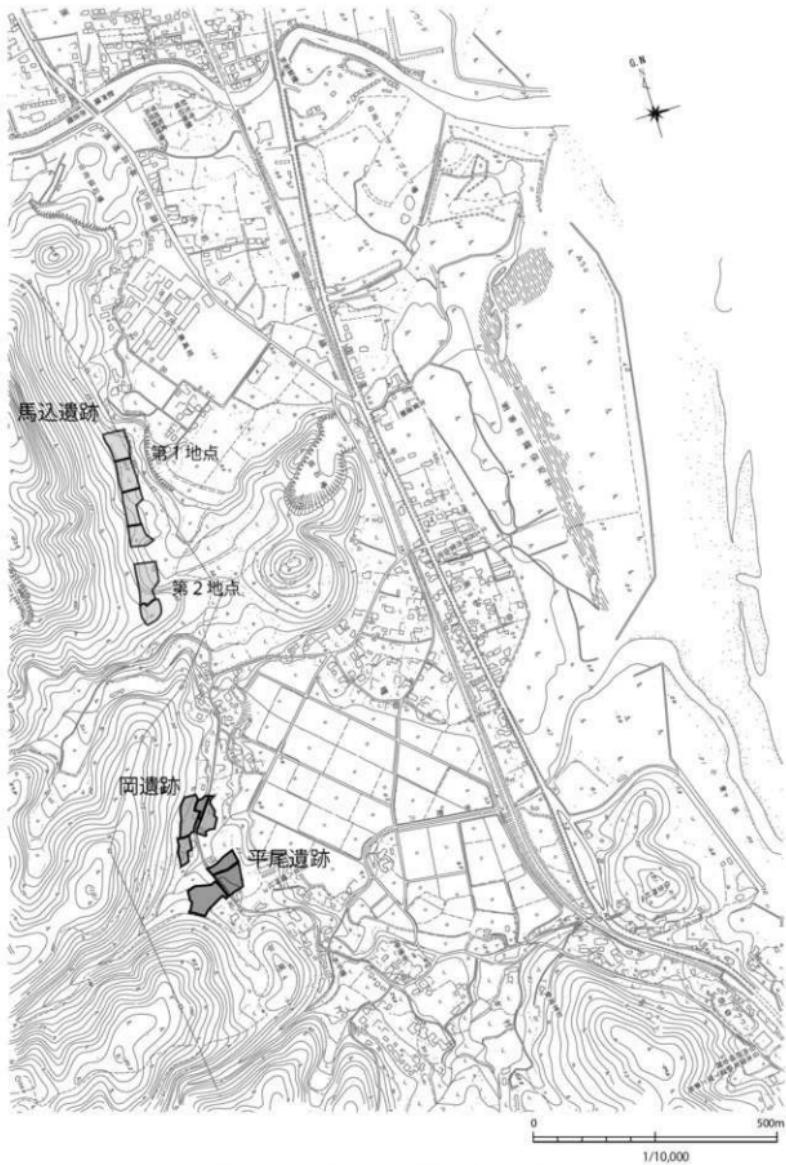
第1次調査は平成24年11月12日から平成24年11月21日まで、1,800m<sup>2</sup>を対象に調査を行った。この調査区は標高49.6mの丘陵上の一帯にあり、調査区に18箇所のトレンチを設定し、重機及び人力により掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。層序はI層の表土、II層の盛土、III層の鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層、IV層の暗褐色土、V層の黒褐色土、VI層の黄橙色粘質土、VII層の明黄橙色粘質土から黄橙色粘質土、VIII層の岩盤層（地山）となっている。III層部分は調査区の西側一帯のみに残存しており、その下のIV層上面では散礫が露出する状況であ

った。調査区の東側では表土を剥ぐとすぐにIV層からV層となり、その下は地山層（VII層～VIII層）となっていた。この調査では8箇所のトレンチ内から縄文時代早期と考えられる土坑や散礫があり、散礫下からは多数の集石遺構が検出された。また、これらのトレンチから石器や剝片、縄文土器片などの遺物も多数出土したため、第2次調査として継続することになった。

第2次調査は平成24年12月17日から平成25年3月29日まで、1,600m<sup>2</sup>を対象に実施した。第1次調査時に西側から多数の遺物が出土していたことから、西側を中心に重機及び人力により掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査区からは旧石器時代から中世までの遺構・遺物が確認された。詳細については第III章で記述する。



第4図 馬込遺跡調査区



第5図 岡遺跡・馬込遺跡及び周辺地形図

## 第Ⅱ章 岡遺跡（第16次調査）の成果

### 第1節 調査の方法と経過

#### 1-1. 発掘調査の方法と経過

本調査は、平成24年4月9日から平成24年8月10日まで実施した。調査対象面積は1,000m<sup>2</sup>である。

本調査区は、第6次調査区と第9次調査区との隣接地点にあたることから、後期旧石器時代・縄文時代早期を中心とした遺跡が想定された。

調査は、第9次調査区の東側にあたる斜面地、市道本村線下、市道本村線から山へと分岐する山道入口について堆積状況や地形の様子等を考慮しながら段階的に行っていった。斜面地は、表土であるI層を重機で除去したのち上・中・下段に分け調査を行った。上・中段においては地形の変更を受けているため堆積状況が良好ではなく、IV層からの調査となつた。下段においては、作業員とともに掘削作業を行いII層にて遺構を検出した。精査の結果、溝状遺構2条、土坑1基、多数の小穴を検出した。その後、斜面地全体をIV層上面にて精査し掘削を進めていき、散礫、集石遺構、炉穴、土坑、縄文時代早期の遺物を確認した。市道本村線下、山道入口については、アスファルト下の路盤を重機で剥ぎとり精査を行つた結果、大部分が削平を受けていたため、市道下はV層から、山道入口はVI層からの調査となつた。市道本村線下については、炉穴と思われる焼土と石礫を確認したのみで、VII層上面（一部VIII層上面）まで掘削を進めたが、その他の遺構・遺物は確認できず調査を終了した。山道入口については、VI層上面において散礫から礫群を確認した。

遺構については、検出面や完掘面での平面図・断面図、レベルを基本とし1/10または1/20で図化した。VI層で検出した散礫については1/20で図化し、レベルをとり点上げを行つた。包含層内から出土した遺物は、トータルステーションで出土位置を記録し、取り上げた。

遺構の図化記録とともに写真記録も行つた。写真記録は主として35mmモノクローム・リバーサル写真およびデジタルカメラを併用し記録した。発掘調査の詳細については、調査日誌抄に代える。

#### 調査日誌抄（平成24年）

- 0409 駐車場整備。
- 0410 事務所、器材庫、トイレ設置。
- 0412 重機による表土剥ぎ。
- 0416 調査区南西部で炉穴検出。
- 0419 作業員18名雇用開始。
- 0423 調査区の精査。M1G r 南西側山道入口付近のAT下層より微細剥離片出土。
- 0424 II層掘削。溝状遺構検出。
- 0501 土坑、小穴検出。
- 0509 溝状遺構完掘写真の撮影。
- 0511 市道下北部V層掘削。
- 0516 土坑、小穴完掘写真の撮影。
- 0518 市道下南部精査。石礫出土。
- 0522 斜面地IV層散礫検出。
- 0523 集石遺構2基検出。
- 0530 山道入口精査。Tr3南壁より炉穴検出。
- 0604 斜面地V層掘削。
- 0606 斜面地中央付近より炉穴検出。
- 0607 山道入口VI層上面まで掘削。
- 0611 山道入口より散礫、礫群検出。
- 0620 Tr3南側より集石遺構検出。
- 0621 豪雨により作業中止。
- 0625 集石遺構実測。
- 0705 山道入口の散礫、礫群実測。
- 0706 調査区北部(VI層)の地形図作成。
- 0725 第6次調査区から続くと思われる炉穴検出。
- 0727 調査区南部(VI層)の地形図作成。
- 0803 Tr1、Tr2の土層断面実測。
- 0808 炉穴実測。作業員雇用終了。
- 0810 調査終了。

#### 1-2. 整理作業及び報告書作成

平成24年10月～平成25年10月の期間で整理作業を行つた。水洗、注記、選別、計測等の作業を行つた後、遺物台帳を作成した。平成24年10月から接合作業を行い、平成24年12月に遺物実測作業に入った。一部の遺物は拓本作業を行い、遺物実測図お

より現場実測図はトレース作業を経て、レイアウトを行った。

報告書作成にあたっては、宮崎県埋蔵文化財センター報告書マニュアルに則って作成した。



整理作業風景 (縦接合)



整理作業風景 (実測)

### 1-3. 基本層序

本調査区は、1-1で述べたとおり第6次調査区と第9次調査区に隣接する地点にある。第9次調査区の東に接する斜面地は、調査以前は畠として利用され、近代～昭和の時期に石垣を造成するなど旧地形の改変が激しく行われていた。北東から南西に延びる市道本村線下は、アスファルト舗装時に大部分を削平されていたが、北東に向かって傾斜していたため、北東側ではV層より下位の層で良好な堆積が認められた。市道本村線から分岐する山道入口は、路盤を剥ぐとV層がわずかに堆積する程度であったが、VI層、VII層は北東に向かって厚く堆積していた。第9次調査区同様、第6次調査区で見られた二次堆積鬼界アカホヤ火山灰は石垣周辺のほんの一部しか残存していないかった。

旧地形としては、基本的に調査区の西側から東側に向かって緩やかに傾斜している。微地形であるため変化に富み、堆積状況も異なる様相をみせる。

基本層序を設定するにあたって、第6次調査の基本層序、第9次調査の基本層序、Tr1とTr2の壁面、調査区東側の迂回路に面した壁面を土層観察用として活用し、土層は色調、土質によりI～VII層に分層

した。以下、層位ごとにみていく。

I層： 暗褐色土層 (Hue10YR3/3) で表土である。

II層： 暗褐色土層 (Hue10YR3/3) で明治頃までの造成土とみられ、縄文時代から近世までの遺物を含む。

III層： 褐色土層 (Hue10YR4/6) で二次堆積した鬼界アカホヤ火山灰である。第9次調査区同様、本調査区でも南東の石垣周辺の一部にしかみられない。第6次・第13次調査区では主に縄文時代晚期の遺物が多く出土している。

IV層： 暗赤褐色土層 (Hue5YR4/6) で粘土質層である。非常に粘性があり、しまりもある。3mm以下の白色、赤橙色の岩片を多く含み、わずかに拳大の礫を含む。K3Gr、K4Gr、L2Gr、L3Grの斜面中段周辺約300mの範囲に堆積がみられるが、それ以外ではあまり堆積状況が良好ではない。縄文時代早期の遺物包含層。

V層： 調査区の中でも一番堆積が厚い。粘性・含有物の違いでVa層、Vb層に細分される。  
後期旧石器時代～縄文時代早期の遺物包含層。

Va層 黒褐色土層 (Hue10YR2/3) で非常に粘性があり、しまりも強い。1cm程度の礫、2mm以下の白色、赤橙色の岩片を含む。主に縄文時代早期の遺物を含むが、堆積状況によっては後期旧石器時代の遺物も含まれる。

Vb層 黒褐色土層 (Hue10YR2/3) で粘性はあるもののVa層に比べるとやや弱いが、しまりは強い。また、小さな礫も多く含む。後期旧石器時代の遺物包含層。

VI層： 始良Tn火山灰層(以下AT) 混じり堆積層である。AT粒子の混ざり方でVIa層、VIb層に細分される。第9次調査区のVII層に相当する。AT上位の後期旧石器時代の遺物包含層。

VIa層 黒褐色土層 (Hue10YR2/2) で粘性があり、しまりもある。V層までにみる白色、赤橙色の岩片が細かく少ない。表面を削るとシャリシャリとしAT火山灰層に黒色土が混じる。

VIb層 黒褐色土層 (Hue10YR2/2) でしまりはあるが、粘性はあまりない。ATがブロックで確認できたがATの堆積状況は不安定である。

ブラックバンド状のブロックも堆積する。

VII層： 暗褐色土層 (Hue7.5YR3/4) で粘性があり、しまりはわずかにある。5mm程度の白色岩片を多量に含む。AT下位の遺物包含層で、第9次調査区のIX層に相当する。

VIII層： 黄褐色土層 (Hue10YR5/6) で粘土層である。下位では岩盤となる。

本遺跡は、先に述べたように第6次調査区、第9次調査区に隣接しており、堆積状況に類似性がみられることがから、第6・9・16次調査区の基本層序については第6図に記す。

第9次調査区

I	表土	縄文時代～近世
II	黒褐色土	中世～近世
III	二次堆積アカホヤ火山灰層	縄文時代後期～古代
IV	黒褐色土	縄文時代早期
V	黒褐色土	旧石器時代～縄文時代早期
VI	暗褐色土	旧石器時代
VII	AT火山灰を含む層	
VIII	土石混層	無遺物層
IX	灰褐色土	旧石器時代
X	にぶい黄褐色	地山
X I	明黃褐色	地山



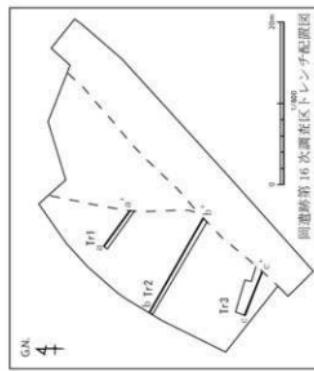
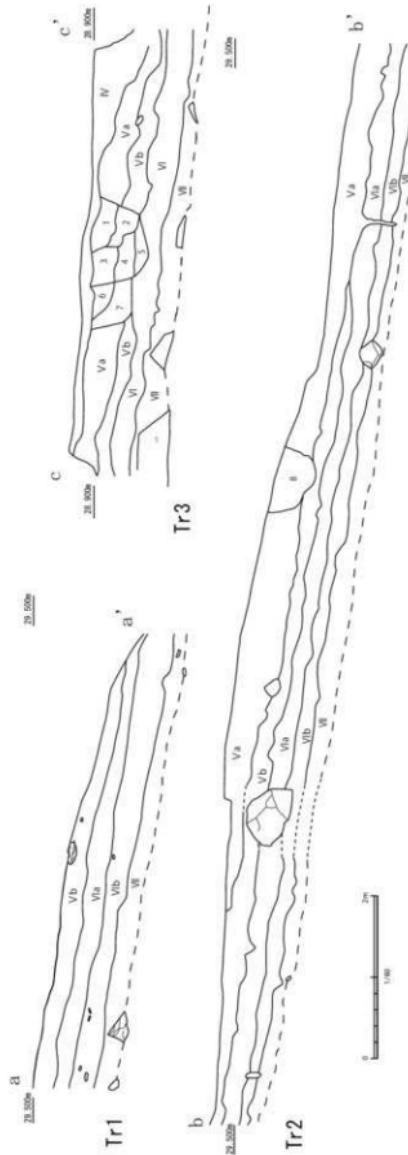
第16次調査区

I	表土	縄文時代～現代
II	暗褐色土	縄文時代～近世
III	二次堆積アカホヤ火山灰層	
IV	暗赤褐色土	縄文時代早期
Va	黒褐色土	旧石器時代～縄文時代早期
Vb	黒褐色土	旧石器時代
VIa	AT火山灰を含む層	
VIb	AT火山灰を含む層	旧石器時代
VII	暗褐色土	旧石器時代
VIII	黄褐色土	地山

第6次調査区

I a	表土	中世～現代
I b		縄文草創～近世
II a		縄文草創～古代末
II b		二次堆積アカホヤ火山灰層
II c	アカホヤ火山灰層	無遺物層
III	明赤褐色土	縄文時代早期後半
IV a	黒褐色土	縄文時代早期前半
IV b	黒褐色土	旧石器時代
V	AT火山灰を含む層	
VI	褐色土	
VII	黄褐色土	

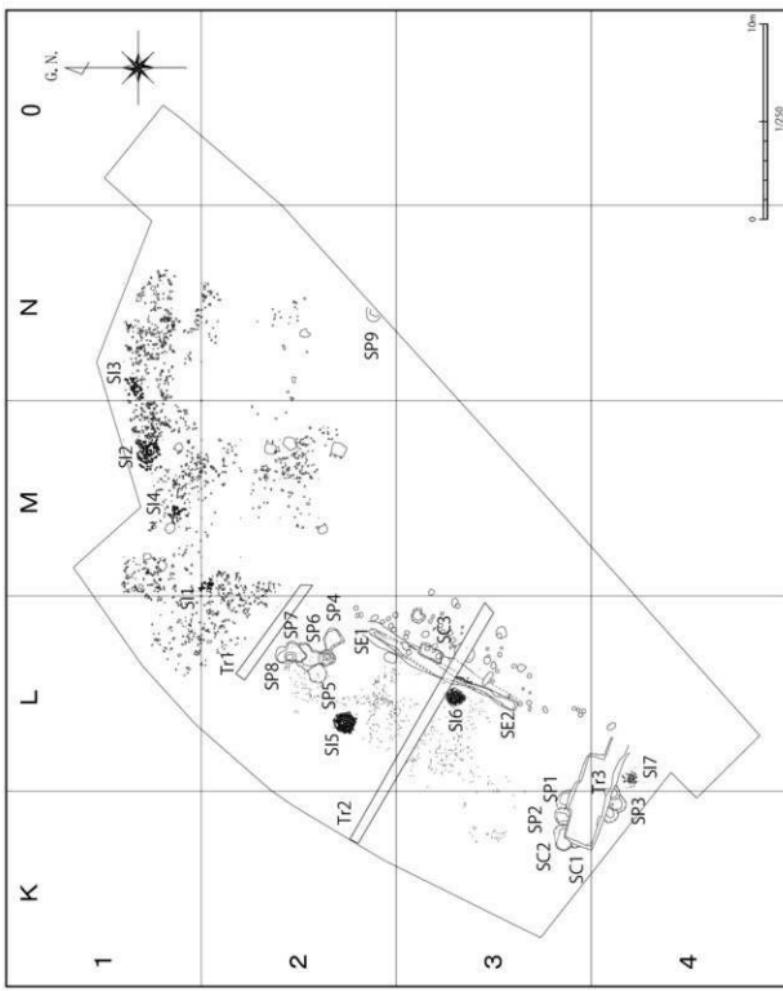
第6図 岡遺跡 第9・16・6次調査区基本土層比較図



- IV 細粒褐色土 (Ibari 5 YC1/4) 3 mm以下が半褐色・白色の粒を多量に含み、粘性。しかしともに細かい。
- Va 深褐色土 (Ibari 010B2/2) 地面に2cmでは土は少し多く、2mm程度のものが多くなる。
- Vb 黄褐色土 (Ibari 010B2/3) 2cm以下が赤褐色・白色の粒を含む。
- Vd 黑褐色土 (Ibari 010B2/2) 黒褐色の土を含むVb層よりはハサセバサとした感じがある。赤褐色・白色の粒を含むのがない。
- Vh 黄褐色土 (Ibari 010B2/2) ATが発達した表面を除くとシカリヤリとする。粘性は少しとんどもあり。
- Vl 黑褐色土 (Ibari 010B2/2) 黒褐色の土を含むがATが発達する。
- Vm 黄褐色土 (Ibari 010B2/2) 土は2cm以上がATが発達する。
- Vn 黄褐色土 (Ibari 010B2/2) 土は2cm以上がATが発達する。
- Vb 黄褐色土 (Ibari 010B2/4) 土は2cm以下が半褐色・白色の粒を多く含み、黒褐色・白色の粒を多く含む。
- Vd 黄褐色土 (Ibari 010B2/6) 黒褐色の土を多く含む。
- Vg 黄褐色土 (Ibari 010B2/6) 黒褐色の土を多く含む。
- 1 布穂褐色土 (Ibari 010B2/4) 土は2cm以下が半褐色・白色の粒を多く含む。
- 2 布穂褐色土 (Ibari 010B2/4) 1.上までて、黒褐色。
- 3 布穂褐色土 (Ibari 010B2/4) 1.生じてて、黒褐色。
- 4 黑褐色土 (Ibari 010B2/6) 1.生じてて、黒褐色。
- 5 布穂褐色土 (Ibari 010B2/3) 2cm以下の土を含み、わずかに砂片も含む。1.よりは少くあり、粘性は強。
- 6 布穂褐色土 (Ibari 010B2/4) 1.上までて、黒褐色。
- 7 布穂褐色土 (Ibari 010B2/4) 2cm以下の土を含み、黒褐色。
- 8 布穂褐色土 (Ibari 010B2/2) Vn層と似ている。部分的に軟塑性となるところがあり、やや大きな砂片を含む。

第7図 土層断面図

第8圖 遺構分布圖



## 第2節 後期旧石器時代の遺構と遺物

### 2-1. 概要

基本層序のVb～VII層が後期旧石器時代に相当する層である。第6次調査、第9次調査の調査報告を加味すると本調査のVb・VI層がAT上位の遺物包含層、VII層がAT下位の遺物包含層に相当する。V層については、調査区が傾斜地であり、かつ微地形であるために堆積層として明確な判別が困難なところもあった。Va層出土の遺物を形態的な特徴や石材との関係から判断し、後期旧石器時代の遺物に抽出したものも存在している。

### 2-2. 遺構

山道入口周辺から礫が広範囲に散らばった状態で確認されAT上位の礫群4基と散礫を検出した（第9図）。礫や赤化礫が一定量集まる箇所を礫群と認定し、礫群は主に調査区北部のM1GrからN1Grに向かって緩やかな傾斜地で検出した。検出面はVI層上面である。構成礫は全て尾鈴山溶結凝灰岩で、多くが破碎礫である。周辺には礫が点在しており、礫群以外に出土した礫は、出土状況から散礫とした。

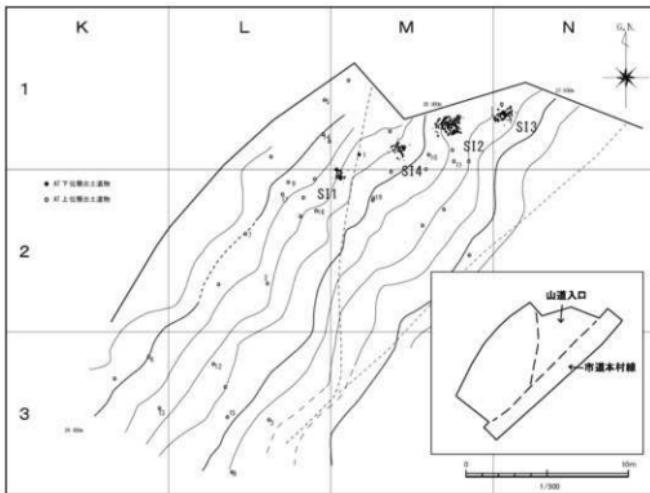
### (1) 磨群（第10図、図版2）

#### S11（第10図）

M2Gr北西部の標高約28.8m地点に径0.8m×0.6mの範囲内で24点、平均重量144.6g、総重量3.76kgの礫を検出した。掘り込みは見受けられない。赤化率は約70%と部分的に焼けた弱い赤化礫も含むものの確認された礫群の中では最も高い。しかし、他と比べると小規模かつ小範囲のまとまりとなる。SI1内同士での接合はみられなかったが、SI1の西部から南部にかけた近辺の接合関係を調べた結果、礫28点、12個体、そのうち赤化した礫同士の接合が10点、5個体確認できた。

#### S12（第10図）

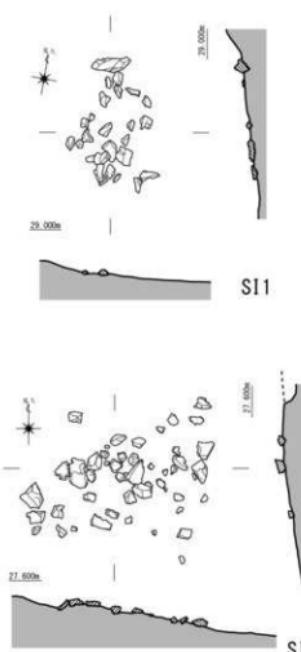
S13の西に位置し、標高約27.8mで検出した。径1.8m×1.2mと礫群では最も広い範囲に122点の礫を検出し、平均重量211.9g、総重量25.2kgと大型の礫が多い。掘り込みや炭化物は見受けられない。赤化率は約43%である。円弧状に配置されていた様相も見てとれる。SI2内同士で接合された礫は4点、2個体であり、周辺では10点、4個体の接合が確認できた。



第9図 後期旧石器時代の遺構・遺物分布図

## SI3 (第10図)

礫群の中では最も東側に位置し、緩やかに下る地点の低地で50点の礫を検出した。標高は約27.5m、径1.25m×0.7mの範囲内に平均重量168.0g、総重量8.4kgの礫で構成されており、約50%の礫が赤化している。炭化物、掘り込みは見受けられない。SI3の礫同士での接合は2点、1個体あり、斜面に沿うようなかたちではあるが南東部において接合された礫が13点、5個体確認できた。



## SI4 (第10図)

標高約28.5mの地点で検出した。径1.5m×0.85mの範囲内に51点の礫を検出し、総重量は5.22kgである。平均重量も111.1gと比較的小ぶりの礫が集まる。掘り込みは見受けられない。赤化率は55%であり、強い熱を受けた礫が他の礫群より多くみられる。SI4内で接合された礫は2点、1個体である。また、SI4南東部の接合関係を調べた結果、接合が確認できた礫が14点、7個体、そのうち赤化した礫は10点、5個体である。



第10図 磯群実測図

## 第3表 磯群一覧表

礁構名	グリッド	検出場所	長軸 (m)	短軸 (m)	個数	重量 (kg)	平均重量 (g)	赤化の具合
SI1	VI	VI	0.8	0.6	24	3.76	144.6	7個赤化
SI2	VI	VI	1.8	1.2	122	25.2	211.9	4個赤化
SI3	VI	VI	1.25	0.7	50	8.4	168.0	5個赤化
SI4	VI	VI	1.5	0.85	51	5.22	111.1	5個赤化・強い赤化

## (2) 散疊

主に散疊を検出したのは、VII層上面で調査区東部にあたる約10×20mの緩やかに傾斜する範囲である（第11図）。1594点の疊（疊群の疊は除く）で構成され総重量は約239.35kg、一個体あたりの平均重量は約150.2g、全て尾鈴山溶結凝灰岩である。散疊は、L1Gr～L2Gr、M1Gr～M2Gr、N1Gr～N2Grの範囲内を2×2mの小Grに分割した後、実測を行ない1点ずつ取り上げた。また、赤化状況の確認と計測を行った。なお、疊の赤化の要因は被熱、鉄分の酸化等が考えられる。接合状況をみると、接合するものが118点、53個体であった。第11図は疊群・散疊の分布図、第12図・第4表は小Grごとの散疊の重量別個体数である。調査時には疊や赤化疊が比較的小規模にまとまっている4群を疊群と認定していたが、疊群の周りに接合疊や赤化疊が多く分布し、接合疊においては規則的な広がりがみられること、疊群の周辺部に破碎した小ぶりの疊が多く分布していることなどから、認定した4群以外にもM2-8Gr、N1-2Gr周辺一帯にも疊群が存在した可能性が指摘できる。

V層掘削時から0.25m<sup>3</sup>程度の尾鈴山溶結凝灰岩がいくつか露頭していた。これらはVI層中にみられる疊構成とも一致することから、疊群に使用した疊は身近にある疊を活用していた可能性がある。また、VII層においても疊が散乱していたが、範囲がVI層とほぼ同じ分布を示していることから、落ち込みまたは流れ込みによるものと判断し、トータルステーションでの記録とした。

### 2-3. 遺物（第13～15図1～19、図版4）

後期旧石器時代の遺物は、始良Tn火山灰層（以下AT）の上下の層で確認した。遺物は出土した層だけでなく、形態的な特徴からも後期旧石器時代の遺物として抽出したものも含まれる。

#### (1) AT下位（第13図1）

AT下位に属する石器はVII層で出土した珪質頁岩製剥片1点のみである。

#### 微細剥離剥片（第13図1）

1は縦長剥片を素材とし、左側線上部、主要剥離面の下線から右側線にかけて微細剥離がみられる。

2と同様のナイフ形石器を作るための素材剥片とも考えられる。

#### (2) AT上位（第13～15図2～19）

AT上位に属する石器は、ナイフ形石器2点、スクレイバー2点、二次加工剥片2点、微細剥離剥片5点、剥片22点、石核2点の総数35点出土した。そのうち18点の固化を行った。

#### ナイフ形石器（第13図2・3）

2は珪質頁岩製の不定形剥片を素材とする。右側縁と左側縁の一部及び腹面基部のバルブを除去するように加工を施す。刃部には微細剥離痕がみられる。3は流紋岩製の縦長剥片を素材とし二側縁に加工を施す。先端部は欠損しているが、両側縁ともプランディングを入念に施している。

#### スクレイバー（第13図4・5）

4・5はやや厚みのある剥片を素材とする。4は下部を欠損しているが、左側縁に加工を施し刃部を作出している。5は左側縁から下線にかけて急斜度に加工を行い刃部を作出している。

#### 二次加工剥片（第13図6・7）

6は不定形剥片を素材とし、両側縁に二次加工が施されている。7は横長剥片を素材とする。下線に二次加工を施し、右側縁には背面側からの二次加工もみられる。

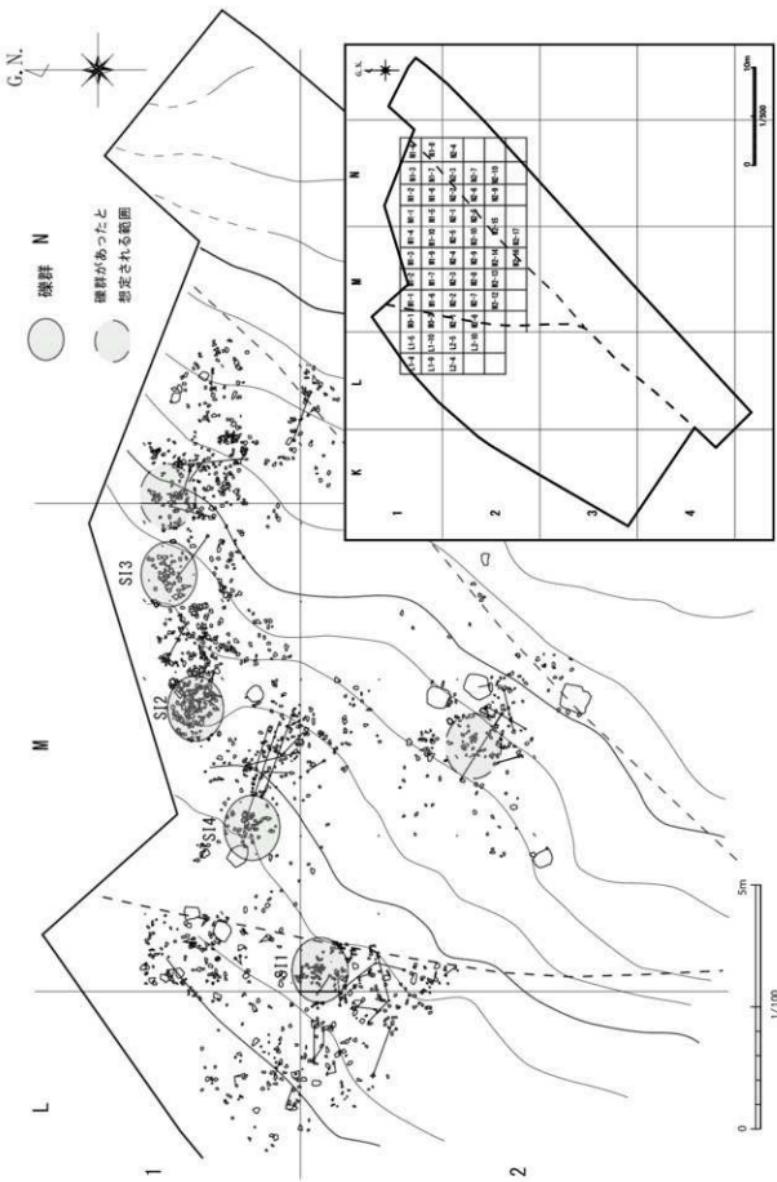
#### 微細剥離剥片（第13・14図8～13）

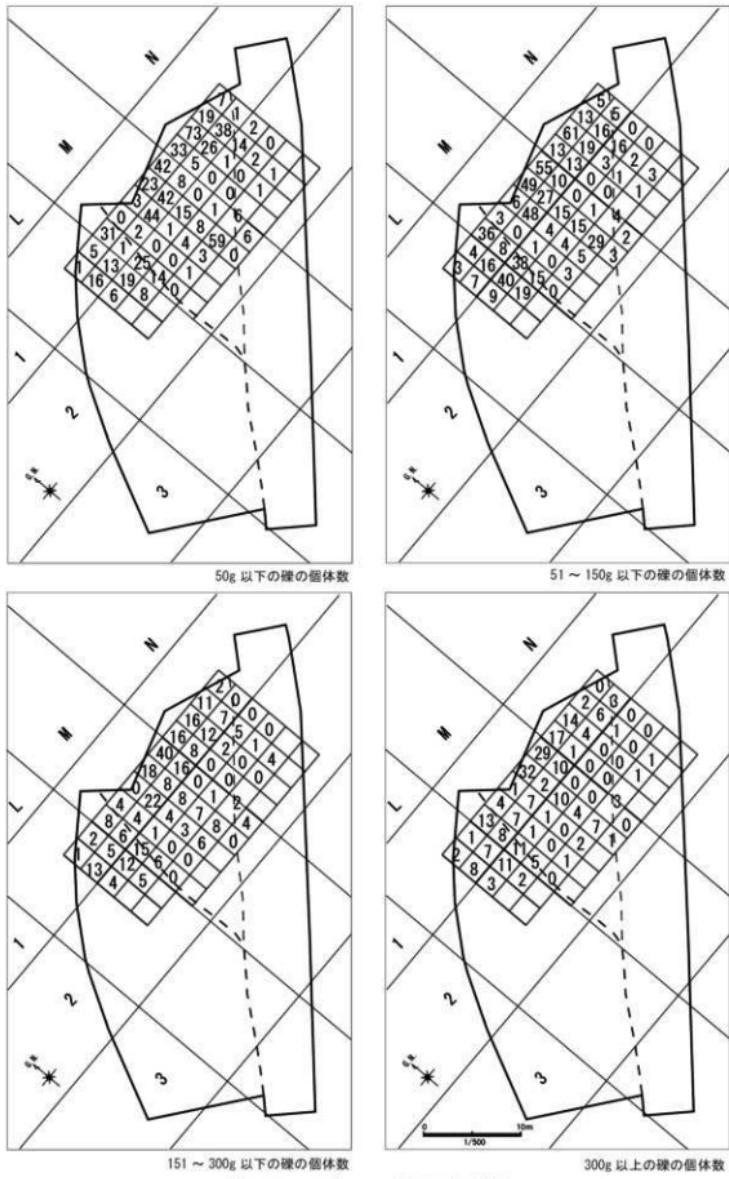
8～11は縦長剥片を素材とする。8は背面右下に自然面を残す。主要剥離面の右側縁及び左側縁下部に微細剥離がみられる。9は背面右側から下端にかけて自然面を残し、右側縁にわずかに微細剥離がみられる。10は上部、下部を欠損しているが、両側縁に微細剥離がみられる。スクレイバーとしての機能も考えられる。11は両側縁に微細剥離がみられ、打面部には打面調整が認められる。末端部は欠損している。12・13は幅広の不定形剥片を素材とする。12は背面に自然面を残し、主要剥離面の左側縁下部から下線、右側縁にかけて微細剥離がみられる。13は下線に微細剥離がみられる。

#### 剥片（第14・15図14～17）

14は黒色の頁岩製の縦長剥片である。主要剥離面には大きくバレバスカーを残し、背面には末端側

第11図 爪群・散蹠分布図及び接合状況





第12図 小グリッド重量別個体数

第4表 VI層散疎重量別個体数

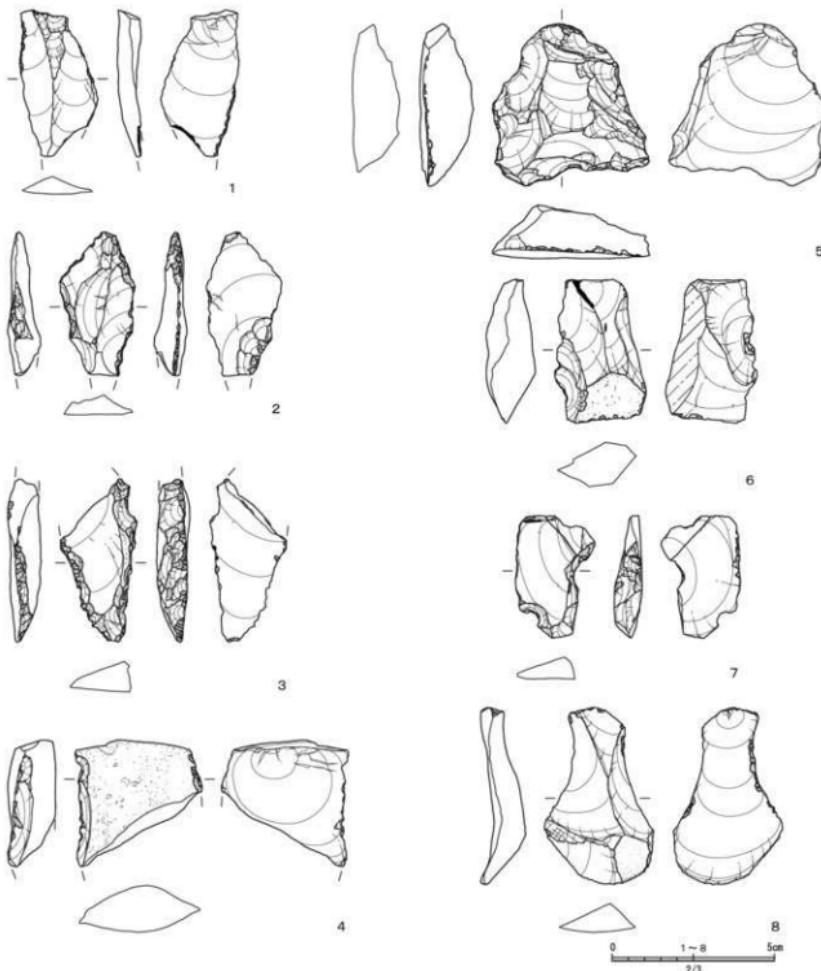
	50g未満	51g~100g	101~150	151~200	201~250	301~400	401~500	500g以上	雌数	雄合数	歩化率(%)
LI-4	1	1	2	1	0	1	0	1	7	1	28
LI-9	16	4	3	6	7	1	0	7	44	6	58
LI-4	6	2	7	3	1	1	0	2	22	3	76
LI-5	5	4	0	2	0	0	0	1	12	0	17
LI-10	13	13	3	2	3	2	2	3	41	1	76
LI-5	19	21	19	2	10	1	3	7	82	11	79
LI-10	8	14	5	3	2	2	0	0	34	1	80
MI-1	31	28	8	5	3	2	3	8	88	7	68
MI-2	1	5	3	2	4	4	1	3	23	6	57
MI-1	18	19	11	6	4	5	2	0	65	6	62
MI-6	14	12	3	2	4	1	2	2	40	7	42
MI-1	0	1	2	0	4	2	1	1	11	0	64
MI-6	2	0	0	1	3	2	3	2	13	0	62
MI-2	0	1	0	1	0	0	0	1	3	0	67
MI-12	1	2	1	0	0	0	0	1	5	0	0
MI-2	3	4	2	0	0	0	0	1	10	0	30
MI-3	1	2	2	3	1	1	0	0	10	2	60
MI-7	23	22	10	6	6	2	0	1	70	6	65
MI-8	4	3	1	0	3	0	0	0	11	0	27
MI-13	3	4	1	2	4	1	0	1	16	2	50
MI-9	42	20	7	4	4	2	0	0	79	4	49
MI-4	15	11	4	5	3	4	3	3	48	4	43
MI-9	8	10	5	3	4	2	0	2	34	4	33
MI-14	59	21	8	3	5	2	2	3	103	4	32
MI-16	0	2	1	0	0	0	1	0	4	0	100
MI-4	42	33	22	19	21	11	10	8	166	11	33
MI-10	8	4	6	3	13	3	3	4	44	0	28
MI-10	1	1	0	0	1	0	0	0	3	0	33
MI-15	6	2	2	0	2	1	2	0	15	0	46
MI-17	6	2	0	0	4	0	0	0	12	0	42
MI-1	11	2	3	4	1	2	4	2	29	1	32
MI-5	5	8	5	3	5	0	0	1	27	2	22
MI-1	0	1	0	0	2	0	0	0	3	0	0
MI-2	73	32	29	7	9	7	3	4	164	12	27
MI-6	24	8	11	4	8	1	3	0	59	3	19
MI-2	1	2	1	0	2	0	0	0	6	0	0
MI-6	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
MI-9	1	0	1	0	0	0	0	1	3	0	33
MI-3	19	10	3	7	4	1	0	1	45	5	24
MI-7	38	15	1	4	3	3	0	3	67	2	24
MI-3	14	11	5	2	3	1	0	0	36	5	28
MI-7	2	1	1	0	1	0	0	0	5	0	40
MI-10	1	3	0	3	1	1	0	0	9	2	22
MI-4	7	4	1	2	0	0	0	0	14	0	17
MI-8	1	3	2	0	0	2	0	1	9	0	12
MI-4	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
計	555	369	201	120	155	71	48	75	1594	118	39

S11	7	3	5	3	2	2	0	2	24	0	70
S12	23	31	18	7	11	11	10	11	122	6	43
S13	22	5	3	3	8	5	1	3	50	3	50
S14	21	10	6	5	5	2	2	0	51	3	55
計	73	49	32	18	26	20	13	16	247	12	55

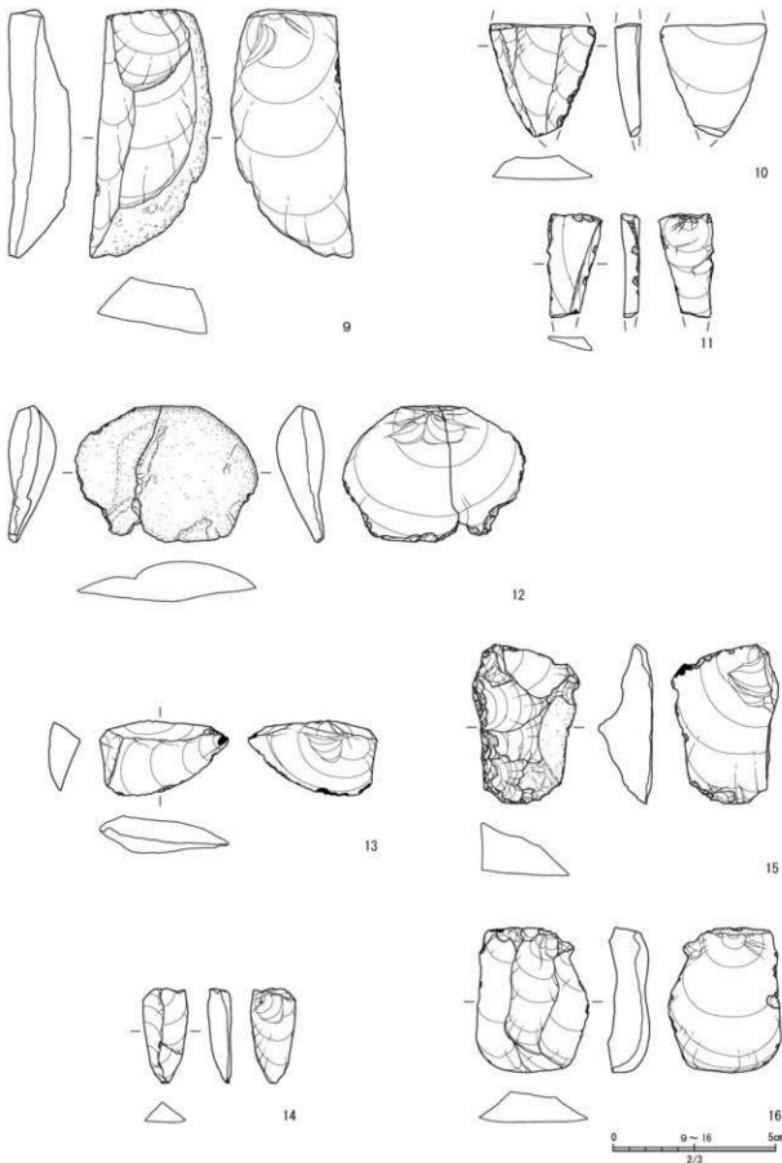
からの先行剥離が認められる。15は背面左側に石核調整痕を残す。16は頭部調整を行い、背面構成からは連続的に縦長剥片を3箇所剥離した可能性が指摘できる。17は不定形剥片を素材とし、この背面側には複数枚の不定形な剥片剥離が認められ、両側縁及び下縁部には微細剥離が残る。

## 石核(第15図18・19)

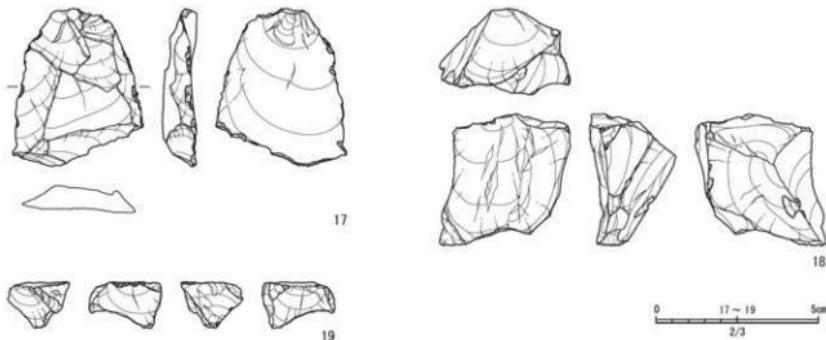
18は黒色の頁岩製の石核である。石核端部に礫面を残し、多方向からの剥離によって剥片剥離を行っている。19はチャート製の石核である。単一の平坦面より剥片剥離作業を行っている。残核である。



第13図 後期旧石器時代石器実測図（1）



第14図 後期旧石器時代石器実測図（2）



第15図 後期旧石器時代石器実測図（3）

第5表 後期旧石器時代石器計測表

No.	出土地点 (グリッド)	層	器種	石材	X座標	Y座標	Z座標	法量			
								長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	M1	VII	微細剝離片	珪質頁岩	-68258.838	58401.824	28.456	4.40	2.26	0.69	5.6
2	L2	V	ナイフ形石器	珪質頁岩	-68266.789	58369.159	28.873	4.39	2.29	0.94	6.4
3	L3	V	ナイフ形石器	流紋岩	-68275.164	58396.231	28.019	5.00	2.30	0.96	9.4
4	L2	VI	スクレイパー	珪質頁岩	-	-	-	3.59	3.76	1.44	20.9
5	L1	VI	スクレイパー	流紋岩	-68255.519	58399.648	29.130	4.73	4.71	1.60	33.8
6	K3	V b	二次加工剝片	流紋岩	-68271.285	58388.818	29.389	4.36	2.68	1.49	16.4
7	L2	VI a	二次加工剝片	流紋岩	-68263.720	58394.780	29.099	3.74	2.36	0.83	5.9
8	L3	VI	微細剝離片	珪質頁岩	-68278.334	58392.987	27.739	5.34	3.30	1.00	12.5
9	L2	VI a	微細剝離片	珪質頁岩	-68260.560	58397.420	28.524	7.44	3.42	1.79	51.6
10	M1	VI a	微細剝離片	珪質頁岩	-68258.850	58406.070	28.041	3.40	3.25	0.78	9.1
11	M1	VI a	微細剝離片	流紋岩	-68259.270	58407.640	27.813	3.16	1.61	0.55	2.4
12	L3	VI a	微細剝離片	珪質頁岩	-68271.729	58392.850	28.447	4.16	5.50	1.42	29.1
13	K3	V	微細剝離片	珪質頁岩	-68274.454	58389.550	29.203	2.27	3.98	1.14	8.5
14	L1	VI	剝片	珪質頁岩	-68257.607	58399.590	29.093	2.88	1.37	0.71	2.5
15	L3	VI a	剝片	流紋岩	-68275.011	58393.662	28.265	4.80	3.25	1.63	20.3
16	L2	VI a	剝片	流紋岩	-68262.320	58399.120	28.346	4.44	3.41	1.22	20.1
17	L2	VI a	剝片	流紋岩	-68261.300	58397.070	28.377	4.75	3.89	1.02	16.5
18	K3	V	石核	珪質頁岩	-	-	-	3.60	3.59	2.48	30.7
19	M2	VI	石核	チャート	-68261.551	58402.707	28.003	1.39	2.18	1.75	4.0

### 第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

#### 3-1. 概要

基本層序のIV・Va層が縄文時代早期に相当し、ともに粘性の非常に強い層である。縄文時代早期の層は斜面地しか残存しておらず、遺構・遺物ともそのほとんどが斜面地での検出となった。なお、Va層の遺物については第2節でも述べたように形態的な特徴や石材との関係から判断し後期旧石器時代の遺物としたものもある。

#### 3-2. 遺構

遺構は、集石遺構3基、炉穴9基、土坑2基をIV・V層で検出した（第16図）。前述したとおり道路建設時に削平をうけたため遺構が集中する箇所の多くは斜面地である。市道本村線下のN2Grでは、第6次調査区から続くと思われる炉穴の一部を検出している。

##### （1）集石遺構（第17図、図版3）

IV層にて集石遺構を3基検出した。斜面部中央IV層上面では散疊が分布しており、上部の疊を取り上げた後に疊の集中部分がみられた箇所を集石遺構とした。使用された石材は全て尾鈴山溶結凝灰岩である。

#### S15（第17図）

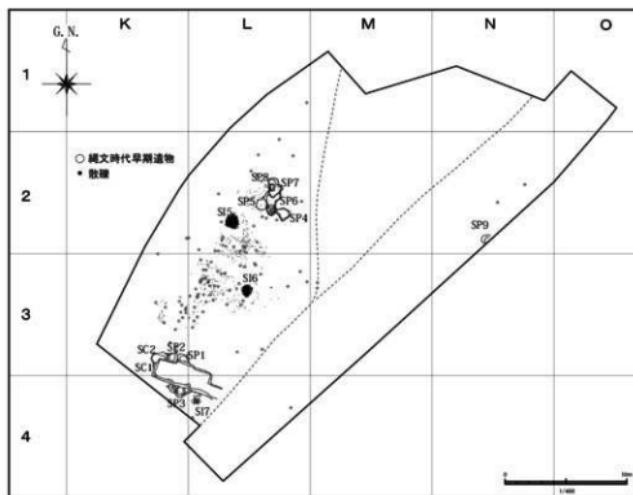
L2Gr南側で検出した。SP4～SP8と近接しており、長径1.2m×短径1.0mで掘り込みを有する。掘り込みは円形で断面は皿状を呈し、深さは最大で0.3mである。内部疊の残存状況は良好であり、疊は掌大サイズから約30cm程度の大きさまで様々な形状の疊で密に構成されている。疊は全て被熱のため赤化しており、総重量は約90.5kgである。

#### S16（第17図）

調査区の中央付近であるL3Grで検出した。長径1.0m×短径0.85mで掘り込みを有する。掘り込みは円形で断面は皿状を呈し、深さは最大で0.25mである。S15同様、内部疊は密であり、構成疊も全て被熱のため赤化しているが、疊個々の大きさは小さく10cm未満が多い。総重量は約43.0kgである。

#### S17（第17図）

調査区の南部に位置するSP1～SP3に近接した場所、L4Grで検出した。畑や石垣の裏込めを造成する際に削平をうけた影響で、内部疊があまり残存していない状況での検出となった。長径0.8m×短径0.6mで掘り込みを有し、構成疊は全て被熱のため



第16図 縄文時代早期の遺構・遺物分布図

赤化している。掘り込みは約0.1mと浅く、総重量も約17.0kgである。

## (2) 散碟

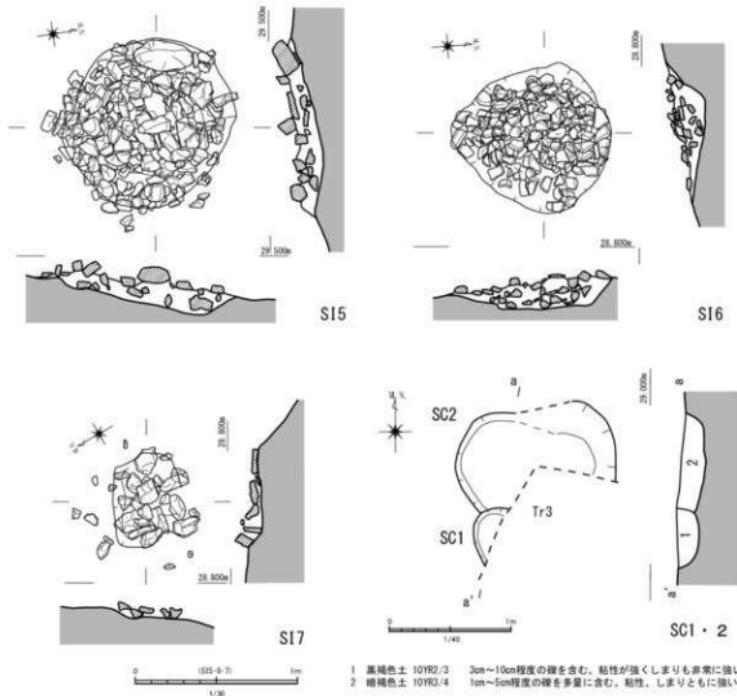
II層を掘削し、粘性の非常に強いIV層上面を精査しているときに、赤化礫を含む拳程度から掌大サイズの礫の広がりが見られた（第16図）。散礫検出時上り礫には疎密があり、やや礫が集中する場所では、その下部において集石遺構を検出した。散礫と集石遺構は同質の石材、尾鈴山溶結凝灰岩である。散礫の形成された場所は斜面地中央部約 $10 \times 20\text{m}$ の範囲で東に向かって傾斜している。散礫と同様の広がりで繩文時代早期の遺物も多数出土している。

### (3) 土坑(第17図)

2基検出しており、いずれもTr3の掘削時に検出した。SC1とSC2は切り合っており、ともに焼土、炭化物は含まない。SC1はSC2を切るかたちで検出し、平面形は楕円形で最大幅0.5m、深さ0.2m程度、埋土は1層である。SC2はSP2の西側に隣り合うようなかたちで検出し、平面形は楕円形で最大幅1.4m、最深0.6mを測る。焼土は有しないが、炉穴との関係性も考えられる。

#### (4) 炉穴 (第18・19図、図版2・3)

炉穴は大きく3つの群に分かれて、計9基が検出された。K3Gr～K4Grでは、SP1～SP3（第1群）が



第17図 繩文時代早期集石遺構・土坑実測図

調査区端のTr3沿いに検出された。L2Grでは、SP4～SP8（第2群）が、N2Grでは、SP9が検出されている。遺構の一部分のみの調査となった炉穴（第1群）は、その構造自体からでは遺構の認定が困難であったが、①焼土・炭化物を伴うこと、②群集していること、③ほぼ同一時期での切り合い関係がみられるること、これら3点を重視して炉穴として報告する。

#### SP1・SP2（第18図、図版2）

SP1は残存長で長軸0.86m×短軸0.5m×深さ0.6mを計る。明瞭な焼土を伴っておらず、炭化物のみが伴っている。よってSP1に堆積している埋土は炉部の掘き出しに伴うものと考えられる。SP1はSP2に西側を切られており、近辺に炉部と思われる焼土堆積部は存在しなかったため、炉部は西部に存在していた可能性がある。

SP2は残存長で長軸0.86m×短軸0.78m×深さ0.64mを計る。SP1を切るかたちで構築されている。焼土が比較的厚く堆積しており、炉部として機能していたと思われる。SP2がSP1の西部のみ切っていることを考慮すると、SP1が東西主軸、SP2は南北主軸をもつている可能性がある。

#### SP3-1・2・3（第18図、図版2）

V層を掘り込み面にもつ3つの土坑が切り合うように検出された。構築はSP3-1→SP3-2→SP3-3（以下1、2、3）の順と考えられるが、3つの土坑の関連性は判然としない。

1は2とトレンチに切られているので、規模の詳細は不明である。掘り込みは0.46mと他の炉穴と比較し少々浅い。

2も規模等の詳細は不明であるが、明瞭な焼土をもつ点が異なる。掘り込みの規模も東西で推定0.9mほどはあったと考えられる。3に切られている。

3は東西0.66mの規模をもつが、南北方向は不明である。下端はやや段掘状になっており、他の炉穴とは趣が違う。ただし、掘り込みはV層と考えられ、埋土の観察からも大きな時期差はないようであるため、SP3に伴うものとして報告する。

#### SP4・SP5・SP6・SP7・SP8（第19図、図版3）

SP4～SP8は5基以上の炉穴が切り合うことにより、

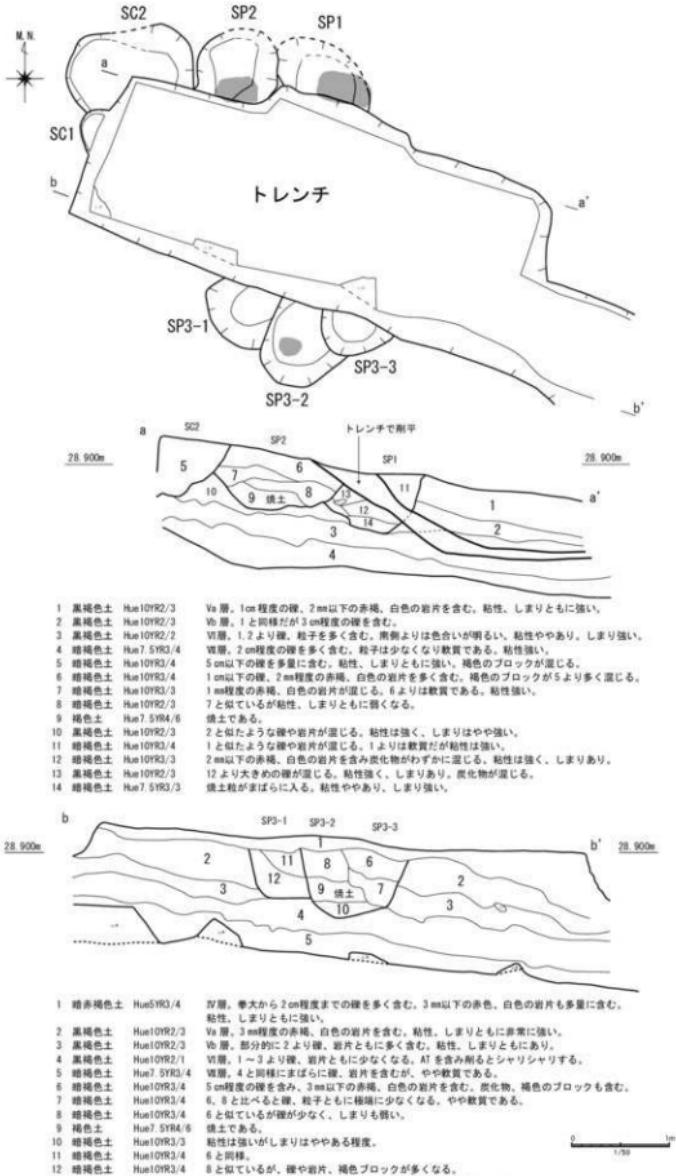
群をなす。構築順序は、SP4→SP5→SP6→SP7→SP8と考えられ、東西軸に設定されたタイプ（SP4・SP5）と南北軸に設定されたタイプ（SP6・SP7・SP8）に大きく分別できる。以下、個別に報告をおこなう。なお、遺構の計測値は復元した使用時の軸を重視し、足場から炉部へと向かう軸を「縦軸」、縦軸に対する横幅を「幅」とする。

SP4は群において最初に造られた炉穴で、足場と炉部という構造が比較的良好に確認された。足場は炉部に向かってすばまる扇状のプランをなし、足場と炉部との接続点が段状に掘り残されている点が特徴的である。縦軸は2.03mを計り、炉部の幅は残存で0.64m（復元幅0.9m程）、くびれ部の幅0.27m、足場最大幅1.06mを計る。くびれ部の掘り残し部は比高差で0.12～0.15m程で足場と炉部を区分する機能を有していたと思われる。炉部は焼土が0.4m以上堆積しており、床面は固く硬化している。西側の一部をSP6に切られている。

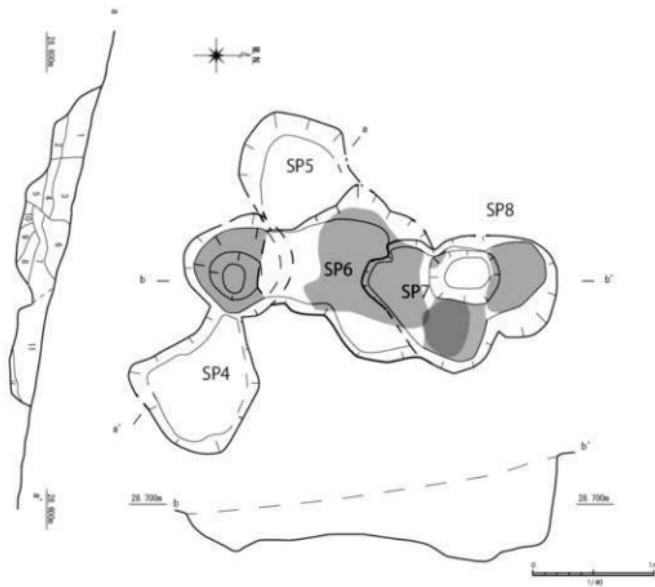
SP5は、残存長軸0.91m×短軸0.92mを計る。焼土の堆積は浅く明瞭ではなく、疎らに分布している。構築はSP6に切られていることを考慮すると、SP4とSP6の間の構築と考えられる。ただし、SP4との接続がやや不自然なため、間に1基存在していた可能性もある。SP6の項で述べるようにSP6として報告するものも一部SP5に含まれる可能性がある。

SP6はSP5を切るかたちで南北軸に構築されている。残存部を元に復元すると長軸1.44m×短軸0.89m以上となると考えられる。東側が張り出す、ややいびつな形態をなす。焼土は特に南側に比較的厚く堆積していたが、全面に分布しており、床面の硬化などもなく、炉部自体は明瞭でなかった。張り出しは、切り合いの可能性はあるが、掘削時の判断では土質の違いなどは捉えられなかった。ただし、張り出し部がSP5と同一軸であること、張り出し部には焼土の堆積は特に顕著ではなかった点を踏まえると、SP5の足場がSP6に切られた痕跡である可能性がある。

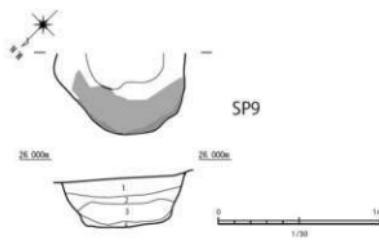
SP7はSP6を切って構築されている。埋土上層では判別できず、VI層への掘り込みで前後関係が判明した。残存長軸1.23m×短軸0.63mを計る。北壁側



第18図 繩文時代早期SP1・2・3実測図



- 1 黒褐色土 Hue10YR2/3 粘性しまりともにあり。1mm~3mmの白色粒、炭化物をまばらに含む。燒土粒多く含む。
- 2 黒褐色土 Hue7 SYR2/3 粘性あり。しまり強い。1mm~7mmの白色粒をまばらに含み。わずかに燒土粒を含む。
- 3 黒褐色土 Hue5YR3/1 1mm~10mmの白色粒を多く含む。
- 4 黒褐色土 Hue7 SYR2/3 粘性あり。しまり強い。1mm~5mmの白色粒をまばらに含む。細かな燒土粒が多く、炭化物はまばらに含む。
- 5 結構色土 Hue10YR2/3 粘性ややり。しまり強い。1mm~3mmの白色粒をわずかに含む。燒土粒、炭化物をわずかに含む。
- 6 黒褐色土 Hue7 SYR3/2 粘性あり。しまり強い。白色粒、赤色粒をまばらに含む。細かな燒土粒をまばらに含む。
- 7 黒褐色土 Hue7 SYR3/2 粘性弱く。しまりややり。燒土粒、炭化物を多く含む。やや炭化している。
- 8 褐色土 Hue7 SYR4/3 粘性なし。しまりもほとんどない。燒土堆積層でありボソボソしている。炭化物も含む。
- 9 黑褐色土 Hue7 SYR3/2 粘性なし。しまりあり。燒土粒、炭化物をまばらに含む。
- 10 黑褐色土 Hue10YR2/2 粘性ややり。しまり強い。燒土粒、炭化物をまばらに含む。
- 11 極暗褐色土 Hue7 SYR3/2 粘性あり。しまり弱い。大きめの白色粒を多く含む。褐色ブロック。白色透明粘物も含む。
- 12 結構色土 Hue7 SYR3/3 粘性ややり。しまり弱い。1mm~5mmの白色粒が混じり、1mm程度の赤褐色粘物、褐色ブロックを含む。



- 1 黒色土 Hue7 SYR2/1 固くしまっており粘性もある。炭化物と燒土粒を含む。
- 2 明赤褐色土 Hue5YR5/8 烧土。3より極暗褐色土を多く含み、炭化物も含む。粘性。しまりなし。
- 3 明赤褐色土 Hue5YR5/8 烧土。粘性。しまりともなし。他の粒子等の混ざりなし。
- 4 極暗褐色土 Hue7 SYR2/3 粘性。しまりともなし。燒土粒が多く混ざる。

第19図 繩文時代早期SP 4～8・9実測図

に焼土が堆積し、床面は硬下している。焼土および硬化面はSP8に切られている。

SP8はSP7を切って構築されている。SP7と足場を共有していたと想定すると縦軸1.58m、炉部の幅0.83mとなり、長軸0.59m×短軸0.43m×深さ0.07~0.11mの掘り込みがあった。焼土は掘り込み部にもかかるように堆積していたことより、炉穴機能時に使用されていたと考えられる。SP4の段状の掘り残しとはやや様相を異にするが、炉部と足場は別に掘り込むという点では共通性があり、SP8の掘り込みも、炉部と足場を区分する機能があったと考えられる。

### SP9（第19図、図版3）

SP9は調査区北東部N2Grに位置し、第6次調査区で検出された炉穴（SP3）から続くと想定される範囲を重機で掘削し、精査中に焼土面を確認した。焼土部分のみの検出のため炉部の残存は長軸0.8m×短軸0.5mである。焼土面の堆積は0.15mあり、強い熱を帯びていたため焼土の周囲には灰白色の土の焼け跡もみられた。分布の様子から第6次調査区のSP3と同群をなし、主軸を東西に向ける炉穴であると考えられる。

第6表 繩文時代早期集石遺構一覧表

遺構名	グリッド	検出席位	長軸（m）	短軸（m）	掘り込み		配石	重量（kg）
					残深（m）	平面形		
SI5	L2	IV	1.2	1.0	0.3	円形	なし	90.5
SI6	L3	IV	1.0	0.85	0.25	円形	なし	40.3
SI7	L4	IV	0.8	0.1	0.1	楕円形	なし	17.0

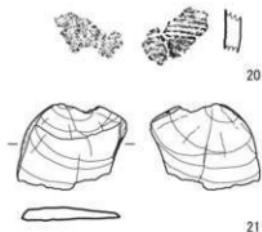
第7表 繩文時代早期炉穴一覧表

遺構名	グリッド	検出席位	残存規模			平面形	焼土	放射性炭素年代
			長軸（m）	短軸（m）	残深（m）			
SP1	K3	V	0.86	0.5	0.6	不明	薄らに堆積	—
SP2	K3	V	0.86	0.78	0.64	不明	比較的厚く堆積	—
SP3-1	K4	V	0.7	0.6	0.64	不明	なし	9665 ± 30 年 BP
SP3-2		V	0.85	0.8	0.9	不明	明確な焼土あり	—
SP3-3		V	0.66	0.66	0.5	不明	なし	—
SP4	L2	V	2.03	0.9	0.45	長楕円形	40cm程度の焼土あり	9490 ± 30 年 BP
SP5		V	0.91	0.92	0.4	長楕円形	薄く疊らに堆積	—
SP6		V	1.44	0.89	0.48	長楕円形	南側に厚く堆積	9485 ± 30 年 BP
SP7		V	1.23	0.63	—	長楕円形	薄らに堆積	—
SP8		V	1.58	0.83	0.75	長楕円形	明確な焼土あり	9490 ± 30 年 BP
SP9	N2	V	0.8	0.5	0.3	不明	15cm程度の焼土あり	9380 ± 30 年 BP

## 3-3. 遺構内遺物（第20図20・21、図版5）

第2群の炉穴からは、SP6の埋土から土器片2点、SP8の埋土上層から石器1点が出土している。ただし、土器片1点は風化が激しいため、土器片1点、石器1点を図化し報告する。なお、図示できなかつた1点は深鉢形土器の口縁部で、内面に横方向の条痕を有していた。

SP6出土の20は深鉢形土器の口縁部付近で、内面に横方向の比較的シャープな条痕が施されている。SP8出土の21はホルンフェルス製の使用痕のある剥片である。左側縁部および右側縁の一部に自然面を残し、打面の反対側の鋭利な部位に使用によると思われる剥離がみられる。



第20図 遺構内出土遺物実測図

## 3-4. 包含層内遺物

縄文時代早期に属する遺物はIV・Va層で出土した。

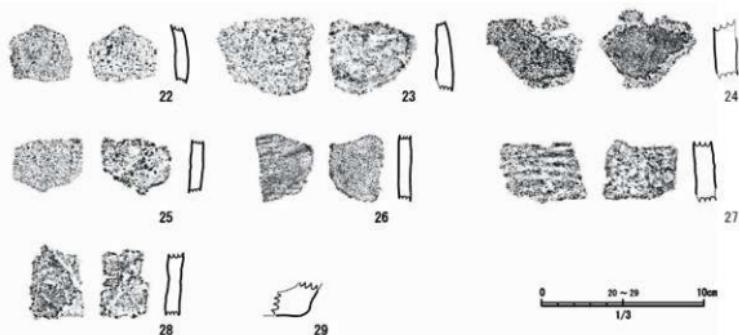
## (1) 土器（第21図22～29、図版5）

縄文時代早期層（IV～Va層）から出土した土器に関しては、ほとんどが小破片で風化が著しい。また、文様や形状が不明瞭であり型式を特定できるものも少ないため実測等に耐えうるもののみ8点を実測した。

22～28は深鉢形土器の胴部片で、22～25は風化が激しく調整は不明瞭である。26は風化が激しいものの外面にナデ調整がみられる。27は内面をナデ調整、外面に条痕が施されている。28は外面に指圧痕がみられる。29は深鉢形土器の底部である。風化のため土器面が摩耗して器形に変化がみられる。

## (2) 石器（第22～25図30～76、図版5・6）

石器の出土数は143点で、石鏃2点、楔形石器1点、スクレイバー8点、蛤形剥片石器15点、二次加工剥片3点、微細剥離剥片1点、剥片82点、石核2点、礫器7点、打製石斧4点、石錐1点、磨石10点、不明7点である。そのうち、48点を図化した。利用石材はホルンフェルスや砂岩が多く黒曜石といった石材はほとんどみられない。



第21図 縄文時代早期土器実測図

**石鎚(第22図30・31)**

30はチャート製で完形である。平面形は二等辺三角形に近く、両側縁は膨らみをもち丁寧に整形されている。基部には抉りがみられる。31は上青木・桑ノ木津留産系の黒曜石で、左脚部がわずかに欠損する。平面形は正三角形に近く、両側縁の形状はやや膨らみをもつて基部はわずかに内湾する。

**楔形石器(第22図32)**

チャート製で両設打面を有する楔形石器である。

**スクレイパー(第22図33~40)**

33~35はホルンフェルス製で背面に大きく自然面を残す。33は縦長剥片を素材とし、はじめ右側縁に大きく加工を行い、細かな加工を施して刃部を作出している。34は下部が欠損しているが、剥片端部に連続的に剥離を行い刃部を作出している。35は不定形剥片を素材とし、下縁部には鋸齒状を呈する刃部を作出している。36~40は砂岩製である。36は幅広の剥片を素材とする。周縁に連続的に加工を施し刃部を作出している。上部は欠損している。37は厚みのある幅広の剥片を素材とし、背面下縁部及び腹面上縁に急斜度な加工を施す。右側は欠損している。38は縦長剥片を素材とし、大まかな剥離で整形し、下縁に細かな加工を施している。石斧からの転用品の可能性も考えられる。39は幅広い剥片を素材とし背面に大きく自然面を残す。腹面の上縁及び下縁に加工を施し刃部を作出している。石斧の未製品とも考えられる。40は厚みのある不定形剥片を素材とし、背腹面にはそれぞれ自然面、節理を残す。左側縁下部に抉りを入れ刃部を作出している。石核の転用品の可能性も考えられる。

**蛤形剥片石器(第22・23図41~55)**

自然礫から打面調整を行わず剥離された剥片の素材を生かしたものを一括して蛤形剥片石器として報告する。これらは珪質頁岩製、ホルンフェルス製、砂岩製の剥片を素材としている。41~43・55・57は周縁に、44~46・50は下縁周辺に使用痕らしき微細剥離がみられる。47は下縁に刃部を作出するための加工が施されている。48・49は剥離された際に下部が薄く剥離され、それらを刃部として活用している。53~55は側縁を細かな剥離で整えてい

る。

**二次加工剥片(第23図56・57)**

56は姫島産黒曜石で、両設方向からの剥片剥離がみられ、下縁には細かな剥離を施している。57は自然面を大きく残した横長剥片を素材とし、右側縁に二次加工を施している。

**微細剥離剥片(第23図58)**

58はホルンフェルス製の縦長剥片を素材とする。背面左部から下部にかけて自然面を残す。下縁に微細剥離痕がみられる。

**石核(第23図59・60)**

59・60は砂岩製の石核である。60には両面に敲打痕がみられる。

**礫器(第24図61~66)**

61~65はやや厚みのあるホルンフェルス製で、両面とも自然面を残す。下縁に粗い加工を施し刃部を作出している。61は右部を欠損している。65は左側縁に細かな剥離作業を行い尖頭状に刃部を作出している。66は砂岩製である。大きな剥離のち下縁に粗い加工を施し刃部を作出している。

**打製石斧(第24図67~69)**

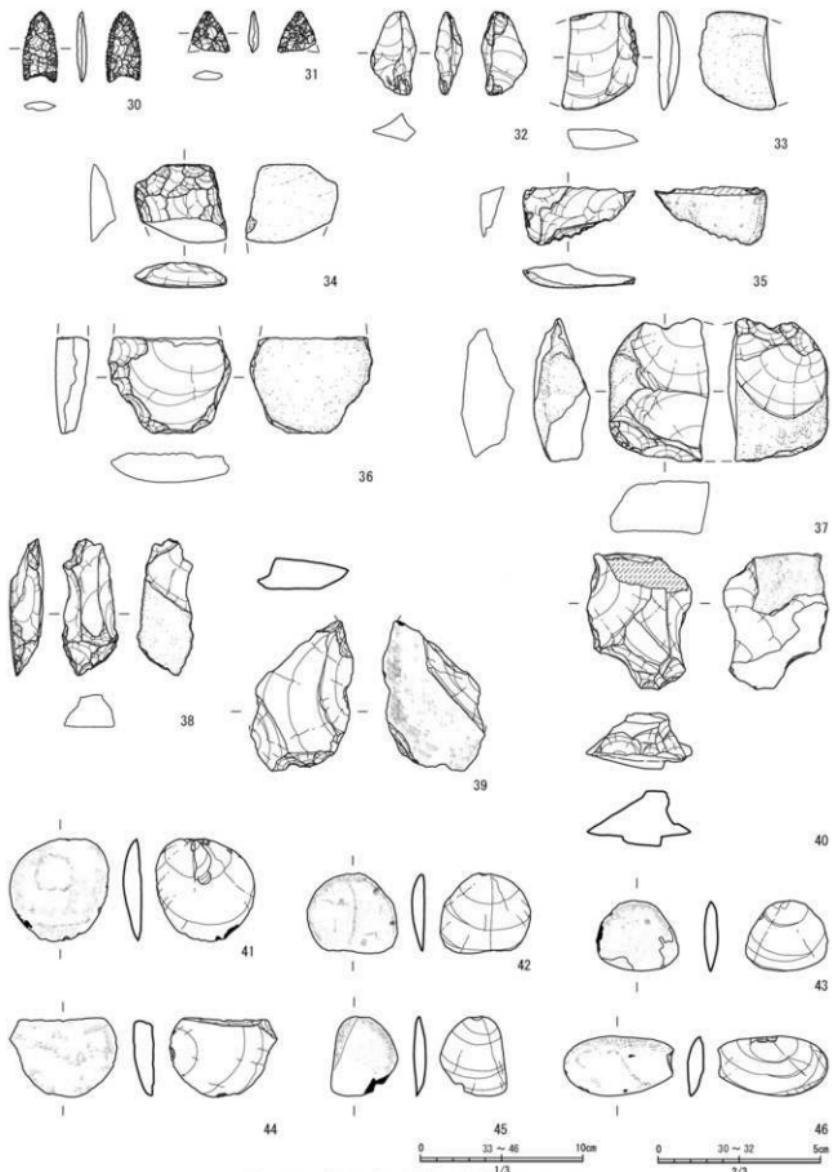
67~69は背面に自然面を残す剥片を素材としている。背面から周縁にかけて剥離を行い、両側縁が直線的になるよう調整している。横断面がカマボコ状になる。67・69は刃部を、68は上部を欠損している。

**石錘(第25図70)**

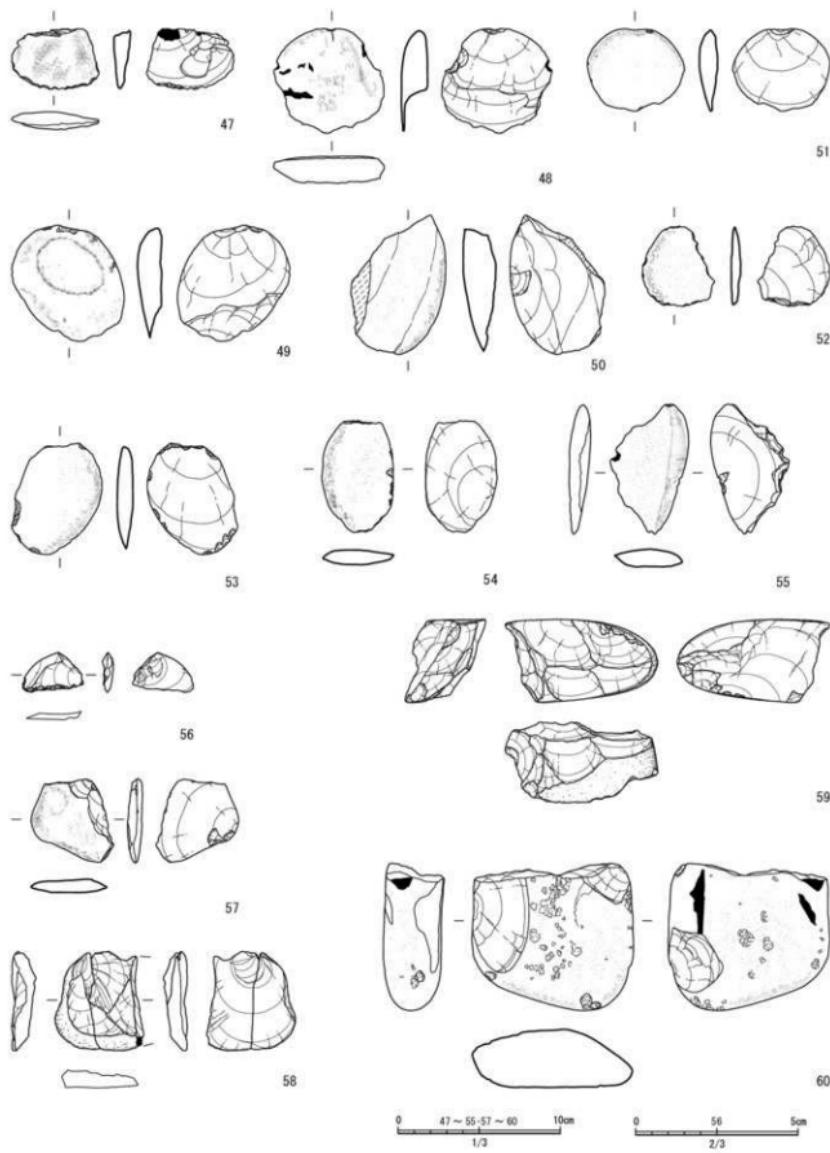
70は砂岩製の扁平な礫を素材とする。長軸方向に抉入状の加工を施し紐部を作り出している。

**磨石(第25図71~76)**

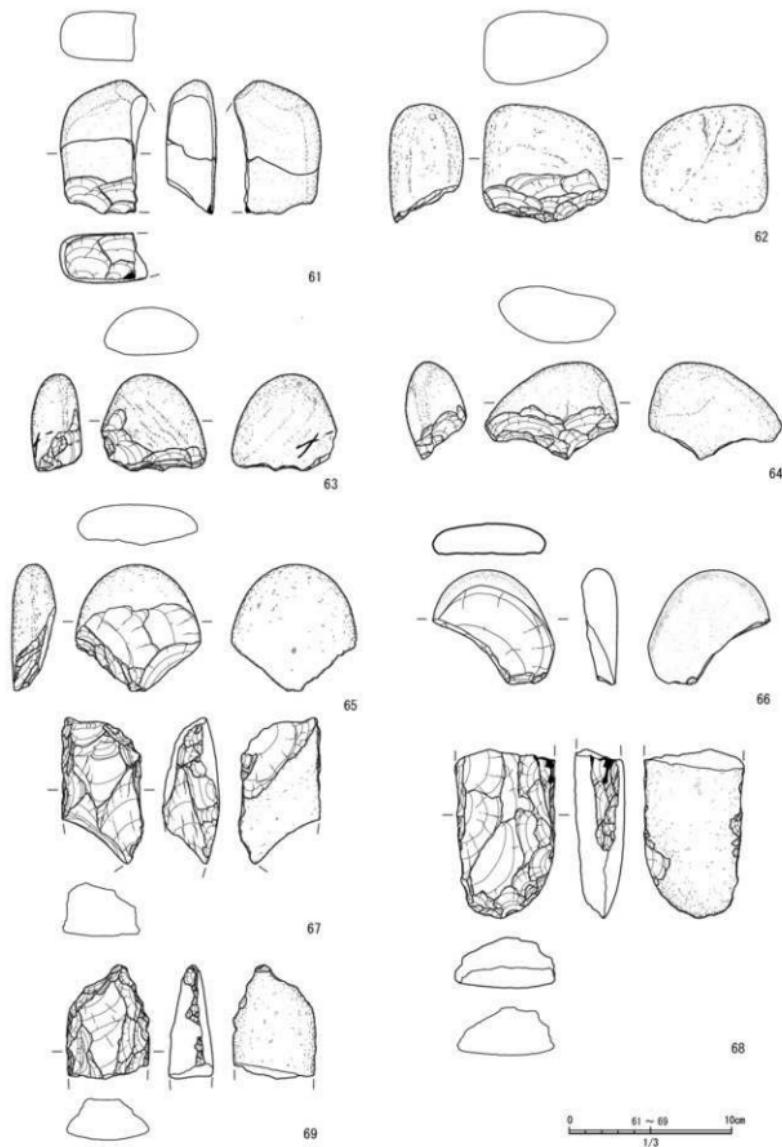
71・72は砂岩製である。71は両面ともに中央に縦長の回みと摩滅がみられる。上部には抉入状の加工が施されている。石錘としての転用も考えられる。72は上部が欠損している。周縁に敲打痕がみられる。73~75は尾鈴山溶結凝灰岩製である。円礫を素材とし両面に摩滅がみられる。73は両側縁に顕著な摩滅がみられる。76は上部を欠損しているが、被熱を受けているため赤化している。



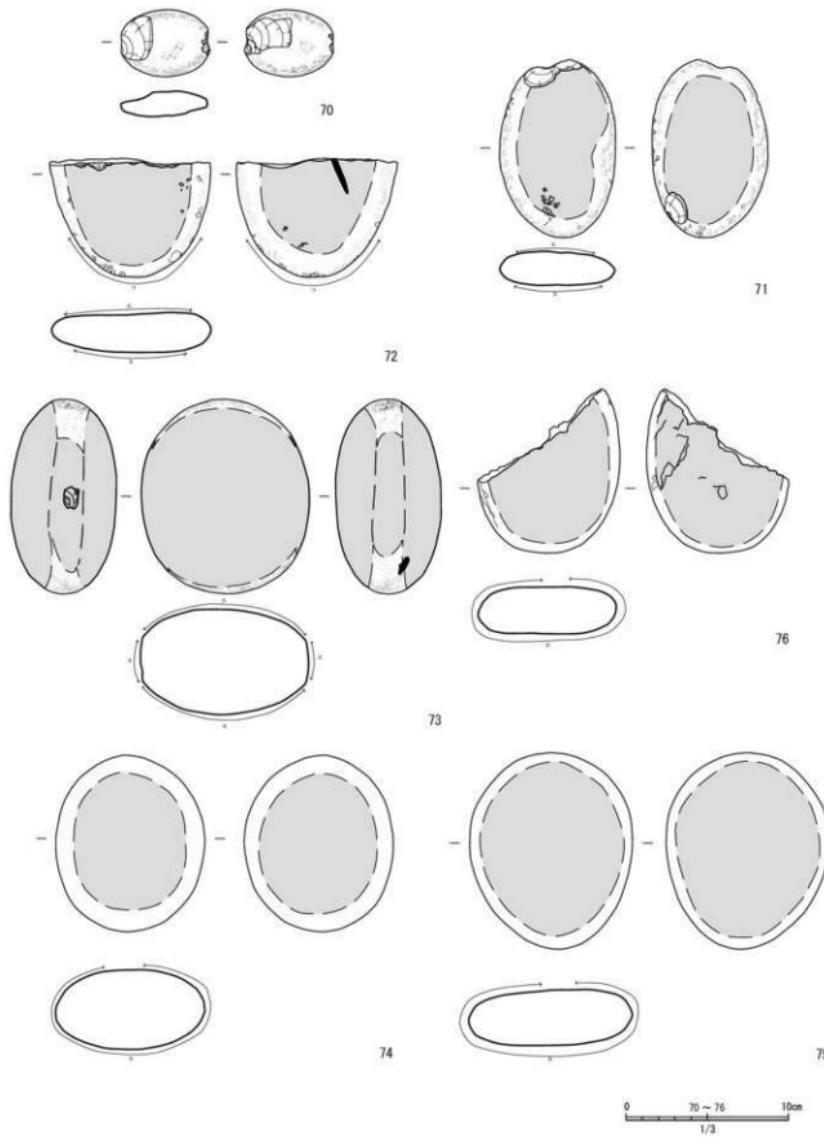
第22図 繩文時代早期石器実測図（1）



第23図 繩文時代早期石器実測図（2）



第24図 繩文時代早期石器実測図（3）



第25図 縄文時代早期石器実測図（4）

第8表 繩文時代早期土器観察表

No.	出土地点 (グリッド)	器種	部位	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土
				口径	底径	器高	外	内	外	内	
20	SP6	深鉢	口縁部	—	—	—	風化のため 調整不明	横方向の 条痕文	灰褐色 5YR4/2	黒褐色 5YR2/1	2.5mm以下の灰白粒、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の のくらい赤褐色
22	L2	深鉢	底部	—	—	—	風化のため 調整不明	風化のため 調整不明	灰褐色 5YR4/4	黒褐色 7.5YR3/2	3mm以下の赤褐色、2.5mm以下の透明光沢粒、2mm以下の の黒粒、褐色粒
23	L2	深鉢	底部	—	—	—	風化のため 調整不明	風化のため 調整不明	黒褐色 5YR5/6	黒褐色 10YR2/2	1.5mm以下のくらい黄褐色、1mm以下の黒粒、黒色光沢 粒
24	L4	深鉢	底部	—	—	—	風化のため 調整不明	風化のため 調整不明	明褐色 7.5YR4/3	明褐色 7.5YR5/6	3mm以下の赤褐色、灰白粒、2mm以下の黒色粒、1mm以 下の透明光沢粒
25	L3	深鉢	底部	—	—	—	風化のため 調整不明	風化のため 調整不明	黒褐色 5YR4/6	黒褐色 7.5YR3/1	4mm以下の褐色粒、3mm以下の灰白粒、2mm以下の黒色 光沢粒、1mm以下の透明光沢粒
26	L2	深鉢	底部	—	—	ナデ	風化のため 調整不明	明褐色 7.5YR5/8	褐 7.5YR6/6	6mm以下の灰褐色、3mm以下の裡粒、2mm以下の黒色光 澤粒、明褐色、黃褐色	6mm以下の灰褐色、3mm以下の裡粒、2mm以下の黒色光 澤粒、明褐色、黃褐色
27	K3	深鉢	底部	—	—	ナデ	ナデ	ナデ	褐 7.5YR7/6	褐 7.5YR7/6	2mm以下の灰褐色、灰白粒、1.5mm以下の透明光沢粒
28	L2	深鉢	底部	—	—	—	風化のため 調整不明	指圧痕	褐 7.5YR7/6	褐 7.5YR7/4	2mm以下の灰白粒、1mm以下の黒色粒
29	K3	深鉢	底部	—	—	—	風化のため 調整不明	風化のため 調整不明	褐 7.5YR6/6	—	1mm以下の灰白粒

第9表 繩文時代早期石器計測表

No.	出土地点 (グリッド)	層	器種	石材	法量				法量			
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
21	SP8	—	石刀	ホルンフェルス	5.35	6.70	0.80	29.6	5.35	6.70	0.80	29.6
30	L4	V	石鋸	サヤード	1.94	1.06	0.28	0.7	—	—	—	—
31	L2	IV	石鋸	ホルンフェルス	1.18	1.07	0.29	0.3	—	—	—	—
32	K4	IV	細削石器	サヤード	2.51	1.31	0.82	1.8	—	—	—	—
33	L2	V	スクレイパー	ホルンフェルス	5.81	4.34	1.26	46.0	—	—	—	—
34	L3	V	スクレイパー	ホルンフェルス	4.80	5.21	1.53	46.0	—	—	—	—
35	—	カクラン	スクレイパー	ホルンフェルス	3.45	6.75	1.38	25.9	—	—	—	—
36	K3	IV	スクレイパー	砂岩	5.83	7.45	1.98	111.7	—	—	—	—
37	L3	V	スクレイパー	砂岩	8.75	6.07	3.41	218.4	—	—	—	—
38	L3	V	スクレイパー	砂岩	8.25	3.41	2.01	60.1	—	—	—	—
39	K4	IV	スクレイパー	砂岩	9.30	6.30	1.90	103.7	—	—	—	—
40	L3	V	スクレイパー	砂岩	8.45	6.40	3.45	153.9	—	—	—	—
41	L3	IV	細削石器	陶質頁岩	6.30	6.10	1.10	45.2	—	—	—	—
42	L3	V	細削石器	ホルンフェルス	4.95	5.55	0.75	23.7	—	—	—	—
43	N2	V	細削石器	ホルンフェルス	3.10	3.55	0.60	6.7	—	—	—	—
44	L3	V	細削石器	ホルンフェルス	6.60	4.80	1.25	50.0	—	—	—	—
45	N2	IV	細削石器	ホルンフェルス	4.90	3.90	0.70	17.4	—	—	—	—
46	K3	V	細削石器	ホルンフェルス	3.70	6.80	0.95	28.9	—	—	—	—
47	L3	V	細削石器	ホルンフェルス	3.70	5.25	1.00	20.6	—	—	—	—
48	K3	V	細削石器	砂岩	6.40	6.60	1.60	62.0	—	—	—	—
49	L2	IV	細削石器	砂岩	7.15	6.90	1.50	74.4	—	—	—	—
50	L2	V	細削石器	砂岩	8.60	5.60	2.00	107.5	—	—	—	—
51	L2	V	細削石器	砂岩	5.10	6.00	1.10	34.8	—	—	—	—
52	L2	IV	細削石器	砂岩	5.50	4.35	0.60	12.7	—	—	—	—
53	L3	V	刮削器	砂岩	—	—	—	—	6.85	5.55	0.95	43.6
54	K4	IV	刮削器	砂岩	—	—	—	—	6.90	4.40	0.90	34.8
55	—	V	刮削器	砂岩	—	—	—	—	8.00	4.70	1.30	44.4
56	—	V	二次加工工具	高炭度頁岩	—	—	—	—	1.10	1.85	0.30	0.4
57	L3	V	二次加工工具	ホルンフェルス	—	—	—	—	5.15	5.10	0.90	25.9
58	L3	IV	擦削刮削器	ホルンフェルス	—	—	—	—	6.05	5.29	1.47	42.5
59	L3	V	石核	砂岩	—	—	—	—	5.09	8.55	3.91	215.0
60	N2	V	石核	砂岩	—	—	—	—	9.05	9.05	3.60	476.2
61	L2	IV	研磨器	ホルンフェルス	—	—	—	—	8.16	4.83	3.05	189.5
62	K3	IV	研磨器	ホルンフェルス	—	—	—	—	7.06	7.73	4.51	333.6
63	L3	V	研磨器	ホルンフェルス	—	—	—	—	5.84	6.19	3.02	154.0
64	—	III	研磨器	ホルンフェルス	—	—	—	—	5.88	8.10	3.63	168.2
65	—	V	研磨器	ホルンフェルス	—	—	—	—	7.75	7.70	2.64	179.1
66	L3	V	研磨器	砂岩	—	—	—	—	7.10	7.50	2.20	121.1
67	K3	IV	打製石器	ホルンフェルス	—	—	—	—	7.87	4.87	3.47	158.4
68	K3	IV	打製石器	砂岩	—	—	—	—	10.20	6.08	3.03	249.6
69	K2	V	打製石器	砂岩	—	—	—	—	6.74	5.08	2.72	107.3
70	—	II	石核	砂岩	—	—	—	—	5.50	5.10	1.50	55.7
71	K3	V	磨耗	砂岩	—	—	—	—	12.00	7.15	2.10	229.7
72	—	II	磨耗	砂岩	—	—	—	—	7.40	9.90	2.45	258.1
73	—	II	磨耗	高鈣山字輪面泥灰岩	—	—	—	—	12.00	10.40	6.50	1173.6
74	—	表	磨耗	高鈣山字輪面泥灰岩	—	—	—	—	10.90	9.15	4.90	706.2
75	—	III	磨耗	高鈣山字輪面泥灰岩	—	—	—	—	12.15	10.05	3.45	640.0
76	K3	IV	磨耗	高鈣山字輪面泥灰岩	—	—	—	—	10.10	8.80	2.90	321.4

## 第4節 その他の時代の遺構と遺物

### 4-1. 概要

斜面部の表土を除去し精査した後、斜面部下段II層上面において溝状遺構2条、土坑1基、小穴61基を検出した（第26図）。時期は判断しづらいため、ここで取り扱うこととした。

### 4-2. 遺構

#### (1) SE1 (第27図、図版3)

長さは8.8m、中央部の断面幅は1.2m、最深0.15m、検出面では、最も高い中央部と最も低い南部とのレベル差は0.47mであった。SE1を構築した後にSE2を構築していたため、SE1の南部のほとんどは消失していた。埋土は1層で、遺物は出土しなかった。

#### (2) SE2 (第27図、図版3)

長さは8.5m、中央部の断面幅は0.6m、最深0.2m、検出面では、最も高い中央部と最も低い南部とのレベル差は0.36mであった。中央部には16個の縦で長さ0.95mに渡って石が規則的に組まれていた。ただ、

畑などによる削平のため一部を損傷していると思われる。埋土は1層で、遺物は出土しなかった。

#### (3) SC3 (第27図、図版3)

溝状遺構を掘削時に検出された土坑である。溝状遺構で削平をうけており検出面では長軸1.3m×短軸0.7mの方形のプランをなす。深さは0.1m程度であり、ごく浅い。用途は不明である。

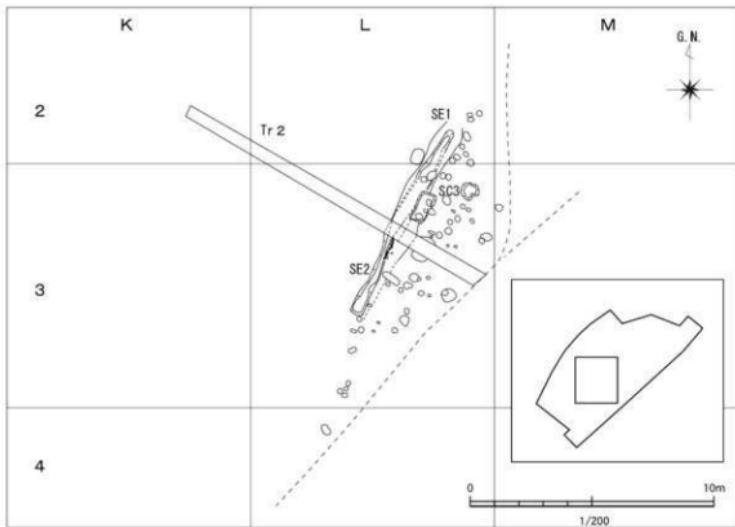
#### (4) 小穴 (第26図、図版3)

調査区中央の斜面下段においてII層掘削時に多く検出されたが、遺物の出土も少ないとから時期、用途とともに不明である。分布状況のみを示す（第26図）。隣接する第9次調査の遺物出土状況や分布状況を加味すると近世の可能性が考えられる。

### 4-3. 遺物

#### (1) 陶磁器 (第28図77~83、図版6)

77~83は国産陶磁器である。77は染付皿の底部で見込みは不明であるが、高台にハリ跡がみられる。78は染付丸碗の口縁部で外面に草花文を施す。

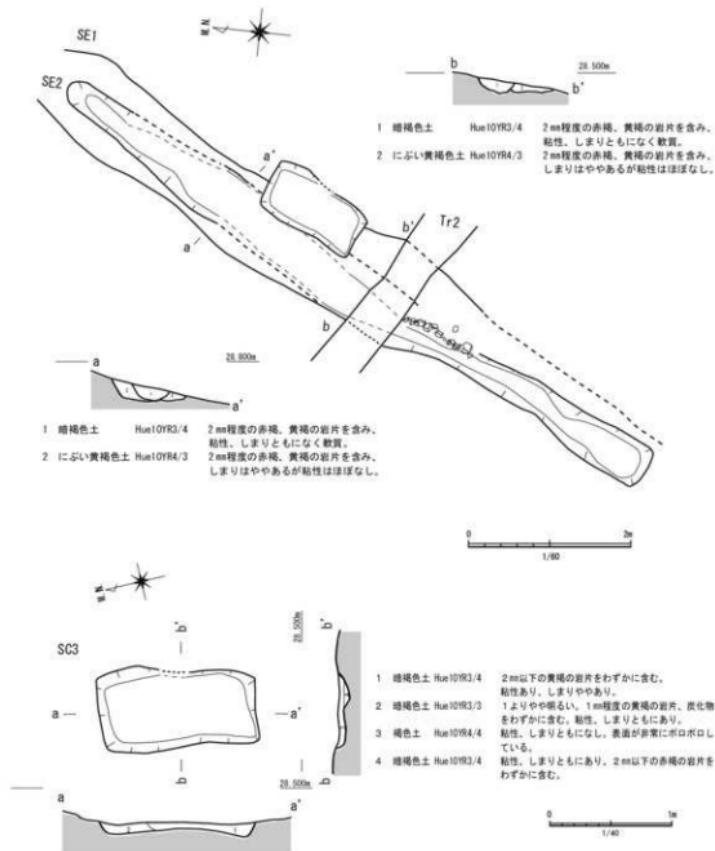


第26図 その他の時代遺構分布図

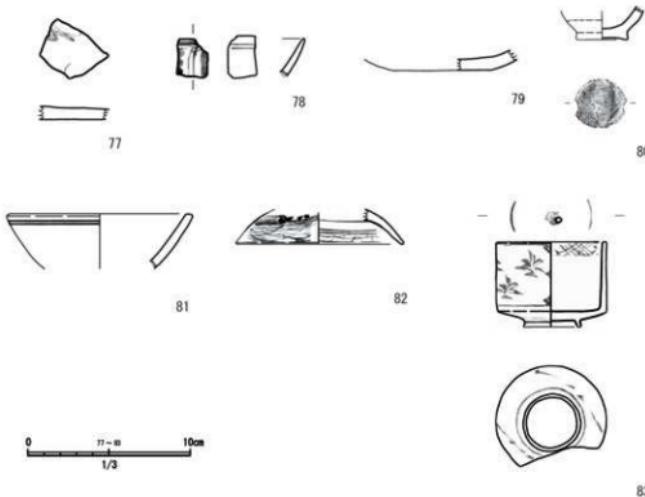
79は土瓶の底部で重ね焼きの時につけたと思われる溶着痕がみられる。80は碗の底部に回転糸切り痕を残す。81は統制陶器の口縁部で二重圓線がみられる。

82は碗蓋の口縁部で外面は山水文、内面は簡略化した青海波文を施文する。83は筒形碗で、外面は四つ

目結び文で区画し、その中に草文を描く。内面口縁部には四方攢文を巡らし、見込みには五弁花文を施文する。



第27図 その他の時代溝状遺構・土坑実測図



第28図 その他の時代陶磁器実測図

第10表 その他の時代陶磁器観察表

No.	出土地点 (グリッド)	種別	器種	部位	法量			手法・調整・文様ほか		色調		胎土	備考
					口径	底径	器高	外	内	外	内		
77	摺乱	染付	皿	底部	—	—	—	ハリ跡あり	施釉	釉 灰白 NB/0	胎土 灰白 SYR/1	精良	17 c 肥前系
78	摺乱	染付	碗	口縁	—	—	—	草花文	施釉	釉 灰色 I0YB/1	胎土 黄色 7.SYR/1	精良	18 c 後半 肥前系
79	摺乱	陶器	土瓶	底部	—	6.0	—		施釉	釉 線オーリーブ褐色 2.SYR/3	胎土 にぶい緑 SYR/4	精良	
80	N2	陶器	碗	底～ 底部	—	3.2	—	回転糸切り痕あり	施釉	釉 線 7.SYR/7/6	胎土 にぶい緑 7.SYR/7/4	精良	
81	N1	磁器	碗	～体部	11.3	—	—		施釉	釉 白色 9/0	胎土 白色 9/0	精良	統制陶器
82	表探	染付	碗蓋	口縁	10.3	—	—	山水文	施釉化した青海波紋	釉 灰白 I0YB/1	胎土 灰白 NB/0	精良	18 c 後半 肥前系
83	表探	染付	筒形 碗	口縁 ～底部	6.95	3.65	5.4	四つ目結び文 草文	四方摩文 見込五井花文くずれ	釉 灰白 I0YB/1	胎土 灰白 NB/0	精良	18 c 後半 肥前系

## 第5節 自然科学分析

本遺跡の炉穴の埋土中より炭化材、焼土が確認された。それらを試料として放射性炭素年代測定(AMS法)と樹種同定を実施した。放射性炭素年代測定は、遺構の時期決定の参考にする目的で実施し、樹種同定は、当時の遺跡周辺の植生を復元するとともに、当時の植物利用の実態を推察する目的で実施した。各分析に使用した試料及び分析方法・結果等については下記に掲載した。

### 1 放射性炭素年代測定

#### 1-1. 試料と方法

第11表参照。

#### 2-2. 測定結果

加速器質量分析法(AMS)によって得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。第12表にこれらの結果を示し、第29図に暦年較正結果(較正曲線)を示す。

##### (1) <sup>14</sup>C測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料のδ<sup>13</sup>C値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

##### (2) 放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差(±)は1σ(68.2%確率)である。<sup>14</sup>C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正年代値も併記した。

##### (3) 暦年代(Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動および<sup>14</sup>Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な<sup>14</sup>C測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 09、較正プログラムはOxCal 3.1である。

暦年代(較正年代)は、「<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1σ(68.2%確率)と2σ(95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。( )内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

#### 2-3. 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1では9565±30年BP(2σの暦年代でBC9140～8780年)、No.2では9490±30年BP(BC9120～9000, 8920～8900, 8860～8700, 8680～8650年)、No.4では9485±30年BP(BC9120～9070, 9060～9010, 8850～8700, 8680～8640年)、No.5では9490±30年BP(BC9120～9000, 8920～8900, 8860～8700, 8680～8650年)、No.6では9380±30年BP(BC8750～8560年)の年代値が得られた。

#### 文献

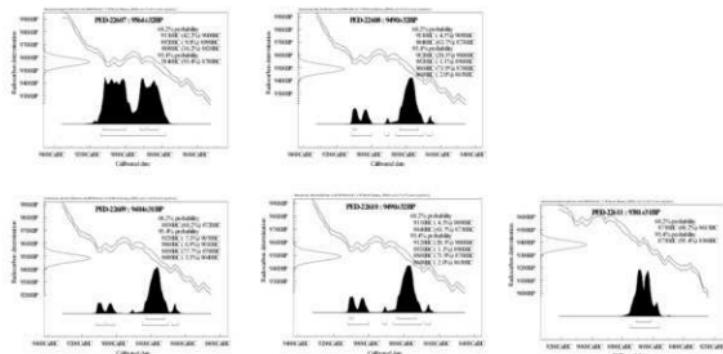
- Brook Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Brook Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, p.355-363.
- Paula J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 51, p.1111-1150.
- 中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正, 関西考古学マニュアル, 同文社, p.301-322.

第11表 測定試料、前処理・調整法および測定法

試料No.	採取箇所	種類	前処理・調整法	測定法
No.1	SP 3. 備土中	炭化材(広葉樹)	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS
No.2	SP 4. 備土中	炭化材(クルミ属)	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS
No.4	SP 6. 備土中	炭化材(コナラ属コナラ属)	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS
No.5	SP 8. 備土中	炭化材(ニレ属)	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS
No.6	SP 9. 備土中	炭化材(クリ)	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS

第12表 放射性炭素年代測定法結果

試料No.	測定番号 PDR-	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年校正用 年代(年BP)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代 (年BP)	曆年代(較正年代): cal-	
					1 $\sigma$ (68.2%確率)	2 $\sigma$ (95.4%確率)
1	22607	-26.83 ± 0.17	9564 ± 32	9565 ± 30	BC9120-9000(42.2%) BC8920-8890( 9.8%) BC8880-8820(16.2%)	BC9140-8780(95.4%)
2	22608	-25.85 ± 0.24	9490 ± 32	9490 ± 30	BC9110-9090( 4.5%) BC8840-8730(63.7%)	BC9120-9000(20.3%) BC8920-8900( 1.1%) BC8860-8700(71.9%) BC8880-8650( 2.0%)
4	22609	-27.83 ± 0.19	9484 ± 31	9485 ± 30	BC8830-8720(68.2%)	BC9120-9070( 7.3%) BC8960-9010( 6.9%) BC8850-8700(77.7%) BC8880-8640( 3.5%)
5	22610	-25.35 ± 0.23	9490 ± 32	9490 ± 30	BC9110-9090( 4.5%) BC8840-8730(63.7%)	BC9120-9000(20.3%) BC8920-8900( 1.1%) BC8860-8700(71.9%) BC8880-8650( 2.0%)
6	22611	-25.67 ± 0.23	9381 ± 31	9380 ± 30	BC8710-8615(68.2%)	BC8750-8560(95.4%)



第29図 曆年較正結果

## 2 樹種同定

### 2-1. 試料

試料は、SP3、SP4、SP6、SP8、SP9の焼土中から採取された炭化材7点である。

### 2-2. 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

- 1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
- 2) 試料を割折して、木材の基本的三断面（横断面：木口、放射断面：柾目、接線断面：板目）を作成
- 3) 落射顕微鏡（40～1000倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

### 2-3. 結果

第13表に同定結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真（第30図）を示す。以下に同定根拠となつた特徴を記す。

#### 1) クルミ属 Juglans クルミ科（試料2、3）

大型で丸い道管が単独あるいは2～数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら短接線状に1列に並び、網状柔組織をつくる傾向がある。道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は同性放射組織型で平伏細胞からなるが、ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られ1～3細胞幅である。

以上の特徴からクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。材は耐朽性、保存性は低いが、狂いが少なく韌性に富んでいて、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

#### 2) クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科（試料6、7）

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は単列の同性放射組織型で平伏細胞からなる。

以上の特徴よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高

木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

#### 3) コナラ属コナラ節 Quercus sect. Prinus ブナ科（試料4）

年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は同性放射組織型で平伏細胞からなる単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

#### 4) ニレ属 Ulmus ニレ科（試料5）

年輪のはじめに中型から大型の道管が1～3列配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は單穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなり同性放射組織型で1～5細胞幅ぐらいである。

以上の特徴よりニレ属に同定される。ニレ属にはハルニレ、オヒヨウなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

#### 5) 広葉樹 broad-leaved tree（試料1）

道管と放射組織が存在する。試料の保存状態が悪く小片で広範囲の観察が困難なため、広葉樹の同定にとどめた。

## 2-4. 所見

樹種同定の結果、各遺構の埋土中から採取された炭化材では、クルミ属2点、クリ2点、コナラ属コナラ節1点、ニレ属1点、広葉樹1点が同定された。クルミ属は、沢沿いなどの適潤地に生育する落葉高木である。クリは、暖温帯と冷温帯の中間域では、純林を形成することもあり、乾燥した台地や丘陵地を好む落葉高木で二次林要素でもある。コナラ属コナラ節は、日当たりの良い山野に生育する落葉高木で、温帯を中心に広く分布する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帯のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。ニレ科は温帯を中心とした湿润地ないし山地に分布

する落葉広葉樹である。いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

## 文献

島地謙・佐伯浩・原田浩・塙倉高義・石田茂雄・重松順生・原藤和司(1985)

木村の傳承、文永堂出版、296p.

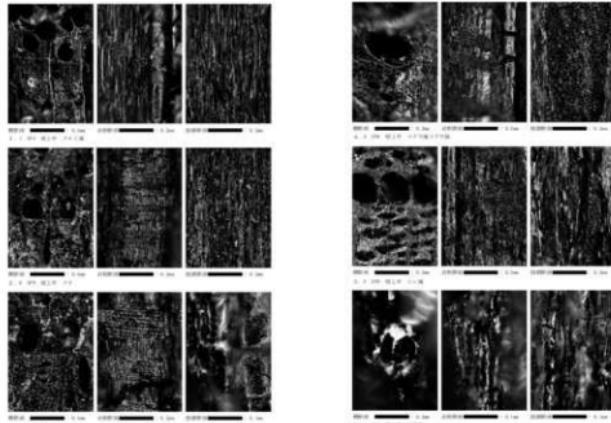
島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品叢観、雄山閣、296p.

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡叢観—用材から見た人間

・植物園林史、植生史研究特別1号、植生史研究会、24p.

第13表 樹種同定結果

分析番号	遺構番号	出土位置	結果(学名/和名)	
1	SP3	燒土中	broad-leaved tree	広葉樹
2	SP4	燒土中	Juglans	クルミ属
3	SP4	理土中	Juglans	クルミ属
4	SP6	理土中	Quercus sect. Primus	コナラ属コナラ節
5	SP8	理土中	Ulmus	ニレ属
6	SP9	燒土中	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ
7	SP9	理土中	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ



第30図 炉穴出土の炭化材

## 第6節 小結

岡遺跡（第16次調査）では、後期旧石器時代、縄文時代早期にかけての遺構・遺物を確認した。縄文時代早期以降の遺構・遺物は旧地形の変更が激しく、なおかつ道路建設時にも削平をうけていたためほとんど確認することができなかった。後期旧石器時代及び縄文時代早期にかけては、隣接する第6次調査、第9次調査と出土する遺構・遺物が同様の様相をみせていることより比較検討を行なながら本調査の調査成果について触れ小結とする。

### 後期旧石器時代

後期旧石器時代は、ATを境に2時期の遺物が確認されたが、AT下位層は珪質頁岩製の微細剝離剥片1点のみであった。第9次調査では、本調査区に比較的近いK4Gr、J5Gr、I5GrのAT下位層から遺物が11点確認されている。そのうち同石材の珪質頁岩は8点あるが、石錐(1)、スクレイバー(3)、微細剝離剥片(6)、剥片(7)の4点は、本調査区から出土した微細剝離剥片と肉眼での判断ではあるが限りなく同一母岩に近いと考えられる。ただし、接合関係はみられなかった。AT上位層の遺構は、散礫を伴うかたちで礫群を4基検出した。VI層における礫群・散礫を合わせた礫の総数は1841点、接合数は計130点、57個体である。第2節で述べたように礫や赤化礫が一定量集まる箇所を礫群と認定したが、接合礫の分布状況や礫の重量別個体数を考慮すると他にも2基程度の礫群が存在した蓋然性は高いと思われる。散礫については、斜面上方からの礫の混入の可能性も捨てきれないが、調査区上部にあたる第9次調査で礫群が1基確認されているものの散礫が確認されていないこと、接合礫の分布が規則的な広がりをみせ礫群の周囲での移動がほとんどであること、そして、散礫の近くに母岩となる尾鈴山溶結凝灰岩が多数露頭していたことなどから、使用礫の抜き取りやストックなどといった人為的な要因によるものであると考えたい。日向市はAT上位層において寺ノ上遺跡、百町原地区遺跡、ハッ山遺跡、上野原遺跡で礫群が確認されている。どの礫群も密集または散在するがまとまりの認められるものであり、岡遺跡と同様に掘り込みはもたない。向原中尾

第2遺跡では礫群と認定されていないものの、赤化した礫の散乱が認められているが、その性格や機能は不明である。

後期旧石器時代の岡遺跡全体としての遺構は礫群が6基、遺物は石材別に珪質頁岩40点、ホルンフェルス17点、流紋岩14点、チャート4点、砂岩4点、黒曜石3点、石英2点、頁岩1点の総計85点である。器種は石錐、ナイフ形石器、スクレイバー、二次加工剥片、微細剝離剥片、剥片、礫器、石核であった。遺構・遺物の量は多くないものの当該時期に生活の場として利用された可能性は考えられる。

### 縄文時代早期

縄文時代早期では、集石遺構3基、炉穴9基、土坑2基を検出した。集石遺構は散礫を伴ってIV層上面にて確認された。S17のみ削平をうけていたため残存状況はよくなかったが、他の2基は内部礫の残存状況は良好であり、ほとんどの礫が熱を帯び赤化した状態であった。全ての集石遺構において掘り込みはみられたが、配石はみられなかった。これは、第6次調査の掘り込みも配石ももつタイプ、第9次調査の掘り込みも配石ももつタイプと大きく異なる。遺物や炭化物が確認されなかつたため、これらの集石遺構との正確な時期差については不明である。

炉穴はSP1～3（第1群）、SP4～8（第2群）、SP9に分けられる。主軸を東西に向けるタイプ（SP4・5・9）と南北に向けるタイプ（SP6・7・8）があり、第6次調査、第9次調査とも主軸の向きが合致している。これまでの調査で指摘してきた地形を生かし谷風を意識した炉穴構造の重要性が増してきた。炉穴の形態としては、古い炉穴をもとに軸をずらし交差するように新しい炉穴を構築するようなタイプや古い炉穴の軸に対して並列するように構築するタイプが考えられる。また、足場から炉部に向かってすばまる扇状のプランがSP4・SP8でみられ、接続点が段状に埋め残されている箇所があるなど足場と炉部とを区分する機能があったのではないかと推測される点が特徴的である。炉穴（第2群）の埋土下部に集石遺構と同石材の赤化した礫が13点出土した。第2群とS15、第1群とS17は切り合い開

係は見られないものの近接しており、両遺構とも散礫を取り除いた後に検出されたこともふまると、炉穴と集石遺構は同時期に併設していたとも考えられる。炉穴から確認された炭化物の放射性炭素年代測定と樹種同定を行った。第1群は $9564 \pm 30$ 年BP、第2群は $9485 \sim 9490 \pm 30$ 年BP、SP9は $9380 \pm 30$ 年BPとほぼ同時期を示し、クルミ属、クリ、コナラ属コナラ筋、ニレ属が同定された。これらは食材、建築、器具、薪炭等に用いられる樹種であり、当時の岡遺跡周辺の環境については日当たりがよく山地や湿润地が広がり落葉高木が植生していたことが理解される。石器の石材は、後期旧石器時代と比べると砂岩・ホルンフェルスが極端に多くなり出土遺物の6割を超える。

縄文時代早期の岡遺跡全体としての遺構数は集石遺構14基、炉穴17基、土坑11基を確認した。各調査区の放射性炭素年代測定結果より、第6次調査(SP :  $9490 \pm 35$ 年BP～ $9380 \pm 30$ 年BP)、第9次調査(SI : SP :  $10880 \pm 35$ 年BP～ $9120 \pm 30$ 年BP)、第16次調査(SP :  $9564 \pm 30$ 年BP～ $9380 \pm 30$ 年BP)とそれぞれが縄文時代早期前半の近い年代を示した。土器については第16次調査において、どれも風化が激しく明確な時期特定には至らなかつたが、第6次調査では円筒形貝殻文土器、山形押型文土器が、第9次調査では円筒形貝殻文土器が同様の包含層から出土しており放射性炭素年代測定結果と時期的にも合致している。石器は砂岩、チャート、ホルンフェルスが多く、器種としては石鏃、蛤形剥片石器やスクレイバー、打製石斧、磨石、石錘が多数出土している。

岡遺跡ではこの時期の遺構・遺物が最も多く確認されていることから、この地が狩猟・漁労によって捕らえられたものや採集した植物などの調理・加工を行っていた空間であり、人々の活動の最盛期を迎えていたのではないかと考えられる。今回の調査で竪穴建物跡は確認できなかつたが、遺跡の様相から岡遺跡の所在地より山側(西側)の方まで人間活動の営みの広がりがあったのではないかと想定される。

調査報告の関係上ここでは、第6次調査、第9次調査と比較検討を行いながら後期旧石器時代及び縄

文時代早期について述べてきたが、縄文時代晚期、弥生時代～古代、中世～近世、近代の総括については、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第223集『岡遺跡(第9・13・15次調査)』2012に記載している。

#### 参考文献

- 日向市教育委員会1985『日向市道路詳細付別冊調査報告書』
- 日向市教育委員会1994『古町原地区遺跡』
- 日向市教育委員会1995『寺ノ上遺跡』
- 日向市史編さん委員会2009『日向市史 資料編』日向市
- 日向市史編さん委員会2010『日向市史 通史編』日向市
- 宮崎県埋蔵文化財センター-2008『林遺跡II』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第174集
- 宮崎県埋蔵文化財センター-2010『野吉第2遺跡(二・三次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第188集
- 宮崎県埋蔵文化財センター-2011『坂平遺跡(第3・4次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第199集
- 宮崎県埋蔵文化財センター-2011『内野ヶ遺跡 内野ヶ第2・第3遺跡 内野ヶ第4遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第202集
- 宮崎県埋蔵文化財センター-2012『岡遺跡(第6・7次調査)・坂元第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第212集
- 宮崎県埋蔵文化財センター-2012『向原中尾第1・2遺跡 向原中尾第4遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第213集
- 宮崎県埋蔵文化財センター-2012『岡遺跡(第9・13・15次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第226集
- 保坂康夫2012『日本旧石器時代の縄群をめぐる総合的研究』
- 九州縄文研究会2003『九州縄文時代の集石遺跡と炉穴』第13回宮崎大会

## 第三章 馬込遺跡第2地点の成果

### 第1節 調査の方法と経過

#### 1-1. 発掘調査の方法と経過

本調査区は平成24年12月17日から平成25年3月29日までの間に発掘調査を行った。調査対象面積は1,600m<sup>2</sup>である。第1次調査において縄文土器片（楕円押型文・山形押型文）、スクレイバー、石鏃、石斧、剥片などが出土したため、縄文時代早期を中心とする遺跡である事を念頭に調査計画を作成した。第1次調査で多数の遺物が調査区西側より出土していたために、はじめに西側を中心に掘削作業を行った。また掘削の進め方として、遺跡の標高が高い場所より南北方向の傾斜にそって掘削作業を進めていくことにした。

本調査区は山林であったため、木の切り株が多く散在しており、調査開始時は人力で切り株の除去を行った。調査区の環境整備を行う作業と同時に土層の堆積状況や地形の様子を考慮しながら、重機と人力により、表土剥ぎを行った。表土剥ぎや掘削時に出土した排土を置く場所として、調査区外の北側の斜面地に排土置き場を設置した。その後、業者に委託して本調査区の測量を行い、10m間隔でグリッド杭を設置した。調査区西側から東側に対して、A～F、北側から南側に向かって1～6までのグリッド番号を設定した。

表土は平均30cmほど堆積しており、鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層（III層）は調査区の西側一帯のみに残存しており、その下のIV層から散礫が検出される状況であった。散礫は調査区西側に集中して検出され、調査を進めた結果、多数の集石遺構が検出された。

縄文時代の遺構は早期の包含層であるIV層からV層に集石遺構40基、炉穴1基、土坑1基を検出した。本調査区の集石遺構はほとんどが、配石を持ち、掘り込みを有するタイプであり、掘り込みを持たないタイプが1基だけ確認されている。集石遺構の中には、2～3基以上が上下に切り合った状態も確認されている。この時代の遺構として検出された土坑には2つのピットと落ち込みがあり、落ち込みの床面

から焼土が確認され、炉穴として使用された可能性がある。また2つのピットは杭の跡と考えられ、陥穴として使用された可能性もある。

遺物は縄文時代早期の包含層であるIV層～VI層にかけて、多数出土している。またI層・II層から、縄文時代晚期の遺物も出土しており、無刻目突帯文、刻目文、黒色磨研系の土器などが見られる。調査区西側からは、弥生土器を多量に出土した遺構が検出されたが、その用途、性格については不明である。

その他、時期不明の遺構として、溝状遺構1条と竪穴状遺構1基を検出している。溝状遺構は調査区の南から北東方向へ向かって確認された。道路状遺構の可能性もあるが、硬化面は確認できなかった。当初の計画では3月8日を期限としていたが、調査区西側の弥生土器を多量に出土する遺構の調査に手間取り、調査期間を延長して、3月29日にすべての調査を終了した。

本調査区から出土した集石遺構は1/10、土坑や炉穴などの遺構は1/20で実測図を作成した。ただし、B3Gr～B4Grで検出した集石遺構を含む散礫群については、1/20で実測図を作成した。撮影記録については6×7カラーフィルム、35mmモノクローム・リバーサル写真、デジタルカメラを併用して記録した。集石遺構や不明遺構の埋土から採取した炭化材は業者に委託し、自然科学分析、樹種同定を行い、そのデータを参考にして遺構の時期決定の参考資料にした。遺物についてもトータルステーションにより、位置を記録し、取り上げを行った。また調査区全景を上空から記録するために業者に委託して、ラジコンヘリコプターを使って空中写真撮影を行った。発掘調査の経過は調査日誌抄で代える。

#### 調査日誌抄

平成24年度

1217 環境整備、安全対策等。

1218 重機による表土剥ぎ開始。

- 現場事務所・器材庫の設置。  
作業員通路の整備。
- 1220 遺跡入り口周辺の草刈り、環境整備。
- 1221 重機による表土剥ぎ終了。
- 1225 作業員18人雇用。
- 1226 調査区南西側遺構検出。
- 0107 排土置き場流失防止対策、遺跡入口の整備。
- 0108 調査区北西部遺構検出。
- 0109 遺跡壁面遺構検出・遺跡南側の掘削。
- 0111 調査区内の切り株、伐根作業開始。
- 0118 調査区北西部に疊の主とまり3箇所確認。  
調査区西側の遺構検出を開始。
- 0121 調査区北側をⅢ層まで掘削し遺構検出。  
調査区南側はIV層までの疊分布を確認し、  
多数の集石遺構を確認。
- 0128 調査区東側掘削、遺構検出開始。
- 0204 遺物状況写真撮影、作業員は雨天  
のため作業中止。
- 0205 集石遺構2基確認。
- 0207 調査区北西部より山形押型文土器が出土。
- 0208 重機による排土除去実施。
- 0212 SZ1遺物出土状況写真撮影。
- 0213 空中写真撮影のための調査区清掃。
- 0214 空中写真撮影。
- 0215 調査区の全体図作成。
- 散疊範囲の図面作成・散疊除去。
- 0221 調査区西側掘削。  
土層断面図作成。
- 0222 集石遺構の写真撮影。
- 0225 集石遺構の実測図作成開始。
- 0228 調査区東側を重機にて掘削。  
遺構・遺物共になし。
- 0301 集石遺構の実測図作成。
- 0311 SC1の掘削。
- 0314 地形測量図・遺構分布図作成。
- 0315 調査区東側を重機にて掘削し、深いトレ  
チを設定し、掘り下げる。遺構・遺物は共になし。  
現場事務所撤去。
- 作業員雇用終了。
- 0316 SZ1掘削。

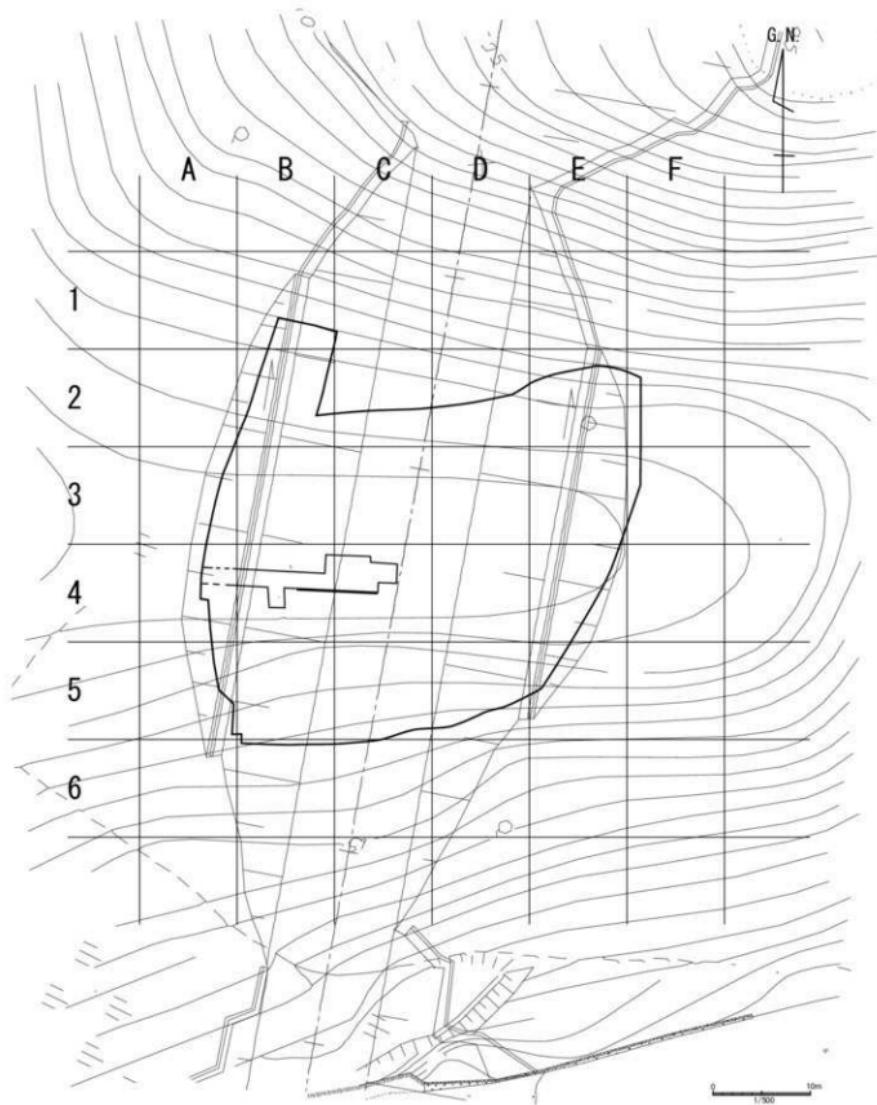
- 0317 SZ1内から、礫、打製石斧、壺がまとまって  
出土する。
- 0329 SZ1完掘、実測図作成、写真撮影。  
調査区内撤収作業。  
調査終了。

## 1-2. 整理作業及び報告書作成

馬込遺跡の整理作業は平成25年4月から開始し、出土した遺物を水洗・注記・計測・接合、実測等を行って、遺物台帳を作成した。遺物の実測は石器60点を業者に委託し、それ以外の石器67点、縄文土器32点・弥生土器42点、青磁1点を宮崎県埋蔵文化財センターで整理作業員及び、センター職員により、実測を行った。また本遺跡の集石遺構や不明遺構の埋土より出土した炭化材6点を放射線炭素年代測定、樹種同定2点を委託した。その後、遺構・遺物の各実測図を基にトレース作業を行い、レイアウト、版下作成、写真撮影を行った。報告書作成にあたっては、宮崎県埋蔵文化財センター報告書マニュアルに則って作成した。



整理作業風景



第34図 調査区グリッド配置図

### 1-3. 基本層序

調査区の基本層序は表土（I層）、暗褐色土～褐色土（II層）の下に鬼界アカホヤ火山灰二次堆積層（III層）と褐色土～暗褐色土（IV層）、黒褐色土（V層）、褐色土（VI層）、明褐色土（VII層）があり、更にその下位が岩盤層（VIII層）となっている。III層は調査区の西側一帯のみに残存しており、その下のIV層上面で散礫が露出する状況であった。調査区北側の斜面地ではI層下位から、一部にIII層・IV層の流れ込みが見られた。調査区の東側では表土を剥ぐとすぐにVII層、VIII層（岩盤）となっていた。IV層～VI層は縄文時代早期の遺物包含層であり、縄文土器片（楕円・山形押型文）、スクレイパー、剥片、石鏃などの遺物も出土した。IV層からV層では、多数の集石遺構が検出された。

またIV層からは数点の旧石器時代の石器が出土した。なお本遺跡からはAT火山灰層は確認されなかった。

以下は各層ごとの特色と土層断面図である。

I層： 表土

II層： 耕作土でabに分かれる。III層とその後の旧表土の遺物を搅拌して包含している。

II a： 暗褐色土（Hue7.5YR3/3）粘性、しまり共にほとんどなし。微細子炭化物を多く含む。

II b： 褐色土（Hue7.5YR4/3）aと比べると粘性、しまり共に強い。

III層： 明褐色土（Hue7.5YR5/6）で粘性をわずかに持ち、しまりは弱い。K-Ah粒を多く含み、二次堆積したアカホヤ火山灰層である。炭化物をまばらに含み、調査区西側のみに残存している。1mm以下の白色と褐色の鉱物を含み、縄文時代晩期から古代の遺物が包含されていた。

IV層： 縄文早期包含層でシルト質と粘質土に分かれれる。

IVa： 褐色土（Hue7.5YR4/6）シルト質から粘質土の中間くらいの土質を持つ。V層と混じり合っているため、判別は困難である。

IVb： 暗褐色土（Hue7.5YR3/4）粘性・しまりはややあり、1mm程の赤褐色鉱物、白色鉱を

まばらに含み、堆積状況の厚みが部分的に大きく異なる。

V層： 黒褐色土（Hue7.5YR3/2）粘性があり、しまりが強い。1mmから5mm程の黄褐色、白色の鉱物を多く含む。

VI層： 褐色土（Hue10YR4/4）粘性強く、しまりは非常に強く、2mmから5mm程の白色、褐色の粒を多く含む。炭化物をわずかに含む。

VII層： 明褐色土（Hue7.5YR5/6）粘性、しまりは共に強く、炭化物をわずかに含む。非常にもうろい岩盤であり、明褐色のマーブル状を形成している箇所もある。

VIII層： 地山の岩盤層。

I	表土	
II	a 暗褐色土（Hue7.5YR3/3）	縄文時代 晩期山脚
	b 褐色土（Hue7.5YR4/3）	
III	アカホヤ火山灰二次堆積	縄文時代 晩期山脚
	明褐色土（Hue7.5YR5/6）	
IV	a 褐色土（Hue7.5YR4/6）	縄文時代 早期層
	b 暗褐色土（Hue7.5YR3/4）	
V	黒褐色土（Hue7.5YR3/2）	
VI	褐色土（Hue10YR4/4）	
VII	明褐色土（Hue7.5YR5/6）	
VIII	岩盤層	

第35図 基本土層図

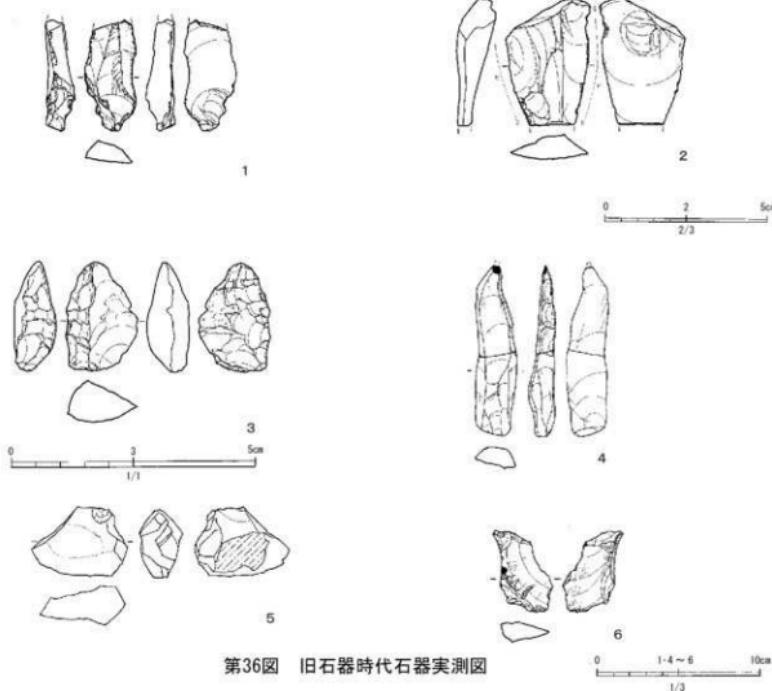
## 第2節 旧石器時代の遺物

### 2-1. 概要

本調査区では旧石器時代の包含層は確認されていないが、IV層～VI層より出土した遺物の中で器種の形態、石材を基に旧石器時代の遺物として判断して、抽出した。

### 2-2. 遺物（第36図1～6、図版14）

1はナイフ形石器である。縦長剥片を素材にしている。先端部が欠損しており、左右に粗雑な調整をしている。先端部が欠損しており、左右に粗雑な調整をしている。



第36図 旧石器時代石器実測図

第14表 旧石器時代石器計測表

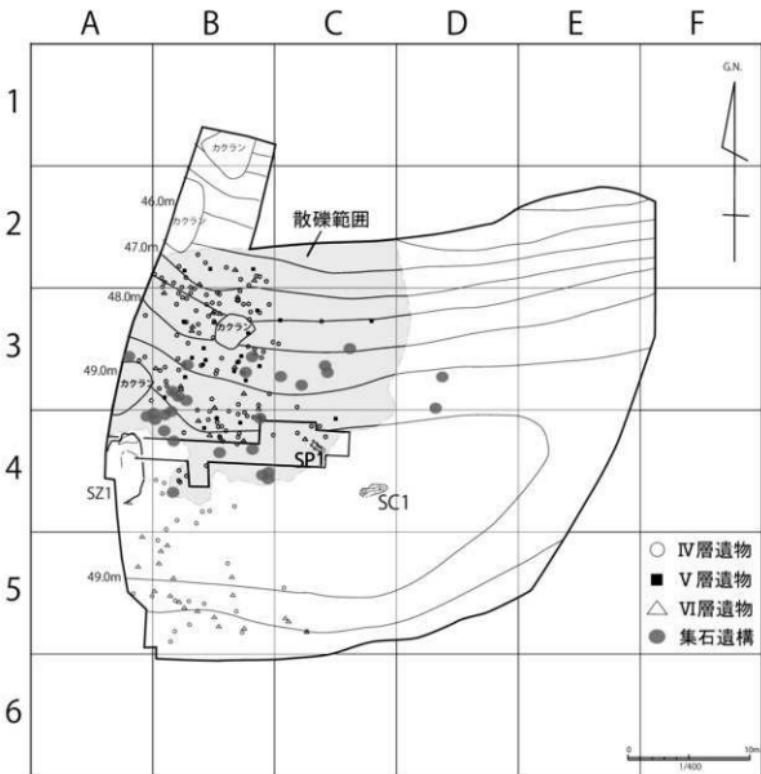
No.	出土地点 [グリッド 座標等]	用	器種	石 材	X座標	Y座標	Z座標	計 測 数			
								長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	B3	IV	ナイフ形石器	流紋岩	58455.131	49.018	6.63	2.90	1.70	28.0	
2	B2	—	スクリイバーナイフ	流紋岩	-67856.291	58455.172	46.767	3.89	2.54	1.06	6.4
3	A4	IV	角錐状石器	ホルンフェルス	—	—	—	2.21	1.44	0.85	2.4
4	B4	IV	ナイフ形石器	ホルンフェルス	-67871.837	58457.417	49.240	10.50	2.60	1.30	38.5
5	B5	IV	剥片	流紋岩	-67886.240	58454.279	48.663	4.20	5.80	2.40	52.3
6	—	IV	剥片	流紋岩	—	—	—	5.00	3.70	1.25	20.0

### 第3節 繩文時代の遺構と遺物

#### 3-1. 概要

繩文時代の遺構・遺物のほとんどが、調査区の西侧に集中し、IV層～VI層から出土している。遺構では集石遺構40基と炉穴1基、土坑1基が確認され

た。遺物は、縄文時代早期の土器片（楕円押型文、山形押型文、貝殻条痕文、撲糸文）、縄文時代晩期の土器片（無刻目突帯文・刻目文）が出土した。また石器はスクレイパー、剥片、石鏃、石錐などが出士した。



第37図 繩文時代遺構・遺物分布図

### 3-2. 遺構

#### (1) 集石遺構（第38図～50図、図版8～12）

本調査区の集石遺構は調査区西側にあった散礫を取り除いた後に集中して検出されている。ほとんどが掘り込みを持ち、配石をもつタイプで、IV層とV層より検出されている。構成礫は尾鈴山溶結凝灰岩や千枚岩などが使用され、赤化した礫も多く見られる。

#### SI 1（第39図）

配石がしっかりと残存し、掘り込みを持ち遺跡内でも最も整った状態の集石遺構である。遺構内からはスクレイバー(55)1点、剥片(60)1点、蛤形剥片石器(88-91)2点が出土している。長軸61cm、短軸55cm、深さ32cmの楕円形状の掘り込みを有している。掘り込み内には人頭大程の扁平な礫が配石として置かれている。内部礫の残存状況が良好な状態で検出しており、掘り込みに沿うように扁平な礫が配置しており、ほぼ、すべてが赤化している。配石と掘り込みの間に5cm程の小礫が敷かれており、裏込めとして配置されたものと考える。

#### SI 2～4（第41図）

B3Gr内に所在し、切り合って構築された集石遺構である。SI2は、SI3を切るような状態で上部に作られている。SI2は、断面を見ると配石と考えられる扁平な礫が存在し、約10cmほどの掘り込みが確認できる。SI3は深さ約15cmほどの掘り込みがあるが、内部礫はほとんどない状態である。SI4は深さ約25cmの掘り込みを持ち、掘り込み北側の上部で礫を確認しているが、内部礫はほとんどない。

#### SI 5～7（第41図）

この遺構もB3Gr内に所在し、礫が東西方向に広がって検出された。遺構内からは剥片(66)1点が出土している。中央付近の断面図を掲載しているが、3つの集石遺構の切り合いが確認できる。最も古いのがSI 7で、それを切るようにSI 6が上部に作られ、最後にSI 5が作られている。SI7の掘り込みは、長軸95cm、短軸75cm、深さは検出面から5cmを測る。

#### SI 8（第42図）

南側の配石がなくなっており、馬蹄形のような残存形状を呈している。掘り込みは長軸68cm、短軸54cm、

深さ10cmで、形状は楕円形を呈するが、南側がはつきりしない。配石は20cm大の礫が掘り込み周縁部に敷き詰めるように配置されているが、中央には見られない。

#### SI 9（第42図）

長軸63cm、短軸61cm、深さ10cmの円形の掘り込みを有している。遺構内からは蛤形剥片石器(83)1点が出土している。掘り込み中央に配置されていた礫は確認できるが、内部礫の残存状況が良好ではない。

#### SI 10（第43図）

北側の形状がはつきりしないが、長軸58cm、短軸40cm、深さ11cmの楕円形の掘り込みを持つ。遺構内からは剥片(70)1点、蛤形剥片石器(82)1点が出土している。明確な配石は確認できない。遺構内から採取した炭化材を放射性炭素年代測定にかけたところ、3390±30年BPの結果が出た。

#### SI 11（第43図）

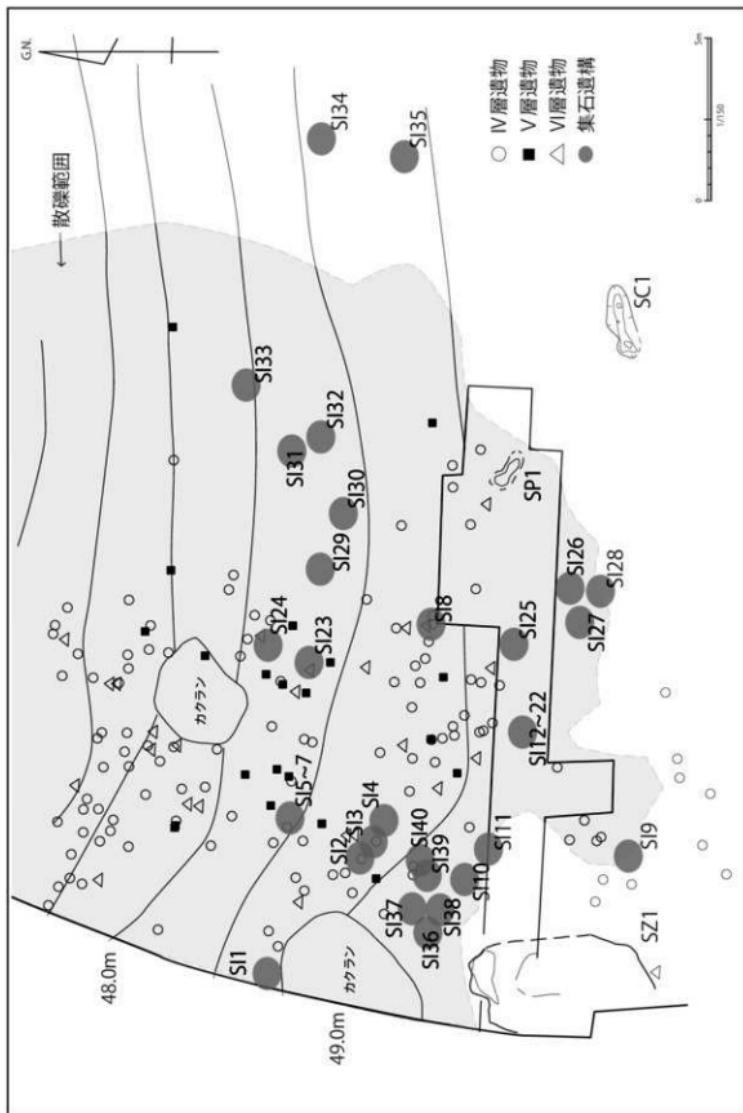
長軸120cm、短軸85cm、深さ25cmの不整な楕円形状の掘り込みを持つ。一部に配石と考えられる扁平な礫が残存する。

#### SI 12～22（第44・45図）

B4Gr内に位置し、11基の集石遺構が集中して切り合った状態で検出された。11基の遺構はいずれも掘り込みを持っています。SI13～19を除き、配石、あるいは配石と考えられる礫の配置が確認できる。その中でSI15は配石を2回作り直している状況が断面で確認でき、SI16も複数の配石構築の状況が確認できる。それぞれの掘り込みの規模については、第15表を参照されたい。この集石遺構群の先後関係は、古い順に示すと、SI12→SI13→SI16→SI14→SI15、SI19→SI21→SI20、SI18→SI22、SI18→SI17である。

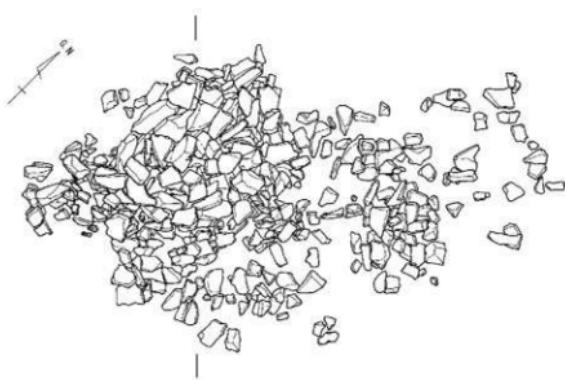
#### SI 23（第46図）

SI24と隣接している。当初はSI24を先に検出し、掘り進めていったところ、南西方向に掘り込みが広がり確認された。掘り込みはほぼ南北方向に向き、幅65cm、深さ10cmの細長い形状を呈している。掘り込み南側に扁平な礫があり、配石と考えられるが北側の形状が不明瞭である。SI24との切り合い関係はわからぬ。

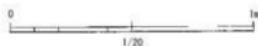
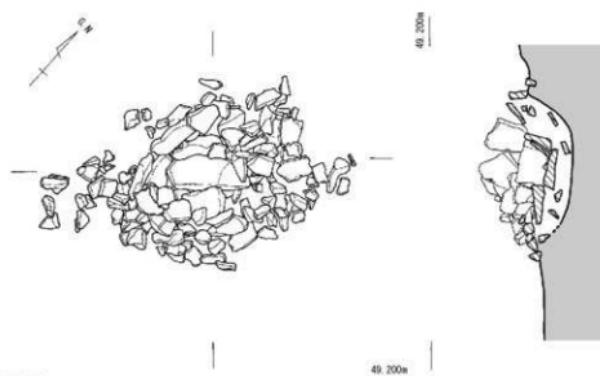


第38図 集石遺構分布図

SI1

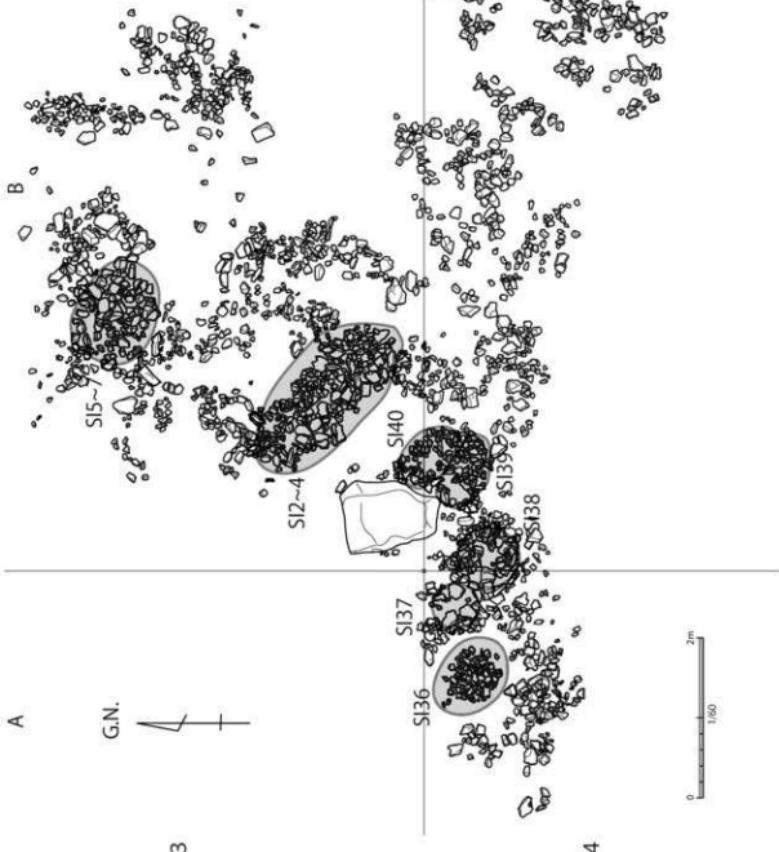


SI1

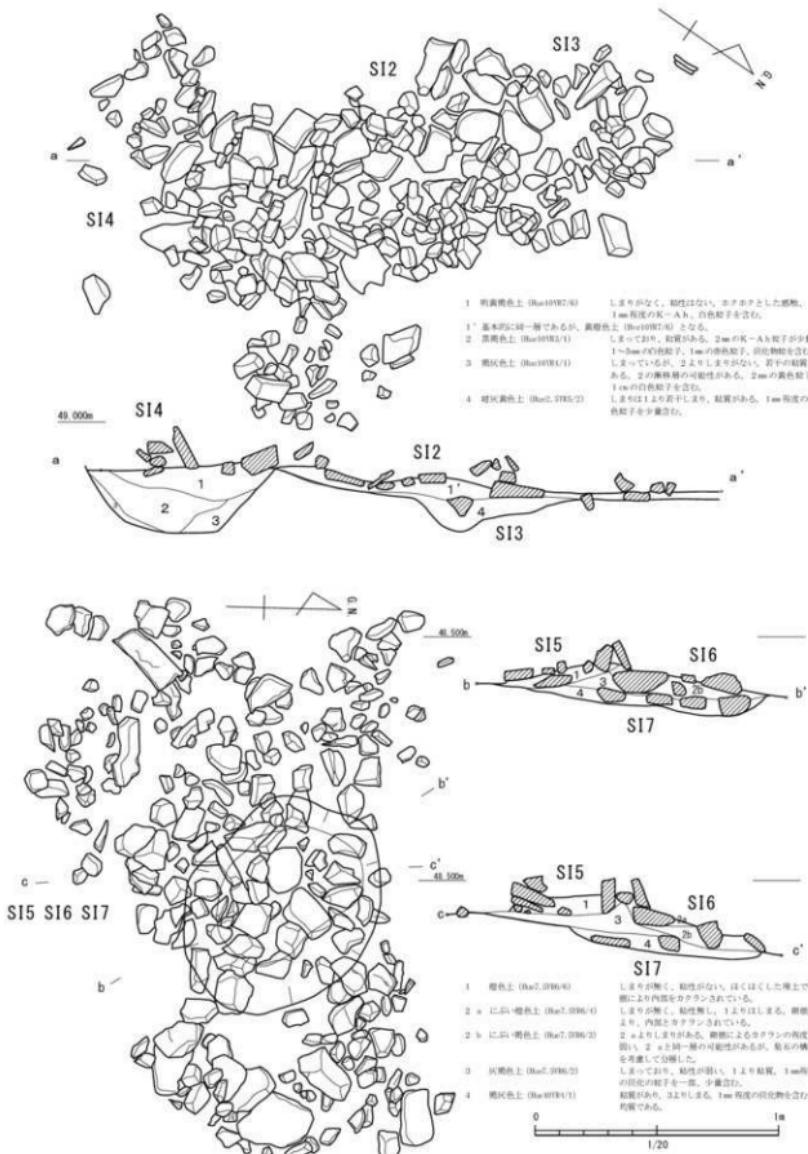


第39図 SI1実測図

C



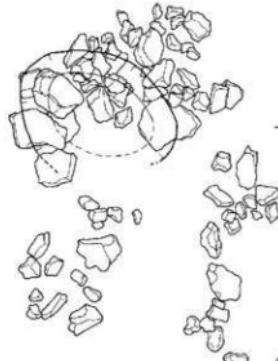
第40図 集石遺構実測図



第41図 SI2~SI7実測図

G.N.  
—  
—  
—

SI8

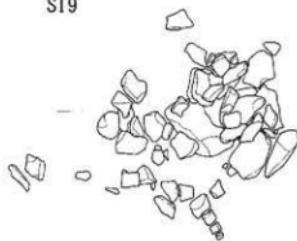


49.70m



SI9

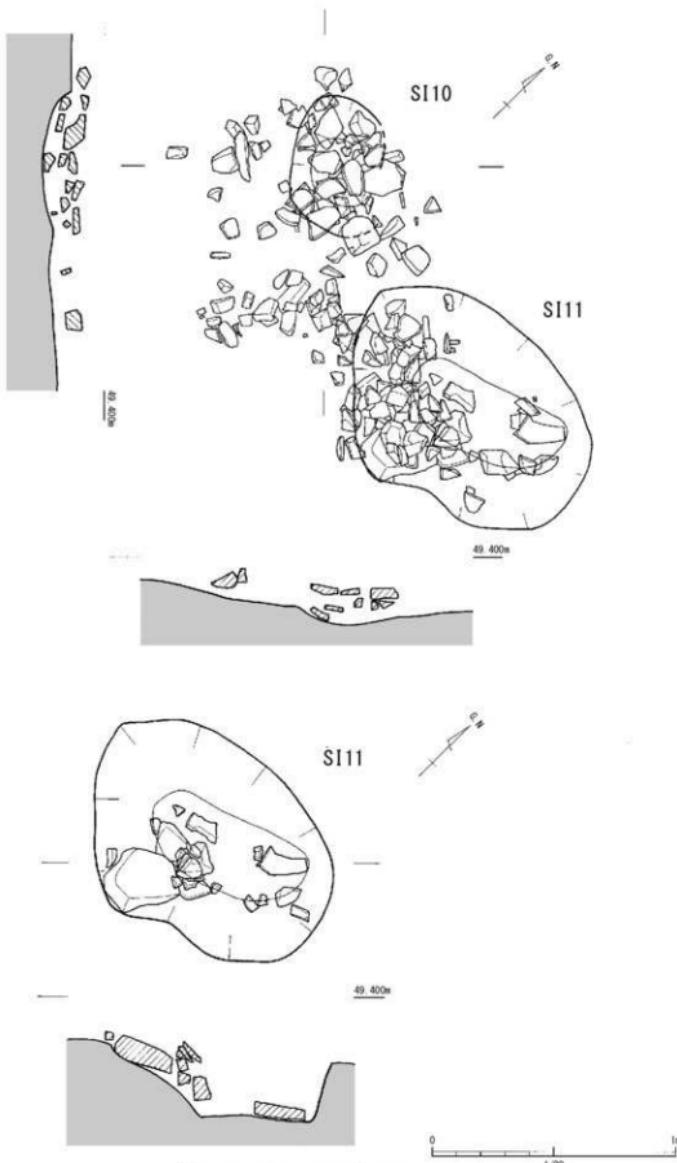
G.N.  
—  
—  
—



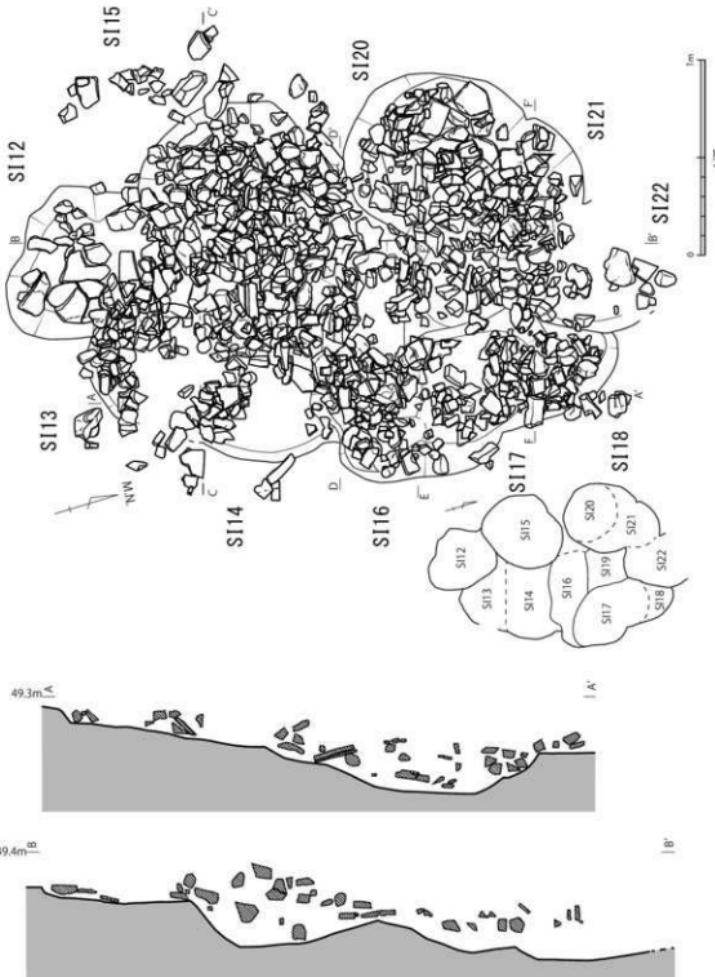
49.70m



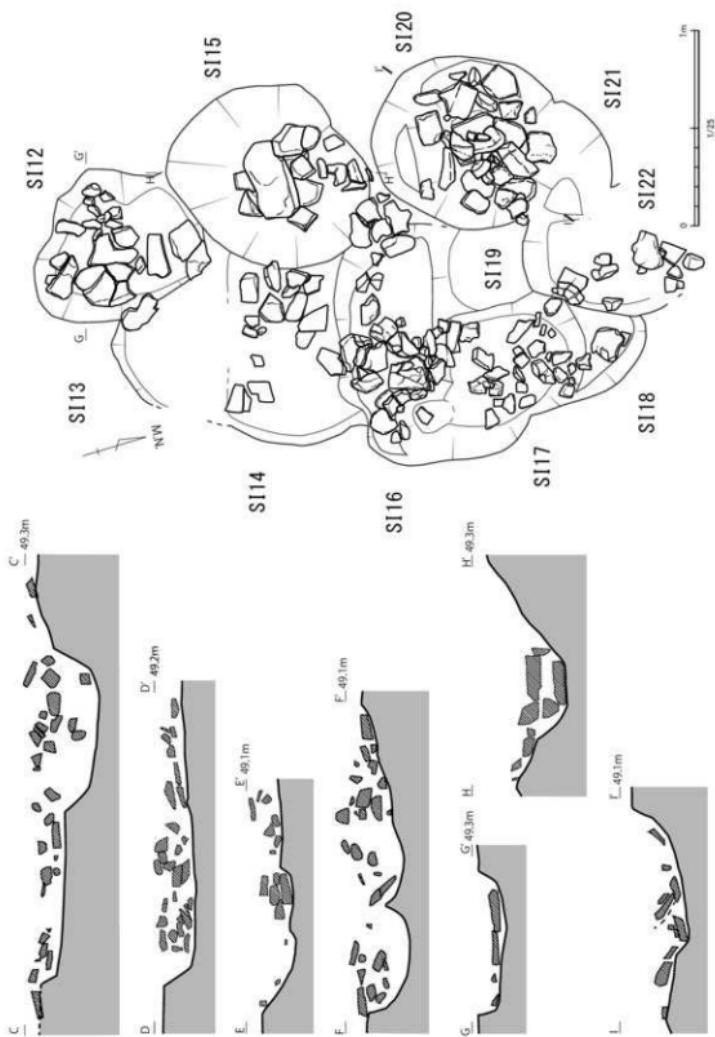
第42図 SI8・SI9実測図



第43図 SI10・SI11実測図



第44図 S112~S122実測図（1）



第45図 S112~S122実測図（2）

**SI24（第46図）**

本遺跡内でも比較的しっかりと配石を持ち、残存状態も良好である。長軸130cm、短軸77cm深さ約20cmの不整な楕円形の掘り込みを持つ。遺構内からは蛤形剥片石器(75・79)2点、磨石(148)1点が出土している。15~25cm程度の扁平な礫が敷かれ、斜め方向に差し込まれた礫も構築されており、作りは良好である。斜め方向の配石西側に長軸40cmの扁平な礫が敷かれており、別遺構の配石なのか、元々SI24を構成していたのか判断が難しい。

**SI25（第47図）**

長軸、短軸とも約50cm、深さ約15cmのほぼ円形状の掘り込みを有している。遺構内からは砾器(99)1点が出土している。掘り込みの床面から浮いた状態で配石と考えられる礫が同じレベルで確認されている。

**SI26（第47図）**

長軸83cm、短軸52cm、深さ12cm程の楕円形状の掘り込みを有しており、配石と考えられる礫が一部残存している。埋土に炭化材を含んでいる。

**SI27（第47図）**

深さ約12cmの不定形の掘り込みを有しており、内部構成礫の残存状況が良好ではない。

**SI28（第47図）**

SI27と近接し長軸30cm、短軸27cm、円形状の掘り込みを有している。掘り込み中央付近に配石と見られる礫が残存している。

**SI29（第48図）**

長軸、短軸とも約70cm、深さ11cmの円形の掘り込みをもつ。内部礫の残存状況が良好ではなく、配石の状況は不明であるが、一部扁平な礫が床面から浮いた状態で確認されている。赤化した礫が多枚、出土している。

**SI30（第48図）**

C3Grに位置し、南西側のプランが不明瞭であるが、直径約90cm、深さ約37cmの円形状の掘り込みをもつ。遺構内からは剥片(67)1点が出土している。掘り込みに沿うような状態で配石が一部残存している。

**SI31（第49図）**

SI32と隣り合わせて検出された。長軸80cm、短軸66cm、深さ約15cmの不定形の掘り込みをもつ。一部配石と想定される扁平な礫を確認している。南に隣接するSI32との先後関係は不明である。

**SI32（第49図）**

SI31と連接して検出された。遺構内からは蛤形剥片石器(93)が1点、出土している。長軸64cm、短軸47cm、深さ13cmの不定形の掘り込みを有している。内部礫の残存状況が良好ではないが、中央と南側に配石らしき扁平な礫を確認できる。

**SI33（第49図）**

長軸54cm、短軸50cm、深さ約10cmのハート形の浅い皿状の掘り込みを有している。配石と考えられる扁平な礫が掘り込み床面から浮いた状態で確認されている。掘り込み内から採取した炭化材を放射性炭素年代測定にかけたところ、 $7996 \pm 30$ 年BPの年代結果が出た。また樹種同定を行ったところ、マツ属複管束亜属の木材という結果が出た。

**SI34（第49図）**

長軸46cm、短軸42cm、深さ8cmの円形の掘り込みをもつ。扁平な礫が床面から少し浮いた状態で確認され、配石と考えられる。

**SI35（第50図）**

長軸、短軸とも約60cm、深さ10cmの掘り込みを有している。配石と見られる礫は床面から浮いた状態で確認されているが、礫の残存状況が良好ではなく、配置状況は不明である。遺構内から採取した炭化材を放射性炭素年代測定にかけたところ、 $9110 \pm 30$ 年BPの年代結果が出た。

**SI36（第40図）**

唯一掘り込みをもたない集石遺構である。礫の密度があり、直径約70cmの円形状を呈している。遺構内からは、蛤形剥片石器(82・84・86・96)4点が出土している。

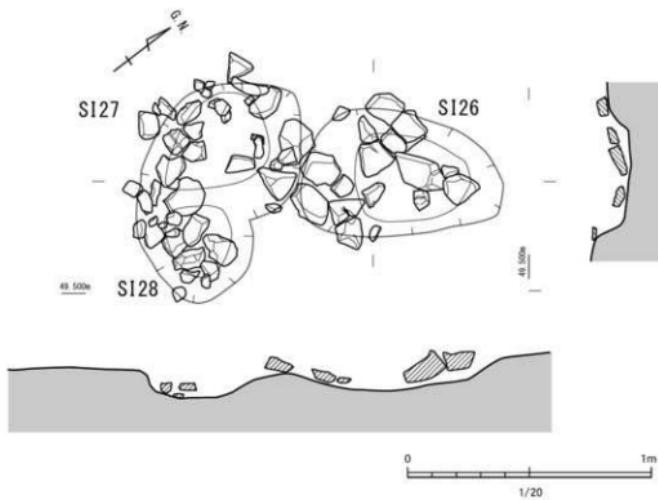
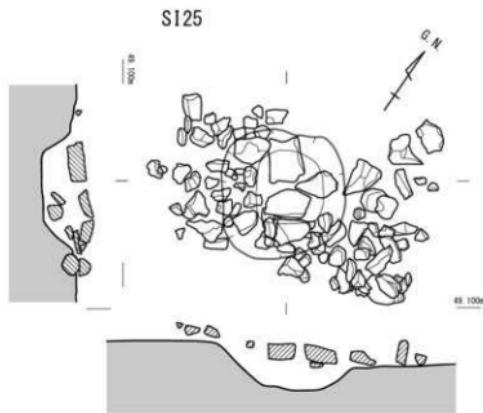
なお、SI36~SI40は平面図のみで単独図面ではなく、集石遺構であった可能性のあるものとして報告する。

**SI37~SI40（第40図）**

A4Gr~B4Grに位置しており、調査区西側の集中した散礫の中から、検出されている。SI37は長軸

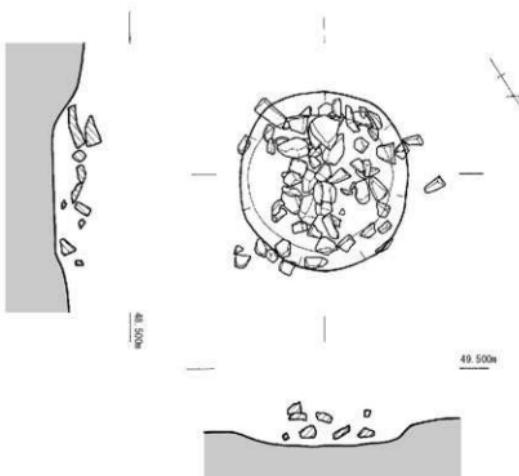


第46図 SI23・SI24実測図

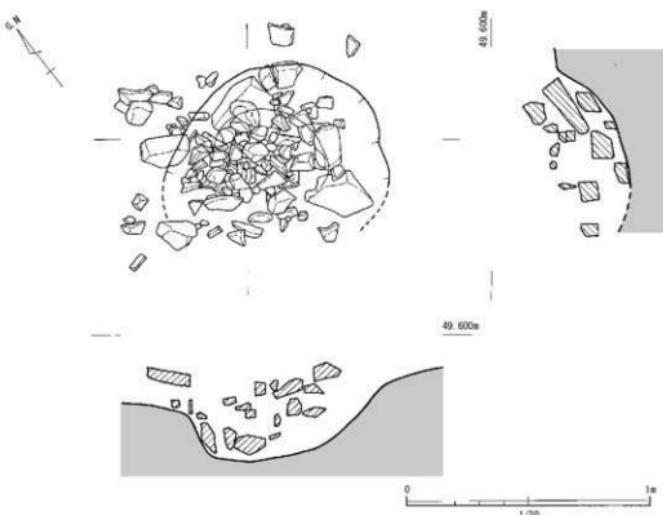


第47図 SI25～SI28実測図

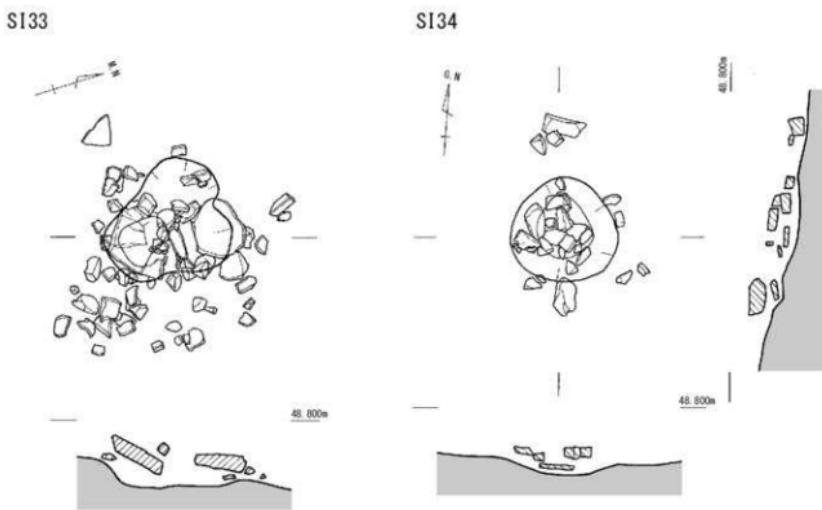
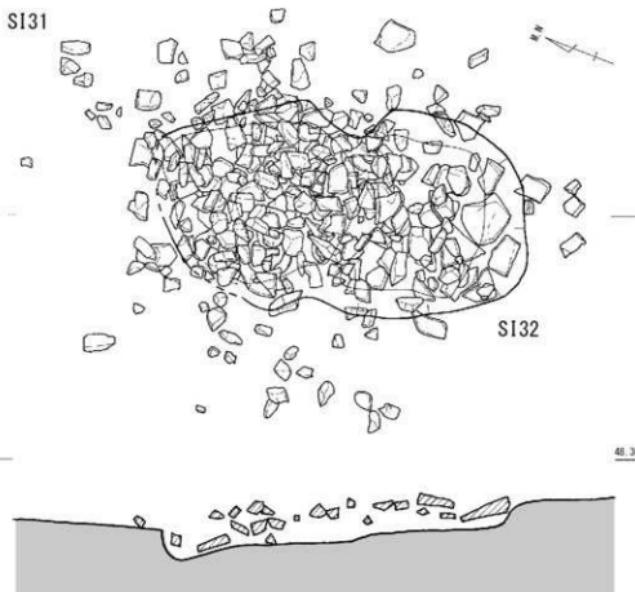
SI29



SI30



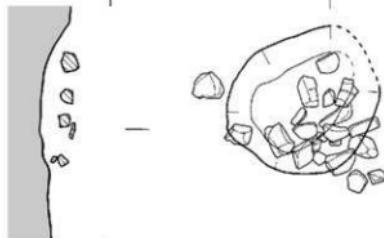
第48図 SI29・SI30実測図



第49図 SI31～SI34実測図

0 1/20 1m

SI35



49.100m



第50図 SI35実測図

0 1/20 1m

SC1



49.500m

SP1



49.100m



0 1/20 1m

第51図 土坑・炉穴実測図

第15表 繩文時代集石遺構一覧表

発石番号	出土位置 (グリッド)	取り込み面積 (m <sup>2</sup> )		面積 割合	配石の有無
		長軸	短軸		
S 1.1	B1	44	55	22	飛行
S 1.2	B1	—	—	18	—
S 1.3	B1	—	—	15	—
S 1.4	B1	70	80	55	—
S 1.5	B1	—	—	6	—
S 1.6	B1	—	—	10	—
S 1.7	B1	95	75	7	飛行
S 1.8	B1	68	34	10	飛行
S 1.9	B1	63	61	18	飛行
S 1.10	B1	58	45	11	飛行
S 1.11	B1	120	85	25	—
S 1.12	B1	90	80	10	飛行
S 1.13	B1	—	—	—	—
S 1.14	B1	—	—	—	—
S 1.15	B1	100	85	20	円頂
S 1.16	B1	—	—	16	—
S 1.17	B1	115	85	15	—
S 1.18	B1	—	—	22	—
S 1.19	B1	—	—	8	—
S 1.20	B1	—	—	27	飛行

発石番号	出土位置 (グリッド)	取り込み面積 (m <sup>2</sup> )		面積 割合	配石の有無
		長軸	短軸		
S 1.21	B1	—	—	—	—
S 1.22	B1	—	—	65	10
S 1.23	B1	—	—	33	—
S 1.24	B1	—	—	77	10
S 1.25	B1	24	50	15	飛行
S 1.26	B1	93	52	12	飛行
S 1.27	B1	—	—	32	—
S 1.28	B1	30	27	—	飛行
S 1.29	C1	74	79	11	飛行
S 1.30	C1	94	—	27	—
S 1.31	C1	90	66	23	不規則
S 1.32	C1	64	47	13	不規則
S 1.33	C1	34	50	18	不規則
S 1.34	B1	98	42	8	飛行
S 1.35	B1	62	62	17	飛行
S 1.36	A1	—	—	—	—
S 1.37	B1~B1.1	86	64	—	—
S 1.38	B1~B1.1	—	—	—	—
S 1.39	B1	—	—	—	—
S 1.40	B1	—	—	—	—

86cm、短軸64cmの円形に10cm程の礫で配石されている。SI38は長軸180cm、短軸90cmの楕円形に配石されており、掘り込み内に配置したと見られる扁平な礫が存在するが、構成礫の残存状況が良好ではなく、配石や掘り込みの状況は不明である。SI39・SI40は長軸90cm、短軸70cmの楕円形に礫が配石されている。平面を見ると、2つの切り合いがある可能性がある。

## (2) 炉穴(第51図)

本調査区の炉穴は1基が確認されている。C4Gr内に位置し、主軸は北西方向を向いている。長軸約120cm、短軸約40cmのプランを有しており、くびれた楕円形を呈している。床面に約30cm径の焼土の痕跡が2箇所、確認された。

## (3) 土坑(第51図)

本調査区の最高所中央付近より、1基の土坑が確認されている。主軸は東西方向を向いており、長軸約230cm、短軸約90cmである。この土坑床面には2つのピットと落ち込みが1つあり、各ピットの間隔は約30cmである。西側の落ち込みは深さが約36cmであり、焼土が確認されたため、炉穴として使用された可能性がある。また残りの2つのピットは深さ6cm程度で底面には杭の痕跡があったと仮定すると、陥れ穴として使用された可能性もある。

### 3-3. 遺物

#### (1) 繩文時代早期の土器(第52図、図版16)

縩文時代早期の土器に関しては、風化が著しく実測に耐えられる20点を掲載した。

#### 貝殻条痕文土器(第52図7~13)

7~9は深鉢の口縁部である。7の外面上には斜め方向に貝殻条痕文が施され、外側にやや反った形状をしており、口唇部は丸みを帯びている。8の外面上は垂直に上に伸びる形状をしており、端部は丸みを帯びている。深鉢の口縁部である。9の外面上はやや外側に反った形状をしており、口唇部は平坦にまとめてある。10は外面上には風化が激しいものの貝殻条痕文が確認でき、一部にスヌ状の炭化物が付着している。口唇部は内面にやや肥厚している。11~13は深鉢の胴部であり、内面には貝殻条痕文が施されている。

#### 楕円押型文土器(第52図14~20)

14~15は深鉢の口縁部から胴部である。外面に楕円押型文が施され、内面にナデ調整が行われている。14の外面上は逆八の字形に反っており、口唇部はU字形を呈している。15には内面上板状の工具を使ったと見られる横方向の調整がある。16~19は深鉢の胴部である。外面には楕円押型文が施され、内面にはナデ調整が施されている。20は深鉢の口縁部であり、外面は垂直に上に伸びる形状をしており、口唇部はくの字形をしている。内面に楕円押型文が施されている。

#### 山形押型文土器(第52図21~24)

21は深鉢の口縁部である。外面は垂直に上に伸びる形状をしており、口唇部はU字形をしている。山形押型文が施され、内面にはナデ調整がほどこされている。22~24は深鉢の胴部である。外面の風化が激しいが、山形押型文が確認でき、内面にはナデ調整が施されている。24は手向山式土器である。

#### 撚糸文土器(第52図25~26)

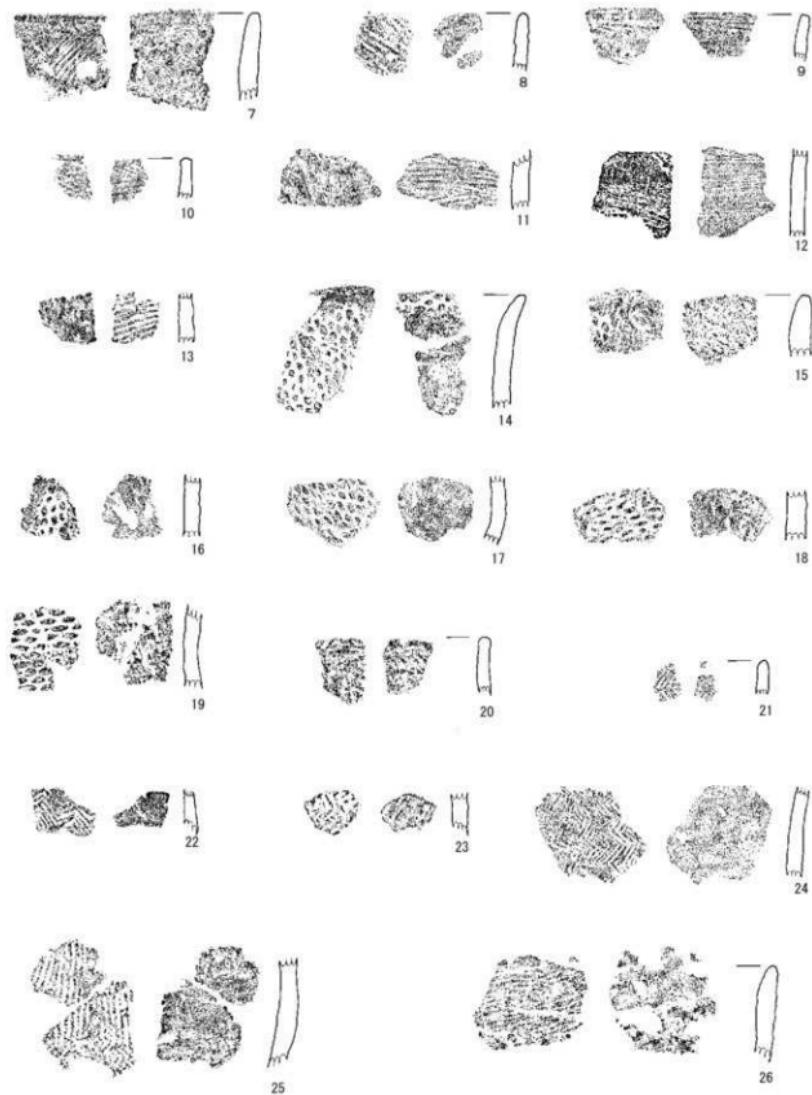
25は深鉢の胴部である。外面は風化が著しいものの撚糸文と山形押型文が確認できる。内面はナデ調整が行われている。26は深鉢の口縁部であり、垂直に上へと続いているが、内面はやや外側に反っている。口唇部は、丸くおさめられている。外面には撚糸文が施され、内面は一部欠損しているものの、ナデ調整が行われている。

#### (2) 縄文時代晚期の土器(第53図、図版17)

縩文時代晚期の土器も風化が著しく実測に耐えられる12点を掲載した。

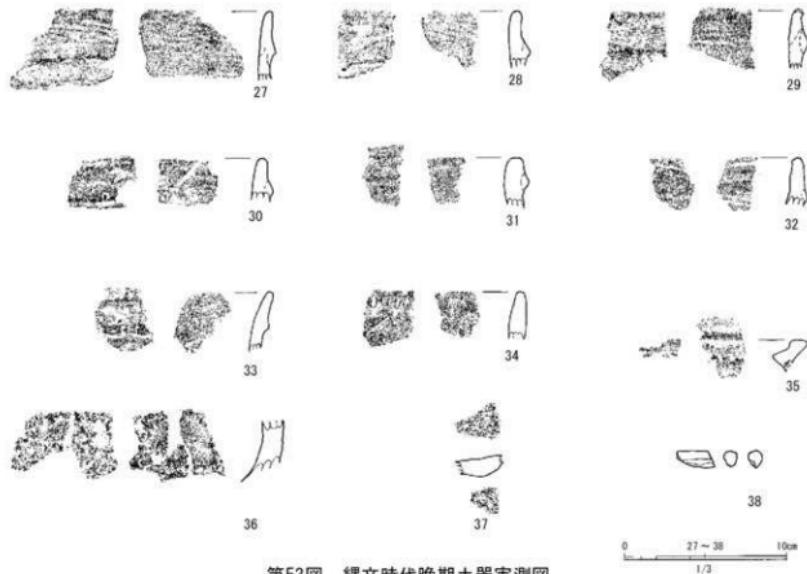
#### 無刻目突蒂文(第53図27~33)

27は深鉢の口縁部である。粘土紐を貼付した突蒂が施され、口縁端から突蒂頂部までが直線的に続く形状をしている。器壁は薄く、口唇部は丸みを帯びている。28は深鉢の口縁部である。粘土紐を貼付した突蒂文が施され、口唇部はU字形を呈している。29は深鉢の口縁部である。口唇部は外面にやや肥厚している。30~31は深鉢の口縁部である。粘土紐を貼付した突蒂文が施され、30は口唇部が丸みを帯びており、31は器壁が厚く、平坦にまとめられている。32は浅鉢の口縁部である。外面には、貼付突蒂文が施され、口唇部は、やや平坦な形状を呈している。33は深鉢の口縁部であり、緩やかに外反している。口唇部は平坦な面を有する。



第52図 縄文時代早期土器実測図

0 7~26 10cm  
1/3



第53図 縄文時代晩期土器実測図

## 刻目文土器（第53図34）

34は鉢の口縁部であり、器壁は厚い。口唇部は平坦にまとめられている。外面には刻目文が施されており、本調査区では刻目文は1つしか出土していない。

## 鉢（第53図35～38）

35は浅鉢の口縁部である。大型の鉢であり、外面にはナデ調整、内面には横方向のナデ調整が施してある。36は深鉢の底部である。外面は風化が著しく、内面にわずかにナデ調整の痕が見られる。37は深鉢の底部である。内面、外面とも風化が著しい。内面にスス状の炭化物が付着している。38は浅鉢の口縁部である。

## (3)石器（第54～64図、図版14～16）

石器を石材ごとに分けると、砂岩173点、流紋岩12点、チャート48点、ホルンフェルス93点、尾鈴山溶結凝灰岩32点、頁岩5点、珪質頁岩50点、石英1点、泥岩1点、凝灰岩1点である。

## 石鎚（第54図39～44）

石鎚は本調査区から6点が出土し、すべてを図化

した。石材は39・40、42～44がチャート製である。41は頁岩である。39・41は、ほぼ二等辺三角形をしており、左右対称の作りとなっている。先端部は鋭くとがっており、基部に心もち、凹みを持たしてある。42の平面形は先端部が欠損しているが、基部にアーチ状の浅い抉りがあり、脚端が丸みを帯びている。43は先端部が欠損しているが、基部に抉りがある。脚端はやや鋭い。44の先端部は鋭くとがっており、基部に抉りがなく、未製品の可能性がある。

## 楔形石器（第54図45）

45は楔形石器であり、本調査区では唯一の出土品である。石材はチャート製であり、扁平な小蝶を素材にしている。

## スクレイパー（第54図46～56）

スクレイパーは本調査区から11点が出土しすべてを図化した。46・48・49・51は砂岩製である。52・56はホルンフェルス製である。47・50は珪質頁岩である。53は流紋岩製である。54は本調査区では唯一の石英である。46は横長の剥片を使用し、正面に剥離痕が

見られ、刃部を形成している。47は背面側より加工を施し、両側縁から下部にかけて、弓状の刃部を形成している。48は当初は礫器として製作された後、両側縁から下部にかけて細かく加工を施し、スクレイバーに転用された可能性がある。49は横長の剥片を使用し左側縁から下部にかけて、刃部を作り出している。50は横長の剥片を使用し、正面と主要剥離面より加工を施し、下縁に鋸歯状の刃部を形成している。51は石核を礫器として製作した後、加工を施し、スクレイバーへと転用された可能性がある。52は幅広の剥片を使用し、裏面より加工を施し、刃部を作り出している。53は横長の剥片を使用し、側縁に細かい鋸歯状の加工が施されている。54は幅広の剥片を使用している。55は敲打による粗い加工が施され、赤化した部分や火熱のために割れたと見られる摺理面を有する。56は当初は礫器として製作された後、下部に加工を施すことでスクレイバーへ転用されたと思われる。

#### 二次加工剥片（第55図57・58）

二次加工剥片は本調査区より2点が出土しており、すべてを図化した。57の石材はホルンフェルス製であり、右側側縁が欠損しているが、横長の剥片を使用したと見られる。上面に二次加工が施されている。58の石材は珪質頁岩製であり、右側縁下部に細かい二次加工が施されている。

#### 剥片（第55図59～70）

剥片は本調査区より225点が出土しており、その内、12点を図化した。59・63・65・70は流紋岩製である。60・67・69が珪質頁岩であり、61・62は頁岩である。64はホルンフェルス製であり、66・68はチャート製である。59は縦長剥片を使用し、両側縁に微細剥離痕がある。60は横長剥片を使用し、右側縁下部に微細剥離痕がある。61は横長剥片を使用し、右側縁部に微細剥離痕がある。62～64・66は縦長剥片を使用し、66は右側縁下部、左側縁上部に加工が施してある。67・68・70は下部が欠損しているが、縦長剥片を使用していたと見られる。

#### 蛤形剥片石器（第56・57図71～96）

蛤形剥片石器は本調査区より102点が出土しており、その内、26点を図化した。石材は73・79・80・82～84までがホルンフェルスであり、74・95が珪質頁岩、71

～72、75～78、81・85・88～91・93・94・96が砂岩、86～87、92は尾鈴山溶結凝灰岩を素材にしている。本調査区の蛤形剥片石器の特色として、横長や縦長の剥片を素材として、側縁や下縁に二次的な加工をしてあるものや微細剥離痕を有するものがある。共通の形状としては下縁に丸みを帯びた三角形をしているものが多い。71～75は側縁または下縁部に微細剥離痕がある。横長剥片を素材にしており、左側縁から下部にかけて微細剥離痕が見られる。76～85は横長剥片、縦長剥片を素材にしており、側縁や下部に二次的な加工を施している。86～96は横長剥片、縦長剥片を素材にしており、加工を施さず、側縁部や下縁部にかけて刃部を形成している。

#### 礫器（第58図97～110）

礫器は本調査区から14点が出土しており、すべてを図化した。97・99・104・106・107までは尾鈴山溶結凝灰岩製である。98・101～103・108はホルンフェルス製である。100・105・109・110の石材は砂岩製である。97は大型の横長剥片を素材にしており、上部と下部に加工の痕が見られる。重量があり、形状の観点から剥片としてではなく、礫器と判断して報告する。98は円鏗を利用し、上部に粗い加工を施し、片面剥離による刃部を作り出している。99は上面から右側縁にかけて自然面が残る。正面・裏面は大きく剥離されている。100は円鏗を利用し、自然面を広く有している。上部に粗い加工を施し、両面剥離による刃部を作り出している。101は上部に粗い加工を施している。刃部の打点面に対してエッジが入っている。102は円鏗を利用していている。自然面を有し、上部に加工を施して、片面剥離による刃部を作り出している。103は円鏗を素材にしており、表面、裏面に自然面も確認できる。上部に粗い剥離面がある。104～110までは上部に自然面を有した縦長や横長剥片を素材にしており、底部にピック状の尖った部分を作り出している。110は一部に自然面を有している。両面剥離により刃部を作り出し、更に二次加工を施している。

#### 石斧（第59図111～121）

石斧は本調査区から11点が出土しており、その内、7点を図化した。111が尾鈴山溶結凝灰岩製である。112～114・117・120・121はホルンフェルス製である。

122～124の石材は砂岩である。本調査区の石斧はいずれも打製石斧であり、基部に抉りをもたず、刃部に続くもののみが出土している。111は多方向から粗雑な調整が施されている。加工の痕がある。112は重量のある礫を使用している。正面には自然面、裏面には主要剥離面となっている。113は使用により裏面が剥離し、破損している。両側縁にかけて細かい加工が施されている。114は刃部が欠損しており、破損したものをさらに再加工して尖った錐先を作り出している。115は厚みのある礫を使用しており、正面には自然面、裏面には主要剥離面となっており、刃部が欠損している。116は使用により、大きく破損している。正面には一部、自然面が残り、裏面には主要剥離面があつたものと推測される。117は正面には自然面、裏面には主要剥離面となっており、使用により、刃部欠損している。118は大きく破損している。正面には一部、自然面が残り、裏面には主要剥離面があつたものと推測される。119は正面には自然面、裏面には主要剥離面となっており、基部が欠損している。120は大きく破損している。正面には一部、自然面が残り、裏面には主要剥離面があつたものと推測される。121は基部の部分と思われるが、大きく破損している。

#### 石核（第60・61図122～134）

石核は本調査区から21点が出土しており、その内、13点を図化した。122～124・126・127、131・132は砂岩製、125・128は尾鉤山溶結凝灰岩製、129は珪質頁岩製である。130・133はホルンフェルス製、134はチャート製である。122は円礫を素材にしており、正面、裏面に自然面を有する。上部から両側縁にかけて、粗く剥片を剥離して、残った部分である。123は円礫を素材としている。124は裏面に自然面を有している。上部に粗い剥離面がある。125は円礫を素材にしており、正面、裏面に自然面を有する。上部より剥片を剥離して残った部分である。126は円礫を素材にしており、自然面を有する。多方向からの剥離により剥片を作り、残った部分である。127は円礫のものを素材につくられ、下部に磨面がある。磨石として使用していたものが破損し、後に石器をつくるための石核として使用された可能性がある。128は円礫のものを素材にしている。いずれも欠損部分があるものの、両縁と両

側面に磨面を確認することができる。129は右側縁に縦の規則的な剥離の痕がある。131・134は厚みのある円礫を素材にしており、裏面に多くの自然面を有している。133は多方向から、細かい剥離が行われている。

#### 石錘（第62図135～143）

石錘は本調査区から9点が出土しており、その内、すべてを図化した。135～141・143までの石材は砂岩である。142の石材は珪質頁岩である。本調査区では当初、別の器種で製作されたものが破損し、それに抉りをつけて石錘として再利用したものが数点出土している。135～140は扁平な円礫を素材として、両側縁を打ち欠いて抉りを作り、錘部を形成している。141は元々、石斧として使用されたものが破損し、その後、上部と下部に抉りをつけ、石錘として再利用したものと考える。142は蛤形剥片石器だったものに抉りをつけ、石錘として再利用したものと考える。143は石核だったものを再利用して、抉りをつけて石錘として使用した可能性がある。

#### 敲石（第62図144）

敲石は本調査区から1点が出土しており、図化した。144の石材は砂岩であり、縦長の礫を使用している。長軸の両端、両側面に磨面がみられ、使用しやすいように加工してある。上部と下部には敲打痕が確認できる。

#### 凹石（第63図145）

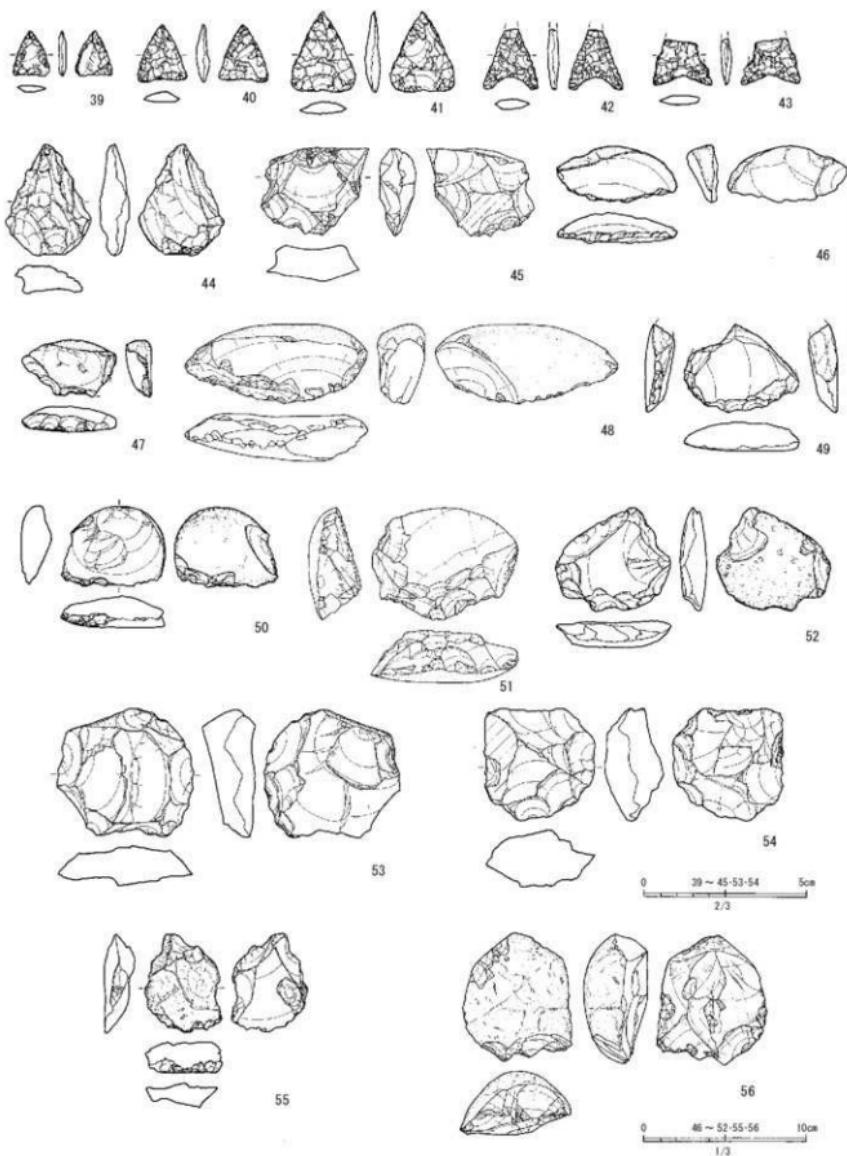
145の石材は砂岩であり、厚みのある円礫を使用している。礫平坦部の両面に2mm程の凹みがある。

#### 磨石（第63図146～148）

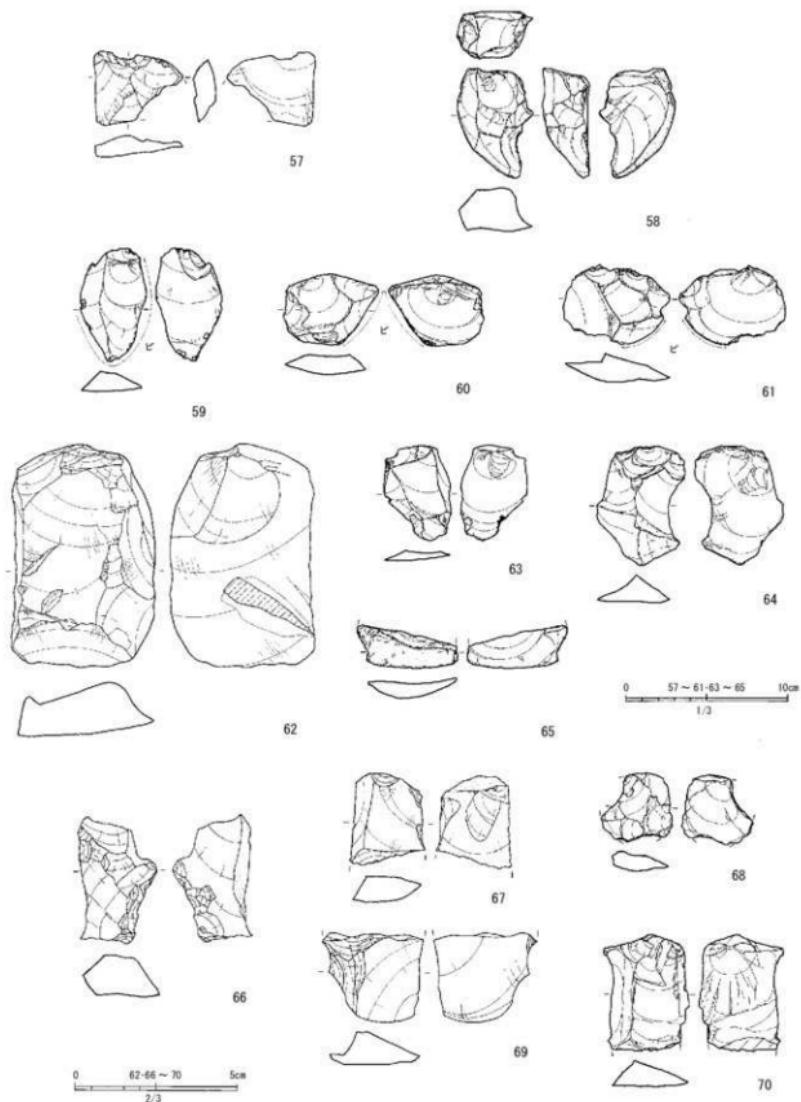
磨石は本調査区から52点が出土しており、その内、3点を図化した。146～147は尾鉤山溶結凝灰岩であり、148は砂岩である。146～148は円礫を素材にしている。いずれも欠損部分があるものの、両側面にはつきり磨面を確認することができる。

#### 石皿（第63図149・150）

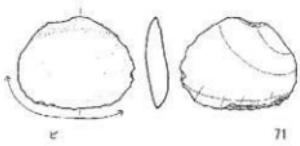
石皿は本調査区から4点が出土しており、その内、2点を図化した。149の石材は砂岩であり、円礫の扁平なものを使っている。正面・裏面に磨面があり、両側縁には敲打痕が見られる。150の石材は砂岩であり、円礫を使用している。中央部が全面、磨面になっ



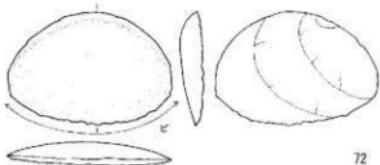
第54図 繩文時代石器実測図（1）



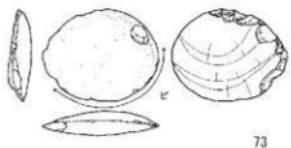
第55図 縄文時代石器実測図（2）



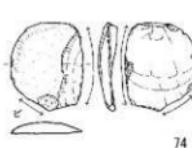
71



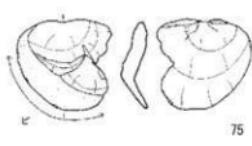
72



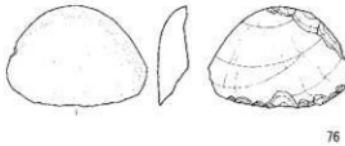
73



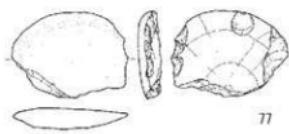
74



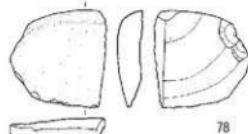
75



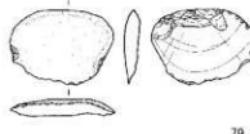
76



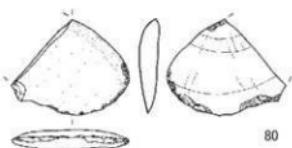
77



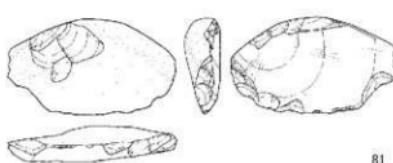
78



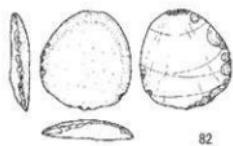
79



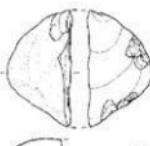
80



81



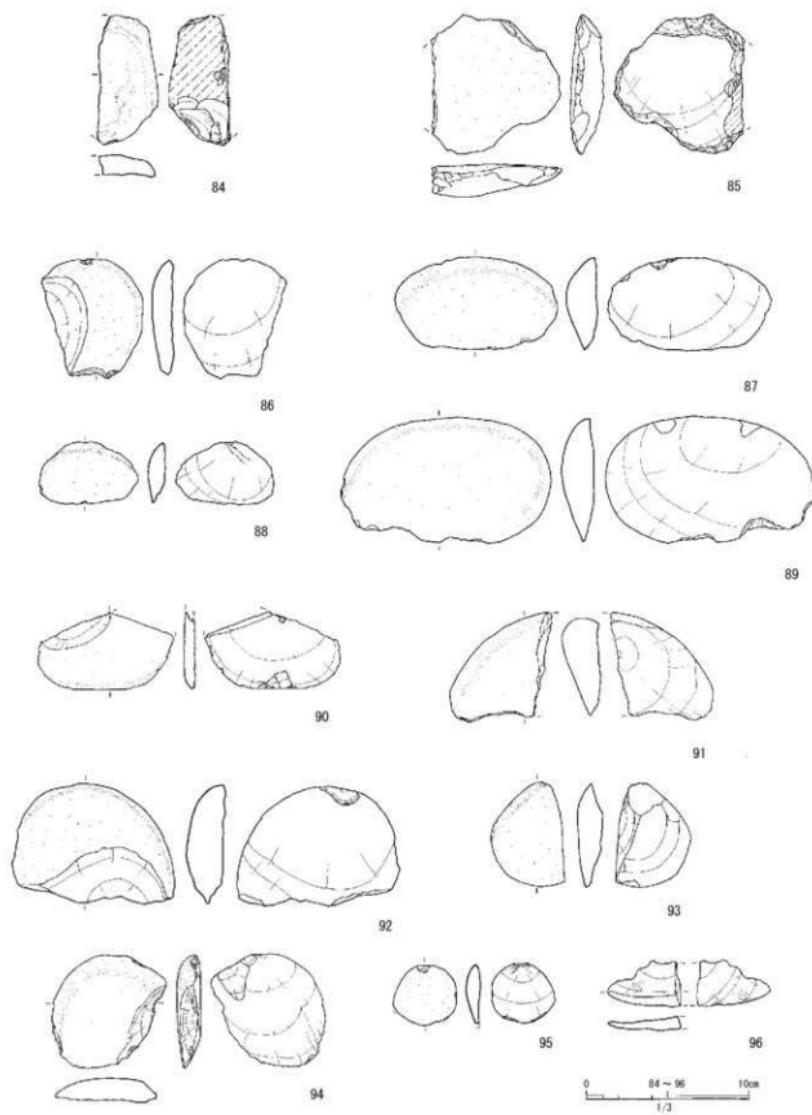
82



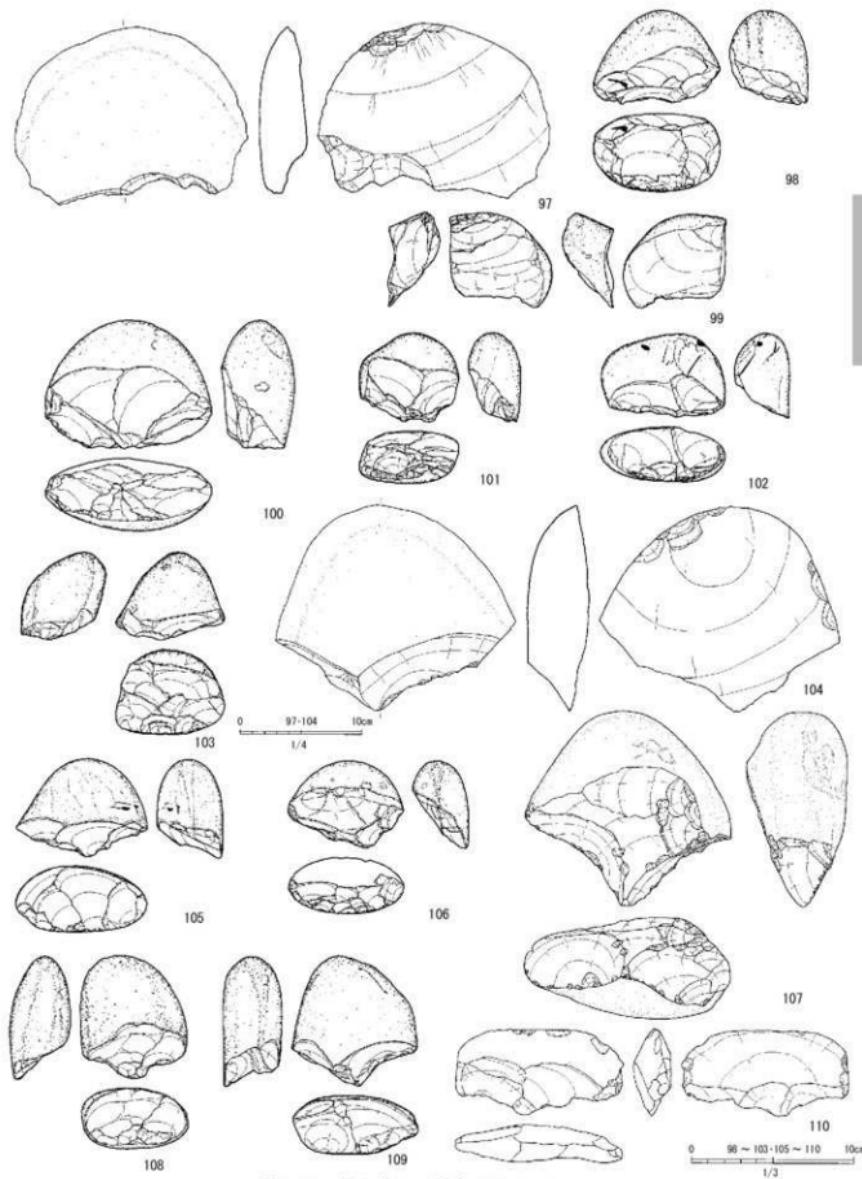
83

0 71~83 10cm  
1/3

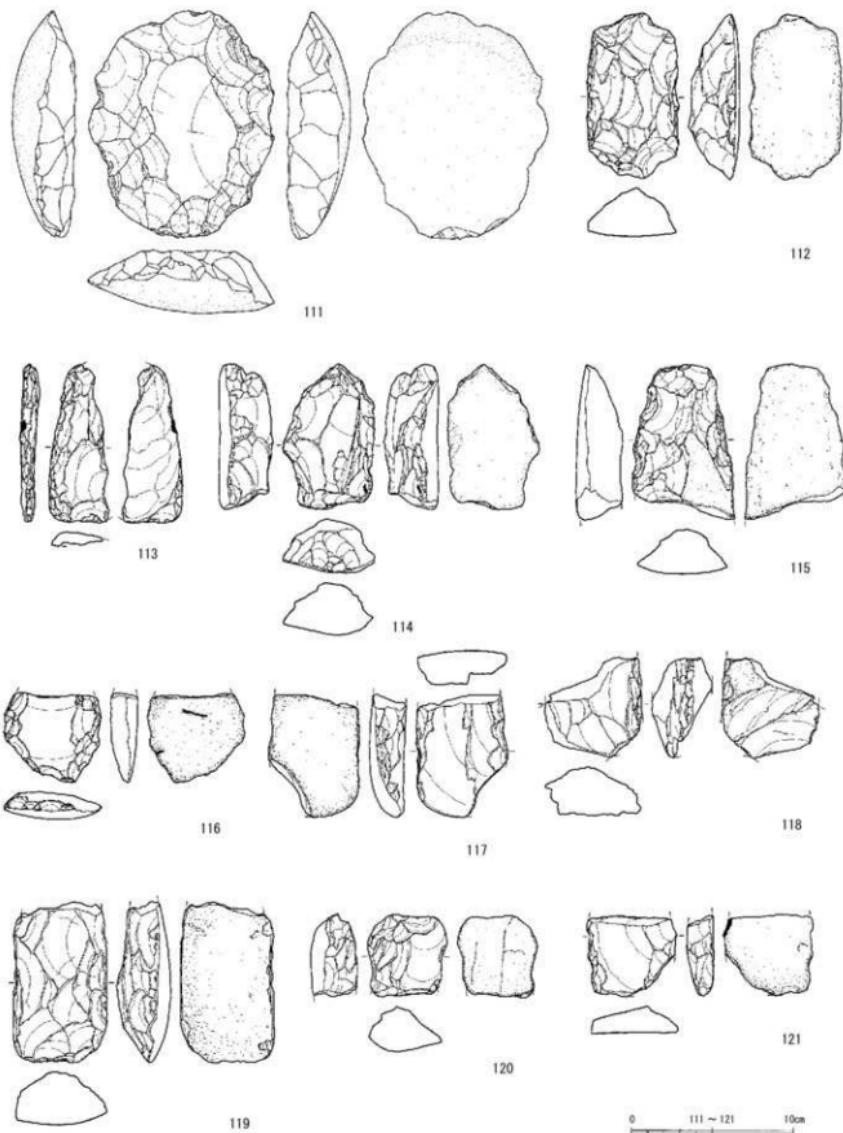
第56図 縄文時代石器実測図（3）



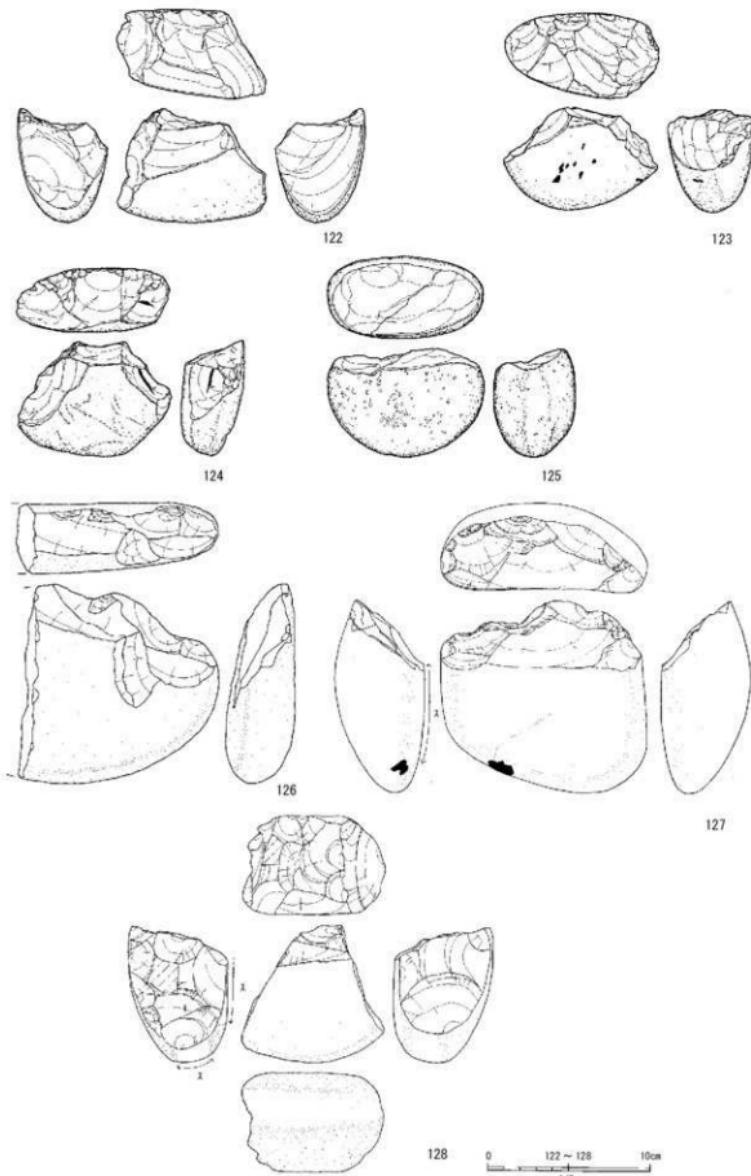
第57図 縄文時代石器実測図（4）



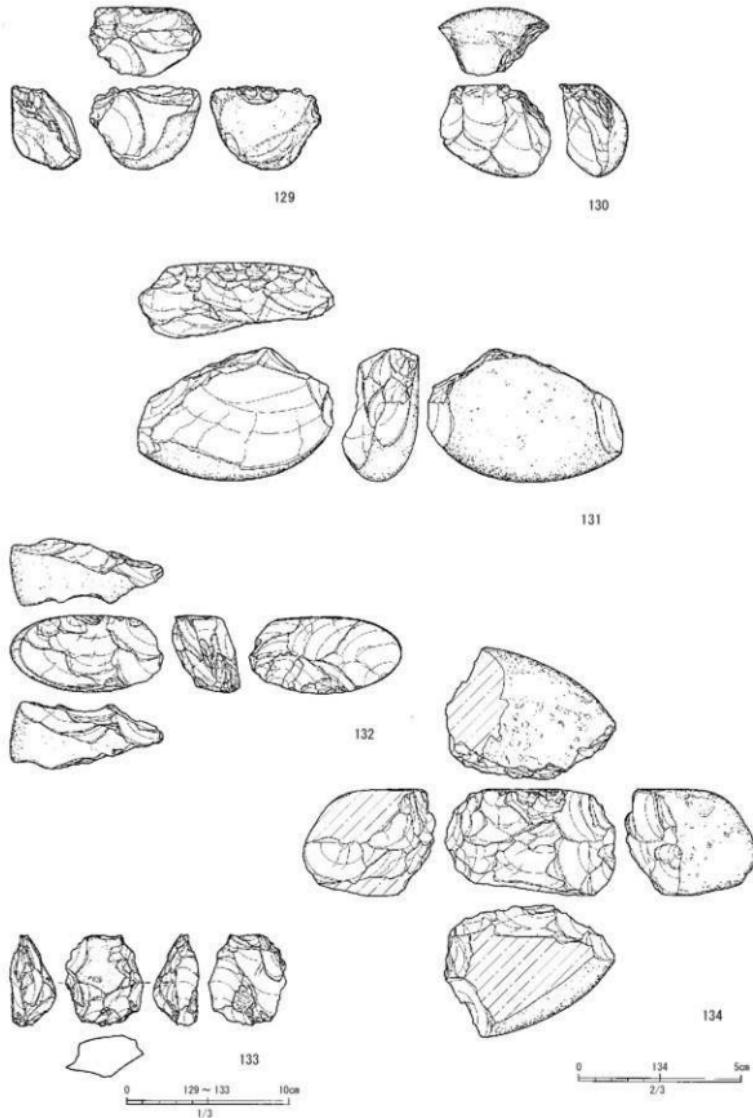
第58図 縄文時代石器実測図（5）



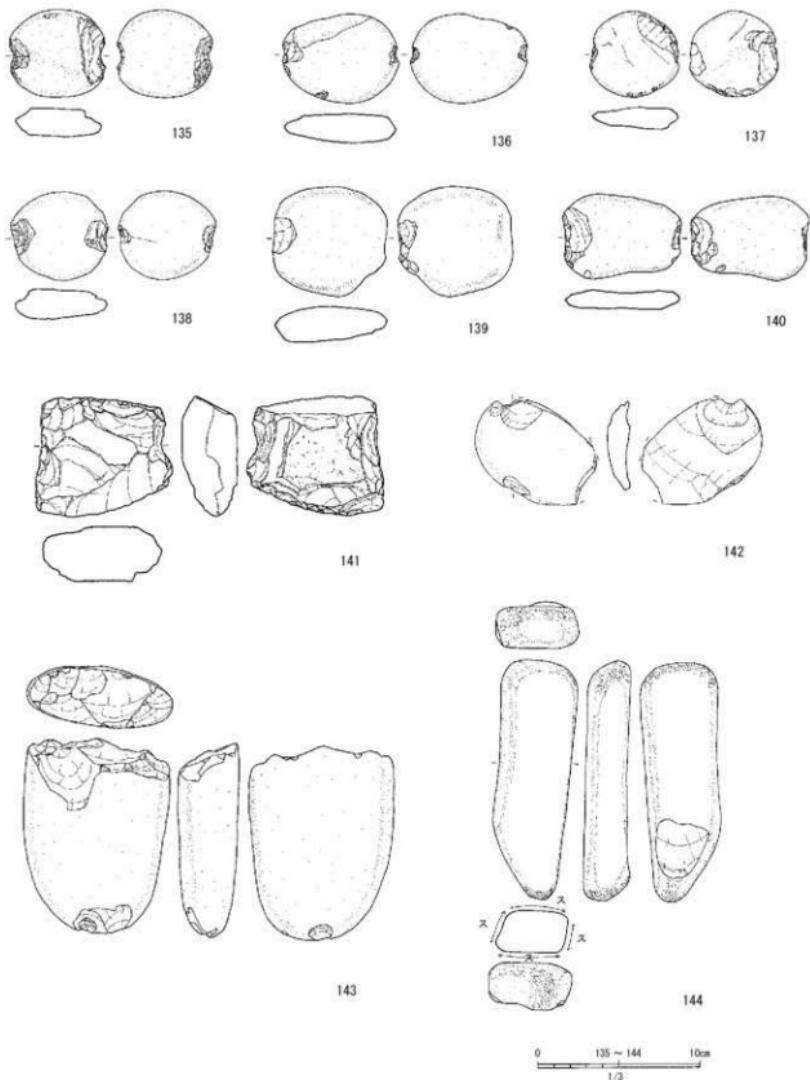
第59図 繩文時代石器実測図（6）



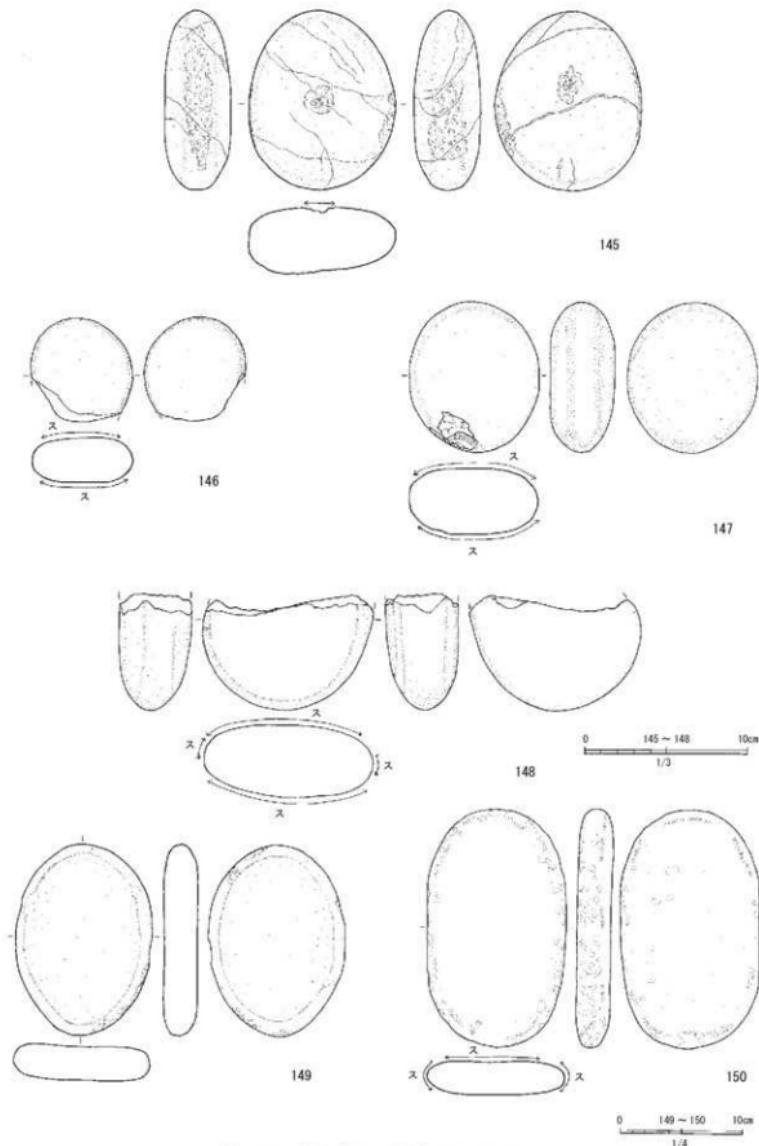
第60図 縄文時代石器実測図（7）



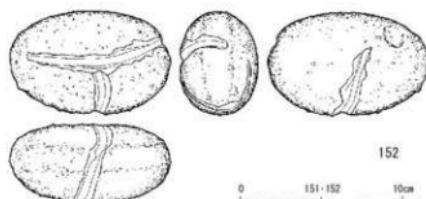
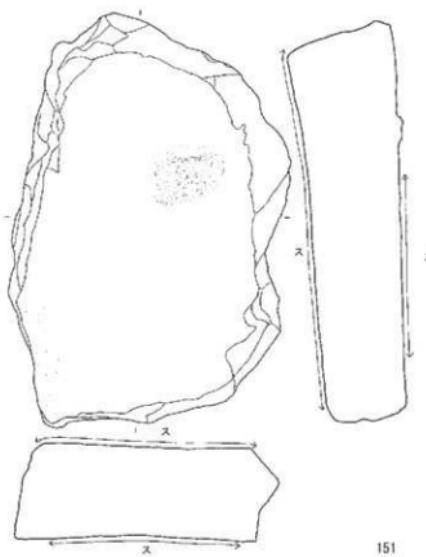
第61図 縄文時代石器実測図（8）



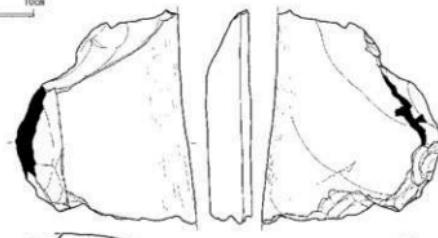
第62図 繩文時代石器実測図（9）



第63図 縄文時代石器実測図 (10)



151-152



第64図 繩文時代石器実測図 (11)

ていることから、磨石の台として使用された可能性もある。

### 台石（第64図151）

151の石材は尾鈴山溶結凝灰岩であり、約9kgの重量がある。広い平坦面を持つ礫を使用している。中央部に磨面を有している。

### 有刻石製品（第64図152）

152の石材は尾鈴山溶結凝灰岩であり、層位横軸箇所より出土している。楕円形の円鏃にT字に5mm程の

深さの線刻がほどこされており、裏面にまで線刻が続いている。有溝石錐のように思えるが、用途については不明であるため、有刻石製品として報告する。

### 磨製石製品（第64図153）

153の石材は泥岩である。断面を見ると刃部は反対側の二平面を挟んで薄型に作られており、側縁にしか存在しないが、石刀の可能性がある。また刃部の側縁が少し湾曲していることから天附型石刀の可能性もある。

第16表 繩文土器観察表

No.	出土地点 〔グリッド位置〕	基 盤	部 位	量 (cm)		手法・調製・文様ほか		色 調		地 土	
				口径	底径	腹底	外	内	外		
7	B 4	深鉢	口縁部	—	—	—	斜方向の斜面底	斜方向のナデ	褐色	に少し黄色	3mm以下の灰白色粘土。透明光沢粘土。黑色光沢粘土を多く含む。
8	A 4	深鉢	口縁部	—	—	—	直角底直底	一部ハリ	褐色	10YR 4/4	10YR 4/4
9	B 4	深鉢	口縁部	—	—	—	直角底直底	直角底直底	褐色	10YR 5/6	10YR 5/6
10	—	深鉢	口縁部	—	—	—	直角底直底、一部スラッシュ	直角底直底	褐色	7.5YR 5/6	7.5YR 5/6
11	A 5	深鉢	脚部	—	—	—	ナデ	直角底直底	褐色	10YR 6/4	10YR 6/4
12	B 4	深鉢	脚部	—	—	—	ナデ	直角底直底	褐色	10YR 6/4	10YR 6/4
13	—	深鉢	脚部	—	—	—	ナデ	直角底直底	褐色	10YR 6/4	10YR 6/4
14	B 3	深鉢	口縁部	—	—	—	楕円内壁型	楕円内壁型	褐色	5YR 5/6	5YR 5/6
15	B 2	深鉢	口縁部	—	—	—	楕円内壁型	楕円内壁型	褐色	5YR 5/6	5YR 5/6
16	B 2	深鉢	脚部	—	—	—	楕円内壁型	楕円内壁型	褐色	10YR 4/4	10YR 4/4
17	A 4	深鉢	脚部	—	—	—	楕円内壁型	楕円内壁型	褐色	10YR 4/4	10YR 4/4
18	—	深鉢	脚部	—	—	—	楕円内壁型	楕円内壁型	褐色	10YR 4/4	10YR 4/4
19	B 1	深鉢	脚部	—	—	—	直角底直底	直角底直底	褐色	10YR 5/6	10YR 5/6
20	B 5	深鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	楕円内壁型、ナデ	褐色	10YR 6/4	10YR 6/4
21	—	深鉢	口縁部	—	—	—	山形内壁型	ナデ、一部欠損	褐色	7.5YR 5/6	7.5YR 5/6
22	—	深鉢	脚部	—	—	—	山形内壁型	ナデ	褐色	7.5YR 5/6	7.5YR 5/6
23	—	深鉢	脚部	—	—	—	山形内壁型	ナデ	褐色	7.5YR 5/6	7.5YR 5/6
24	—	深鉢	脚部	—	—	—	楕円底	楕円底	褐色	10YR 6/6	10YR 6/6
25	B 3	深鉢	脚部	—	—	—	楕円底	楕円底	褐色	10YR 6/6	10YR 6/6
26	C 3	深鉢	口縁部	—	—	—	直角底	直角底	褐色	10YR 4/4	10YR 4/4
27	C 5	鉢	口縁部	—	—	—	輪付突変文	ナデ	褐色	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6
28	B 5	深鉢	口縁部	—	—	—	輪付突変文	ナデ	褐色	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6
29	B 2	浅鉢	口縁部	—	—	—	直角底直底	ナデ、輪付突変文	褐色	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6
30	B 4	深鉢	口縁部	—	—	—	輪付突変文	ナデ	褐色	10YR 6/4	10YR 6/4
31	B 3	深鉢	口縁部	—	—	—	輪付突変文	ナデ	褐色	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6
32	B 4	浅鉢	口縁部	—	—	—	輪付突変文	複数のナデ	褐色	10YR 6/4	10YR 6/4
33	A 4	深鉢	口縁部	—	—	—	直角底直底	直角底直底	褐色	10YR 7/4	10YR 7/4
34	B 3	鉢	口縁部	—	—	—	刮み目	ナデ	褐色	10YR 6/6	10YR 6/6
35	A 5	深鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	複数のナデ	褐色	10YR 6/6	10YR 6/6
36	B 3	深鉢	脚部	—	—	—	直角底	ナデ	褐色	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6
37	—	深鉢	脚部	—	—	—	直角底	ナデ	褐色	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6
38	B 4	浅鉢	口縁部	—	—	—	直角底	ナデ	褐色	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6

第17表 繩文時代石器計測表

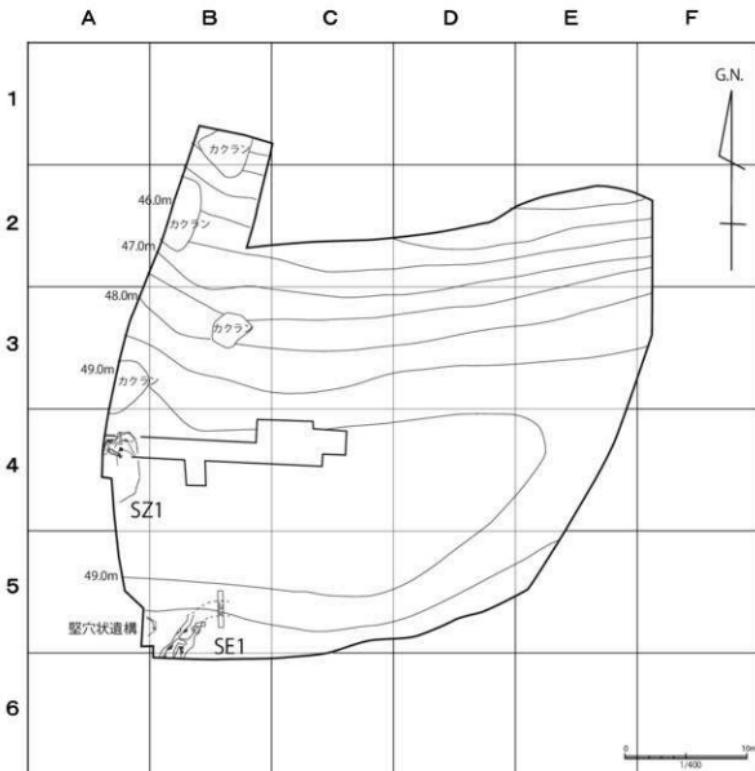
No.	出土地点 〔遺跡名〕	層	器種	石材	法量				No.	出土地点 〔遺跡名〕	層	器種	石材	法量			
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
59	—	Ⅱ	石劍	チヤート	1.34	1.11	0.26	0.4	103	C 4	—	破器	ホルンフェルス	5.18	6.60	4.74	192.0
60	B 2	—	石劍	チヤート	1.82	1.50	0.36	0.5	104	B 4	—	破器	尾鷲山遺跡灰坑	18.90	19.80	5.10	1656.9
61	C 2	—	石劍	黄玉	2.39	1.95	0.43	1.6	105	B 2	V	破器	砂岩	6.03	6.05	4.02	216.2
62	—	—	石劍	チヤート	1.53	1.66	0.34	0.9	106	E 3	Ⅱ	破器	尾鷲山遺跡灰坑	5.23	7.10	3.19	124.2
63	B 2	V	石劍	チヤート	1.32	1.61	0.33	0.7	107	B 2	—	破器	尾鷲山遺跡灰坑	11.95	12.65	4.20	826.7
64	B 3	V	石劍	チヤート	2.36	2.59	0.89	6.1	108	D 3	—	破器	ホルンフェルス	7.52	6.50	3.71	224.1
65	B 4	V	柳叶刀	チヤート	2.45	2.30	1.10	0.4	109	B 2	V	破器	砂岩	7.76	7.72	2.61	253.2
66	—	—	スクレイパー	砂岩	3.44	7.14	1.80	41.3	110	B 3	V	破器	砂岩	5.30	10.30	2.30	115.6
67	B 2	V	スクレイパー	珪質灰岩	3.38	5.79	1.54	34.3	111	B 2	Ⅲ	石斧	尾鷲山遺跡灰坑	13.95	11.40	3.95	679.6
68	—	—	スクレイパー	砂岩	4.85	11.20	2.90	172.2	112	B 2	—	石斧	ホルンフェルス	10.17	6.59	3.09	190.1
69	B 3	—	スクレイパー	砂岩	5.28	7.03	1.69	65.3	113	B 2	Ⅲ	石斧	ホルンフェルス	9.45	3.82	1.00	38.9
70	B 4	—	スクレイパー	珪質灰岩	4.85	6.15	1.91	70.0	114	B 2	V	石斧	ホルンフェルス	8.63	5.53	3.27	182.6
71	B 2	—	スクレイパー	砂岩	6.90	9.00	2.20	206.4	115	C 3	—	石斧	砂岩	8.97	6.16	2.83	185.6
72	B 3	V	スクレイパー	ホルンフェルス	6.22	7.05	1.62	78.3	116	B 3	V	石斧	砂岩	5.29	5.94	1.64	64.4
73	B 3	V	スクレイパー	流紋岩	3.34	4.16	1.58	25.0	117	C 3	—	石斧	ホルンフェルス	7.46	5.55	2.19	125.1
74	B 2	V	スクレイパー	石英	2.41	2.40	1.77	20.6	118	B 3	V	石斧	砂岩	6.00	6.00	2.22	96.5
75	S 1 1	—	スクレイパー	珪質灰岩	5.79	4.39	1.86	42.7	119	B 2	—	石斧	砂岩	9.82	9.74	3.30	257.0
76	B 3	V	スクレイパー	ホルンフェルス	7.90	6.75	0.95	229.3	120	—	石斧	ホルンフェルス	5.03	4.96	2.88	81.4	
77	B 4	V	二次加工片剣	ホルンフェルス	4.60	4.45	1.40	27.9	121	C 3	—	石斧	ホルンフェルス	4.94	5.30	1.66	55.9
78	B 5	V	二次加工片剣	珪質灰岩	6.46	4.60	2.77	89.8	122	A 3	—	石核	砂岩	6.90	9.12	5.42	374.5
79	B 6	V	片剣	珪質灰岩	6.83	4.02	1.44	36.8	123	C 3	—	石核	砂岩	6.30	9.45	5.24	362.6
80	S 1 1	—	剣	珪質灰岩	4.41	5.71	1.32	38.5	124	—	石核	砂岩	6.96	9.06	3.71	279.6	
81	B 4	V	剣	黄玉	4.65	6.42	1.84	42.3	125	B 3	V	石核	尾鷲山遺跡灰坑	6.53	9.62	5.02	427.6
82	—	—	剣	黄玉	6.85	4.40	1.86	62.4	126	B 5	—	石核	砂岩	12.20	12.40	4.40	791.3
83	B 4	V	剣	流紋岩	5.94	4.10	0.96	18.5	127	C 4	V	石核	砂岩	11.80	12.70	5.50	1034.3
84	C 3	—	剣	ホルンフェルス	7.30	4.75	0.82	58.0	128	B 3	V	石核	尾鷲山遺跡灰坑	8.50	8.90	6.10	532.0
85	B 3	V	剣	流紋岩	2.27	5.64	1.15	15.2	129	B 5	V	石核	珪質灰岩	5.07	6.60	3.92	144.8
86	S 1 5 ~ 7	—	剣	チヤート	2.40	2.40	1.30	12.0	130	B 3	—	石核	ホルンフェルス	5.66	6.72	3.72	163.0
87	S 1 3 0	—	剣	珪質灰岩	2.80	2.40	0.80	7.4	131	B 2	V	石核	砂岩	7.95	11.89	4.42	524.5
88	B 4	V	剣	チヤート	2.04	2.16	0.62	2.7	132	—	石核	砂岩	4.72	9.35	2.60	191.5	
89	S 1 3 6	—	剣	珪質灰岩	2.30	3.15	1.00	8.3	133	E 3	Ⅱ	石核	ホルンフェルス	5.55	4.76	2.30	66.3
90	S 1 1 0 ~ 1 1	—	剣	流紋岩	2.59	2.46	0.97	8.0	134	D 2	—	チヤート	砂岩	3.21	5.22	2.93	84.1
91	B 4	V	柳形剣	石器	5.70	7.20	1.30	56.7	135	B 3	V	石核	砂岩	5.20	5.90	1.75	79.6
92	C 3	V	柳形剣	石器	7.00	10.00	1.50	117.5	136	B 2	—	石核	砂岩	5.50	7.15	1.80	102.3
93	B 4	—	柳形剣	ホルンフェルス	5.30	7.15	1.50	61.0	137	C 4	—	石核	砂岩	5.30	5.40	1.15	52.3
94	B 2	V	柳形剣	石器	5.45	4.40	1.20	26.9	138	C 2	—	石核	砂岩	5.40	6.10	1.90	84.7
95	S 1 2 4	—	柳形剣	石器	5.50	5.75	0.90	39.8	139	B 5	V	石核	砂岩	6.70	7.10	2.20	156.9
96	B 5	—	柳形剣	石器	6.10	6.70	1.85	111.6	140	B 5	V	石核	砂岩	5.20	7.30	1.20	72.9
97	C 3	V	柳形剣	石器	5.30	7.70	1.40	62.1	141	B 2	—	石核	砂岩	7.30	8.29	3.37	257.9
98	B 5	—	柳形剣	石器	6.00	5.90	1.60	76.1	142	B 4	V	柳質灰岩	6.50	7.40	1.30	72.5	
99	S 1 2 4	—	柳形剣	ホルンフェルス	4.80	6.25	1.10	33.6	143	B 1 6	—	石核	砂岩	12.00	9.00	3.75	598.2
100	C 3	V	柳形剣	ホルンフェルス	5.90	7.20	1.20	62.0	144	B 2	V	石核	砂岩	14.75	5.10	2.35	316.8
101	B 3	—	柳形剣	石器	5.90	10.15	2.30	142.2	145	C 3	V	石核	砂岩	11.00	9.00	4.10	616.0
102	B 1 1 0 ~ 1 1	—	柳形剣	ホルンフェルス	6.10	6.80	1.20	45.3	146	—	石核	尾鷲山遺跡灰坑	6.35	6.30	2.75	161.4	
103	S 1 9	—	柳形剣	石器	5.30	7.70	1.40	62.1	147	B 5	—	石核	尾鷲山遺跡灰坑	9.20	8.00	4.00	407.9
104	S 1 3 6	—	柳形剣	ホルンフェルス	7.15	4.00	1.45	46.3	148	B 1 2 8	—	石核	砂岩	7.10	10.50	4.50	404.8
105	B 5	—	柳形剣	石器	6.95	2.80	1.40	58.2	149	B 3	V	石核	砂岩	15.20	11.20	3.05	798.1
106	S 1 3 6	—	柳形剣	尾鷲山遺跡灰坑	7.35	6.25	1.25	67.8	150	B 5	V	石核	砂岩	19.50	11.40	2.75	1060.1
107	B 3	V	柳形剣	尾鷲山遺跡灰坑	5.30	11.10	1.85	125.0	151	B 5	—	石核	尾鷲山遺跡灰坑	34.10	23.20	9.85	7000.0
108	S 1 1	—	柳形剣	石器	2.85	6.05	1.10	25.6	152	—	有削石製品	尾鷲山遺跡灰坑	6.35	9.85	4.75	381.2	
109	B 2	V	柳形剣	石器	7.70	12.90	2.00	265.1	153	C 3	—	柳形石製品	武岩	4.26	3.51	0.92	15.2
110	S 1 2 6	—	柳形剣	石器	4.75	6.35	0.70	34.0									
111	S 1 1	—	柳形剣	石器	6.70	6.20	2.45	87.2									
112	C 4	—	柳形剣	尾鷲山遺跡灰坑	7.35	10.05	2.40	200.1									
113	S 1 2 1 ~ 2 2	—	柳形剣	石器	6.40	4.60	1.50	43.2									
114	S 1 1 2 ~ 2 4	—	柳形剣	石器	6.90	7.05	1.50	82.0									
115	B 5	—	柳形剣	石器	3.70	3.90	0.90	12.9									
116	S 1 3 6	—	柳形剣	石器	2.90	4.55	0.90	8.4									
117	B 3	V	柳形剣	尾鷲山遺跡灰坑	14.40	19.10	2.80	1111.4									
118	C 2	—	柳器	ホルンフェルス	5.55	7.47	4.72	260.4									
119	S 1 2 5	—	柳器	砂岩	7.89	10.23	4.43	442.4									
120	C 4	—	柳器	砂岩	5.49	6.13	2.18	127.1									
121	C 3	—	柳器	ホルンフェルス	5.16	7.96	3.37	164.1									

## 第4節 弥生時代の遺構と遺物

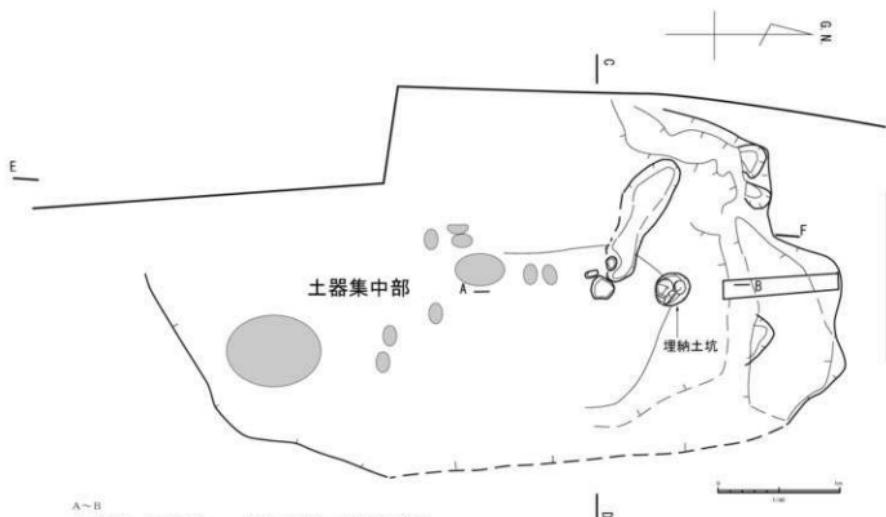
### 4-1. 概要

弥生時代の遺構は、A4Grに位置するSZ1（不明遺構）のみである。このSZ1（不明遺構）からは打製石斧、壺、礫が共に配置された状態で埋納土坑が検出された。また、弥生時代終末期の壺や甕、鉢が焼土や焼成物と共に多数出土した。

埋納土坑から出土した打製石斧は、使用された痕跡ではなく、同時に出土した礫も敲打による調整で形を整えている痕跡が確認された。また、壺は頭部から先が欠損した状態で出土している。なおSZ1の上面と下面より出てきた炭化材を放射線炭素年代測定にかけたところ、上層の炭化材では  $1845 \pm 25$  BP、下層の炭化材では  $1835 \pm 20$  BP という年代結果が出た。



第65図 弥生時代以降の遺構分布図



A～B

- 1 黄褐色土 (Bue10YR5/6) 桐土粒。炭化物粒。少量を含む。やや軟。
- 2 黒褐色土 (Bue10YR5/6) 黒褐色土 (10YR5/2) の混入土。やや軟。
- 3 褐色土 (Bue10YR4/6) 褐色土。炭化材を無少量含む。
- 4 褐色土 (Bue10YR4/1) 褐灰色土しまりがある。赤褐色の炭化物の粒が含まれる。
- 5 褐色土 (Bue10YR4/6)
- 6 明黄褐色土 (Bue10YR7/6) 明黄色土。炭化物 3～5cm 程の繊維を含む。
- 7 にじむ黄褐色土 (Bue10YR5/4)
- 8 黒褐色土 (Bue10YR2/2) 1～5cm 程の繊維を含む。
- 9 にじむ黄褐色土 (Bue10YR5/4) 8 の混入土。
- 10 明黄褐色土 (Bue10YR7/6) 3～5cm 程の繊維を含む。

49.200m



C～D

- 1 黒色粘質土 (Bue7.5YR4/3) 1mm 程の透明な粒や炭化物を含む。
- 2 褐色土 (Bue7.5YR4/6)
- 3 褐色粘質土 (Bue10YR4/6) 黏性が強く、硬質。しまりがある。1mm 程の黒褐色粒をまばらに含む。
- 4 明褐色土 (Bue7.5YR5/6) 黏性が少なく、ややしまりがない。白色性をわずかに含む。
- 5 明褐色土 (Bue7.5YR5/6) 4 に似ているが、色調がやや暗く、炭化物や塊土粒をわずかに含む。
- 6 褐色土 (Bue7.5YR4/4) やや物質があり、ややしまりがある。黄褐色粒や白色粒を含む。
- 7 褐色土 (Bue7.5YR4/6) やや物質があり、ややしまりがある。白色粒を含む。
- 8 明褐色土 (Bue7.5YR5/6) 黏性があるものの、しまりがない。
- 9 褐色土 (Bue7.5YR4/3) 6 に似ているが、より硬質である。
- 10 明褐色粘質土 (Bue10YR5/6) 粘質が強く、ややしまりがある。白色粒及び黄褐色粒を含む。
- 11 褐色土 (Bue10YR4/4) 粘質があり、ややしまりがある。褐色粒や白色粒を含む。
- 12 褐色土 (Bue7.5YR4/3) 15 と比べ、やや軟質でしまりがない。
- 13 褐色土 (Bue10YR4/4) 11 に特徴が似ているが、肉眼ほどのしまりがない。
- 14 褐色土 (Bue7.5YR4/3) 黏性があり、しまりがある。赤色、白色、白色粒をわずかに含む。9, 12 に似ている。
- 15 帯褐色粘質土 (Bue10YR3/4) 硬質でしまりがある、粘質が強い。白色粒、黄色粒を多く含む。
- 16 黄褐色粘質土 (Bue10YR5/6) 粘質が強く、しまりがややある。炭化物をわずかに含む。

49.400m



第66図 SZ1実測図・土層断面図（1）



第67図 SZ1土層断面図 (2)

#### 4-2. 遺構

### (1) 不明遺構 (第 66 ~ 69 図図版 12・13)

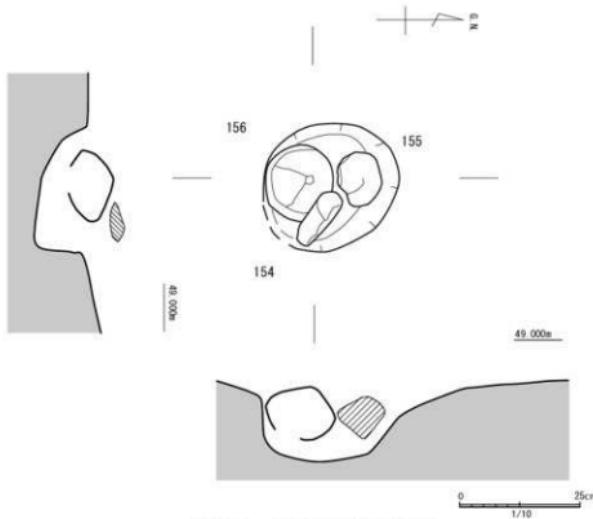
調査区最高所の西側縁辺で検出された本遺構は、第1次調査時に遺物の出土と焼土の検出によって認識されていた。

第1次調査で東西方向に設定したトレンチに弥生土器片と礫、トレンチ壁の断面に焼土らしき層の固まりが確認され、周辺とは事を異にする状況が見られた。その時点で、遺構が絡むことを想定し、第2次調査に移ってから周囲の土層堆積や遺物の出土状況を見ながら慎重に掘り下げを行った。遺構周辺の堆積層は、灰白色粒を含んだ明褐色土の混入した層に、炭化物等を含む非常にしまった褐色土が入る状態を遺構のラインとして掘り下げていった。

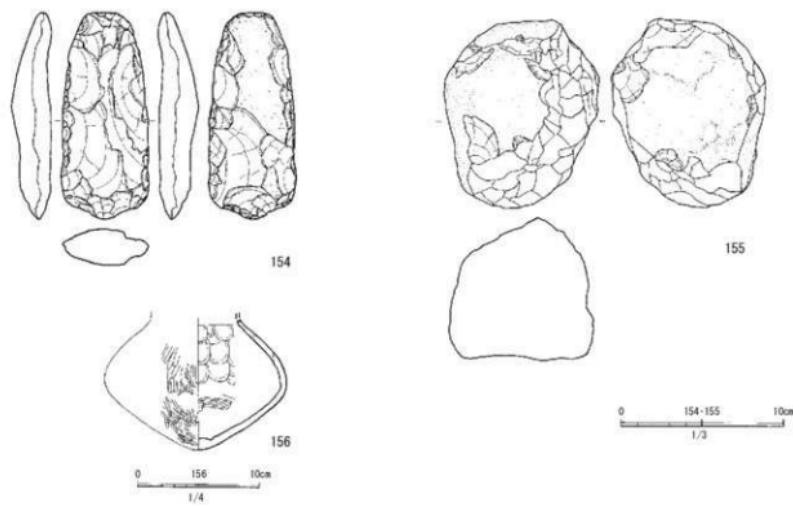
遺構は、当初北側に半円形状に検出され、検出面から約40cmほど掘り下げたところで焼土の堆積を確認した(第67図)。遺構の南側は、土層反転等の擾乱により、プランが把握できる状況ではなかった。確認された焼土の堆積は、部分的にくびれのある長梢円形状を呈し、約20cmの深さで堆積していた(第67図)。焼土の堆積が確認され、鍛冶関連の遺構も想定されたので、フローテーションを行ったが鉄滓や鉄片、粒状滓等は確認されなかった。

さらに、焼土の周囲を掘り下げたところ、北側に頭部から先がなくなった壺の胴部と打製石斧、礫を検出した。壺は逆さまにして設置され、その上に重なるように石斧が置かれていた（第69図）。また、壺と礫は、検出面から15cm程度掘り込まれたほぼ円形の土坑に床面から浮いた状態で納まっていることが確認された（第69図）。この壺や礫を納めた土坑は、幅約1m程度の掘り込みが埋まつたところで構築されている。壺と礫を納めた土坑は、さらに上部からの掘り込みがあったのかは検出された時点では確認することはできなかった。

さらに、断面観察で遺構と判断した掘り込みを追いながら南側に掘り進めていく過程で、弥生土器片が多量に出土するようになった。土器は、集中して折り重なるような状態で確認されることもあり、土器片の集中部分には焼土や炭化物も見られ、土器焼成遺構の可能性も想定しながら、出土地点を記録しつつ取り上げを同時に進めていった。遺構の南側には明褐色土を含んだ灰白色土が検出されており、この層が岩盤層としてとらえ、遺物を含む層を遺構の埋土として除去しながら掘り進んだ。断面観察では、弥生土器片を多量に含む層（灰白色粒を含む橙色土層）は、岩盤と考えている灰白色土層に挟まれるよう



第68図 SZ1埋納土坑平面図



第69図 SZ1埋納土坑出土遺物実測図

状態で流れ込んでいる状況を確認している。

最終的には、北側の半円形状の遺構を含んだ長楕円形状の大きな落ち込みになったが、北側の埋納遺構を含む掘り込みと、南側の土器が多く出土する落ち込みとの関係を把握することは困難であった。

#### 4-3. 遺物

##### (1) 土器 (第 70 ~ 72 図、図版 18 ~ 22)

不明遺構 (SZ1) から出土した土器の中から、実測に耐えられるものを実測・計測を行った。なお 189 のみ、調査区北側の B2G から出土している。

##### 壺 (第 70 ~ 71 図 157 ~ 171)

157・159・162・166 は大きく開く口縁部と長く屈曲する口縁部を持っており、屈曲度はやや深い。166 の口縁部は長く屈曲した口縁部を持ち、底部は厚く接地面の少ない平底を呈している。158・161・164 は甌の口縁部から胴部にあたる。短く屈曲する口縁部を持つが、屈曲度はやや浅い。外面は摩耗しており、黒斑が付着している。160・163・165 は胴部より口縁部が広く、屈曲した逆ハの字形の口縁部を持っている。163 は長く屈曲する口縁部を有している。165 は短く浅い屈曲度を持つ口縁部をしており、底部は接地面の少ない平底である。167 は短く屈曲度の浅い口縁部を呈している。168 の底部は接地面の少ない丸底をしている。167 と 168 は同一個体である。169 は厚みのある平底となっている。外面、内面共に黒いススが付着している。170 は厚みがあり、接地面の少ない平底となっている。171 は比較的薄く、接地面の少ない平底となっている。

##### 壺 (第 71・72 図 172 ~ 193)

172 の胴部は丸みを帯びた形状をしており、厚い平底の底部に繋がっている。173 の口縁部はわずかに傾斜しており、口唇部は薄くなっている。174 の口縁部は二段階に屈曲し、上部はわずかに外側に反っている。175 の口縁部はわずかに外反しており、口唇部は厚く、工具によるナデが見られる。176 ~ 179 は接地面の少ない、厚みのある丸底や平底となっている。180 は広い平底を呈している。181 は接地面の少ない、平底となっている。182 は 1 cm 程の平底となっている。183 は壺の底部と見られ、わずかに上げ底状の底部となっている。184 は外面、内面ともに丁寧なナデが

行われている。185 ~ 188・192 は複合口縁の壺である。185・186 は口縁部に折拓波状文を施す。190 は外面、内面共にナデが見られる。191 は外面に刻目突蒂文があり、内面には横方向にナデが確認できる。192 は内面に工具を使用したナデがある。193 は頭部が欠損しており、外面は縱方向のミガキがあり、内面には丁寧なナデが行われている。

##### 鉢 (第 72 図 194 ~ 196)

194 の口縁部は直線的に逆ハの字形に開いており、底部は欠損している。外面、内面ともに工具を使って丁寧なナデや指押さえがある。195 の口縁部は直線的に逆ハの字形に開いており、碗の形状は直線的に底部に続いている。底部には 1 cm ほどの接地面の少ない平底となっている。外面にはナデがあり、内面には横や斜方向にナデがある。196 は浅鉢の口縁部から底部にあたり、直線的に逆ハの字形に開いている。底部は 1 cm ほどの接地面の少ない平底となっている。外面、内面共に摩耗が激しいものの外面に一部、ナデの痕がある。

##### (2) 遺構から出土した遺物 (第 70 図 154 ~ 156)

##### 石斧 (第 69 図 154)

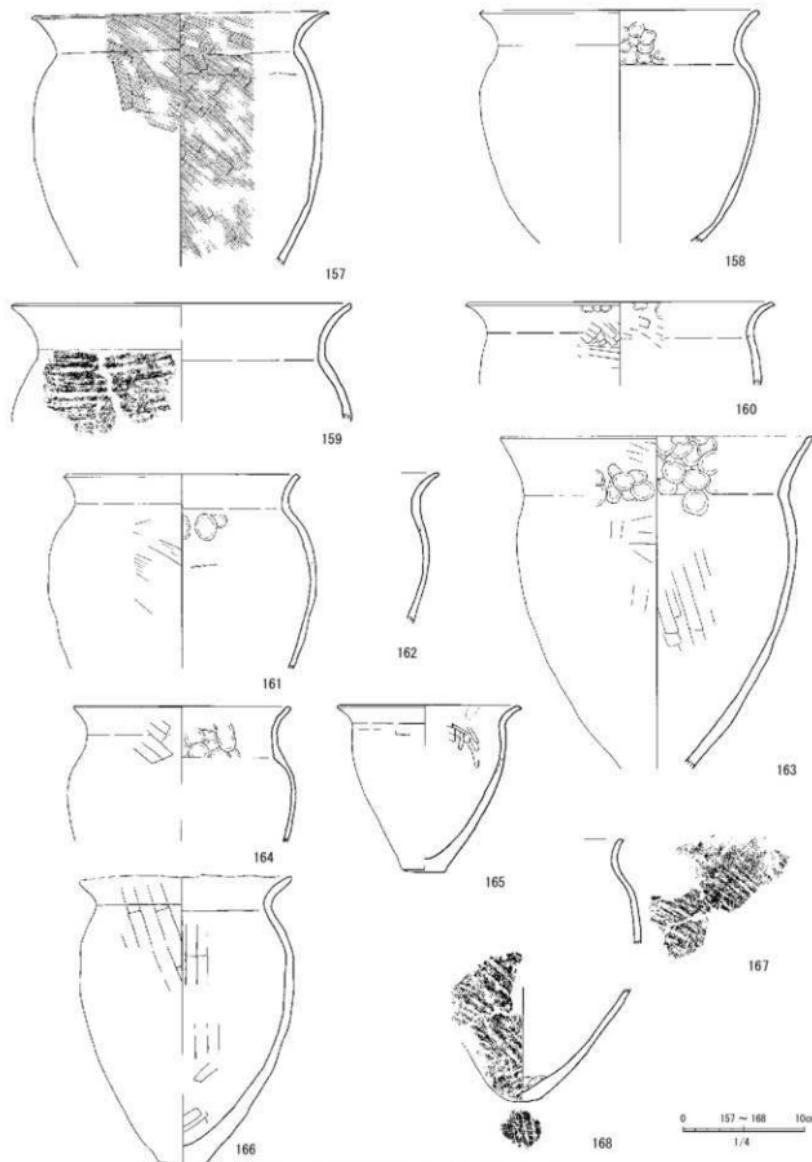
154 は砂岩製の石斧である。SZ1 より壺 (156)、礎 (155) と共に出土している。長さは 12 cm、幅は 5 cm、厚さは 3 cm である。表面には上部に自然面が残り、裏面には主要剥離面を残す肉厚の礎を用いており、石器縁部に細かな敲打による整形が施され、左右対称に作られている。刃部は絞られて整形されている。この石斧は、ほぼ完形であり、使用痕が見られない。

##### 礎 (第 69 図 155)

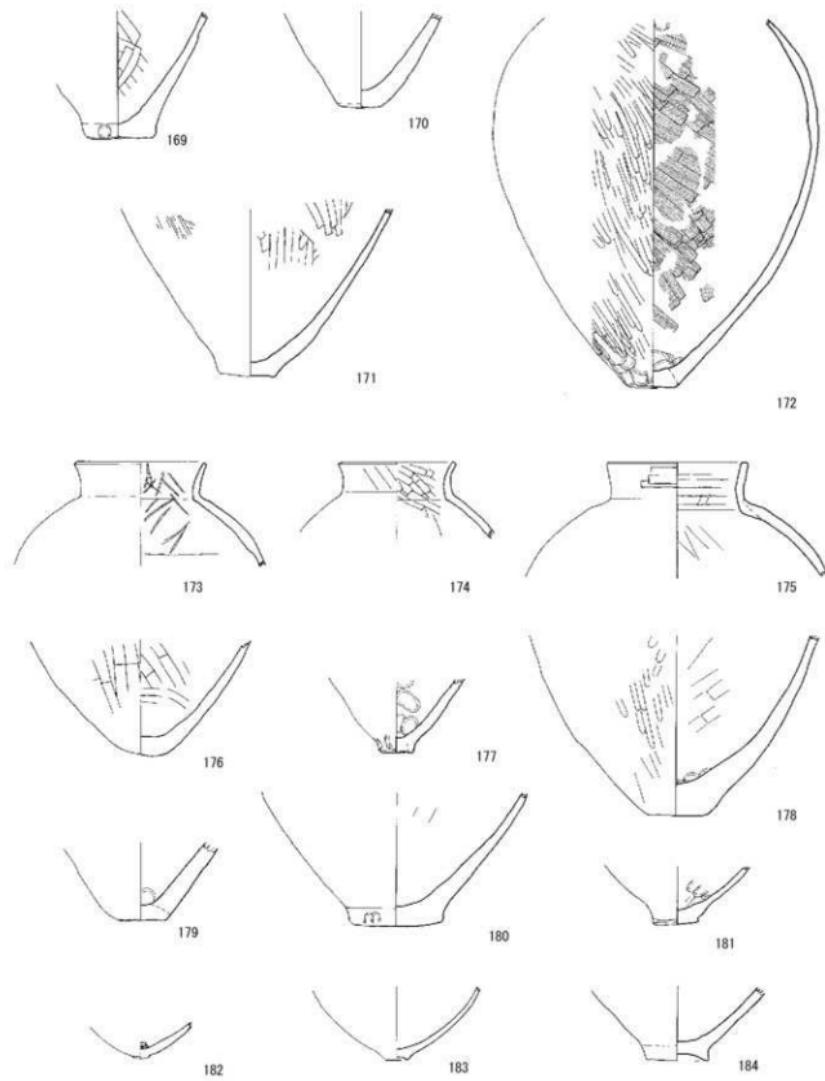
155 は 1.1 kg の尾鈴山溶結凝灰岩の礎であり、長さ 12 cm、幅 9 cm である。石斧 (154) と壺 (156) と一緒に並べられた状態で出土している。礎には敲いて形を整えた痕跡があり、全体的に角を取り、丸みをもたせてある。

##### 壺 (第 69 図 156)

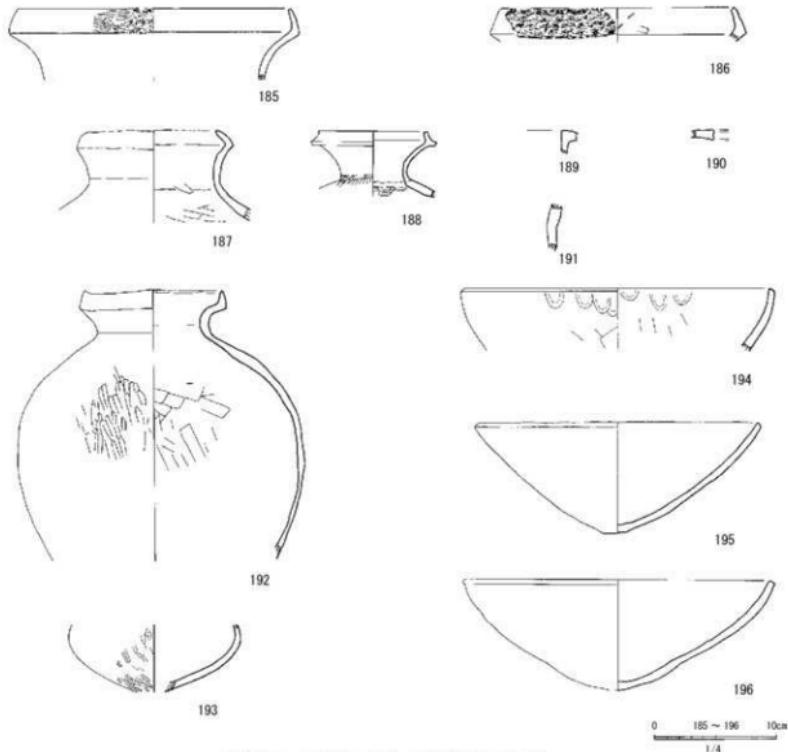
156 は頭部が欠損しており、長頸壺の胴部から底部にあたる。胴部は強い湾曲があり、やや浅い錐部状の底部が見られる。



第70図 SZ1出土弥生土器実測図（1）



第71図 SZ1出土弥生土器実測図（2）



第72図 S21出土弥生土器実測図（3）

第18表 弥生土器観察表（1）

No.	出土場所 グリッド 座標値	基 磯	部 位	量 (cm)			手すり・調節・文様ほか	色 調		地 土
				口径	底径	高さ		外	内	
157	S21.1	裏	口縁部	24.30	—	—	斜面の凹凸不 規則、ハサウ エ	斜方のハケ目 横溝	にぶい褐色 7.5mm	2-mm程度の褐色系。赤褐色系。1-mm以下の灰白色系。赤褐色系を多く含む。 1-mm以下の褐色系。1-mm以下の灰白色系。1-mm以下の褐色系を含む。
158	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	22.40	—	—	傾斜した内側壁不 規則、スラット型	卓上用のため調節不 規則	褐色 7.5mm	褐色系 7.5mm
159	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	28.00	—	—	傾方向のナギ、タ タキ	傾方向のナギ	にぶい褐色 7.5mm	6 mm以下の灰白色系。褐色系を多く含む。
160	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	24.80	—	—	傾方向の工具 ナギ、ナギ	傾方向の工具ナギ、 ナギ	褐色 7.5mm	6 mm以下の灰白色系。4 mm以下のにぶい褐色系。灰褐色系を多く含む。 4 mm以下の灰白色系を少し含む。
161	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	18.80	—	—	傾方向の工具ナギ、 ナギ	傾方向の工具ナギ、 ナギ	にぶい褐色 7.5mm	8 mm以下の灰白色系。5 mm以下の褐色系。3 mm以下の灰褐色系。灰白 褐色系を多く含む。5 mm以下の褐色系を少し含む。
162	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	—	—	—	傾・傾方向の工具 ナギ、ナギ	傾・傾方向の工具ナギ、 ナギ	にぶい褐色 7.5mm	4 mm以下の褐色系。3 mm以下の灰白色系を多く含む。
163	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	25.60	—	—	傾方向の工具ナギ、 ナギ	傾方向の工具ナギ、 ナギ	褐色 7.5mm	6 mm以下のにぶい褐色系。5 mm以下の灰褐色系。4 mm以下の灰白色 系を多く含む。1 mm以下の透明灰褐色を少し含む。
164	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	18.00	—	—	傾方向の工具ナギ、 ナギ	傾方向の工具ナギ、 ナギ	褐色 7.5mm	5 mm以下のにぶい褐色系。褐色系を多く含む。
165	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	15.15	3.95	13.70	工具ナギ後ナギ、 ナギ	工具ナギ後ナギ、 ナギ	褐色 7.5mm	4 mm以下の灰白色系。灰褐色系を多く含む。
166	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	17.35	3.45	23.90	調節不可開、一部 斜面のナギ	傾・傾方向の 工具ナギ	にぶい褐色 7.5mm	6 mm以下の褐色系。3 mm以下の灰白色系を多く含む。
167	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	—	—	—	ナギ、斜方のタ タキ	傾方向のナギ	にぶい褐色 7.5mm	2~3 mm程度の褐色系。微暗な褐色系。灰褐色系。灰白色系をわずかに含む。 4 mm程度の褐色系。灰白色系。
168	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	—	2.80	—	傾方向のタタキ ナギ、指押さ え	傾方向のタタキ ナギ、指押さ え	にぶい褐色 7.5mm	2~3 mm程度の褐色系。微暗な褐色系。灰褐色系。灰白色系を多く含む。 4 mm程度の褐色系。灰白色系。
169	S21.1	裏	口縁部 ～腹部	—	4.60	—	調整不可、押押 え、火付骨	傾方向の工具ナギ、 ナギ	褐色 7.5mm	4 mm以下の灰白色系を多く含む。

第19表 弥生土器觀察表（2）

170	SZ 1	直 ～直部	—	2.85	—	調査不明	工具ナデ 手斧	にぶい褐色 7.09E/4	
171	SZ 1	直 ～直部	—	4.55	—	直線のため調査不 可能。ミガキ 痕あり	工具ナデ。ナデ。 手斧	淡黄褐色 107E/4	
172	SZ 1	直 ～直部	—	4.10	—	ナデ。斜方向のミ ガキ	斜方角のハケ目。 ナデ	淡黄褐色 107E/4	
173	SZ 1	直 ～直部	—	10.30	—	様、斜方向のナデ。	工具ナデ。ナデ？ 調 理棒	にぶい褐色 7.09E/4	
174	SZ 1	直 ～直部	—	9.00	—	斜方向のナデ。斜 方向のナデ。	工具ナデ。ナデ。 手斧	にぶい褐色 7.09E/4	
175	SZ 1	直 ～直部	—	11.60	—	工具ナデ。ナデ。 斜方角の工具ナ デ	工具ナデ。ナデ。 手斧	にぶい褐色 7.09E/4	
176	SZ 1	直 ～直部	—	3.00	—	斜方角の工具ナ デ	斜方角の工具ナ デ	にぶい褐色 7.09E/4	
177	SZ 1	直 ～直部	—	2.60	—	ナデ。指揮え。 手斧	丁寧なナデ。指 揮え。	にぶい褐色 7.09E/4	
178	SZ 1	直 ～直部	—	5.10	—	直化痕。斜方角 のハケ目	直化痕。斜方角 のハケ目。工具ナ デ	にぶい褐色 7.09E/4	
179	SZ 1	直 ～直部	—	4.35	—	ナデ。粘つつな ナデ。指揮え。	ナデ。指揮え。	にぶい褐色 107E/4	
180	SZ 1	直 ～直部	—	7.55	—	工具ナデ。ナデ。 直化痕	工具のため調査不 可能。ナデ。指 揮え。	にぶい褐色 107E/4	
181	SZ 1	直 ～直部	—	3.65	—	ナデ	直化のため調査不 可能。ナデ。指 揮え。	にぶい褐色 107E/4	
182	SZ 1	直 直部	—	1.30	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ。指 揮え。	にぶい褐色 5.09E/4	
183	SZ 1	直 ～直部	—	1.90	—	ナデ	斜方角の丁寧なナ デ	淡黄褐色 107E/4	
184	SZ 1	直 直部	—	5.23	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい褐色 7.09E/4	
185	SZ 1	直 ～直部	—	22.30	—	斜方角のナデ	斜方角の工具ナ デ	淡黄褐色 107E/4	
186	SZ 1	直 直部	—	19.00	—	—	横穴内のナデ。横 穴端	横穴内のナデ。横 穴端	淡黄褐色 107E/4
187	SZ 1	直 ～直部	—	10.60	—	ナデ	工具ナデ。ナデ。 手斧	工具ナデ。ナデ。 手斧	淡黄褐色 107E/6
188	SZ 1	直 ～直部	—	9.00	—	丁寧なナデ。威力 のミガキ	丁寧なナデ。	淡黄褐色 107E/6	
189	BZ	直 ～直部	—	—	—	ナデ	斜方角のナデ。ナ デ	にぶい褐色 7.09E/6	
190	SZ 1	直 直部	—	—	—	—	横ナデ	横ナデ	にぶい褐色 107E/6
191	SZ 1	直 直部	—	—	—	斜方角的支離文 字	斜方角的支離文 字	淡黄褐色 107E/4	
192	SZ 1	直 ～直部	—	11.30	—	—	横、斜方角のナ デ。工具ナデ。ナ デ	横、斜方角のナ デ。工具ナデ。ナ デ	淡黄褐色 107E/6
193	SZ 1	直 直部	—	—	—	—	工具のミガキ	工具のミガキ	淡黄褐色 107E/6
194	SZ 1	直 ～直部	—	24.80	—	工具ナデ。丁寧な ナデ。指揮え。	工具ナデ。丁寧な ナデ。指揮え。	淡黄褐色 107E/4	
195	SZ 1	直 ～直部	—	22.95	1.80	9.10	ナデ	横、斜方角のナ デ	淡黄褐色 107E/4
196	SZ 1	直 ～直部	—	24.90	1.50	8.05	直線のため調査不 可能。ナデ	直線のため調査不 可能。ナデ	淡黄褐色 7.09E/6

## 第5節 その他の時代の遺構と遺物

## 5-1. 概要

本調査区の南西隅に位置するB5Grで溝状遺構が1条検出されている。他にも丘陵部の頂上付近から1基の竪穴状遺構が確認されている。また遺物としてはII層から青磁片が1点、出土している。

## 5-2. 遺構

## (1) 溝状遺構（第73図、図版13）

調査区の南から北東方向へ、走行軸はN-48°-Eで、緩やかなカーブを描き、3m程の長さで検出されており、溝幅は平均約1.4mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。延長確認のため、Trを設定したところ、幅1m程の延長部を確認したので、更に北東方向に延長している可能性がある。遺構の形状から、道路状遺構の可能性も考えられたが、今回の調査では硬化面は確認できなかった。

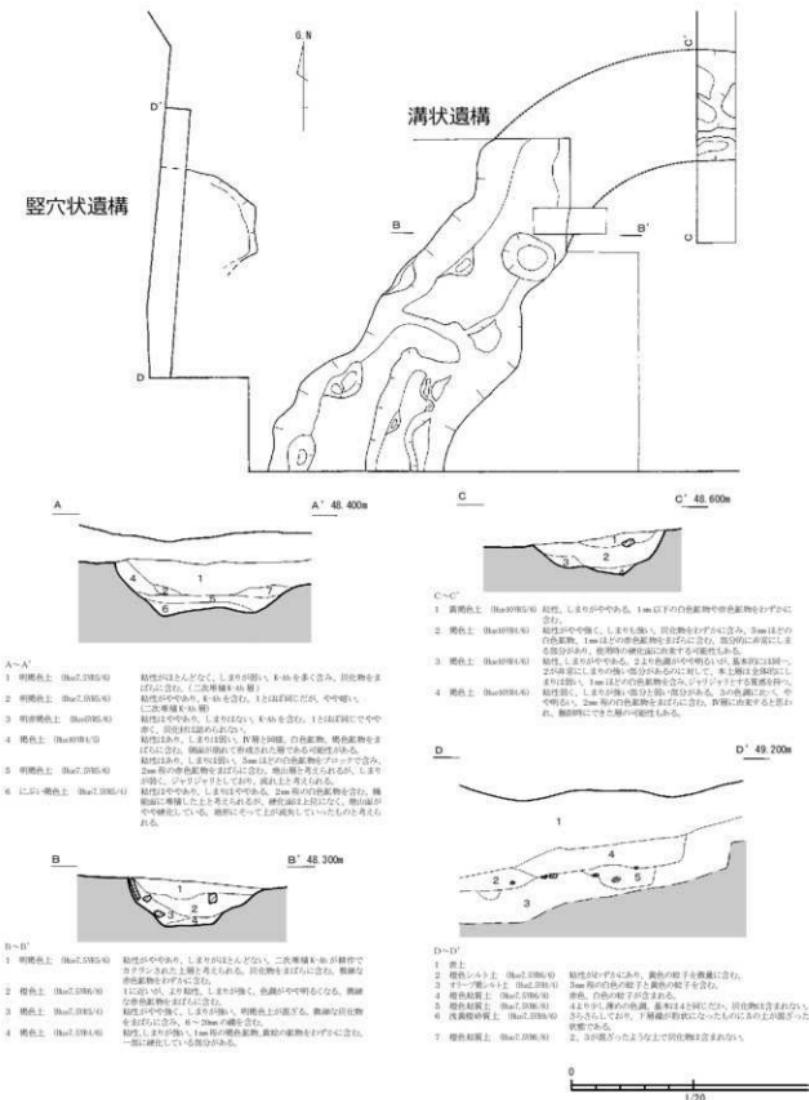
## (1) 竪穴状遺構（第73図、図版13）

調査区のB5Grに位置しており、本来は西側に続いているが、調査区外のため遺構の角の部分的な検出となっている。遺構内からは台石（197）が出土していることから竪穴建物跡の可能性があるが、柱穴、壁帶構などの建物を構成する要素や炉、かまどなどの調理施設が検出されていない。

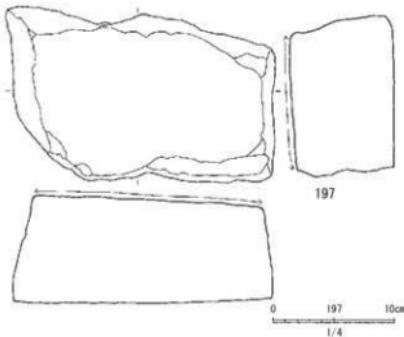
## 5-3. 遺物

## (1) 台石（第74図、図版22）

197の石材は尾鈴山溶結凝灰岩であり、約4kgの重量があり、長さ14cm、幅22cm、厚さ9cmである。竪穴状遺構より出土している。広い平坦面を持つ礫を使用している。欠損しているため、151と同程度の大きな台石であった可能性もある。

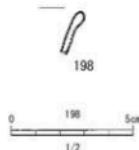


第73図 溝状遺構・縫穴状遺構実測図・土層断面図



(2) 青磁 (第74図、図版21)

198は14世紀後半から16世紀にかけて見られる龍泉窯系の丸碗である。口縁部の一部しか出土していない。口縁部が端反りとなる特徴を有することから、上田分類のD類に相当する。



第74図 竪穴状遺構遺物・青磁実測図

## 第6節 自然科学分析

本遺跡では、4基の集石遺構と1基の不明遺構から炭化物が検出された。これらの出土した試料について年代測定を実施して、時期決定を行うと共に、不明遺構(SZ1)と集石遺構(SI33)から出土した炭化材の樹種同定を実施することにより、当時の木材利用状況を明らかにし、近隣森林の植生を推測するなどの有用な情報を得ること目的で実施した。各分析に使用した試料及び分析方法・結果等については下記に掲載した。

### 1 放射性炭素年代測定

#### 1-1. 試料と方法

第20表参照。

#### 2-2. 測定結果

加速器質量分析法(AMS)によって得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。

第21表にこれらの結果を示し、第75図に暦年較正結果(較正曲線)を示す。

#### (1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

#### (2) 放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は5730年である国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差(±)は $1\sigma$ (68.2%確率)である。<sup>14</sup>C年代値は下1桁を丸めて表するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

#### (3) 暦年代(Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動および<sup>14</sup>Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な<sup>14</sup>C測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 09、較正プログラムはOxCal 3.1である。なお、<sup>14</sup>C濃度比から現代の試料と考えられるNa3についてはOxCal 4.1(較正曲線データ:Post-bomb atmospheric NH<sub>2</sub>)を使用した。暦年代(較正年代)は、<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により $1\sigma$ (68.2%確率)と $2\sigma$ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma$ ・ $2\sigma$ 値が表記される場合もある。( )内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

## 2-3. 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1では $1835 \pm 20$ 年BP(2σの暦年代でAD 120～240年)、No.2では $1845 \pm 25$ 年BP(AD 80～110, 120～240年)、No.4では $9110 \pm 30$ 年BP(BC 8430～8400, 8390～8370, 8350～8250年)、No.5では $3390 \pm 30$ 年BP(BC1750～1610年)、No.6では $7995 \pm 30$ 年BP(BC7060～6800年)の年代値が得られた。No.3は現代(AD1950年土以降)の試料であり、何らかの原因で現代の炭化材が混入した可能性が考えられる。

### 文献

- Bruce Rouse C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy. The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Bruce Rouse C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, p.355-363.
- Paino J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.
- Reimer, P. J., Brown, T. A., & Reimer, R. E. (2004). Discussion: Reporting and calibration of post-bomb C-14 data. Radiocarbon, 46(3), 1299-1304.
- 中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と年代校正. 離島考古学マニュアル. 同成社. p.301-322.

## 2 樹種同定

### 2-1. 試料

試料は、SZ 1付近土器集中部およびSI33掘り込み内から採取された炭化材2点である。これらは、放射性炭素年代測定に用いられたNo.1およびNo.6と同一試料である。

### 2-2. 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

- 1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
- 2) 試料を割折して、木材の基本的三断面(横断面:木口、放射断面:柾目、接線断面:板目)を作成
- 3) 落射顕微鏡(40～1000倍)で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

### 2-3. 結果

第22表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon*

マツ科 写真1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平

樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。横断面:早材から晩材への移行は急で垂直樹脂道が見られる。放射断面:放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鉗歯状肥厚が存在する。接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亞属に同定される。マツ属複維管束亞属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

シイ属 *Castanopsis* ブナ科 写真2

横断面:年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面:道管の穿孔は單穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州(福島県、新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性や低く、建築、器具などに用いられる。シイ属にはスダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、試料が小片で広範囲の観察が困難なためシイ属の同定にとどめた。

### 2-4. 考察

樹種同定の結果、SZ 1付近土器集中部の炭化材(No.1)はシイ属、SI33掘り込み内の炭化材(No.6)はマツ属複維管束亞属と同定された。シイ属は温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。マツ属複維管束亞属には温帯を中心に広く分布する常緑針葉樹であり、土壤条件の悪い岩山に生育し二次林を形成するアカマツと砂地の海岸林を形成するクロマツがある。いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であった。

### 文献

- 島地 健・佐伯 清・原田 清・塙食尚義・石田茂雄・重松耕生・須藤彰司 (1985) 木材の構造・文永家出版. 296p.
- 島地 健・伊東隆夫 (1980) 日本の道路出土木製品総覽. 雄山閣. 296p.
- 山田昌久 (1993) 本州列島における木質遺物出土遺跡文献集成-木材から見た人間・植物関係. 植生史研究特別1

第20表 測定試料、前処理・調整法および測定法

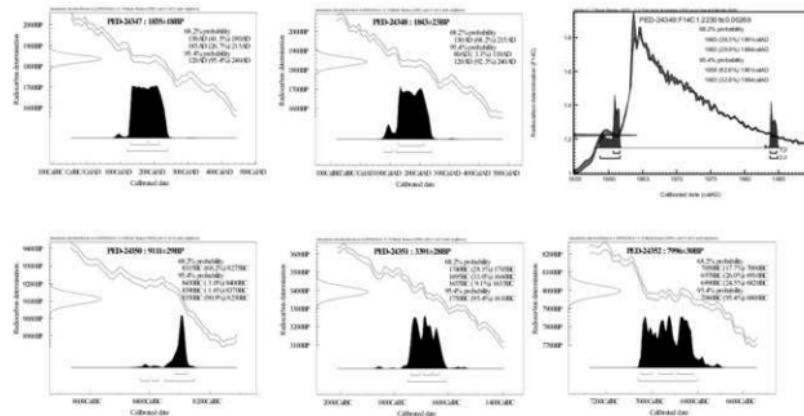
試料No.	採取箇所	種類	前処理・調整法	測定法
No.1	SZ 1付近土器集中部①	炭化材(シイ属)	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS
No.2	SZ 1層位横軸部粘土上②	炭化材	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS
No.3	S15.6.7	炭化材	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS
No.4	S135	炭化材	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS
No.5	S110.11	炭化材	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS
No.6	S133-裏込み内	炭化材(マツ属複数管束亞属)	超音波洗浄、酸-7時間-酸処理	AMS

第21表 放射性炭素年代測定法結果

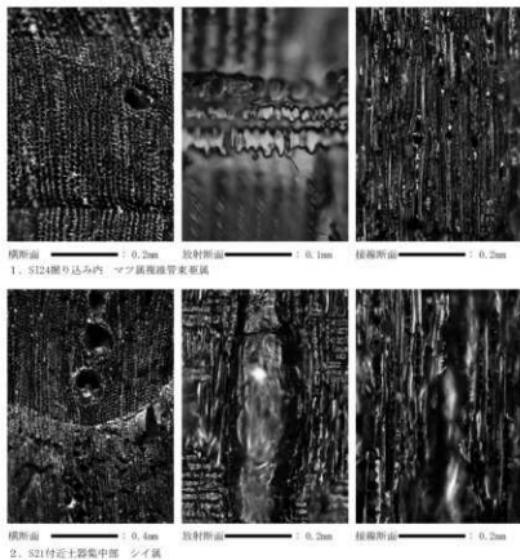
試料No.	測定番号 PED-	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年較正用 年代(年BP)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代 (年BP)	曆年代(較正年代) : cal-	
					1 $\sigma$ (68.2%確率)	2 $\sigma$ (95.4%確率)
1	24347	-26.13 ± 0.23	1835 ± 18	1835 ± 20	AD130-180 (41.5%) AD185-215 (26.7%)	AD120-240 (95.4%)
2	24348	-30.35 ± 0.34	1843 ± 23	1845 ± 25	AD130-215 (68.2%)	AD60-110 (3.1%) AD120-240 (92.3%)
3	24349	-26.67 ± 0.27	F14C: 1.2230 ± 0.0027	modern	Post-bomb NH2: AD1960-1961 (38.3%) AD1983-1984 (29.9%)	Post-bomb NH2: AD1958-1961 (62.6%) AD1983-1984 (32.8%)
4	24350	-27.09 ± 0.35	9110 ± 29	9110 ± 30	BC8315-8275 (68.2%)	BC8450-8400 (3.0%) BC8390-8370 (1.6%) BC8350-8250 (90.9%)
5	24351	-30.50 ± 0.44	3391 ± 28	3390 ± 30	BC1740-1705 (28.1%) BC1695-1660 (31.0%) BC1655-1635 (9.1%)	BC1750-1610 (95.4%)
6	24352	-26.80 ± 0.31	7996 ± 30	7995 ± 30	BC7050-7000 (17.7%) BC6970-6910 (26.0%) BC6890-6820 (24.5%)	BC7060-6800 (95.4%)

第22表 樹種同定結果

試料	結果(学名/和名)	
SZ1付近土器集中部	<i>Castanopsis</i>	シイ属
S133裏込み内	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複数管束亞属



第75図 历年較正結果



第76図 馬込遺跡第2地点の炭化材

## 第7節 小結

今回の調査では旧石器時代、縄文時代早期・晚期、弥生時代終末期の遺構や遺物が出土した。また、青磁片も1点出土した。

本調査区は、風倒木による地層の横転や斜面地の土層堆積による遺物の流動があり、遺物の出土と層序関係を把握することが難しいところもあったが、慎重に掘り下げを行い、IV層からVI層を縄文時代早期の包含層として、調査を進めた。以下、今回の調査で確認された主要な遺構や遺物を基に考察を加えたい。

### 縄文時代

本調査区では縄文時代早期の遺構として、集石遺構40基、炉穴1基、土坑1基が検出されている。

馬込遺跡周辺で縄文時代早期の集石遺構や炉穴を検出した遺跡は次の通りである。板平遺跡で集石遺構36基、炉穴55基、岡遺跡で集石遺構14基、炉穴17基、平尾遺跡で集石遺構1基、坂元第2遺跡で集石遺構2基、向原中尾第2遺跡で集石遺構が18基、向原中尾第5遺跡で集石遺構が13基・炉穴33基が検出されている。周辺遺跡の遺構検出状況と本調査区の集石遺構と炉穴の検出状況を比較すると、集石遺構の検出数は多い方であるが、炉穴の検出数が極端に少ない。集石遺構の検出規模ではほぼ同じ板平遺跡では、炉穴の検出が50基以上あり、本調査区内での検出数が著しく低い状況である。本調査区で確認された炉穴は、調査区内で最高所にあたる尾根頂部で検出されており、検出面からの深さが約10cmとひじょうに浅い掘り込みであり、他の炉穴があった場所と同様に後世の開墾等で削平された可能性がある。このことが、検出数が少ない理由の一つと考えられるが、斜面での検出が1基もなかつたことは本遺跡のあり方を検討する上で、考慮しないといけない事象である。

本調査区で検出した集石遺構は、掘り込みを有するものがほとんどで、唯一SI36だけ掘り込みをもたなかった。周辺遺跡の状況を見ると、板平遺跡で36基の集石遺構が検出されており、掘り込みと配石があるものが15基、掘り込みがあり、配石がないものが10基、掘り込みのないものが10基、確認

されている。向原中尾第2遺跡では17基が確認されており、掘り込み、配石があるものは5基、掘り込みがあり、配石がないものが8基、掘り込みも配石もないのが4基確認されている。岡遺跡では14基の集石遺構が確認され、ほとんどは掘り込みと配石を有している。このように、周辺で検出された集石遺構は全般的に3つのタイプに集約されるが、本遺跡の集石遺構も、同様の状況が見られる。また、周辺遺跡の集石遺構は独立した状態で検出されているが、本遺跡では、複数の集石遺構が切り合った状態で確認されており、同じ場所で何回も集石遺構を構築していた状況が見られる。

集石遺構内から炭化物等の検出が一部で見られたので、調査員の手によりサンプリングを行い放射性炭素年代測定と樹種同定を委託した。分析した集石遺構は、SI10～SI11、SI33、SI35である。その結果、SI33は $7995 \pm 30$ 年BP、SI35は $9110 \pm 30$ 年BPの測定結果が出ており、ほぼ縄文時代早期の範囲に含まれることが判明したが、SI10～SI11の結果が、 $3390 \pm 30$ 年BPという測定値が出された。本調査区からは縄文時代後期の包含層も遺物も確認されていないため、何らかの原因で違う時期の炭化物が混入した可能性が考えられるので、SI10・11についても縄文時代早期の遺構として報告した。

炉穴は調査区の中央から1基確認されており、隣接する場所から土坑も1基確認された。この2つの遺構からは床面から焼土が検出されているため、土坑についても炉穴として使用されていた可能性がある。またこの土坑からは2つの小穴が確認されており、陥落穴として使用された可能性もある。馬込遺跡は標高50mほどの尾根上にあるため、現地調査の時に経験したが、風の通りがよく、炉穴を作って、煮炊きや蒸し焼き等の調理には適した場所と考えられる。また今回の調査では堅穴建物跡は検出されなかつたが、本調査区は現在も湧水が見られ、生活の場としては、良好な環境であったと推測される。

遺物では縄文時代早期の土器が梢円押型文土器片、山形押型文土器片、撚糸文土器片、貝殻条底文土器片、縄文時代晚期の土器が、無刻目突帯文土器や黒色磨研系の土器などが出土している。また石器とし

ては石鏃、スクレイバー、蛤形剥片石器、有刻石製品、磨製石製品等が出土している。本調査区で出土した石器の素材として最も多いものが砂岩製である。石器を器種ごとに見ると 100 点近く出土した蛤形剥片石器が多く、本調査区の周辺の河原にある円礫を素材にして蛤形剥片石器などを製作されたものと推測される。

### 弥生時代

この時期の遺構や遺物は、調査区西側から検出された埋納土坑を含む不明遺構（SZ1）とこれらの遺構から出土した土器がある。

埋納土坑からは、頸部から先が欠損した壺の胴部、石斧、および加工された礫が出土している。また、不明遺構の南側からは、炭化材や炭化物、焼土を伴った状態で多数の土器片が出土している。出土した土器は、複合口縁や單口縁を含む壺、甕、鉢に大別され形態から弥生時代終末期、板平遺跡と周辺地を含む土器編年<sup>9</sup>から、I 期 b段階の時期に相当すると考えられる。埋納土坑から出土した壺については、胴部がそろばん玉状の形態をしていることから、前記土器編年の I 期 a段階の時期が考えられ、遺構の成り立ちに若干の先後関係が想定される可能性がある。遺構南側の土器集中箇所から採取した炭化材の放射性炭素の年代測定結果は、1835 ± 20 年 BP、北側の粘土層上の炭化物は 1845 ± 25 年 BP の結果が出ている。あわせて樹種同定も行い、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林を構成するシイ属であることが判明している。

不明遺構（SZ1）を一つの大きな遺構として報告しているが、遺構の成因については、埋納土坑を含む北側の半円形状の遺構と南側の土器集中出土箇所を含む落ち込みの関係を整理しなければならない。北側の半円形状の遺構は、南側に風倒木等による擾乱でプランが判然としない点はあるが、断面観察により、埋没した後幅約 1.5 m ほどの土坑が掘られ、これもまた埋没の後、埋納土坑が構築されたとみられる。埋納土坑については、第 4 節でも触れているが、上方から掘り込まれていたか確認できなかつたため、検出面を床面と考えて、同じレベルで検出された焼土を埋土とした土坑とともに何らかの遺構が

構築された可能性がある。一方、南側の土器を多量に含む落ち込みについては、成因について明快な答えを出せない状況である。土層断面で示しているが、弥生土器を多量に含む褐色土層の堆積をどう説明できるか。灰白色の岩盤層に挟まれるような状態が確認されているので、岩盤層の隙間に流れ込んだのか、あるいは、岩盤層を掘り下げたところで火を使い、土器とともに岩盤層を含んだ土で人為的に埋めたのか検討が必要である。この北側、南側の遺構（落ち込み）については、双方を土層断面により確認することができず、成立に時期差があるのか、同時期に存在したのかが不明である。いずれにしても北側の遺構も南側の落ち込みも焼土や炭化物が見られ、火に関連する何らかの遺構であると想定でき、一つの考え方として祭祀に関連する遺構の可能性がある。馬込遺跡周辺の祭祀関連遺跡は、南の都農町内で調査された俵石第 2 遺跡が報告されている。俵石第 2 遺跡は、水穴による陥没した自然遺構に、土器を一括廃棄した事例で弥生時代終末期の時期に比定されている。報告の中で水（穴）に対する祭祀関連と報告されており、本遺跡の火に関する祭祀を想定するものとは状況が異なるようである。

馬込遺跡周辺では、隣接する岡遺跡や平尾遺跡などから弥生時代の遺構は確認されていない。馬込遺跡で弥生時代終末期の遺構が確認されたことは、祭祀遺構のような非日常的な遺構の可能性を含め、周囲に集落の存在を予想させるものである。

### 註

- ① 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『坂平遺跡（第3・4次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第199集

### 参考文献

- ② 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『尾立第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第169集
- ③ 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『岡遺跡（第6・7次調査）』坂元屋第2遺跡宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第212集
- ④ 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『向原中尾・1・2遺跡 向原中尾第4遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第213集
- ⑤ 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『俵石第1・2遺跡（第2・3次調査）』俵石第2・3遺跡 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第216集
- ⑥ 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『岡遺跡（第9・13・15次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第223集
- ⑦ 上田秀夫 1982『14～16世紀の有磁機の分類』『質基陶器研究』No.2
- ⑧ 日向市史編纂委員会 2010『日向市 史編』

# 第IV章 東九州自動車道建設に伴う調査成果

## 1 東九州自動車道建設に伴う発掘調査

東九州自動車道は、北九州市を起点とし大分・宮崎・鹿児島県の各県を結び、鹿児島市に至る全長436kmの高速自動車国道である。そのうち宮崎県部分の大分県境～清武間までの136kmの発掘調査を西日本高速道路株式会社九州支社（旧日本道路公団）・国土交通省延岡河川国道事務所の委託を受けて県・県教育委員会・県埋蔵文化財センターが行った。

西都～清武間（26.9km、33遺跡）の調査は平成7～10年度、都農～西都間（25.0km、79遺跡）は11～21年度、門川～日向間（13.9km、7遺跡）は17～21年度、県境～北川間（16.5km、15遺跡）は19～21年度、日向～都農間（20.0km、32遺跡）は20～24年度に行い、25年3月末の馬込遺跡第2地点（日向市）ですべての調査が終了した。発掘調査終了後の整理作業及び報告書作成は西都～清武間が11～13年度に29遺跡18冊、都農～西都間は15～22年度に59遺跡66冊、門川～日向間は18～23年度に5遺跡4冊、県境～北川間は18～22年度に7遺跡3冊を刊行した。日向～都農間は22年度から着手し、25年度の5遺跡2冊を含めて14遺跡12冊を刊行し、東九州自動車道（大分県境～清武間）建設に伴う遺跡の記録保存の措置はすべて終了する。なお平成13年3月に西都～清武間が、22年7月に高鍋～西都間、22年12月に門川～日向間の供用が開始され、日向～都農間の26年3月16日の開通で大分県境～清武間が全線開通し、北九州市～宮崎市までは26年度中には全線開通予定である。

昭和55～61年度の23遺跡約40万m<sup>2</sup>の宮崎学園都市の発掘調査の成果を踏まえて、それを遙かに超える166遺跡180万m<sup>2</sup>規模である東九州自動車道（大分県境～清武間）の発掘調査体制を県・県教育委員会は整備し、西都～清武間に着手する平成7年度には文化課埋蔵文化財第二係東九州班9人体制で着手し、埋蔵文化財センターとして総合博物館から分離独立する8年度には調査第一課25人体制、都農～西都間に着手する11年度に宮崎市佐土原町下那珂に新館を建設し、12年度に調査第一課41人体制（職員35人・非常勤6人）、ピーク時の14年度は53人体制（職員41

人・非常勤12人）、25年度は9人体制である。なお高速道路対策局併任職員が8年度から導入、任期付職員は16年度から採用され、19年度は最大19人であった。

平成12年度から旧石器時代 小畑弘己教授（熊本大学）、縄文時代 泉拓良教授（京都大学）、本田道輝教授（鹿児島大学）、弥生時代 田崎博之教授（愛媛大学）、古墳時代 広瀬和雄教授（国立歴史民俗博物館）・柳澤一男教授（宮崎大学）で構成された東九州自動車道調査指導委員会が設置され、調査・遺構・遺物についての指導・助言を得ながら調査を進めると共に、助言であった「調査マニュアル」作成・「土層の共通略称」の導入を行った。また14年度には都農～西都間の調査の指針として『発掘調査・整理作業基本マニュアル』を策定し、19年度に『基本編』として改訂し、20年度には『整理作業～報告書作成編』を作成した。また都農～西都間では14年度から同時に10箇箇所の調査を行うために、土層を遺跡間で比較する場合の「ものさし」として、基本的に認められるテフラ（火山灰層）やローム層、黒色土帯について共通の略称を用いることとし、ローム層の場合は上から「ML1」・「ML2」・AT・「ML3」・「ML4」、黒色土帯の場合は上から「MB1」・AT・「MB2」・「MB3」とした。頭に冠する「M」は「宮崎平野」を意味する。テフラは上位からKr-Th（高原スコリア）、K-Ah（鬼界アカホヤ）、Sz-S（桜島薩摩）、Kr-Kb（小林軽石）、AT（姶良Tn）、A-Fm（姶良深港）、A-Ot（姶良大塚）、Kr-Aw（霧島アワオコシ）、Kr-Iw（霧島イワオコシ）、A-Iw（姶良岩戸）、Aso-4（阿蘇4）などの火山灰を鍵層とした（『概報III』2003）。なお旧石器時代の遺跡は遺構・遺物の分布の密度が低く、確認調査でも包含層の有無・密度のデーターが必ずしも正確に得られない場合も予想されるため10m間隔のグリッドの1/4を掘り下げ確認を行い（「25%調査」と称する）、ある層で遺構・遺物が確認された場合は100%（全面）調査に移行した。また熊本大学甲元眞之教授の指導で13年度から導入されたフローテーション法を調査工程の中に位置づけることによつ

て遺構埋土の炭化種種・鉄片等の微細遺物が回収され、当時の食料事情・鉄生産などが明らかになったが、試料採取位置・記録方法・コンタミ等の課題もある（藤本2008）。また放射性炭素年代測定・火山灰分析・樹種同定等の自然科学分析によって遺構の年代や遺跡周辺の植生が明らかになった。

## 2 東九州自動車道の調査成果

ここでは調査成果の概要を後期旧石器時代から近世までを時代順に代表的な遺跡で述べることにする。なおそれぞれの遺跡の内容等については調査成果一覧表（第23表）と報告書刊行一覧（第24表）を参考にされたい。

### ①後期旧石器時代

AT下位の石器群は36遺跡で、AT上位の石器群は79遺跡で出土し、特に都農～西都間の58遺跡のうち50遺跡という多くの遺跡でATの上下で疊群が検出され、ナイフ形石器・角錐状石器・剥片尖頭器・細石刃核などの石器群が出土した。ここではAT下位、AT上位、細石刃期に分けて述べる。

なお宮崎県旧石器文化談話会の「宮崎県下の旧石器遺跡概観」2005では基本層序と石器群の出土層位によってAT下位を3段階（第1～3段階）、AT上位を4段階（第4～7段階）、細石刃石器群を3段階（第8～10段階）に分けた「宮崎10段階編年」である（以下「宮崎第○段階」と略す）。東九州道調査の基本層序との対応は、第1段階（ML3～MB3下部 台形様石器・石斧・鋸歯縁加工石器）、第2段階（MB3～MB2 台形様石器・二側縁加工ナイフ形石器）、第3段階（MB2 縦長剥片を素材とする二側縁加工ナイフ形石器・厚手の縦長剥片を素材とするスクレイバー）、第4段階（ML2下部 二側縁加工ナイフ形石器・縦長剥片を素材とするエンドスクレイバー）、第5段階（ML2上部～MB1下部 狩谷型ナイフ形石器・瀬戸内技法・剥片尖頭器・角錐状石器・円形の大型スクレイバー）、第6段階（MB1中部～下部 今岬型ナイフ形石器・北牛牧型ナイフ形石器・縦長剥片を素材とする基部及び部分加工のナイフ形石器・台形石器）、第7段階（MB1上部～ML1下部 小型の縦長剥片を素材とするナイフ形石器）、第8～10段階（ML1～MB0）である。第8段階は円錐形の細石刃核・黒曜石の小種を素

材とし、打面調整を施す細石刃核、第9段階が船野型・畦原型細石刃核、第10段階は西海技法の影響を受け、扁平な船野型・畦原型細石刃核を特徴とする。東九州道調査の遺跡では第1段階としては音明寺第2遺跡第I文化層、第3段階としては東畦原第3遺跡第II文化層・音明寺第2遺跡第II文化層・北牛牧第5遺跡第I文化層、第5段階としては小並第1・東畦原第3・長蔭原・木脇遺跡、第6段階としては北牛牧第5・音明寺第2・上ノ迫遺跡、第7段階としては野首第2遺跡、第8段階としては上ノ原遺跡、第9段階は下星野遺跡、第10段階は塚原遺跡をあげている。

### AT下位

AT下位の石器群については日向市板平・岡遺跡の2遺跡、日向市東郷町向原中尾第4遺跡（MB2、疊群1基）の1遺跡、都農町舟川第2（MB2、4基）・俵石第2（MB3・2、2基）・俵石第1（ML3～MB2、4基）・尾立第2（ML3～MB2、1基）・立野第5遺跡（MB2、4基）の5遺跡、川南町銀座第2（MB2、1基）・登り口第1（MB2）・市納上第2（MB2、1基掘り込み）・赤天神本（MB2）・中ノ迫第1（MB3・2、8基）・中ノ迫第2（MB3・2）・中ノ迫第3（MB3・2、1基）・国光原（MB3）遺跡の8遺跡、高鍋町野首第2（MB3・2、78基）・北牛牧第5（MB2）・唐木戸第3（ML3～MB2）・小並第1（MB2、4基）・牧内第1（ML3～MB2、1基）・牧内第2（MB2）遺跡の6遺跡、新富町音明寺第2（ML3・MB2、15基）・東畦原第1（MB3・2、43基）・東畦原第2（MB3・2、16基）・東畦原第3（ML3・MB2、4基）・西畦原第1（MB2、1基）・西畦原第2（MB3・2、5基）・上新開（ML3～MB2、3基）・勘大寺（ML3～MB2、13基）・永平田第1（MB2、3基）・永平田第2（MB3・2、8基）・尾小原（MB2、5基）・向原第1遺跡（MB2）の12遺跡、西都市別府原遺跡（MB2、5基）の1遺跡、宮崎市上ノ原遺跡（MB2）の1遺跡であり、AT直下のMB2を中心的に都農・川南・三財原面・新田原面（高鍋・新富）の台地上に遺跡が特に展開している。以上のように門川～日向間1遺跡、日向～都農間5遺跡、都農～西都間28遺跡、西都～清武間2遺跡の計36遺跡である。

県内の最古の石器群としては川南町後半田遺跡第V文化層で霧島イワオコシ層（約4～4.5万年前）直下のローム層から出土した石器群があるが、石器かどうかで見解が分かれている。疊群は後半田遺跡第

Ⅲ文化層で霧島アワオコシ火山灰（約38,000年前）の下位から4基検出されている（後半田遺跡調査団2002）。一方、東九州道調査のAT下位の最古の旧石器としては音明寺第1遺跡（新富町）の第I文化層下（霧島アワオコシ・霧島イワオコシの下位、ML4・5）の7点については「自然礫」と「礫器と敲石」で見解が分かれしており、確実なのは東畦原第3遺跡（新富町）の霧島アワオコシ上位のML3で礫群1基、石核・剥片が、この遺跡以外はその上位のMB3で東畦原第2遺跡など7遺跡で礫群・石器が確認されている。なお東九州道調査では霧島アワオコシ・イワオコシの下位では旧石器は出土していない。

特に野首第2遺跡（高鍋町）ではATの下位の3枚と上位の4枚の計7つの文化層が確認され、剥片尖頭器以外の各種のナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核等が多数出土し、旧石器の編年を行う上では標識的な遺跡である。礫群が300基も検出されており、県内最大規模の遺跡であり、全国的にも有数である。第I期はMB3下部で宮崎10段階編年の第1段階に相当し、剥片・石核類が少量出土した。第II期はMB3上部～MB2下部の二側縁加工ナイフ形石器・台形石器の石器群で第2段階である。第III期はAT直下のMB2上部で石刀・縦長剥片の二側縁加工ナイフ形石器と不定形剥片素材の一側縁加工ナイフ形石器を主体とする石器群で、局部磨製石斧も出土しており、第3段階である。AT上位のMB1下部の第IV期は二側縁加工ナイフ形石器（狸谷型ナイフ形石器）を主体とする石器群で剥片尖頭器を共伴しない事例で、第4段階と第5段階の間、もしくは第5段階前半に位置付けられている。MB1中部の第V期は瀬戸内系石器群と大型の角錐状石器で構成され、第5～6段階である。横長の剥片を取る瀬戸内技法によって作られた国府型ナイフ形石器の石材は五ヶ瀬川流域の流紋岩である。MB1上部～Kr-Kb層中部の第VI期は終末期のナイフ形石器・台形石器で構成され、第7段階である。Kr-Kb層上部～ML1下部の第VII期は細石刃石器群で、①野岳・休場型、②船野型・畦原型と様々な細石刃核が出土し、①が第8段階、②が第9段階である。礫群の変遷は、AT下位は第I期7基、第II期32基、第III期22基の合計61基、AT上位は第IV期47基、第V期160基、第VI期6基、

第VII期1基の合計214基で、AT上位のMB1中部の時期（第V期）が最盛期である。礫群は礫が稠密な分布するI類と疎らな分布をするII類に分けられ、AT下位は第II期にI類がわずか4基あるのみでII類が主体であるのに対してAT上位の第IV期にはI類が目立ち始めるが、最盛期のV期にはI類が乏しくなる。放射性炭素年代法によれば霧島アワオコシ上位でAT下位のMB3上部の37号礫群は $28,010 \pm 220$ BP（以下「年BP」はAMS法放射性炭素年代測定法による）、AT直上の27号礫群は $22,370 \pm 120$ BPである。なおML3とアワオコシの下位からは石器は出土していない。

AT下位の礫群は礫の密集度も低く、散漫で掘り込みを持たないのに対して、上位は密集度も高く、掘り込みを持ち、石器が混在する傾向がある（『概報III』2003）。東畦原第1遺跡（新富町）ではMB3（27基）が礫が散漫であるのに対してMB2（16基）では密集するものもある。

ナウマン象の解体・木材の伐採斧と考えられているAT下位（霧島アワオコシの上位）の局部磨製石斧は都農町尾立第2（MB3）・俵石第2遺跡（MB3～MB2）、川南町中ノ迫第3遺跡（MB3）、野首第2遺跡（MB2）などで出土し、注目されている。特に局部磨製石斧と密接な関係が想定されている環状ブロック群が立野第5遺跡（都農町）のVII層（MB2）で検出され、直径約20mの範囲に9つの石器ブロックが環状に東西に分かれて分布し、北部と南部に二箇所の出入り口が想定され、外にも1ブロック接続するが、局部磨製石斧は出土していない。なお東畦原第3遺跡（新富町）でもAT下位のMB3で直径18mの範囲に8つの石器ブロックが環状に巡っており環状ブロック群として再評価され、宮崎第1段階に相当する。なお県内における局部磨製石斧の出土状況と環状ブロック群との時期差については、関東地方とは異なった生業・行動・集團関係の可能性も指摘されている（日高2009）。

俵石第1遺跡（都農町）ではAT下位のI期（ML3相当・宮崎第1段階）では剥片が、II期（MB3～MB2・第3段階）では礫群4基・縦長剥片素材の小形のナイフ形石器・削器・搔器と共に水晶製ナイフ形石器・二次加工剥片・剥片が出土した。AT下位の水晶製石

器の出土例は県内では延岡市北方町矢野原遺跡（県1995）以外には日向市東郷町向原中尾第4遺跡（I期、礫群1基・剥片）・高鍋町北牛牧第5遺跡（MB2、石核・剥片）のみであり注目される。

なお尾立第2遺跡（都農町）のIX層中の姶良深港火山灰と姶良大塚火山灰は調査中肉眼では判別できなかったが、火山灰分析で同定できるという程都農町以北の調査では困難になり、宮崎平野部の基本層序にそぐわない点が明らかになった。

#### AT上位

AT上位の石器群は、大分県境～北川間は2遺跡、門川～日向間は1遺跡、日向～都農間は13遺跡、都農～西都間は48遺跡、西都～清武間は15遺跡の合計79遺跡から出土し、AT下位の遺跡数より倍増している。

AT上位のMB1下部から出土する剥片尖頭器は塩見城跡（日向市）が東九州道調査では最北端で、舟川第2遺跡（都農町）・前ノ田村上第2遺跡（川南町）・小並第1遺跡（高鍋町）・上ノ原遺跡（佐土原町）など日向市1遺跡、東郷町2遺跡、都農町7遺跡、川南町4遺跡、高鍋町6遺跡、新富町2遺跡、佐土原町3遺跡、国富町1遺跡の合計26遺跡で出土している。野首第2遺跡（高鍋町）では全く出土していない。舟川第2遺跡では日本最長の剥片尖頭器が出土している。剥片尖頭器は宮崎第5段階で、存在が目立つ大淀川～一つ瀬川流域、目立たない一つ瀬川流域～小丸川流域と指摘され（宮崎県旧石器文化講話会2005）、小丸川以北は目立つ。前ノ田村上第2遺跡では1期（VIIa層・ML2）は礫群15基と剥片尖頭器24・縦長剥片の石器群（宮崎第5段階）、2期（IV～V層・MB1）は礫群25基と角錐状石器18・瀬戸内技法の石器群（第6段階）に分層でき、ML2の剥片尖頭器がMB1より大形で基部の抉りが明瞭という変遷が明らかになった。

AT上位のMB1上部～中部・Kr-Kb中部～下部から出土する角錐状石器は東九州道調査では池ノ下遺跡（日向市）が最北端で、俵石第1遺跡（都農町）・中ノ迫第2遺跡（川南町31）・牧内第1遺跡（高鍋町）・下屋敷遺跡（佐土原町）など日向市1遺跡、東郷町2遺跡、都農町8遺跡、川南町10遺跡、高鍋町7遺跡、新富町11遺跡、西都市2遺跡、佐土原町3遺跡、国富町2遺跡の合計46遺跡で出土している。

都農～西都間は西都～清武間の遺跡群と比較した場合、角錐状石器の出土点数が多く、逆に剥片尖頭器は少ない（「概報III」2003）。勘大寺遺跡二次調査では161点も出土しているのに対して、剥片尖頭器は1点のみである。

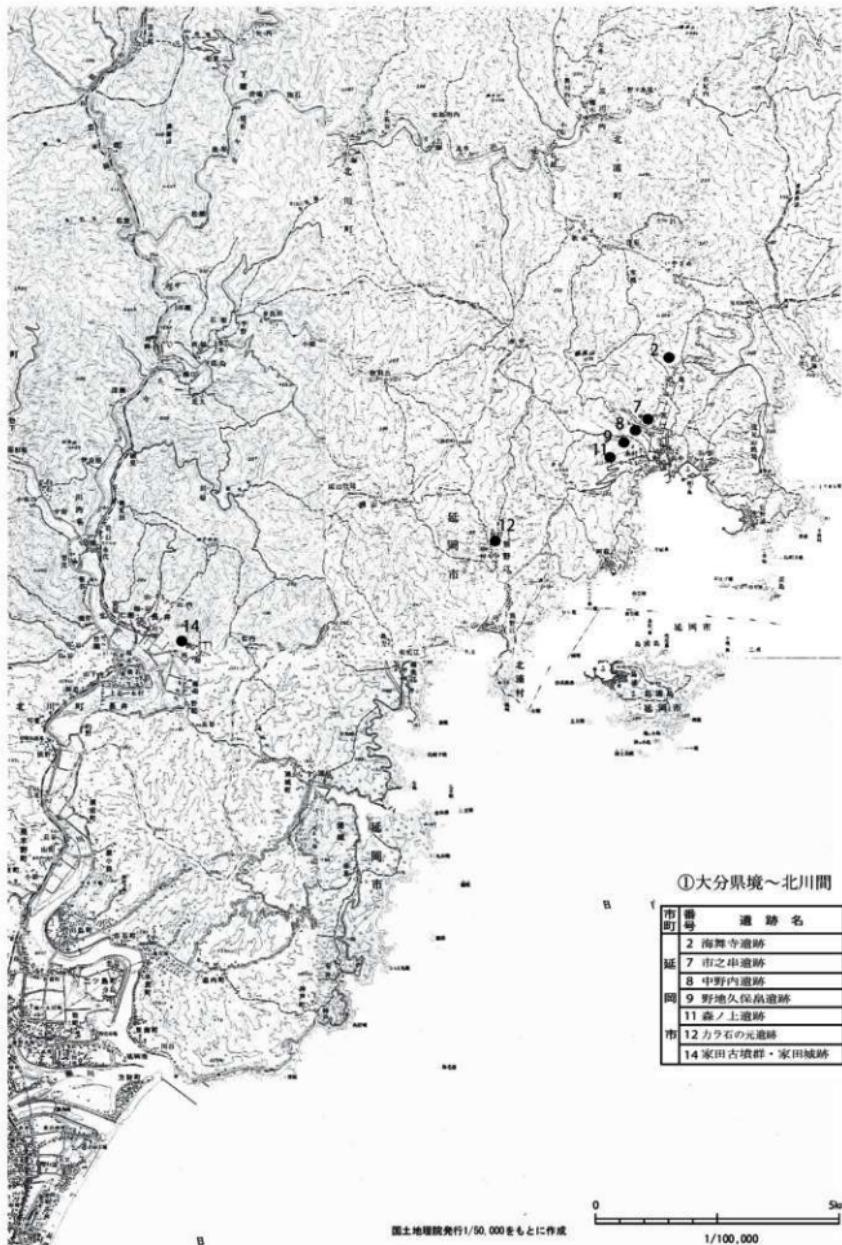
横長の剥片をとる瀬戸内技法によって作られた國府型ナイフ形石器は舟川第2遺跡（都農町）・中ノ迫第1遺跡（川南町）・野首第2遺跡（高鍋町）・東畦原第1遺跡（新富町）・下屋敷遺跡（佐土原町）など多くの遺跡で出土しており、石材は五ヶ瀬川流域産の流紋岩を主体に利用している。秋成雅博氏の集成によれば県内では76遺跡で出土しており（秋成2013）、東九州道調査では都農町7遺跡、川南町9遺跡、高鍋町9遺跡、新富町9遺跡、宮崎市佐土原町5遺跡、宮崎市1遺跡、国富町1遺跡の合計41遺跡で半数を占めている。國府型ナイフ形石器・翼状剥片・盤状石核・接合資料という瀬戸内技法の第1工程から第3工程まですべて揃っているのは中ノ迫第1・野首第2遺跡など8遺跡にとどまる。中ノ迫第1遺跡の石材の8割は流紋岩である。

俵石第1遺跡（都農町）はAT上位のⅢ期（ML2相当・宮崎第5段階）は礫群9基・ナイフ形石器・台形石器・角錐状石器・剥片尖頭器が、Ⅳ期（ML1下部相当

第6・7段階）は礫群7基・ナイフ形石器（北牛牧型・今岬型・國府型・片島型）・台形石器・剥片尖頭器が、V期（ML1上部相当・第9・10段階）は野岳・休場型・畦原型細石刃核が確認された。なお舟川第2遺跡（都農町）のV a層で縦長剥片素材を用いた二側縁加工のナイフ形石器から細石刃石器群までの幅広い時期の石器が出土しているように、俵石第1遺跡より以北になるとAT上位のKr-Kbが上下に散在して確認されるために、單一層として判断は困難である。

#### 細石刃期

細石刃石器群は、日向～都農間は6遺跡、都農～西都間は37遺跡、西都～清武間は11遺跡の合計54遺跡から出土している。野岳型・船野型が尾立第2・尾花A・別府原遺跡、野岳型・船野型・畦原型は野首第2遺跡、船野型・畦原型は前ノ田村上第2・小並第1・長歯原・塚原遺跡などで出土しており、層位的にはMB1～MB0に相当するが、野首第2遺跡にみられる



第77図 東九州自動車道（県境～北川間）関連遺跡位置図

ように包含層が薄いために層位的に調査するのは困難であった。しかし長薗原遺跡では石器ブロックとして大型の畦原型と船野二型が共存していることから、同時期として理解されると共に船野型の拡散にともなう地域石材適応と評価されている（宮田2010）。

舟川第2遺跡（都農町）では宮崎第8段階の野岳・休場型細石刃核、第9段階の船野型細石刃核、第10段階の泉福寺・羽佐島III型細石刃核など3時期の細石刃石器群が出土し注目される。また県内初の姫島産安山岩製の船野型細石刃核も出土している。

永牟田第2遺跡（新富町）では黒曜石製の野岳型・船野型細石刃核が出土しているのに対して、小並第1遺跡（高鍋町）では砂岩を利用した畦原型細石刃核が層位的に出土している。なお畦原型細石刃核の畦原は新富町の東畦原・西畦原の地名に由来するが、天地返し等の耕作の影響のためか東九州道調査では新富町内で出土しなかった。耳川流域を北限として俵石第1（都農町）・前ノ田村上第2遺跡（川南町）などで、長薗原遺跡では9点も出土している。

唐木戸第4遺跡（高鍋町）では桑ノ木津留産（熊本・鹿児島県・宮崎県境）が63%と主体であり、日東産（鹿児島県大口市）が28%、腰岳産（佐賀県伊万里市）が5%と九州各地の黒曜石が利用されている。宮崎平野部においては黒曜石製石器群の中では桑ノ木津留産製細石刃核が主体であり、野岳型はほぼ黒曜石製であるが、船野型は黒曜石以外の石材も利用している（芝2011）。なお尾立第2遺跡出土の黒曜石を蛍光X線分析した結果、桑ノ木津留産・日東産・上牛鼻産以外はデーターベースにない産地のもので、尾立第20X群として仮称されたが、いわゆる「霧島山産」黒曜石（坂田1982）に相当すると考えられ、菱刈系として設定されている（長井2010）。俵石第1・勘大寺・下屋敷遺跡でも確認されている（岸田2011）。

火山灰は高原スコリアが高鍋町域まで、松島薩摩火山灰が都農町域まで、小林軽石が都農町域まで、ATは日向市域まで、姶良深港・姶良大塚は都農町域まで、霧島アワオコシは川南町域まで、霧島イワオコシは都農町域まで確認されているが、都農町域から北は肉眼で明瞭に確認できるのはK-AhとATのみであったために旧石器の調査の際に「土層の共通の略称」

が適応しなくなった。

石材分類については、双眼実体顕微鏡を用い、原則として水に濡らして行った堆積岩類・火碎岩類・火成岩類・变成岩類の「石器石材分類表」と、流紋岩系は色・表面の模様・手ざわりなどでa～gの7分類した宍戸章氏作成に加筆した「石器石材分類表（流紋岩系）1999.9.20」がある（『木脇遺跡』2001所収）。流紋岩系は松田清孝によってI（a類）、II（d・f類）、III（g類）、IV（b・c類）、V（e類）に再分類された「石器石材分類表（流紋岩系）2000.9.8）がある（『東畦原第2遺跡』2005所収）。この石器石材分類表をベースに『野首第2遺跡』2007のように各遺跡の担当者が肉眼観察、手触り、双眼実体顕微鏡を使って黒曜石・安山岩・ホルンフェルス・頁岩・砂岩・チャートなどを細分している。なお尾鈴山酸性岩類については24年度の報告書から尾鈴山溶結凝灰岩として表記している。

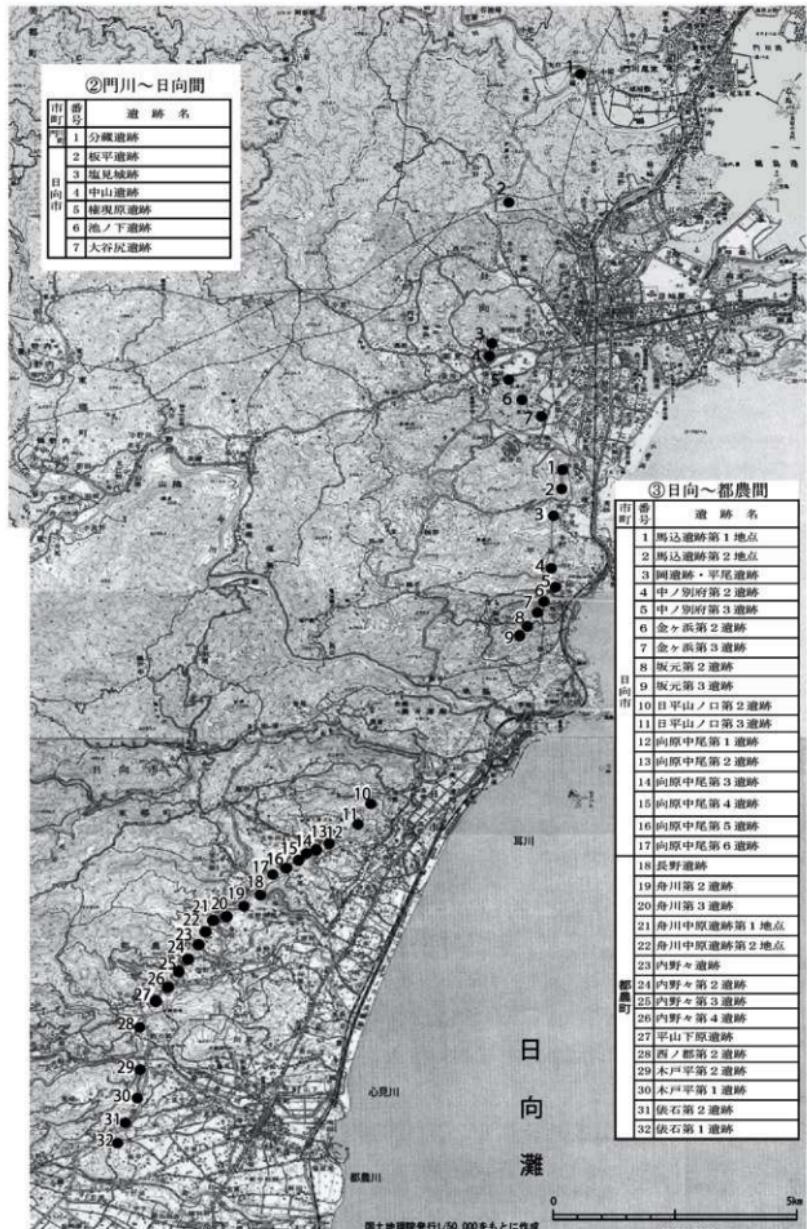
以上のように旧石器の時期を決める火山灰の存在と面的に調査した結果、宮崎県内の旧石器の編年指標になるばかりでなく、旧石器時代の標準的な編年とされている武藏野台地の編年と並んでその成果は全国的にも注目されている。

## ②縄文時代

都農～西都間では草創期が18遺跡に対して、早期になると55遺跡と増加するが、鬼界アカホヤ火山灰降灰後の前期になると7遺跡と激減し、中期が6遺跡、後期が11遺跡、晩期が12遺跡と変動する。日向～都農間でも早期16遺跡に対して前期2遺跡、中期1遺跡、後期1遺跡、晩期2遺跡と推移する。

### 草創期

草創期の隆帶文土器・爪形文土器は赤石天神本・国光原・尾花A遺跡（川南町）、崩戸遺跡（高鍋町）、塚原遺跡（国富町）などで出土している。尾花A遺跡の竪穴状造構は長径2.6m、短径2.2mの規模の楕円形プランで、蔽石・台石と共に貝殻や爪先による刺突を施す隆帶文土器が出土した。県内では上猪ノ原遺跡（清武町2009）の竪穴建物跡14軒のみで注目される。塚原遺跡出土の隆帶文土器は内面に赤色顔料（ベンガラ）を塗っており、非実用的な土器である可能性が高く、上猪ノ原遺跡の土器にも赤色



第78図 東九州自動車道（門川～都農間）関連遺跡位置図

顔料がみられる。塚原遺跡の隆帯文土器付着物から $11,850 \pm 60$ 年BPと $11,750 \pm 60$ 年BPの年代が得られている（遠部2008）。塚原遺跡では丸ノミ形石斧の未製品が2点平行に並んだ状態で出土しており、土坑は確認できなかったが、埋納の可能性がある。

朝草原遺跡（都農町）で極めて薄手で胎土が堅緻な無文土器が出土し、尖底から二日市洞穴第5～4文化層に、直口する口縁部形態から柏原遺跡F地点II層に相当し草創期末に比定されたが、その後の集成（『平山下原遺跡』2011）によれば39遺跡中半数の18遺跡が東九州道の調査で、川原田式直前の陽弓式段階の野首第2遺跡、陽弓式の下層に別府原式が出土する立野第2遺跡など早期前葉を中心としている。

崩戸遺跡では、隆起線文土器段階で細石刃（桑ノ木浦留産黒曜石）・流紋岩製尖頭器が出土している。なお向原中尾第4遺跡（都農町）のチャート製柳型又型有舌尖頭器と北牛牧第5遺跡の有舌尖頭器については草創期土器は出土していない。

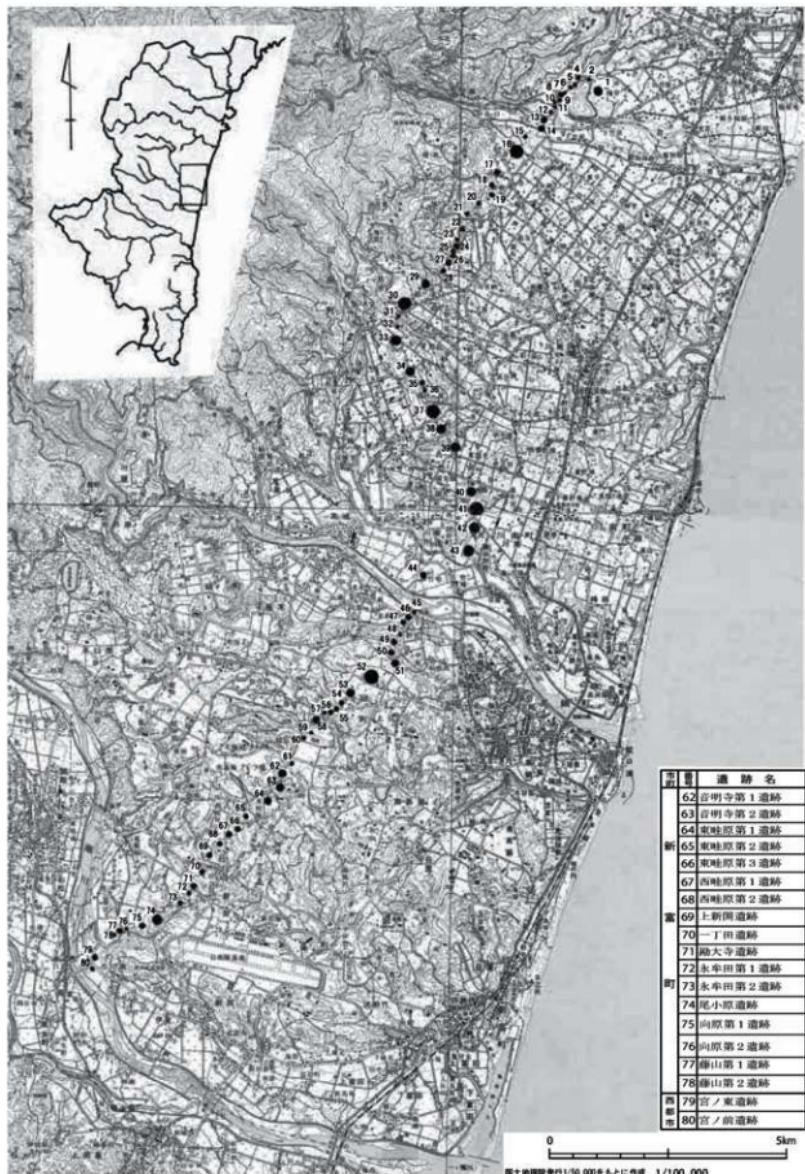
白ヶ野第2・3遺跡（宮崎市）のIXa～IXb層で細石刃核（野岳・船野型）・細石刃と共にシルト岩製神子柴型石斧が出土しており、接合関係から当遺跡で製作している。また唐木戸第3遺跡（高鍋町）からもホルンフェルス製神子柴系石斧が出土している。これら九州出土の神子柴型石斧の位置づけについて慎重にならざるをえない（福田2000・宮田2010）。

### 早期

早期になると県内の遺跡の数は増大し、東九州道調査でも同様に延岡市森ノ上遺跡（168基・貝殻文主体）、日向市板平（36基・貝殻文）・馬込遺跡（40基）、都農町舟川第2（33基・無文）・尾立第2遺跡（52基）、川南町市納上第2（32基・貝殻文）・中ノ迫第2（37基・押型文）・中ノ迫第3（32基・貝殻文）・国光原（63基）・尾花A遺跡（243基・押型文）、高鍋町野首第1（34基・押型文）・野首第2（206基・押型文）・老瀬坂上第3（34基・貝殻文）・下耳切第3遺跡（32基）、新富町尾小原（65基・押型文）・藤山第1遺跡（42基）、佐土原町別府原遺跡（48基・押型文）、国富町松元（44基・貝殻文）・木脇遺跡（83基・貝殻文）、清武町白ヶ野第2・3遺跡（90基・押型文）など集石遺構が30基前後ずつ検出されている。

その中で突出しているのは小丸川を挟んで左岸の早期前葉～中葉の押型文土器（沈目式主体、田村・ヤトコロ式併行）を主体とする尾花A遺跡は243基、右岸の押型文土器（下菅生B式・田村式）を主体とする野首第2遺跡では206基も検出されており、県内最大級の規模である。尾花A遺跡の集石遺構の19基は $9,400 \sim 8,760$ 年BP（4基）、 $8,480 \sim 8,115$ 年BP（9基）、 $7,815 \sim 7,530$ 年BP（5基）に分かれ、8,300年代BPを中心とする。集石遺構の構成礫の石材は砂岩が主体である。炉穴は11基と非常に少なく、9基は丘陵南端部の集石遺構密集地ではなく、集石遺構の少ない北端部に分布している。一方、集石遺構206基に対して炉穴203基とほぼ拮抗している野首第2遺跡の集石遺構は $9,160$ 年BP（1基）、 $8,430 \sim 8,210$ 年BP（15基）、 $8,120$ 年BP（1基）の3群に分かれ、8,300年代BPが中心であり、炉穴も $8,390 \sim 8,250$ 年BP（6基）、 $8,110$ 年BP（1基）の2群で8,300年代BPを中心とするので、集石遺構が早く形成されるが、両者とも最盛期は同時期である。集石遺構の密度が低い場所に炉穴が分布している。なお滑川第1遺跡（清武町2006）では集石遺構を放射性炭素年代で①ボオル状の大型の掘り込みを持つタイプ（ $9,350$ 年BP頃）、②掘り込みを持つタイプ（ $8,500 \sim 8,200$ 年BP）、③礫が平面形（円形）に集中するタイプ（ $7,500$ 年BP頃）、④円形の掘り込みを持ち礫がギッシリ詰まった小型の集石遺構（ $6,800$ 年BP）に分類され、野首第2遺跡では②が、尾花A遺跡では①・②・③が追認されたが、野首第2遺跡では①→②については検証されなかつた。尾立第2遺跡では②・③が、向原中尾第2遺跡は②、板平遺跡は②が追認された。なお岡遺跡の第9次調査区S15や立野第5遺跡のS11は放射性炭素年代では草創期の集石遺構の可能性がある。

集石遺構の構成礫については森ノ上遺跡が千枚岩、板平遺跡が砂岩、岡遺跡から前ノ田村上第2遺跡まで尾鈴山酸性岩類を主体とし、国光原遺跡で尾鈴山酸性岩類が半数になり、小丸川左岸の西ノ別府遺跡・尾花A遺跡は砂岩が主体、小丸川右岸から南は尾鈴山酸性岩類・砂岩・ホルンフェルスで構成され、清武川周辺になると白ヶ野第2・3遺跡は98%が清武川の河岸段丘底部の第三系宮崎層群の細粒砂岩



第79図 東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡位置図

## ④都農～西都間

市町	遺跡名	市町	遺跡名
1	朝倉遺跡	32	大内原遺跡
2	尾立第2遺跡	33	中ノ迫第1遺跡
4	朝草原遺跡	34	中ノ迫第2遺跡
5	尾立第3遺跡	35	中ノ迫第3遺跡
6	尾立第4遺跡	36	中ノ迫第4遺跡
7	尾立第5遺跡	37	前ノ田村上第1遺跡
8	立野第5遺跡	38	前ノ田村上第2遺跡
9	立野第1遺跡	39	赤坂遺跡
10	立野第2遺跡	40	国光原遺跡
11	立野第3遺跡	41	湯平田遺跡
12	立野第4遺跡	42	西ノ別府遺跡
13	八幡第1遺跡	43	尾花A遺跡
14	八幡第2遺跡	44	竹崎遺跡
15	上ノ原・北分遺跡	45	崩戸遺跡
16	銀座第1遺跡	46	野首第1遺跡
17	銀座第2遺跡	47	野首第2遺跡
18	銀座第3A遺跡	48	南中原第1遺跡
19	銀座第3B遺跡	49	南中原第2遺跡
20	豊口第1遺跡	50	老若坂上第3遺跡
21	登り口第2遺跡	51	下耳切第3遺跡
22	山ノ口遺跡	52	北牛牧第5遺跡
23	谷ノ口遺跡	53	唐木戸第1遺跡
24	市納上第1遺跡	54	唐木戸第2遺跡
25	市納上第2遺跡	55	唐木戸第3遺跡
26	市納上第3遺跡	56	唐木戸第4遺跡
27	市納上第4遺跡	57	唐木戸第5遺跡
28	市納上第5遺跡	58	小並第1遺跡
29	虚空蔵免遺跡	59	小並第2遺跡
30	赤石・天神本遺跡	60	牧内第1遺跡
31	天神本第2遺跡	61	牧内第2遺跡

を利用しており、その南の遺跡は砂岩である。藤山第2遺跡は砂岩とホルンフェルスが8~9割占めている。以上のように集石遺構の構成要素は身近に豊富にある遺跡周辺の供給源によると考えられる。

なお集石遺構の記録については唐木戸第4遺跡で問題点を整理し、尾小原遺跡三次調査では検出状況を写真で記録する方法が試験的に行われた。当センターの『発掘調査マニュアル基本編』では検出状況の平面図と配石のみの平面図、断面図は縦・土層の断面を描き、配石のみ断面に見通しを追加している。『応用編』では二方向の断面図と、「見通し図を作成することにより縦の密集度を視覚的に表現することができるが、その場合、実測図作成に時間を要するので、記録方針について調査者は検討しなければならない。」として見通し図については必ずとるかについては基數・残存状況などによって判断している。なお集石遺構は構成要素の属性として石材・重量・赤化度等のデーターを現場段階で記録後は廃棄している

が、旧石器時代の縦群については、全てセンターに持ち帰り、個々の属性を記録している。

早期前半の貝殻文土器を主体とする別府原遺跡（佐土原町）では集石遺構48基に対して炉穴が307基と突出しており、最高所の平坦面に集石遺構が分布し、炉穴は南側斜面を中心に等高線に直交して作られる。古い炉穴の前方に新しい炉穴を構築する例や、軸をずらし交差するように新たな炉穴を構築し、古い炉穴の一部を足場とする例が多く、35基も切り合うものもあった。48号炉穴（8,930±50年BP）からはユリ科のネギ属（ノビルなど）などの鱗茎が出土し、当時の食を復元する上で注目される。63号炉穴（9,460±100年BP）では炉部の手前（足場側）の底面で完形に近い深鉢形土器が潰れた状態で出土したことから、土器を利用した煮沸の可能性もあり、炉穴の機能を考える上で注目される。また早期には数少ない堅穴建物跡が2軒検出され、一辺3.7mと2.9mの方形プランである。打製石器700点、磨石65点に対して、石鍤はわずか8点であるが、早期に特徴的な短軸に打ち欠きを入れるタイプである。

森ノ上遺跡（延岡市北浦町）では炉穴4基に対して集石遺構が168基も検出され、県北では笠下遺跡（延岡市北方町1990）の163基を抜いて最大規模である。集石遺構の構成要素は扁平な千枚岩で、掘り込み全体に配石を花弁状に立て並べ、一見すると花びらの形をしている。この千枚岩は北川層群中にあり、遺跡近辺に豊富にある。早期前葉～末の貝殻文土器（前平式・知覧式・中原式）を主体としており、押型文土器（稻荷山式・早水台式）が客体であり、瘤付無文土器も出土している。黒曜石は姫島産が主体で、淀姫・針尾島と腰岳が少量出土する。石鍤・尖頭器、敲石・磨石が多数出土しているが、石鍤は1点もない。なお中野内遺跡（延岡市北浦町）では集石遺構が1基検出され、9,405±28年BPである。

板平遺跡（日向市）では集石遺構36基・炉穴55基・陥入穴状遺構4基が検出され、早期前半の貝殻文土器（中原II式）を主体とし、早期後半の手向山式・天道ヶ尾式（妙見式）も出土している。集石遺構の構成要素の主体は砂岩であり、供給源は富高川と推定される。燃料材はコナラ類で、炉穴は9,260±30~9,230±



第80図 東九州自動車道（西都～清武間）関連遺跡位置図

1/100,000

## ⑤西都～清武間

市町番号	遺跡名	市町番号	遺跡名
西原市 西原市 西原市	1 砥向遺跡 2 大辻屋敷遺跡 3 小田河原遺跡 4 平田追跡 5 別府原・西ヶ庭遺跡 6 上ノ原遺跡 8 下原敷遺跡 9 梅ヶ島遺跡 10 侍居削遺跡 11 長原原遺跡 12 上ノ迫遺跡 13 上松尾遺跡	宮 崎 市	18 中別府遺跡 19 舟岡第2遺跡 20 町屋敷遺跡 21 北城跡 22 游内遺跡 23 野添遺跡 24 生石村古墳周辺 25 内言田・柳原遺跡 26 本城跡 27 白い野第2・3遺跡 28 上の原第1遺跡 29 横須原2遺跡 30 横須原1遺跡
国 富 町	14 松元遺跡 15 井手口遺跡 16 木脇遺跡 17 球原遺跡		31 杉木原遺跡 32 下星野遺跡 33 永ノ原遺跡

30年BPであるのに対して、集石遺構は9,280±40年BPと8,215±20~8,180±40年BPに分かれ、土器に対応すると考えられる。

野首第2遺跡では礫を充填したピットが環状に巡る「環状ピット群」が3基検出された。1号環状ピット群は中央に1基のピットを中心に径2.3m×2.1mの楕円形に15基のピットが巡る。

陥し穴状遺構は日向市板平遺跡（4基）の1遺跡、川南町銀座第1（4基）・中ノ迫第1（1基）・国光原遺跡（1基）の3遺跡、高鍋町牛牧第5（1基）・唐木戸第1（10基）・唐木戸第2遺跡（2基）の3遺跡、音明寺第1（2基）・東畦原第1（1基）・上新開（1基）・尾小原遺跡（9基）など9遺跡、佐土原町下屋敷遺跡（2基）の1遺跡、清武町上ノ原第1（1基）・杉木原遺跡（1基）の2遺跡など小河川に降りる谷部付近で検出され、旧石器時代末のものもある（『西畦原第2遺跡（二次・三次）』2005）。尾立第2遺跡では谷地形の傾斜に沿うように等間隔で26基の土坑が分布しており、杭痕跡はないが分布状況から「けもの道」に配置された陥し穴状遺構の可能性がある。赤石・天神本遺跡では楕円形プランが長方形プランに切られており、床面に2個の杭痕跡を有し、草創期～早期に比定されている。

ハイヒール土坑と呼ばれる根菜類の採取痕跡の可能性がある土坑群は俵石第1・前ノ田村上第2・牧内第1遺跡などで意識的に調査されている。

早期の土器としては尖底土器（音明寺第1遺跡）、

貝殻文円筒土器（権現原第1・老瀬坂上第3・中ノ迫第1遺跡）、押型文土器（白ヶ野第2・3遺跡）、平椿・塞ノ神式土器（白ヶ野第2・3遺跡）など南九州の貝殻文土器と全国的に普遍的な押型文土器を中心に出土している。木脇遺跡（国富町）の貝殻文円筒土器付着物は9,505±55年BPと9,430±55年BPの年代を得られている（遠部2008）。

平山下原遺跡ではナデ調整の器壁が1cm以下の薄手の尖底無文土器が出土しており、土器の混和剤として繊維を利用している。県内では39遺跡知られているが、特に尾立第2・朝草原・尾花A遺跡など都農町から川南町の遺跡に多く、二日市洞穴第4文化層から第5文化層、陽弓式の段階である。

尾花A遺跡では土坑の中に早期中葉の貝殻条痕文深鉢形土器の口縁部を下にして置いた土器埋設遺構（SC210）が検出され、土器内部の土を水洗選別したところユリ科植物の鱗茎と炭化物が検出され、炭化物は8,150±40年BPである。土器埋設遺構は非日常的な場面での調理が想定されており、当遺跡では同タイプのものが出土していないことからも首肯される。なお早期の土器埋設遺構としては県内最北であり、逆位の事例としては伊勢ヶ谷第1遺跡（都城市2007）に次いで2例目である。

向原中尾第2遺跡（東郷町）は手向山式土器が主体で集石遺構が17基検出され、ホルンフェルス製打製石斧が2点並んで出土し、掘り込みもあることから石斧埋納遺構である。埋納遺構の事例としては土坑に尾鈴山溶結凝灰岩製磨石を3点並べた白ヶ野第2・3遺跡、ホルンフェルス製打製石斧が7点まとまって出土した老瀬坂上第3遺跡などがある。

粗製剥片石器は、川南町藏座村遺跡（県2002）で「蛤形剥片石器」と提唱され、向原中尾第2遺跡（東郷町）・内野々遺跡（都農町）でも出土しており、石材の主体は藏座村遺跡・下那珂遺跡が砂岩・ホルンフェルス製であるの対して、内野々遺跡は尾鈴山溶結凝灰岩・砂岩である。

## 前期～中期

アカホヤ降灰後の前期・中期の遺跡は県内では非常に少なくなる時期で、都農～西都間でも同様に前期は11遺跡・中期8遺跡と激減するが、中期の集落跡で

ある下耳切第3遺跡（高鍋町）は特筆される。

前期の西唐津式土器は野首第1・老瀬坂上第3遺跡（高鍋町）、長薗原遺跡（佐土原町）、白ヶ野第2・3遺跡（宮崎市・清武町）の4遺跡、曾畠式土器（古段階）はカラ石の元遺跡（延岡市）、尾花A遺跡（川南町）、崩戸・野首第1・老瀬坂上第3遺跡（高鍋町）、上ノ原第1・白ヶ野第2・3遺跡（宮崎市・清武町）、権現原第1遺跡（清武町）など8遺跡、曾畠式土器（新段階）は内野々第4遺跡（都農町）、尾花A遺跡、崩戸・野首第1遺跡など5遺跡、轟C・D式土器は野首第1・老瀬坂上第3遺跡、上ノ原第1遺跡など3遺跡で出土している（桑田2013）が、堅穴建物跡等の遺構は検出されていない。なお滑石が混入している土器は尾花A・老瀬坂上第3遺跡のみである。県内では西唐津式土器が15遺跡、曾畠式土器（古段階）が59遺跡、曾畠式土器（新段階）が34遺跡、轟C・D式土器が15遺跡で出土し、曾畠式土器（古段階）の段階に遺跡の増加が見られており、東九州道の遺跡も対応している。

下耳切第3遺跡は堅穴建物跡9軒・平地式建物跡32軒・土坑143基で構成された集落跡で、瀬戸内系土器である船元II・III式及び春日式北手牧段階の時期である。遺構は谷に向かって弧状に分布し、堅穴建物跡・平地式建物跡は東群と西群に二分される。堅穴建物跡は円形プランで、床面の面積は8~14m<sup>2</sup>と23~29m<sup>2</sup>に分かれ。ピットがある一定の間隔で円形や椭円形に巡る平地式建物跡は9~14m<sup>2</sup>で、小型の堅穴建物跡に相当する。SA22・82・83は3軒の切り合いで、SA22は直径約6m、SA82は直径約5.8m、SA83は直径約4.9mと二度建て替えており、面積も最大規模であるので、当集落の中心的な建物である。土坑のうちSC42・43からは多量の炭化したドングリ（イチイガシ）が出土しており、貯蔵穴の可能性がある。イチイガシの3点は4,430~4,380±40年BPである。土器に付着した煤の3点は4,630~4,370±50年BPである。石鍬6点に対して石鍬が326点と卓越しており、重量は10~90gが多く、中心は10~50g前後である。一方、土器片鍬は18点出土しており、伝播論を再考する上で重要である。

#### 後期～晚期

後期になると県内では遺跡の数が増加し、都農～西都間でも後期が11遺跡、晚期12遺跡である。

野首第2遺跡（高鍋町）では後期後葉の堅穴建物跡46軒が調査され、多数の土器・石器と共にヒスイ製玉や石刀・石棒などの「第二の道具」が出土することから拠点的な集落と考えられる。丸尾式段階（第1期）から黒川式段階（第5期）までの5時期に分かれ、中心は三万田式～鳥井原式段階（第3期）である。堅穴建物跡の規模は約3×3m、床面積約9m<sup>2</sup>程度の小規模なものが多く、円形プランで、壁面の立ち上がりが皿状になるものが多い。約5×5m以上、床面積約25m<sup>2</sup>以上の中・大型が一定数存在する。当遺跡ではアカホヤ火山灰の堆積がほとんど見られないこと、堅穴建物跡の埋土にも認められないことから、この「不整合堆積」は後期後葉以前の集落造営の時期に行われた大規模な土木工事の可能性が高い。また丸玉・小玉・鏺節形垂飾などのヒスイ製玉は新潟県糸魚川・青海産と推定され、北陸地方からブランド品（希少性・硬さ・緑色の威信財）として各地域の拠点的な集落を経由しながら搬入されたと推定される。宮崎県域はヒスイ製丸玉の存在やヒスイ製玉の多さから九州では最も敏感に反映していると評価されている（大坪2003）。また底面を持つ三角形おにぎり状の形をした石冠状石製品が出土しており、宮ノ東遺跡（西都市）でも出土した。打欠石鍬は4,612点も出土し、40~90gにピークがある。なお堅穴建物跡は内野々遺跡（都農町）で4軒、赤石・天神本遺跡（川南町）で2軒調査された。

内野々遺跡では後期前半～中葉（丸尾式主体）の堅穴建物跡が4軒調査され、土器表面の圧痕をレプリカ法で転写し、走査型電子顕微鏡で観察した結果、ダイズ属・アズキ亜属などのマメ科のヘソの他にコクゾウムシが確認された。マメ類の栽培を考える上で注目されると共に、打製石斧も4点出土している。SA4出土のイチイガシは3,484±23年BPである。

石鍬は小丸川流域の野首第2遺跡4,612点・野首第1遺跡278点・南中原第1遺跡232点、一つ瀬川流域の宮ノ東遺跡1,866点、市納上第4遺跡185点出土しており、40~70gにピークがある。市納上第2遺跡では打欠96点に対して有溝が30点である。

晩期になると朝鮮半島の系譜が考えられる孔列文土器が岡遺跡（日向市）・尾花A遺跡（川南町）・上ノ原遺跡（宮崎市）などで出土している。孔列文の孔は完全に貫通していないもの（3類）が多く、朝鮮半島から北部九州そして南九州というルート（片岡1998）と、朝鮮半島から直接南九州というルートが想定されている（千2008）。

なお東九州道の各時期の放射性炭素年代の結果は縄文時代の時期区分に対して与えられた放射性炭素年代の範囲内である（辻2013）。

### ③弥生時代

#### 早期

弥生時代における突帯文土器段階の石庖丁として擦切石庖丁が五ヶ瀬川下流域の古川（延岡市）、耳川中流域の峰の前（西郷村）で表採されていた（下條1977）が、清武川下流域の宮崎市前原北遺跡（県1988）、大淀川上流域の黒土1994・肱穴2000・平田遺跡2008（都城市）などの発掘調査で出土し、肱穴遺跡では松菊里型住居の柱穴から出土している。大淀川中流域の木脇遺跡（国富町）のものは擦切途中で終了しており、抉りを有する。坂元A遺跡（都城市2001）で不整形の小区画水田が調査されているが、東九州道では台地上の調査が多いため弥生時代の水田は検出されなかつた。

#### 前期

県内で最北の花弁状住居跡（北浦町1997）が調査された中野内遺跡で4.6m×3.3mの方形プランの堅穴建物跡が1軒検出され、下城式の壺や壺から前期後半～中期初頭の時期に比定される。磨製石鏃の未製品・剥片等の出土から磨製石鏃の製作が行われていた。またほ場整備調査の遺物中に大分方面より搬入された蛇紋岩製扁平片刃石斧がある。土器は内面の指押さえ痕や外側のハケ目調整の点で豊前・豊後地域のものに酷似している。

尾花A遺跡（川南町）では前期から中期前半の堅穴建物跡は検出されていないが、抉り入り片刃石斧が2点、大型蛤刃石斧も2点出土している。

板平遺跡（日向市）での大分県沿岸部を中心とする下城式土器と北部九州地域を代表とする突帯文土器の系譜の「亀ノ甲」タイプという二系統の甕の共存

は、前期末～中期前半の土器の一様相として中野内遺跡でも確認される。

#### 中期

中期後半～後期初頭に集落形成が始まる尾花A遺跡（川南町）では23軒のうち3軒は「花弁状住居」である。この構造は円形プランや方形プランを基調として内側の複数の突出壁によって間仕切りされた空間を複数持ち、上から見ると花びらの形をした堅穴建物跡で、宮崎・鹿児島県を中心として熊本・佐賀・福岡県、愛媛・徳島県などにも分布している。なお最近では西寒水四本柳遺跡（佐賀県みやき町2009）では中期前葉（須玖I式古段階）の径7.2mの円形プランを基調とした典型的な花弁状住居（SH2012）が松菊里型住居と共存して検出されており、南九州の花弁状住居より古い時期であることから朝鮮半島からの系譜も想定されている（中間1987）。しかし、宮崎県南部・鹿児島県では集落の主体を花弁状住居が占めているのに対して、他地域では単独で存在する。

中期後半～後期前半に集落形成が始まる宮ノ東遺跡（西都市）では堅穴建物跡が38軒調査され、在地の中溝式壠と共に瀬戸内系の回線文を有する壺や脚部に矢羽根透かしを有する高壺、大型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧などの大陸系磨製石斧も出土している。これらの瀬戸内系土器の多くは愛媛県松山市を中心とした伊予地域の搬入品で、備讃地域が続き、特に壺・高壺などが多く県内で見つかっている（梅木2004）。東九州道では搬入品は西畠原第1遺跡の回線文壺・宮ノ東遺跡の伊予系高壺・町屋敷遺跡の讃岐系壺などに限られており、多くは模倣・折衷である（河野2011）。舟で瀬戸内海へ日向灘という海のルートで運ばれたと考えられる。なお瀬戸内系土器は花弁状住居からよく出土する。

塙原遺跡（国富町）C区で中期～古墳時代前期の土坑5基・土坑墓2基が検出された。3基の「スロープ付土坑」は段掘りになっていて、スロープ部分は柱を引き込むための施設であり、土坑の中央に木柱を立てると考えると、ムラの入り口や境界に立てて集落の境を守る役割を果たす「大柱遺構」の可能性がある（東2009）。そのうちの5号土坑からは「鳥」や「家」などを表現した軽石製品が出土しており、

「鳥」形軽石製品は弥生時代の鳥形木製品に、「家」形軽石製品は縄文時代から系譜の追える陰陽石に類するものと考えられている。これらは県内初の事例である。

#### 後期

後期後半になると小丸川以北の台地上に集落が増え、都農町向原中尾第2（8軒中5軒焼失）・木戸平第2遺跡（5軒中4軒）・川南町八幡第2（9軒中5軒）・赤坂（23軒中8軒）・湯牟田（21軒中11軒）・尾花A遺跡（246軒中111軒）などで多数の「焼失住居」が検出されている。焼失住居とは竪穴建物が火事になったために柱や屋根などの建築部材が炭化して良好に残るもので、焼土なども検出される。焼失の原因としては『魏志倭人伝』の「倭国大乱」などの戦乱、失火、「忌避的放火」、「焼却廃棄」、アイヌ民族の「家焼き・家送り風習」等が考えられている。湯牟田遺跡では焼失住居の床面からは完形の土器ではなく小片が多数出土している状況からすると戦乱・失火による「焼けた家」ではなく、集落間の移動などの何らかの理由による片付けとして「住居の焼却廃棄」した「焼いた家」と考えられる。また炭化材の上の焼土の存在から「草葺き」ではなく「土葺き」という「土屋根」が推定される。焼失住居の炭化材を自然科学分析することによって、上屋構造の復元、放射性炭素年代測定法による絶対年代、樹種同定による周辺環境の復元・自然環境の利用状況などの多くの情報が得られた。

尾花A遺跡では中期末～古墳時代前期の246軒中111軒45.1%が焼失住居である。I期（中期末～後期初頭 23軒中1軒4.3%）・空白期・II期（後期後葉

8軒中5軒 62.5%）・III期（庄内1式 10軒中6軒60%）・IV期（庄内2式 22軒中12軒 54.5%）・V期（布留1～2式 71軒中37軒 52.1%）・VI期（布留2～3式 51軒中28軒 54.9%）・VII期（布留4式以降 22軒中8軒36.4%）と変遷し、後期前葉の空白期を挟んで集落の最盛期は弥生時代末～古墳時代前期（III～VI期）であるが、その前段階である後期後葉（II期）から半数以上が焼失し、最盛期の古墳時代前期も同様である。焼失住居の炭化材はクリ・コナラなどの広葉樹、シイ・アカガシなどの照葉樹林が多

く、試料総数204点のうちブナ科が122点60%と多い。ブナ科はクリやコナラ・シイなどのドングリがとれる木である。ほとんどが常緑の中高木で、比較的大きな木材がとれ、遺跡周辺で採取可能な樹種である。

中期後半～古墳時代初頭の集落跡である向原第1遺跡（新富町）では方形プランの竪穴建物6軒・土坑10基が調査され、うち2軒が焼失住居である。SA1は方形プランの焼失住居で、鉄鑓・三角形鉄片・棒状鉄片が出土していることから鉄器を製作した可能性がある。フローテーション法の結果、イネ・ドングリの種子等が出土している。イネがSA1から423点、SA3から119点も採取されたが、石庖丁は出土していない。SA3の炭化米は $2,060 \pm 40$ 年BP、SA1の炭化材は $1,960 \pm 40$ 年BPで、集落変遷はSA2・3・4（中期後半）→SA5→SA1（後期末）→SA6（古墳初頭）である。

後期後半～終末期の集落跡である赤坂遺跡では竪穴建物23軒・周溝状構造3基・周溝墓1基が調査され、2軒が方形基調の花弁状住居である。SA12は主柱穴が6本柱の花弁状住居で、住居中央から放射状に延びた垂木の上の茅状の炭化物はタケ亞科であった。SA9・10・11からは東部瀬戸内系壺が出土している。SA15出土の瓢形壺の類例は下郡遺跡（大分市 2006 120次SD1200 後期中葉主体・一部後葉）の瓢形土器316があるが、筒状の注口がある。SA17から出土した磨石に付着した赤色顔料を蛍光X線分析した結果、ベンガラ（酸化第二鉄）と判明した。石庖丁は16点で、9軒の建物跡から出土し、1点以外はすべて抉り入り石庖丁であり、石材はすべてホルンフェルスである。SA6出土の壺の肩部の圧痕は小畠弘己氏による圧痕レプリカ法でイネと同定された。 $1,950 \pm 40$ 年BP（SA22）、 $1,940 \pm 40$ 年BP（SM1）、 $1,920 \pm 40$ 年BP（SA4・11・12・17）、 $1,900 \pm 40$ 年BP（SA1・3）であり、松永編年（松永2001）の第5期を中心とした第3～6期である。また $14.1m \times 13.1m$ の円形周溝墓が1基検出され、内部主体は單一埋葬の木棺が想定され、東部瀬戸内系の長頸壺と共に鉄鑓が1点出土している。なお周溝墓は後期中頃から終末期に延岡市山田遺跡（県2007）、東平下遺跡（川南町1982・県1986）、川床遺跡（新富町1986）、生目古墳群（宮崎市）など宮崎平野部に分布しており、主体部が単体（單一埋葬）

で、方形周溝墓より円形周溝墓が多数を占めることから東部瀬戸内地域、特に播磨地域の影響が考えられる。主体部からは素環頭太刀・剣・鉄鏃等が副葬されており、規模や周溝を有することから他の木棺墓・土坑墓との格差は見られるが、他地域に見られるような鏡・玉類の出土がないことから、それほど突出した階層ではない。周溝からは供獻された東部瀬戸内地の壺や装飾高坏等が出土している。周溝状遺構については県内では宮崎平野部と大淀川上流域を中心として18遺跡で検出されており、中期後半から古墳時代初頭の時期であるが、主体は後期後半～末である。周溝状遺構は集落内に営まれていることから集落を構成する一要素であり、周溝の北側や東から土器が集中して出土する点、周溝内の焼土の存在から集落で行われる「祭祀」の可能性が指摘されているが、土器の器種構成は甕が半数を占める点、周溝に囲まれた空間の柱穴の存在の事例など「祭祀」とは異なる様相も示している。前ノ田村上第1遺跡で終末期の周溝状遺構の周溝からイネが出土している。

後期後葉～古墳時代初頭の集落跡である木戸平第2遺跡では堅穴建物跡5軒・土坑墓1基が調査された。張り出しを有する方形プランのSA1からは真岩製石庖丁・鉄製穂摘み具が、SA2からは瀬戸内地域との関連がある抉り入り石斧・碧玉製管玉・鉄鏃が、方形プランを基調とする花弁状住居であるSA3からは米粒状の炭化物が内面底部付近に多数付着した甕が出土した。炭化材からSA1が $1,945 \pm 20$ 年BP、SA4が $1,855 \pm 20$ 年BPである。SD1は2段の掘り込みから木蓋土坑墓と推定され、副葬品はなかったが、装飾高坏が出土した。SA5（後期後葉）→SA1（終末期初頭）→SA2・4、SD1（終末期中～後半）→SA3（古墳初頭）と変遷が追え、集落が都農川に接する場所に移動した時に土坑墓が集落より高い位置に造営されている。

西畠原第1遺跡（新富町）では終末期～古墳時代初頭のSA2から鉄製釣り針が出土しており、この時期のものとしては県内唯一の事例である。

森ノ上遺跡（延岡市北浦町）は方形プランの堅穴建物跡が11軒検出され、内訳は終末期が2軒、終末期～古墳時代前期が6軒、前期が3軒である。建物跡の規模は10m<sup>2</sup>代の小型、20m<sup>2</sup>代の中型、45m<sup>2</sup>の大型

（SA3）に分かれる。切り合いはSA5→SA3のみで、5軒は地床炉である。SA4は埋没過程の浅い窪地状の段階に胎土はややこげ茶色で器壁の薄い布留系甕などの大量の土器・石器の他、鉄製刀子・イネ・コムギ・モモなどが出土していることから、一定期間継続して用いられた廐棄場と推定されている。出土土器は松永編年の4～9期に相当する。石庖丁を欠如している。なお鹿児島国際大学中園聰氏の蛍光X線による胎土分析によれば森ノ上遺跡の縄文時代早期土器、中野内遺跡の弥生土器、森ノ上遺跡の前期土器では共通する胎土が使用されているが、中野内遺跡の中期土器の胎土は異なる。

町屋敷遺跡（宮崎市）B区では1号自然流路と2号自然流路の合流部で検出された1号堰跡は洪水等によって杭がすべて西から東へ倒壊している。堰跡の構造は川底に一列に杭を打ち込み、横木で押さえた後、樹皮を張り、その上に杭を敷き詰め、さらに樹皮を張っている。杭はアカガシ・クリ・クヌギ等の広葉樹を利用し、1,790±60年BPの年代値が得られ、後期後半～古墳時代前期である。なおこの遺構については「梁」のような漁撈施設や木材の「水濱け遺構」の可能性も指摘されている。またA区では旧河道の本流とみられる幅約9～10mの1号流路から多数の木材が出土し、木材が流れないよう杭が打ち込まれた跡から木材の変形を防ぎ安定化を図る「水濱け遺構」の可能性がある。この杭列付近から出土したほど穴のある両開きの扉は堅硬で耐久性の強いクスノキ1本の木から一枚板の扉を削り出していることから当時の木工技術の高さがうかがえる。国内での扉は30数例ほどで非常に珍しく、出土土器から後期後半～古墳時代前期である。

福の穂摘み具として普遍的にみられる2つの穴を有する半月形の石庖丁とは形が異なり、方形で両端に抉りを有する抉り入り石庖丁が宮崎では8割以上を占めており（長津2004）、東九州道調査でも数多く出土する。尾花A遺跡では出土した石庖丁233点中の87%が抉り入り石庖丁で、石材もホルンフェルスが87%も占めている。未製品も出土していることから当地で製作していたと考えられ、県内最大の出土数である。川南町域ではホルンフェルス製が主体であるが、前

ノ田村上第1・木戸平第2遺跡はすべて頁岩、向原中尾第2遺跡は頁岩・砂岩である。一方、佐土原町下那珂遺跡（県2004）では149点出土し、83%が抉り入り石庖丁であるが、石材は頁岩が87%も占めている。瀬戸内系土器と抉り入り石庖丁は、瀬戸内地域に顕著に分布することから日向灘～瀬戸内海という海のルートを通じての瀬戸内地域との交流が指摘されている。

赤色顔料については向原中尾第2遺跡の塊と内面付着土器、木戸平第2遺跡の内面付着土器、前ノ田村上第1遺跡のベンガラ内面付着土器、赤坂遺跡のベンガラ付着磨石があり、向原中尾第2遺跡は蛍光X線分析によればヒ素成分が多いベンガラである。

#### ④古墳時代

##### 前期

板平遺跡（日向市）は前期の竪穴建物跡が25軒検出され、方形・長方形プランで主柱穴は2・4本柱で、地床炉である。耳川・塩見川・五ヶ瀬川流域の土器を古墳時代初頭～中期をI期（庄内式土器併行期）、II期（甕の球形胴指向や庄内式・布留式系譜の小型器種の登場と展開）、III期（布留式系譜の高壺や小型丸底壺の盛行と衰退期）に区分した土器編年に基づき、A期（II a・b期 前期前葉）が3軒、B期（II c期 前期後葉）が5軒、C期（III a期 中期前葉）が2軒、D期（III b・c期 中期中葉）が3軒、E期（III d期 中期後葉）が1軒、F期（後期前葉 MT15）が3軒、G期（後期後葉）が1軒と集落変遷しており、盛行期はB～D期である。その集落の規模は一時期に3～5軒程度で、拠点的な集落ではなく小規模な集落を想定している。SA9からは庄内系有段高壺・布留系高壺・山陰系高壺、SA7からは布留系甕・高壺が出土している。なお埋没した自然流路から出土した車輪石は、全体の1/4程度の破片であるが、県内唯一のもので、三浦俊明編年のII段階に相当する（三浦2005）。車輪石は九州では7遺跡9例目（辻田2009）で、同タイプである向野田古墳（熊本県 前方後円墳集成編年4期）と共に分布の南限になる。車輪石の評価については、①板平遺跡付近の前期古墳の崩壊、②板平遺跡の盛行時期（前期後葉～中期中葉）は塩見川流域の初現的地域首長墓である富高2号墳（全長83m前方後円墳 前方後円墳集成4期後

半～5期）の時期とほぼ重なるため、塩見川流域の勢力伸長過程の中で入手され、板平遺跡にも首長層との関係性を示すために分与（分割）が想定され、向野田古墳でも指摘されているように車輪石はヤマト王権から入手した後、前期末まで伝世され集落に廃棄された可能性がある。

塚原遺跡（国富町）C区では径15mの円墳が調査され、内部主体の2mの木棺には鉄劍・刀子・鉄鎌・ガラス玉が副葬され、4世紀前半に比定される。

迫内遺跡（宮崎市）D区の丘陵部の尾根上の古墳3基と斜面部の横穴墓2基が調査され、古墳3基は丘陵の頂上部に周溝を入れ、地山整形で造営している。3号墳は9m×8mの方墳で、木棺直葬の内部主体から鉄劍が出土し、木棺直上の土師器高壺・周溝の土師器壺から4世紀後半に比定される。2号墳と3号墳が共有する溝に土師器壺は穴を掘って埋設されており、うち3個は焼成後穿孔である。2号墳（径9m円墳）は5世紀前半に、1号墳（残存長径15m）は6世紀後半に、2号横穴墓は6世紀後半に造営され、7世紀初頭に追葬されている。以上のように前期から終末期への墓制の変遷と葬送儀礼が具体的に明らかになった。

前期の集落跡としては尾花A遺跡（川南町）で竪穴建物跡が120軒調査され、焼失住居が50軒も検出されているのは県内最大規模である。最盛期のV期（布留1～2式併行期 71軒）の次のVI期（布留2～3式併行期 51軒）に調査区中央南側に断面V字形の幅約0.5～1.0m・深さ約0.4mの溝で閉まれた長辺約29m、短辺約24mの長方形区画が検出され、区画内の同時期の竪穴建物は北東隅の1軒のみである。阿波・讃岐系壺や布留系甕・有段鉢・小型丸底壺・山陰系甕など外來系土器の数量が多い。骨鎌形鉄鎌は国内で3例目であり、朝鮮半島産と考えられる。銅鏡の出土例は県内唯一である。一次拡張区SA609から出土した舟形土製品は舟首に波除け用の堅板を持つ準構造船を表現しており、土製品は全国的にも30例しかなく、特に瀬戸内海沿岸に16例も集中していることから海を通じての交通手段を具体的に示すものである。谷を挟んで西側に川南古墳群が立地することからその古墳群を造営した拠点的集落と考えられる。

尾花A遺跡の北に位置する西ノ別府遺跡（川南町）の前期（布留1・2式）の堅穴建物跡から出土した完鏡の微製重圓文鏡は愛媛県では6面も出土しており（国立歴史民俗博物館1994）、瀬戸内地域との関連もうかがえる。なお弥生時代後期の破鏡は五ヶ瀬川上流域の高千穂町神殿遺跡SA10（県1999）、一つ瀬川中流域の新富町銀代ケ迫遺跡SA9（新富町1982）・松本原遺跡（西都市）、石崎川下流域の佐土原町下那珂遺跡SA96（県2004）などの後期後半～終末期の堅穴建物跡から出土しており、墳墓からは出土していない。下那珂遺跡の前漢鏡（鼈龍文鏡）以外はすべて後漢鏡で、これらの破鏡を有する集落はその地域において拠点的な集落である。なお大淀川下流域の生目古墳群（宮崎市1996）では魚陰洞遺跡と同范の小型微製鏡の完鏡が表採されている。

湯牟田遺跡（川南町）の前期のSA3のベッド状遺構上の炭化したアカガシ製一本鉋の出土状況は類例が少ないため、そのまま切り取り、保存処理した上で西都原考古博物館に展示している。SA7出土の朝鮮半島製板状鉄斧は「伝世品」の可能性が指摘されている。後期後葉～終末期の9軒と古墳時代初頭～前期の7軒の計16軒のうち11軒が焼失し、炭化材上部の焼土は重鈍物観察からアカホヤ等の堅穴の掘削土と考えられ、繊維質植物遺体、「断面船底状の垂木材」など土屋根構造の傍証になるが、断定までには至らなかった。

町屋敷遺跡B区（宮崎市）では畦畔の存在から水田跡が13枚確認され、方形区画で、約5～6m<sup>2</sup>の小区画水田である。水口も7箇所検出された。

#### 中期

家田古墳群（延岡市北川町）は北川に臨む丘陵先端に位置し、迫内古墳群と同様に溝を共有して地山整形する4基の小型古墳が調査され、一辺7m程度の方墳や径4.5m程度の不整形の円墳である。1号墳の主体部は岩盤を掘り込んだ長軸4.6m、幅2m、深さ0.6mの墓坑で、主軸は東西方向で、鉄劍4・鉄鎌21が副葬されていた。鉄鎌の組成が三角形短頭鎌と柳葉鎌が大半を占めることから中期前半に比定される。内部主体は2～4号墳もすべて1号墳と同じで、2号墳には鉄劍1・鉄鎌1が、3号墳には刀子1が副葬さ

れていた。区画溝などから出土した土師器から4基とも中期前半の時期に比定される。

中野内遺跡（延岡市北浦町）で堅穴建物跡6軒（+12軒ほ場整備調査）が調査され、SA3からは須恵器無蓋高杯・杯蓋、鉄鏽が付着する台石などが出土し、TK208の無蓋高杯は胎土分析の結果、陶邑産の可能性が高い。なおほ場整備調査のSA11の高杯転用の輪羽口から小鍛治が指摘されている。集落跡の端で検出されたSC4については塚原遺跡C区のような柱を引き込むためのスロープ部分や鳥形製品等はないが、①柱を固定する際の段の設置、②直径約90cm、検出面からの深さ110cmという土坑の規模と直径約40cmの柱材、③柱の使用後、柱の上部を切って礎の設置、④集落の縁辺に位置し、1本柱という4点から集落の入り口・境界を守る「大柱遺構」と評価されている。また中野内・森ノ上遺跡出土土器編年によれば弥生時代終末期～古墳時代初頭（4期）の甕には大分県南域の倒卵形甕の影響があり、一部にタタキがみられる。前期前半（5～6期）は大分地域に近い様相が強いが、前期後半（6～7期）は宮崎北部の様相と共通点が多くなる。中期（7～8期）には甕の肩部が大きく張る特徴は中野内遺跡独自である。後期（9期）は甕の長胴化と粘土紐の繋ぎ目の調整が粗くなり、粘土紐痕を残す。弥生時代前期～古墳時代中期の北浦地域においては中野内遺跡（弥生前期後葉～後期初頭6軒）→空白期→森ノ上遺跡（弥生終末期～古墳前期11軒）→中野内遺跡（中期18軒）という集落の移動の一要因として中野内遺跡での土石流が考えられる。

板平遺跡（日向市）の堅穴建物跡7軒のうち中期中葉のSA1から鍛冶炉が検出され、鉄滓・高杯を転用した輪の羽口・金床石が出土したことから、集落における鍛冶工房的な建物跡と推定される。集落縁辺部の谷地形の谷風を利用してできる位置に立地している。金属分析の結果、楕円津の始発原料は砂鉄で鍛錬工程に伴う鍛冶津と判明したが、鉄製品や鍛造鉄片は出土しておらず、鉄器生産が行われたかについては確認できなかった。県内では都城市平峰遺跡（県2012）など調査事例は少ないが、高杯を転用した輪の羽口（V式羽口）は畿内地方にほとんど見られず、九州や関東地方に多いという指摘（野島2009）や、鍛冶具

が畿内では鉄器を使用するのに対して、石器を使用するのは弥生時代の鉄器生産形態と解釈されている（角南2000）。なおSA1は焼失建物である。

野首第2遺跡（高鍋町）では堅穴建物跡が34軒も調査され、5世紀後半に盛行している。堅穴建物跡は方形・長方形プランで、一辺2~3mの小型住居と一辺5~6mの大型住居に分かれ。火廻は竈・瓶がなく、竈出現前の段階である。

塚原遺跡（国富町）B区では斜めに打ち込まれた立杭と横木で構成された合掌型の壠跡が検出され、出土土器から中期～古代の時期である。先端を尖らせた杭は樹種同定ではヒノキやツブライジである。

木脇遺跡（国富町）のSA17出土の須恵器壺と2号溝状遺構出土の壺と包含層出土の小型丸底壺、塚原遺跡D地区包含層出土の把手付楕は市場南組窯（愛媛県伊予市）系須恵器と判明した（三吉2004）。

#### 後期

宮ノ東遺跡（西都市）では古墳時代の堅穴建物跡が418軒も調査され、中期の5世紀代が19軒、後期の6世紀代が108軒、終末期の7世紀代が260軒で、最盛期は終末期である。火廻については5世紀後半に出現し、6世紀後半～7世紀前半に盛行する土器埋設炉は当遺跡では8世紀後半まで存続する。また6世紀後半に本格的に導入される竈は土器埋設炉と同じ建物跡で共用しており、6世紀前葉の竈は県内最古例である。須恵器に生焼けに近いものが含まれることから須恵器工人集団との関連も考えられる。

#### 終末期

下耳切第3遺跡（高鍋町）では古墳時代終末期から古代初めにかけて古墳2基・地下式横穴墓8基という「墓」と堅穴建物跡75軒という「住」がほぼ近接して営まれている集落跡として注目される。牛牧1号墳は二重周溝を有する直径約20mの円墳が調査され、内部主体は木棺4基で、耳環・勾玉の位置から須恵器を枕にして5体想定される。木棺からは須恵器（TK209新段階～TK217新段階）・耳環・勾玉・刀子などが出土した。第1～4主体部の墓坑の柱穴について「築造から埋葬までの儀礼における結界」（田中1999）と評価されている。この円墳の周溝に堅坑を掘り、玄室を墳丘外に向ける地下式横穴墓が6基も寄

生する「地下式横穴墓寄生型円墳」（笠瀬2003）で、県内では最北の地下式横穴墓である。また3号地下式横穴墓では長大な堅坑内での初葬時での須恵器・土師器の一括配置と追葬時の須恵器大甕の破碎行為という堅坑祭祀が明らかになった。3・4号地下式横穴墓の堅坑内の小柱穴については木柱の痕跡として「靈魂を呼び寄せるための代役の役割を果たすもの」（土生田1998）と「古墳の所在明らかにするため」（石川1979）のものとして評価されている。この古墳の外周溝の外で馬具の轡が出土した土抗が2基見つかり、そのうちの1基は馬歛が付着した轡であることから馬埋葬土坑と考えられる。この馬埋葬土坑は県内では10遺跡28例が知られ、Ⅰ期（5世紀後半～6世紀初頭）は大淀川下流域と川内川上流域に、Ⅱ期（6世紀前半～中頃）には一つ瀬川中流域に拡大し、Ⅲ期（6世紀後半～7世紀前半）には小丸川下流域に更に拡大し、地下式横穴墓の分布圏と重なっている（甲斐2009）。なお『日本書紀』の推古20（612）年の「馬ならば日向の駒」、『延喜式』兵部省諸国牧条に野波野・堤野・都濃野の馬牧が記載されており、当地域における「馬匹生産」の様相を示している。

高鍋町野首第1遺跡（県2004）では7世紀前半の横穴式石室が新たに2基確認され、1号墳は直径7mの円墳で、石室内に金銅装馬具・大刀・須恵器（TK209新段階～TK217古段階）が副葬されていることから小地域首長墓と想定される。

#### ⑤古代（奈良・平安時代）

##### 集落跡

7～8世紀代の集落跡としては下耳切第3遺跡（高鍋町）・宮ノ東遺跡（西都市）があり、須恵器円面硯（7世紀末前後）から識字層あるいは律令行政組織の末端組織である「里長」の存在が推定される。なお円面硯は県内では5例のみである。

7～8世紀初頭の集落跡である下耳切第3遺跡ではA期（TK209段階 6世紀末～7世紀初頭）は円墳2基・地下式横穴墓2基・馬埋葬土坑1基の造営に始まり、B期（TK217古段階 7世紀第1四半期）は古墳の追葬・地下式横穴墓3基・堅穴建物7軒・掘立柱建物4棟、C期（TK217新段階 7世紀第2四半期）は地下式横穴墓の追葬・22軒・16棟、D期（TK46段階 7

世紀第3四半期)は27軒・11棟、E期(TK48段階 7世紀第4四半期)は11軒・11棟、F期(TK21段階 7世紀末~8世紀初頭)は8軒・20棟、その後は廃絶する。C・D・E・F期は造構の切り合いと主軸方向で更に二期に分かれる。6世紀末~7世紀初頭の古墳の造営に始まり、7世紀第1四半期には古墳と谷の間に集落が形成され、ピークは7世紀第3四半期である。火處については地床炉→土器埋設炉(7世紀第1四半期~8世紀初頭)→竈(7世紀後半~8世紀初頭)と変遷するが、地床炉のみ、竈のみがそれぞれ約1割に対して、土器埋設炉と竈を併用する建物跡が約半数の40軒である。県内では5世紀後半に出現する土器埋設炉と6世紀後半(TK43段階)に出現する竈の併用については炊飯・調理・煮沸などの炊事の機能は竈に特化し、炊事以外の壺の再加熱・暖房等の「圓炉裏」的役割が想定されている(今塩屋2004)。SA74からは須恵器円面鏡が出土しているが、転用鏡・墨書き土器は出土していない。しかし、8世紀後半には谷を隔てた北側丘陵頂部の老瀬坂上第3遺跡に壯年男性の火葬骨を納めた須恵器藏骨器が古代墓として造営され、集落と隔離した場所に墓地が形成される。

7~10世紀の集落跡である宮ノ東遺跡では堅穴建物跡が5世紀は19軒、6世紀108軒、7世紀260軒、8世紀は118軒、9~10世紀は91軒、10世紀は9軒と変遷し、7世紀にピークがある。一方、掘立柱建物は古代26棟、古代以降10棟と少ない。遺物では8世紀前半のループ状の暗文を有する畿内系土師器、8世紀後半の企救型甕・豊後型甕などが出土しており、畿内や豊前・豊後地域との交流がうかがえる。8~9世紀の須恵器円面鏡・転用鏡、8世紀後半の「也」とヘラ描きされた須恵器高台付焼などの出土から識字層の存在がうかがえ、石帶(丸輪)も出土していることから、一つ瀬川に臨む古代の重要な公的機関の可能性がある。なお9世紀初頭に地崩れが起きているが、その後に集落を復興している。

柳迫遺跡(宮崎市)・中別府遺跡(宮崎市)では墨書き土器が、塙原遺跡(国富町)A区ではシャシャンボ製舟形木製品が出土している。

### 水田・畠跡

内宮田遺跡(宮崎市)では水田跡が検出され、区画

は不定形で、面積は100m<sup>2</sup>以下と小規模であり、土師器などから古代前半に比定される。

平田追遺跡(佐土原町)では上段部である西側で歓30条、下段部である東側で10条が検出された。歓幅は約30cmと比較的狭く、プラント・オパール分析の結果、少量ながらイネが検出され、陸稻の可能性がある。またアワも検出されている。なお放射性炭素年代測定の結果、礫層直下の褐色土は9世紀後半の年代が得られたので、古代の畠跡と推定される。なお遺物としては須恵器円面鏡(8~9世紀代)・石帶(巡方)・繩目叩き瓦・布痕土器などがある。

町屋敷遺跡(宮崎市)D区で高原スコリア(1235年降灰)直下で水田跡が7枚検出され、区画は不定形で、面積は約1.8~3.7m<sup>2</sup>と小区画水田である。A区の7号自然流路の3号堰跡は杭がきれいに加工され、杭も太くなり、水留めの樹皮の張り方も丁寧で耐久性を高める技術が施されている点などから灌漑施設建築の進歩が見られ、すべての杭は坚硬で強靭、弾力性も高いアカガシが選定されている。

### ⑥中世・近世

#### 集落跡

古代官道沿いに立地する銀座第1・前ノ田村上第1遺跡(川南町)では中世の方形の区画溝で囲まれた屋敷跡が検出された。銀座第1遺跡は一边が54mの区画溝があることから、半町を単位とした宅地が想定されるのに対して、前ノ田村上第1遺跡では一边が約62m、39mの区画溝があり、1町ないし半町に近い単位である。銀座第1遺跡は溝内から中国産青磁・白磁・備前焼が主体として出土しており、15世紀代を中心とする年代が想定される。銀座第1遺跡出土の体部内外面に成形時の調整痕を明瞭に残す「クロ目土師器」は、豊後大友府内館跡の坏と器形・胎土の特徴は極めて似ているが、糸切りでなく、ヘラ切りで、15世紀末~16世紀中葉に比定される。塙見城跡(日向市)でも出土している。

板平遺跡(日向市)では掘立柱建物跡24棟(中世14棟、近世10棟)検出され、美々津・細島港に近いためか越州窯・龍泉窯・景德鎮窯産の輸入陶磁器や青磁の香炉・水注、古瀬戸の瓶子などが出土している。

海舞寺遺跡(延岡市北浦町)では掘立柱建物跡12

棟が検出され、輸入青磁碗・石鍋・周防型羽釜などから13世紀後半～14世紀後半である。

### 城跡

家田城跡（延岡市北川町）は北川左岸の北方の山地から派生した尾根の一つを幅約8mの堀切で断ち割り独立させて、標高約81mの最高所に主郭を、南北方向にそれぞれ段状の曲輪群を、北東・南西方向にも曲輪群を配置している。特に主郭から南西方向に伸びる細い尾根筋には数箇所の堀切によって、横幅が約10mの小規模な曲輪を7つ連鎖状に配置している。今回、7つの曲輪のうち丘陵先端から4つの曲輪（A～D）が調査された。曲輪Aは3号墳・4号墳の墳丘を削って曲輪1を、最高所に位置するため櫓台と推定されていた曲輪Bは2号墳の墳丘の一部を削って曲輪2を作っていたが、櫓台関係の遺構は検出されなかった。曲輪Cは南北に細長い曲輪3で、北半分は1号墳の墳丘の一部を削り、南半分は盛土を行って、曲輪Dである曲輪4との比高を約6m以上確保して、「切岸」的構造をしている。曲輪3と曲輪4の間の斜面中腹には幅1.2mの犬走り状遺構が巡る。なお構造的には県北部山間地に数多く散見できる丘陵立地型の小規模城館に分類され、縣土持氏の築城が想定されている川坂城を本城として、防御性に欠けるが、交通の要衝に睨みをきかせる見張りの城として東に配された支城の可能性が指摘されている（堀田2005）。

塩見城跡（日向市）は主郭を除く曲輪や谷部をほぼ全面的に調査した結果、曲輪13・掘立柱建物跡194棟・柵列99条などが検出された。西側曲輪群（A～C群）では薬研掘りの堀切や裾を巡る横堀が、南側曲輪群（D～M群）では南北に貫く道路状遺構が1条検出され、少なくとも3回改修されていた。水の手曲輪では谷の入り口を塞ぐように造られた石積遺構や井戸・堀・暗渠が検出された。城郭の改変が3時期以上行われており、13世紀後半～17世紀初頭における塩見城の全容が明らかになった。遺構・遺物から8つの画期に分けられ、I期（11世紀後葉～12世紀末）は中世城館成立の前段階の時期、III期（14世紀後半～15世紀前半）は西側及び南側曲輪群で掘立柱建物群が設置される土持氏支配の時期、IV期（15世紀中頃～末）は塩見城の整備拡充される伊東氏支配の時期、

V期（16世紀初頭～前葉）は水の手曲輪における石積遺構や木杭列の構築など防禦性の向上の時期、VI期（16世紀中葉～17世紀初め）は水の手曲輪として井戸等を設置する繩張りの最終段階の時期、VII期（17世紀初め）は道路状遺構の封鎖などの痕跡から高橋氏による破城の時期である。出土遺物からはIII～VI期が多く、特にIV～V期が多い。調査の結果、15世紀後半以降の塩見城跡は、主郭を円環状に巡る堀切・横堀・堅堀と帶曲輪と幅狭い平坦面で主郭を防衛する内郭と、屋敷地や中世寺院や工房等で構成される外郭が結合した二元構造であった。この繩張りは、家田城跡でみられた痩せ尾根上に鎖状に曲輪群が有機的に結合する「丘陵立地型」（北郷1999）と独立・並列的な曲輪構造を特徴とする「九州館屋敷型」（千田2000）の折衷型と評価されている。吊り紐痕が布袋の外に出ており16世紀代の瓦以外に、17世紀代のコピキBの痕跡と九州タイプの吊り紐痕をもつ瓦も出土しており、瓦葺き建物の可能性があるが、出土量から總瓦葺きでなく限定的な使用が想定される。遺物としては12世紀～16世紀後半の輸入陶器・国産陶器が出土しており、特筆される遺物としては座敷飾りや室籠の「威信財」としての曲輪M出土の13世紀後半～14世紀前半の龍首水注青白磁や、「茶の湯」の茶入れとしての曲輪G出土の16世紀後半～17世紀初頭の景德鎮産青磁小壺などがある。なお瓦質の「土製型人像」は南側曲輪群の1号道路状遺構から出土し、表面に「聖母マリア」とみなされる女性聖人の顔の一部と植物の葉のレリーフがある。聖母マリア像の左右が反転する点を重視すると慶長期（1596～1615年）の『マリア五玄義図』との類似点が指摘されている（神庭1998）。上部に2箇所の穿孔が存在するので、身につけるメダイや壁や箱の内部に掛け垂らして崇拝の対象とするキリスト教遺物と考えられる。共伴遺物から16世紀末～17世紀初頭に比定される。この土製型人像は中世日向におけるキリスト教受容の実像を解く重要な遺物であり、キリスト教関連遺物の土製品としては類例がない。なおイエズス会の『日本年報』天正9（1581）年に日向国のある港に住むキリストンのルカスを紹介している（若山2012）。

### 水田跡

塙原遺跡（国富町）B区では文明ボラ（1471年降下）の下で水田の畦畔が検出され、プラント・オパール分析からも多量のイネが検出された。町屋敷遺跡（宮崎市）C区で中世の水田跡が9枚検出され、水田区画は約100~140m<sup>2</sup>程度であるのに対して、D区の唯一判明した水田区画は約21.1m<sup>2</sup>である。

### 石塔群・墓

迫内遺跡（宮崎市）の磨崖板碑は「七本塔婆」と呼ばれるもので、石塔群から出土した瀬戸産瓶子藏骨器・糸切り底土師器などから13世紀後半~16世紀の時期と推定され、県内唯一の事例であり注目される。なお13世紀後半の瀬戸産藏骨器の中の焼骨は分析の結果、熟年男性と推定された。また平田迫遺跡（佐土原町）では石積構造2基の多量の河原石の下にそれぞれ成人の火葬骨を納めた14世紀の常滑焼藏骨器が安置されていた。

カラ石の元遺跡（延岡市熊野江町）ではいわゆる円角混同式の日向式六地蔵幢に分類される「天文17（1548）年」銘の六地蔵幢が、宮ノ東遺跡（西都市）では中世後半~近世前半の石組構造・茶器遺構・石敷構造が、迫内遺跡（宮崎市）では「宝永5（1808）年」の紀年銘のある近世墓群が調査された。

以上のように東九州自動車道（大分県境~清武間）建設に伴って尾花A・野首第2・宮ノ東遺跡などの複合遺跡に代表される166遺跡の調査を行い、103冊の報告書を刊行して「記録保存」の措置はいちおう終了したが、これは到達点でなく通過点である。それぞれの報告書で明らかにされたことや問題点・課題点を各時代・地域毎に整理・総括し、今後の調査に生かしていくと共に、出土した膨大な遺物を考古資料として県北・県央・県西・県南という地域性や多様性、そして同質性を踏まえながら地域の歴史あるいは日向の歴史を明らかにしたい。

### 参考文献

- 秋成雅典2013「宮崎県における瀬戸内技術の様相」『九州伝石器』第17号：九州伝石器文化研究会
- 池頭耕一郎「石舟町にみられる瀬戸内地と宮崎県の關係」『宮崎考古』第2号：宮崎考古学会
- 石川俊雄1984「宮崎平野における弥生土器編年式」『宮崎考古』第9号：宮崎考古学会
- 石川俊雄1986「宮崎県における弥生文化の成立と大陸文化」『考古学ジャーナル』264号

石川俊雄1991「宮崎県における弥生時代磐式住居の展開」『宮崎歴史研究』第5号：石川俊雄1979「宮崎市本町地区下式2号古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第1号

福井司郎2009「神子山古石器群と圓文時代のはじまり」『九州の縄石器文化』

九州石器文化研究会

今藤義行・鈴木重幸2002「日向における山崎時代後期～後期の土師器」『宮崎平野部を中心として』：『中島古墳の研究』八洲前田版古墳研究会

今村信行2004「鹿島九州古墳時代の火炎」『福岡大学考古学論集』一小畠富士雄先生追憶記念

吉田裕也2005「安土第2・3号墳」西都原市埋蔵文化財調査報告書第33集

後半田遺跡調査委員会・川南町教育委員会2002「後半田遺跡」小畠富士雄先生追憶記念

に付ける石器部材の研究」

梅木謙一2004「西日本・南北における前縄文文化の交流」『西南四国～九州間の交流

に関する考古学的研究』研修代表：梅木謙一

大川洋子2003「圓文の小玉・弥生の火炎～先史・考古学論文の『圓文』」『圓文考古会

小野洋志2003「成長段階としての貢賀圓石器群」『廣島国時代考古学』

酒井信一・宮川信重2006「宮崎県における土師付着物の特徴と其の背景」『宮崎県の14世紀後半～15世紀

時代平野部を中心に』：『宮崎考古』第21号：宮崎考古学会

平野部信光2009「宮崎県における那埋理土器」『研究報告』第5号：宮崎県立西都原考古

博物館

片桐千尋2006「日本出土の土器・中堅層出土土器」『備後集落と農耕社会の形成』九州考

古学会・会場考古学会

神辺信一・小島昌裕・横木丈文・本坂直美1998「京都大学人蔵所「マリアト玄義園」の

調査」『立命館人経済博覧研究報告』第76集

加藤信一2009「宮崎県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代の社会変化

』：『中島古墳の研究』八洲前田版古墳研究会

阿部和志2011「宮崎県における弥生時代中期内底土器の基礎的研究」『地域政策科

』：『研究』第8号

岸井信一・高島優子2011「『宮崎県』・黒曜石の産出状況」『東洋X線分析装置による

黒曜石製品の原産地推定』：『日本出土の土器』第一回明治大学古文書研究所

清川義晃2006「清川市第1遺跡」『清川市埋蔵文化財調査報告書』第21集

兔田伸博2013「宮崎県の曾根式土器」『曾根式土器とその歴史を考える』九州文献研究

会議

國立歴史民俗博物館1994「日本出土の土器・中堅層出土土器」『備後集落と農耕社会の形成』九州考

古学会・会場考古学会

神辺信一・小島昌裕・横木丈文・本坂直美1998「京都大学人蔵所「マリアト玄義園」の

調査」『立命館人経済博覧研究報告』第76集

加藤信一2009「宮崎県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代の社会変化

』：『中島古墳の研究』八洲前田版古墳研究会

赤堀和郎2011「九州における石器の研究」『考古』第104輯

下條英治1977「九州における人頭式石舟石幢の発見」『鏡山猿生古墳記念古文化論文

論集』

下條英治2002「瀬戸市立にある石舟石の型式展開と文化交流」『吉田とその周辺の考

古学』大庭義雄先生研究会記念論文集行持

新井良一2013「地盤の様相」『九州古学』：『圓文時代上』：『東洋学』

酒井信一・栗原2000「奈良の圓文」『奈良の圓文』

赤堀和郎2013「奈良の圓文」『奈良の圓文』

下條英治1997「西日本における人頭式石舟石幢の発見」『鏡山猿生古墳記念古文化論文

論集』

下條英治2002「瀬戸市立にある石舟石の型式展開と文化交流」『吉田とその周辺の考

古学』大庭義雄先生研究会記念論文集行持

新井良一2013「地盤の様相」『九州古学』：『圓文時代上』：『東洋学』

酒井信一・栗原2000「奈良の圓文」『奈良の圓文』

赤堀和郎2013「奈良の圓文」『奈良の圓文』

下條英治1997「奈良の圓文」『奈良の圓文』：『東洋学』

栗原2000「奈良の圓文」『奈良の圓文』

赤堀和郎2013「奈良の圓文」『奈良の圓文』

下條英治1997「奈良の圓文」『奈良の圓文』

赤堀和郎2013「奈良の圓

## 第23表 東九州自動車道調査成果一覧表

## ① 大分県境～北川間（7遺跡3冊）

	遺跡名	所在地	調査年度	時代	遺跡の内容	報告書	
2	南舞今遺跡 (1,988 m)	延岡市 北浦町	19 20	旧石器 中世 近世	附器。縄文後・地割土器。古墳・須恵器。古代・土師器 瓶式柱建物跡 12棟、土坑 1 個、輪入陶磁器・束縛系瓦器・ 圓筒型瓦質土器・石器・北宋鏡・具 (ママグリ)・種差 (コムギ) 国造御器 (備前・肥前・瀬戸・堺)・火打石 空模穴 4	189	
7	市之串遺跡 (4,400 m)	延岡市 北浦町	20	弥生～古墳 近世	土器 陶器・罐	空模穴 7	189
8	中野内遺跡 (11,149 m)	延岡市 北浦町	19 20	縄文早期 弥生前期 古墳中期	集石遺構 1 号 (9,405 ± 28 年 BP)、広葉樹 堅式柱建物跡 4 棟、土器 (下式文)・打製石器・磨石・白石 堅式柱建物跡 4 棟、瓶式柱建物跡 5 棟・大柱遺構 1 ト、自然石路、 土器・甕・圓筒形無蓋高杯 (T'K 208)・砾石・錐具・刀子 ビーム・陶磁器	189	
9	野地久保高益跡 (4,000 m)	延岡市 北浦町	20 21	縄文中期 中世 近世	土器・石器・削片 ビット・円刃・骨器 瓶式柱建物跡 5 棟・土坑 3 基・ビット・圆座陶磁器 (拂面・摩崖・ 肥前・瀬戸・堺)・火打石・鍍金 (ムサシ・マメ科)・空模穴 2	196	
11	森ノ上遺跡 (5,666 m)	延岡市 北浦町	19	旧石器 縄文早期	ナイフ形石器・スクレーブバー・石器 集石遺構 18 箇・卵 4 基・土器 (貝文文・押型文・無文)・打製石器・ 磨石・白石・台石・打製削片石器	189	
			20	弥生末～古墳前期	空穴 1 (1,373 ± 19, -29)・土器・磨石・礫石・白石・鐵器・刀子・種子	196	
12	カラ石の元遺跡 (1,648 m)	延岡市 熊野町	19 20	縄文前期 古墳中期 中世～近世	土器・石器・磨石・石器 堅式柱建物跡 4 棟 (1,584 ± 19, -29)・ツブラジイ・土師器・磨石・砾石・種子 六角彫・繩彫・磨跡・五輪塔・土坑 9 基・ビット・鏡・石器 輪入陶磁器・国造陶器・罐・砾石・火打石・鍍金・骨管・ 魚骨・火打石・貝 (アワビ・カキ)・種実 (イモ・コムギ)	189	
14	家原古墳群 家原城跡 (4,109 m)	延岡市 北川町	21	古墳中期 中世 近世	古墳 4 基・斜面・铁器・刀子・土師器 (甕・高仰) 陶器 4 基・大柱式土器構築・白磁・火打石 スナイドル旋錐	198	

## ② 門川～日向間（5遺跡4冊）

	遺跡名	所在地	調査年度	時代	遺跡の内容	報告書
1	分岐遺跡 (612 m)	門川町 門川	17	縄文後期 縄文中期	土器 (大城式)・石器・打製石器・石錐 土器 (黒川式)・無財目要器文・打製石器・石錐・糠斗状石器	139
2	柏原遺跡 (21,080 m)	日向市 富高	17 18 20 21	旧石器 A T 下位 旧石器 A T 上位 縄文後期 縄文後期	櫛状器・石器・一次加工削片・削片 ナイフ形石器 (今神祭) 集石 36 (9,280 ± 40, コナラ)・伊穴 55 (9,260 ± 30, タリ)・鍋穴 4, 土器 (貝文文・中腹口式・手ぬ山式・天道ヶ尾式)・打製石器・磨石 土坑 1 基・石器遺構 1 基・土器 (太郎船式～三万世式・而來式・ 馬舟式) 土器 (黒川式・無財目要器文) 土器 (下城式・龜ノ甲・須恵式) 堅式柱建物跡 1 棟・土器 (免田式) 堅穴 25 (施主 2 人, 670 ± 20, ツブラジイ)・車輪石・土師器・重複器・ 磨石・石錐・鏡 (高环軸用輪羽口・霞紋・ガラス)・種壳 (イモ) 瓶式柱建物跡 24 棟・鏡 1 個・土器 (布底土器・内墨土器)・ 輪入陶磁器・鍍金・火打石・骨管	176 199
3	庵見足城跡 (25,256 m)	日向市 庵見	17 18 19 20 21	旧石器 縄文早期 弥生中期～後期 古墳前期～後期 古代～近世	ナイフ形石器・削片 (貝器)・竹形石器・削器・刮削器・削片 土器 (貝文文・知観式)・打製石器 土器・罐・平底・土器・堅式柱建物跡 194 棟・種類 99・道状遺構・井戸・ 鏡・入輪入陶磁器 (椎苗文注目白磁・豐後燒小字)・国造陶器 土器骨器・茶目・大割器・石器・つぶて石・タリタシ・遺物 空室壁 23 基・铁器 (洪武・永樂・寛永)・金鋼削削り机・ガラス散沫	210
4	中山道路	日向市 庵見	17 18 19 20 21	中世 古世	空室壁 23 基・铁器 (洪武・永樂・寛永)・金鋼削削り机・ガラス散沫	210
6	湯ノ下遺跡 (1,534 m)	日向市 庵見	17	旧石器	角錐状石器	210

## ③ 日向～都農間（18遺跡8冊）

	遺跡名	所在地	調査年度	時代	遺跡の内容	報告書
2	馬込遺跡第 2 地点 (1,800 m)	日向市 平賀	24	旧石器 縄文早期 弥生終玉期	ナイフ形石器・角錐状衣器・スクレーブバー・削片 集石遺構 40 (9,11 ± 29, マフ藻)・卵穴 1・土坑 5・土器 (貝文文・ 押型文・撲水文)・打製石器・石斧・石錐・磨石・藏石・石皿・白石 土器 (無財目要器文) 土坑 1 基・生土器・石斧・磨石・圓筒形 (1,935 ± 18 年 BP, シイ属)	230

3	国道跡 (12,610 m)	日向市 平治	21 22 23 24	旧石器 A-T 下位	石器・スクレイバー、石核、刮片		
				旧石器 A-T 上位	縫合 5 基、ナイフ形石器・スクレイバー、縫器、石核、刮片		
				縄文早期	集石遺構 14 基 (10,880 ± 34 年前)、砂丘 17 基 (9,564 ± 32, コナラ筋)、土器 (貝紋文・押型文、無文、手取山式)、打製石器・スクレイバー、石核・縫合石器		
				縄文中期	土器 1 件系、埋甕 1 件、土器 (黒川式、組織痕・孔列文・刻目実帶文・無目実帶文)、石器・石核・縫石・台石・熱製削片石器		
	平尾道路			古墳中期	堅耳導物器 1 件、荒器 (P-T-K 47 ± M-T 15・鶴)、土器器		
				古墳～近世	堅耳導物器 4 件、石器 (輪入陶器・國造陶器)		
				縄文早期	集石遺構 1 基、土器 (貝紋文・押型文・撲突文)		
				縄文晚期	土器 (組織痕・孔列文・刻目實帶文・無目實帶文)、石器・石核・石核・縫石・白石・トロトロ石器		
				中世～近世	堅耳導物器 5 件、輪入陶器・束帯系鉢・国造陶器		
8	坂丈第 2 道路 (315 m)	日向市 平治	21-22 古墳	縄文早期	集石遺構 2 基 (8,036 ± 30 年前)、土器・スクレイバー、石斧・磨石		
12	向原中尾第 1 道路 (1,165 m)	日向市 東郷町	20	旧石器 A-T 上位	石核		
縄文早期	土器・打製石器・磨石・回石・縫石・熱製削片石器						
13	向原中尾第 2 道路 (1,929 m)	日向市 東郷町	22 24	旧石器 A-T 上位	ナイフ形石器・スクレイバー・石刀・石核・刮片		
縄文早期	集石遺構 18 基 (18,037 ± 31)・石刀・磨石・縫石・土器 (貝紋・押型・無文、前山式・手取山式)、打製石器・石核・縫石・台石・熱製削片石器						
弥生終末期	堅耳導物器 8 件 (椎矢 5 件)、L877 ± 60、アマブカ風)、土器・石碗・石瓶・磨石・縫石・熱製削片石器						
15	向原中尾第 4 道路 (5,689 m)	日向市 東郷町	20 21 22	旧石器 A-T 下位	縫合 1 基、ナイフ形石器・スクレイバー・石刀・石核・刮片		
旧石器 A-T 上位	縫合 4 基、ナイフ形石器・スクレイバー、石核・縫器・角離状石器・スクレイバー・石刀・石核・縫石・白石・縫器・石核・縫石・台石・縫石・縫合 2 件 (椎矢 2 件)、石核・刮片						
縄文草創期	土器 (貝紋文・押型文、吉原式・中原式・手取山式)・凹彎形土製品・打製石器・打製石刀・磨石・縫石・縫石・縫石・縫合 6 件 7 基、國造文中尾式、吉生中尾式土器						
縄文早期	縫合 1 基、ナイフ形石器・刮片・大頭器・角離状石器・最右・石核・集石 9 件 (9,160 ± 40、コナラ筋)・宍竹 33 (9,180 ± 40、タリ)、土器 (貝紋文・押型文・無文、前山式・中尾式・加賀式・手取山式)・打製石器・打製石刀・磨石・縫石・台石・熱製削片石器						
弥生後期	堅耳導物器 2 件 (椎矢 2 件)、L755 ± 25、アカガシ風)、土器・石瓶丁・碗・磨石・縫石・縫室 (8 基、ガマツミ風)、縄文中期以降に始む穴 2 基						
17	向原中尾第 6 道路 (299 m)	日向市 東郷町	24	旧石器	縫合 2 基、スクレイバー・使用痕削片・磨石		
弥生後期	土器						
18	長野道路 (4,609 m)	都農町 川北	23 24	旧石器 A-T 上位	縫合 1 基、ナイフ形石器・尖頭器・石核・刮片		
縄文早期	土器 1 基、他表面 7 基、土器 (押型文)・打製石器・打製石刀・石核						
弥生後期後半	堅耳導物器 2 件 (椎矢 2 件)、L755 ± 25、アカガシ風)、土器・石瓶丁・碗・磨石・縫石・縫室 (8 基、ガマツミ風)、縄文中期以降に始む穴 2 基						
19	舟原第 2 道路 (5,420 m)	都農町 川北	21 22 23	旧石器 A-T 下位	縫合 4 基 (28,460 ± 10、コナラ筋)、ナイフ形石器・スクレイバー・石刀・石核・刮片		
旧石器 A-T 上位	縫合 5 基、ナイフ形石器・腰谷・牛乳牧式)・台形石器・斜片・尖頭器・角離状石器・磨石・縫石 (野呂帶・船野帶・皇福寺式)・縫石刀						
縄文早期	集石遺構 29 基・配石遺構 1 基、土器 (貝紋文・押型文・無文、手山式・稻荷山式・奈ノ木式)・手取山式・稻荷山式・早水式)・打製石器・磨石・縫石・石核・刮片						
縄文中期	土器 (無目實帶文)						
23	内野ヶ第 6 道路 (4,720 m)	都農町 川北	21 22	縄文早期	堅耳導物器 5 基、土器 (貝紋文・押型文、早水台式・下皆生式・手山式)・打製石器・石核・縫石・縫室・縫合石器		
縄文後期	土器 (波瀬式・尾田式)、中尾式・土器 (船元式・春日式)・堅耳 4 基 (3,480 ± 23、イチイガシ)・(輪ぬ・来島・東原・原式)・石核・石刀・石核・磨石・縫石・縫室 (8 基、ササグニ風)・縫合石器						
縄文後期	堅耳導物器 5 件 (椎矢・スダジイ)、土器 (重乳式)・縫合石器						
24	内野ヶ第 2 道路 (1,420 m)	都農町 川北	20 21	縄文早期	集石遺構 5 基、土器 (押型文、田村式)・石刀・磨石・縫石・刮片		
25	内野ヶ第 3 道路 (290 m)	都農町 川北	22	縄文	磨石・石核・刮片		
弥生	磨石・石核						
26	内野ヶ第 4 道路 (920 m)	都農町 川北	20 21	縄文早期	集石遺構 2 基、土器 (貝紋文・無文、奈ノ木式)・打製石器・石刀・磨石・石核・刮片		
縄文中期	土器 (押型文・轟式)・块状耳輪						
27	平山下原道路 (7,996 m)	都農町 川北	20 21 22	旧石器 A-T 上位	縫合 3 基、ナイフ形石器・斜片・尖頭器・角離状石器・スクレイバー・削器・石核・縫石・縫室		
縄文早期	集石遺構 5 基・土器 (貝紋文・押型文・無文、天道ヶ尾・妙弓式)・打製石器・石刀・磨石・縫石・縫室 (8 基、台石・筒石・磨石・石核・刮片)						
29	木戸平第 2 道路 (2,880 m)	都農町 川北	20 21 22	旧石器 A-T 下位	縫合 2 基、ナイフ形石器・斜片・尖頭器・石核・縫石・縫室		
旧石器 A-T 上位	土器 (平洋式)・打製石器・局部削石器・堅耳 4 件 (4,945 ± 20、ツラヅラジ)・土核 5・土核基)・土器 (施墨式)・石核丁・磨石・縫石・打製石器・磨石・縫石・土器 (ササグニ風)・縫合石器						
弥生末～古墳初期	堅耳導物器 1 件 (椎矢・スダジイ)・土器 (山・奥・1,938 ± 22 年前)・器台・装飾高杯・円子形)						
弥生末期	堅耳導物器 1 件 (椎矢・スダジイ)・土器 (山・奥・1,938 ± 22 年前)・器台・装飾高杯・円子形)						
31	俵石第 2 道路 (3,389 m)	都農町 川北	21 22	縄文早期	縫合 2 基、周縁削石器・ナイフ形石器・スクレイバー・石核・縫合 7 基、ナイフ形石器・斜片・尖頭器・角離状石器・スクレイバー・石刀・石核・縫石 (野呂帶)・縫石刀 (野呂帶)・縫石刀・刮片		

32	依石第1造跡 (1,709 m)	都農町 川之	田石器A-T下位	縫隙4星、ナツイ形石器(水滴)・種器、磁石、石核・削片	200 216			
			田石器A-T上位	縫隙14星、ナツイ形石器(走牛型)、神祭型・縫隙型・				
20 21 22			剥片斜面・角渦状底・ステレオライム・直立石器・石刃・石核・	剥片斜面・角渦状底・ステレオライム・直立石器・石刃・石核・	200 216			
鍛え草期			縫隙5星(縫隙野型)・細孔・刃	縫隙5星(縫隙野型)・細孔・刃	200 216			
出生後期			點・穴・尖・土器・土壙器・土器(貝殻文・押摩文・無文)・	點・穴・尖・土器・土壙器・土器(貝殻文・押摩文・無文)・	200 216			
田村川期			田村川期・打製石器・尖端器・石盤・石灘・削片	田村川期・打製石器・尖端器・石盤・石灘・削片	200 216			
聖穴物語期・幹(地壳)・土器			聖穴物語期・幹(地壳)・土器	聖穴物語期・幹(地壳)・土器	200 216			

④ 都農～西都間 (59遺跡66冊)

	道跡名	所在地	調査年度	時代	道跡の内容	報告書
1	朝倉道跡	都農町 川北	16 17	山石器 AT下位 山石器 AT上位	縄繩 1基、房頭鹿形石斧・鐵、ナフ形石器、打製石斧、嵌石 縄繩 2基 (24,900 ± 1600 年) <sup>a</sup> 、ナフ形石器、有孔環形器 尖頭石器 <sup>b</sup> 、次加工石片、縄繩石刀 (野村型)、縄繩石刀	169
	尾立第2道跡 (7,189 m)			調文早期	集石堆 52 基 (8,410 ± 50 年) <sup>a</sup> 、土器 26 件、(無文) 鋸齒刃尖頭 伴形器、出村式 <sup>c</sup> 、打製石器、石器・縄繩、鍛冶跡 (滑石製) 土坑 1 基 (2,080 ± 40 年) <sup>a</sup> 、土器 2 件、土器 1 件	
2	朝臣原遺跡 (5,565 m)	都農町 川北	16 17	山石器 調文早中期 調文早期	縄繩 2 基、ナフ形石器、角状環石器、細石核 (野馬型)、嵌石 土器 3 件、(無文・縫合痕)、磨石	147
				集石堆 3 基、土器 1 件 (330 ± 500 年) <sup>a</sup> 、土器 (無文)、石器		
3	尾立第3道跡 (1,466 m)	都農町 川北	17	山石器 AT上位	縄繩 10 基、ナフ形石器、有孔環石器、斜片尖頭石器、角状環石器 尖頭石器 2 片、クセレイバー、石器・加工工具、細石核	147
				調文早期	集石堆 2 基 (9,210 ± 60 年) <sup>a</sup> 、9,060 ± 60 年 (2,060 年) <sup>a</sup> 、三脚石 <sup>c</sup> 、打製石器	
4	立野原5道跡 (3,880 m)	都農町 川北	17	山石器 AT下位 山石器 AT上位	縄繩 2 基、房頭鹿形石器、ナフ形石器、スラエレイバー 縄繩 25 基 (14,240 ± 60 年) <sup>a</sup> 、土器 2 件、ナフ形石器、台形石器 打製石器、鉈頭状石器、スラエレイバー、縄繩石刀、縄繩石刀	156
				調文早中期	集石堆 2 基 (12,000 ± 60 年) <sup>a</sup> 、(ナフ・ナフ)、土器 1 件、石器・石器	
5	立野原第2道跡 (2,126 m)	都農町 川北	17	山石器 AT上位	縄繩 2 基、ナフ形石器 (今井型)、石器、削片 縄繩 25 基 (15,700 ± 60 年) <sup>a</sup> 、土器 2 件、ナフ形石器、打製石器	156
				調文早中期	集石堆 15 基、土器 2 件、(無文)、土器、(無文)、土器	

34	中ノ迫第2道路 (20,190 m)	川南町 川南	13 16 17	旧石器A-T下位 旧石器A-T上位 縄文早期 弥生後期後半	剝片 縄唇 8 基、ナイフ形石器・削片丸頭器・角錐状石器・スクレーパー・ 細石刃器・縫石刃 集石 37 (7,734 ± 74 年 BP, コナラ)・少穴 1 (8,090 ± 44, コナラ)・ (押型・貝殻・貝殻刺突文・下剥製式)・石鏽・石斧・鐵石・石器 堅穴 2 (撫丸 1 軒, 1,643 ± 32, コナラ)・石壺丁・鐵石 (擦切)・磨石	167
35	中ノ迫第3道路 (3,040 m)	川南町 川南	16 17	旧石器A-T下位 旧石器A-T上位 縄文早期	剝片 1 基、 縄唇 6 基・土塁 2 基・鑿穴 1 基、ナイフ形石器・角錐状石器・縫石刃 集石 57 (9,140 ± 50, 鈎穴 2) (9,700 ± 40), (貝殻・押型・無文・石鏽・ 鐵石)・土器	144
37	崩ノ田村上第1道路 (1,800 m)	川南町 川南	13 14 15	旧石器A-T上位 弥生終末期 弥生～近世	集石 56 基・ 土器 2 件・ 鐵石刃器	116
38	崩ノ田村上第2道路 (19,049 m)	川南町 川南	13 17 21	旧石器A-T上位 縄文早期～早期 弥生後期～中期	剝片 1 基・ 縫石刃器・ 集石 5 件・ 少穴 1 (8,010 ± 30)・土器群・帶環文・無文・土鏽 堅穴 2 件 (撫丸 1 軒, 1,950 ± 30, クヌギ)・土器・石削・鐵石	161 197
39	赤坂道路 (17,400 m)	川南町 川南	15 16	旧石器後半～古墳初期 中世	堅穴 22 (火炎 8 ± 2000 ± 40, ラクワ)・圓底盤 1 (10,90 ± 40)・圓底盆 3, 土器 (古墳・東屋廻廊の土器)・石壺丁・匂穴 2 (鶴鉢・シガラ)・腰石 堅穴 2 件 (撫丸 1 軒, 1,600 ± 40)・圓底盆 1 (瀬戸内系・土器)・石壺丁	151
40	国光原道路 (8,400 m)	川南町 川南	15 16 17	旧石器A-T下位 旧石器A-T上位 縄文早期 縄文早期	台形石器・鐵石・石斧・ 縫石刃器・ 集石 5 件 (火炎 8 ± 2000 ± 40, ラクワ)・圓底盤 1 (10,90 ± 40)・圓底盆 3, 土器 (火炎文・隆唐文) 堅穴 63 (9,970 ± 70)・火穴 41 (9,160 ± 60)・鑿穴 6 基・ 堅穴 7 (撫丸 1 軒, 1,600 ± 40)・圓底盆 1 (瀬戸内系・土器)・石壺丁	149
41	湯平田道路 (14,050 m)	川南町 川南	13 14 15 16	旧石器A-T上位 縄文早期 弥生中期～古墳前期 古代以降 中世	縫唇 1 基・ 角錐状石器・ 縫石刃器 (縫石刃器・明原型) 集石 23 件・ 土器 (押型文・手形文・平行文・輪山型)・石壺丁・石核 堅穴 24 件 (撫丸 1 軒, 1,900 ± 40 BP, クリ)・土器・從化焼 ・狀狀燒造 1 基・石壺丁・磨製石器・鐵石・石削・鐵石モキ・イネ 道場遺構 2 基 (波板状凹凸面) 堅穴 23 件・堅穴 3 件・糠塚 13 件・東播系・青磁・白磁・古窯口・土師器	107 152
42	西ノ別府道路 (6,420 m)	川南町 川南	16	旧石器A-T上位 縄文早期 古墳前期	ナイフ形石器・削片 集石遺構 13 基・ 土器 (押型文・貝殻文・弘法原式)・石壺・石核・石斧 堅穴 2 件 (土器・石壺・石核・石削・磨石)	124
43	尾花A道路 (21,400 m)	川南町 川南	16 17 18	旧石器A-T上位 縄文早期 弥生中期～古墳前期 古代～中世	ナイフ形石器・ 集石遺構 13 基・ 土器 (押型文・貝殻文・弘法原式)・石壺・石核・石斧 堅穴 2 件 (土器・石壺・石核・石削・磨石) 堅穴 24 件 (撫丸 1 軒, 1,710 ± 20, ブリ)・土器 (瀬戸内系)・石壺丁 石核・鐵石・狀狀燒造・堅穴 2 件 (鶴鉢・シガラ)・腰石 (コナラ・イヌ・アワ) 堅穴 25 件 (撫丸 29 基)・圓底盤 2 件・ 堅穴 26 件 (撫丸 29 基)・圓底盤 2 件	185 195

道路名	所在地	調査年度	時代	道路の内容	報告書
45 湯戸道路 (青木木道) (650 m)	高鍋町 上江	13 14	縄文早前期 縄文早期 中世	土器 (陶器文)・縫石刃・有舌尖頭器 集石遺構 5 件・土器 (押型文・無文・出付式)・石壺・油断骨盆式 留矢柱建物 1 件・土器 7・土壘 1・土器群・鐵石・茶臼・青磁・青磁	103
46 野吉第1道路 (10,600 m)	高鍋町 上江	12 13 14 15 16 17	縄文早期 古墳終末期 近世	集石 65 件 (6,670 ± 40, コナラ)・貝殻・押型文・前輪附追唐舟・土頭・轟・轟 堅穴式石室 2・堅穴 2 (1,280 ± 40, 土器埋設跡)・堆文・須恵器・鐵石 堅穴式石室 2・堅穴 2 (1,280 ± 40, 土器埋設跡)・堆文・須恵器・鐵石 土器 (押型文・貝殻文)・下置式 B 式・田村式・加賀栗山式)・打製石器 堅穴式建物 4 件・土器・土壘・鐵石・堅穴 2 (1,280 ± 40, 土器埋設跡)・堆文・須恵器・鐵石	157
47 野吉第2道路 (13,670 m)	高鍋町 上江	12 13 14 15 16 19 20	旧石器A-T下位 旧石器A-T上位 縄文早期 縄文後期 古墳中期	縫唇 78 件 (28,010 ± 220 年 BP)・ナイフ形石器・形石器・縫石刃・ 二枚加工削片・石核・局部磨製石斧・削片 縫唇 24 件 (22,350 ± 120 年 BP)・ナイフ形石器 (埋谷型・國府型)・台形石器・ スクリーン型・角錐状石器・堅穴・削片刃器・縫石刃器・圓底盤 1 (1,280 ± 40, 土器埋設跡)・ 堅穴式石室 2 (9,160 ± 50 年 BP)・堅穴 2 (8,390 ± 40)・圓底盤 3 (1,280 ± 40, 土器埋設跡)・ 土器 (押型文・貝殻文)・下置式 B 式・田村式・加賀栗山式)・打製石器 堅穴式建物 4 件・土器・土壘・鐵石・堅穴 2 (1,280 ± 40, 土器埋設跡)・堆文・須恵器・鐵石	158 172 188
48 南中原第1道路 (14,220 m)	高鍋町 上江	13 15 16 17 18	旧石器A-T下位 旧石器A-T上位 縄文早期 縄文後期 古墳後期	石器 (2) 縫唇 1 基・ナイフ形石器・石核・削片 集石遺構 19 件 (9,460 ± 30 年 BP)・土壘 13・土器 (貝殻文)・石核 堅穴式建物 1 件 (撫丸 1 軒, 1,495 ± 20 年 BP, クヌギ)・土器・堅穴 22	162 179
50 老齋室上第3道路 (老齋室・延喜寺) (6,600 m)	高鍋町 上江	13 14	縄文早期 縄文前期 古代	縫唇 6 基・ナイフ形石器・角錐状石器・縫石刃器・縫石刃 集石 31 件 (50, ± 30)・貝殻文・押型文・無文・田村式・ソノホ式 土器 (西吉野式・剪式・轆斗式・轆斗式・孔吹式)・石核 堅穴式建物 2 件 (土器・堅穴 2, 1,280 ± 40, クヌギ)・土器・堅穴 22	118
51 下耳切第3道路 (20,800 m)	高鍋町 上江	12 13 14	旧石器A-T上位 縄文早期 縄文中期 古墳終末期 ～古代	ナイフ形石器・削片丸頭器・角錐状石器・縫石刃器・縫石刃 集石遺構 32 件・土器 (押型文・貝殻文・無文・田村式・ソノホ式) 堅穴 9 件・堅穴式 32 件・土壘 14 (4,430 ± 40 イチガシ)・堅穴・春日式 古墳 2 件・堅穴式建物 8 件・堅穴 75 (土器埋設跡)・堅穴・堅穴 82・土壘基 4 ・馬蹄形土壘 2 件・土器 (金型文)・堅穴・耳窓・鉢形・石核・圓底盤	125
52 北牛敷第5道路 (18,240 m)	高鍋町 上江	12 13 18	旧石器A-T下位 旧石器A-T上位 縄文早期 縄文早期	水系型石核・二枚加工削片・縫唇 縫唇 3 件・ナイフ形石器 (今神型)・台形石器・削片丸頭器 ・角錐状石器・スクリーン型・縫石刃器・縫石刃器・縫石刃	80

53	唐木戸第1造跡 (8,500 m)	高鍋町 上江	13 14 15	旧石器 A-T 上位 縄文早期 中世	縄群1基、ナイフ形石器・角錐状石器・スクレーパー・ 箆石造跡3基・陥し穴10基、土器(貝紋、垂ノ神式) 留柱建物跡4棟、土器底器皿、樂器系須恵器	92
54	唐木戸第2造跡 (4,680 m)	高鍋町 上江	13 14	縄文草創期～早期 中世	縄群6・穴2基、打製石器 留柱建物跡1棟(310 ± 40 年BP、クヌギ脚)・留柱建物跡5棟・陥し穴17基	100
55	唐木戸第3造跡 (2,900 m)	高鍋町 上江	12 13 14	旧石器 A-T 上位 縄文早期	石器・礫石・磨石・削片 縄群7基、ナイフ形石器・台形石器・削片尖頭器・角錐状石器・ スクレーパー・細石刃器(明野型)・細石刀・穿孔手斧・垂石斧 貝石器(8,820 ± 50)・土器23・陥し穴11(11,590 ± 100)、貝紋文	105
56	唐木戸第4造跡 (8,010 m)	高鍋町 上江	12 13	旧石器 A-T 上位 縄文早期	縄群10基、ナイフ形石器・角錐状石器・スクレーパー・細石核・ 細石刀・磨石(垂・木葉・根巻)・土器(貝紋文)、打製石器、地盤勾玉	126
58	小豆第1造跡 (7,700 m)	高鍋町 上江	13 14	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期	縄群4基、ナイフ形石器・スクレーパー・石核・礫石・磨石 縄群21基、ナツブ形石器・削片尖頭器・角錐状石器・スクレーパー・ 細石刃器(原野型、野野型)・細石刀・W下位文化(48,280 ± 1,540BP) 貝石器21基・印穴6基、土器(貝紋文、筒平式)・打製石器、石器	159
60	牧内第1造跡 (14,400 m)	高鍋町 上江	12 13 14 15	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期	縄群1基、台形磨石器・スクレーパー・礫石・磨石・削片 縄群21(19,030 ± 90)・土器25、ナイフ形石器(圓筒型・圓谷型)・ 台形石器・削片尖頭器・角錐状石器・石核・削片・磨石・水晶 閃光ビット群3基・土坑群、打製石器、草創期小形文	163
61	牧内第2造跡 (5,500 m)	高鍋町 上江	12 13	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文草創期 縄文早期	礫石・砾石 縄群8基・土坑25、ナイフ形石器・削片尖頭器・角錐状石器・磨石・ スクレーパー・細石刃器・細石刀・削片(水晶) 土器(貝紋文、長柄鉈型文) 箆石造跡1基・陥し穴1基、打製石器	168

	遺跡名	所在地	開発年度	時代	遺跡の内容	側方番
62	音明寺第1造跡 (5,500 m)	新富町 新田	12 13	旧石器 A-T 上位 縄文早期	縄群15基(20,220 ± 110)・陥し穴2基、ナイフ形石器・角錐状石器・ スクレーパー・石核・礫石・磨石・削片 箆石造跡2・4・6基(19,370 ± 60)・陥し穴2基、土器(無文、押型文・ 貝紋文)・筒平式・手斧(山形)・打製石器、礫石・鐵器 遺跡状造跡10基(波板状凹凸面)	102
63	音明寺第2造跡 (8,500 m)	新富町 新田	12 13 14	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期 古代～中世	縄群5基、ナイフ形石器・台形石器・削片尖頭器・角錐状石器・ スクレーパー・石核・礫石・磨石・削片・劍片 印穴3基・陥し穴2基、土器(無文・押型文・サトコロ)・打製石器 遺跡状造跡22基(波板状凹凸面)・露島高馬スコリア・露島新野亨原粗石群	81 94
64	東昭原第1造跡 (14,800 m)	新富町 新田	13 14 15 16	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期	縄群10基(30,980 ± 320 BP)、ナイフ形石器・スクレーパー・磨石 縄群4基、ナツブ形石器・削片尖頭器・角錐状石器・筒平式・ 筒孔30・陥し穴1(12,800 ± 80)、ナイフ形石器(國府型・北牛型)・ 角錐状石器・スクレーパー・磨石・石核・削片 貝石造跡3基(8,270 ± 40)・土器(燃沸文・圓文)・石器	127 128 140
65	東昭原第2造跡 (7,100 m)	新富町 新田	13 14	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期	縄群10基、耐候性石器・ナイフ形石器 縄群15基、ナツブ形石器・角錐状石器・磨石・石核・細石刃器 陥し穴1基、土器(平字式)・打製石器・土坑1(高馬スコリア)	98
66	東昭原第3造跡 (7,200 m)	新富町 新田	12 13	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期 弥生	縄群4基、ナイフ形石器・削片尖頭器・磨石・石核・細石刃器 縄群8基、ナイフ形石器・角錐状石器・台形石器・二次加工削片・ 磨石・磨石・細石核・磨石・削片 貝石造跡3基・土坑1・土器(押型文・無文)・打製石器 土坑2基	87
67	西昭原第1造跡 (13,450 m)	新富町 新田	12 13 14	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期 外生中期後半～後期初期	縄群1基 縄群2基、ナイフ形石器・磨石・磨石・削片 第五石造跡3基・土坑2基、土器(貝紋文・撫布文)・打製石器・磨石 蟹六律建物跡3軒・留柱建物跡3棟、土器(瓶内口式)・慈製石器・ 灰土・蹲形土製品	82
68	西昭原第2造跡 (13,200 m)	新富町 新田	12 13 14 15	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期 飛生第一古墳初期	縄群5基、ナイフ形石器・二次加工削片・磨石・磨石・削片 縄群8基・點穴6(13,350 ± 60)、ナイフ形石器・角錐状石器・磨石 スクレーパー・石核・二次加工削片・磨石・磨石・削片 集石造跡7基・陥し穴1・土坑18、貝紋文・磨石・圓窓文・土器(轟内口式)・石盾・鉛製的針 點穴4(8,800 ± 80)・土器(撫布文)・土器(瓶内口式)・磨石・鉛製的針	82 106 109
69	上新開造跡 (4,200 m)	新富町 新田	14 15	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期	縄群3基、ナイフ形石器・スクレーパー・二次加工削片・磨石 縄群3基、ナイフ形石器・台形石器・スクレーパー・角錐状石器・ 刮削尖頭器・磨石・磨石・石核・削片 集石造跡5基・陥し穴1・土坑24、土器(押型文)・打製石器	129
71	路大今造跡 (7,670 m)	新富町 新田	12 13 14 16 17	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期	縄群13基、ナイフ形石器・石核・磨石・磨石・削片 縄群4基(20,800 ± 190BP・アラ科)、ナイフ形石器・台形石器・ 角錐状石器・スクレーパー・磨石・石核・削片 集石造跡5基・陥し穴1・土坑24、土器(8,820 ± 50)・打製石器	110 153
72	永平田第1造跡 (2,190 m)	新富町 新田	12 13 14 16	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期	縄群3基、鐵器・磨石・削片 縄群・磨石・磨石・石核・削片 集石造跡1基、打製石器・スクレーパー・磨石 縄群8基、ナイフ形石器(圓筒型)・スクレーパー・角錐状石器・ 二次加工削片・磨石・磨石・削片	114
73	永平田第2造跡 (2,150 m)	新富町 新田	12 13 14 16	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位 縄文早期	縄群6基・土坑4基、土器(貝紋文・無文)・打製石器・磨石 集石造跡6基・土坑4基、土器(貝紋文・無文)・打製石器・磨石	134

74	尾小原遺跡 (14,178 m)	新富町 新田	12 14 15 16 17	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位  縄文早期 弥生後半~後半	縄群 5 基、削片・砂片 縄群 16 基、ナイフ形石器・有形石器・スクレイバー・角擦状石器・ 二次加工削片・磨石・磨石・磨石刃・磨石刃・削片 集石 65 件 (8,240 ± 40, コナラ特)、砂穴 7 件 (300 ± 40)、鑿穴 9 件、 (坪型・貝紋文、田村・桑ノ丸式)、石器・石錐・石斧・磨石、磨石、磨石 土器 (黑川式、孔列文)、打製石斧・石錐・石斧 堅忍物 3 件、土器・磨製石斧 土器 (轍文式)	117 133 150
75	向原第 1 遺跡 (4,000 m)	新富町 新田	11 12 13 14	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位  縄文中期 弥生後半~古墳初期	削片 縄群 4 基、ナイフ形石器・有形石器・スクレイバー・角擦状石器・ 二次加工削片・石錐・石核・磨石・磨石・削片 集石 42 件 (2,100 ± 20, 貝紋文)、砂穴 11 件、陷穴 1 件、土器 (貝紋文・無文、平手式・ 中空式)、打製石器・磨石・磨石・台石・晚期孔列文土器 堅忍物 6 件 (椎木 2 件 (1,060 ± 50, ヤブツバ式))、土器・石瓶丁・鉛錠・鉛片・ 磨石・磨石・磨石 (イズ 2,060 ± 40 年前)、サザゲ属・モモ・ドングリ)	119
77	藤山第 1 遺跡 (2,542 m)	新富町 新田	13 14 16	旧石器 A-T 上位  縄文早期	ナイフ形石器・スクレイバー・磨石・石核・削片 集石 42 件 (2,100 ± 50, 土坑 5 件)、土器 (貝紋文・押型文・無文、平手式)、 打製石器・石錐・石核・磨石・磨石・施墨土器 (孔列文・貝紋文)	142
78	藤山第 2 遺跡 (1,000 m)	新富町 新田	12	縄文早期  縄文中期	集石 5 基、土坑 1 件、土器 (押型文、田村式)、打製石器・磨石 土器 (轍文式)、縄文中期 (2,200 ± 20 年前)、近世遺物	95
79	宮ノ東遺跡 (9,310 m)	西都市 西高	11 15 16	旧石器  縄文早期 縄文後期~地層  弥生中期~後期 古墳中期~後期 古代  中世~近世	縄群 4 基、ナイフ形石器・有形石器・角擦状石器・磨石・削片 土器 (貝紋文・押型文)、前期土器 (轍文式)、糞土中第 3 土器 (和元式) 堅忍物 6 件 (軒型)、土器 (孔列文・突部文)、円錐状土製品・石器・ 石核・石錐・石核・石核 (土器)、打製石器・磨石 堅忍物 38 件、土器 (伊予式)、石瓶丁・石皿・磨製石器・磨石 堅忍物 418 件 (1,630 ± 40, 土器埋設段)、削片、上部・鉛錠・耳環 堅忍物 2 件 (土器埋設段)、土器 (押型文・無文)、土器・磨石・堅忍物・ 堅忍物 6 件 (軒型)、土器 (伊予式)、堅忍器・布痕土器・丸瓦・陶器・石器 中空型 4 件・見附合 2 件・鋸切 1 件、藏骨器 (常滑式)・土瓶叩坏・ 堅忍物 175 件、土器 (轍文式)、堅忍器・茶葉器 (190 ± 40 年前)・輪入陶器・ 堅忍物 10 件、土器・石器・堅忍・輪入土器	173

## ⑤ 西都~清武間 (28遺跡18冊)

遺跡名	所在地	調査年度	時代	遺跡の内容	報告書
2 大津埋敷遺跡 (500 m)	西都市 熊野町	10	平安時代 古代~近世	土器叩坏・内黒土器・布痕土器・張忍器 堅忍物 1 件、堅忍器・布痕器・磨石・削片	32
4 平田追跡遺跡 (10,530 m)	宮崎市 佐土原町 平田島	8 9	古墳終末期 古代 中世	横穴墓 1 基、堅忍器 堅忍器・土瓶叩坏 (全教整型)・堅忍器・布痕土器・丸瓦・陶器・石器 中空型 4 件・見附合 2 件・鋸切 1 件、藏骨器 (常滑式)・土瓶叩坏	29
5 別府原第 2 遺跡 (7,950 m)	西都市 熊野町 吉崎 佐土原町 平田島	8 9	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位  縄文早期	縄群 5 基、一次加工石器・磨石・削片 ナイフ形石器・角擦状石器・スクレイバー・磨石・石核 ・細石核 (軒型式・野呂型)・磨石刃・削片 堅忍物 2 件、集石 4 件 (0,220 ± 60)、砂穴 507 件 (0,700 ± 100, タリ付)、火炎料・火炎料・火炎料 (コナラ子孫)・配石 11 件、 土器 (貝紋文・腰凹式)・石器・石核・石核・堅忍物・打製石器・石錐	61
5 別府原第 2 遺跡 (50 m)	西都市 熊野町	9	旧石器 A-T 上位  縄文早期	スクレイバー・二次加工削片・磨石・削片 集石 2 件 3 基、土器 (押型文・手山山式)・複形石器・磨石	61
6 西ヶ原追跡遺跡 (920 m)	宮崎市 佐土原町 鹿野田	9	旧石器 A-T 上位  縄文早期	坚忍物 2 件 (土器)・土器 (押型文・押型文・丸瓦・火炎付)・ 石器・スクレイバー・同层堅忍石斧・磨石・石器・石器	61
7 上ノ原遺跡 (11,002 m)	宮崎市 佐土原町 西上原	8 9	旧石器 A-T 下位 旧石器 A-T 上位  縄文早期 中世	土器 1 件、ナイフ形石器・スクレイバー・磨石・磨石・削片 縄群 2 件、陽石 1 件 (11,370 ± 30)、ナイフ形石器・台形石器・削片尖頭器 ・角擦状石器・スクレイバー・磨石・磨石・削片 集石 26 件 1 基、砂穴 38 件 (9,230 ± 50 年前)・土坑 8 件、土器 (貝紋文・ 押型文・無文・加賀式・吉田式・桑ノ丸式)、打製石器・磨石 土器 (孔列文・堅忍物)・堅忍物 1 件	58
8 下原敷遺跡 (11,657 m)	宮崎市 佐土原町 西上原	8 9	旧石器 A-T 上位  縄文早期	縄群 4 件、ナイフ形石器 (因房型)・削片尖頭器・角擦状石器・ スクレイバー・石刀・石器・石核・細石核 (船型型)・磨石刃 集石 26 件 3 基、阳石 38 件 (9,190 ± 60 年前)、土器 (貝紋文・吉田式) 打製石器・石斧・石器・磨器・磨石・石器	56
9 梅ヶ島遺跡 (11,072 m)	佐土原町 西上原	8 9	古代~中世	水桶器・昭和器・土瓶叩坏・布痕土器・張忍器	32
11 長原原遺跡 (10,474 m)	宮崎市 佐土原町 西上原	8 9	旧石器 A-T 上位  縄文早期	縄群 7 基、ナイフ形石器 (伴谷型)・有形石器・削片尖頭器・ 角擦状石器・スクレイバー・石刀・石器・石核・細石核 (船型型)・磨石刃 細石核 (船型・野呂型・昭原型)・磨石・削片 集石 26 件 1 基、砂穴 38 件 (9,160 ± 50 年前)・カサ・土坑 16 件・鑿穴 9 件、 土器 (貝紋文・押型文・中原式)・打製石器 西ヶ原式・清文中期・船元式	57
12 上ノ原遺跡 (13,225 m)	佐土原町 西上原	8	旧石器 A-T 上位  縄文早期	縄群 2 件、ナイフ形石器・有形石器・磨石・磨石・磨石 土器 (貝紋文・押型文・手山山式)	40
14 彦元道跡 (6,586 m)	国富町 本脇	8 9	旧石器 A-T 上位  縄文中期 弥生後期	縄群 3 件、ナイフ形石器・有形石器・角擦状石器・スクレイバー・石核 細石核 (船型)・磨石・削片 集石 44 件、土器 (貝紋文・熱希文・平治式・塞ノ神式)・打製石器 ・局部磨削斧・磨石・石器・石核 土器 (轍文式)	44

東九州自動車道の  
調査成果

15	井口田遺跡 (1,200 m)	国富町 本脇	8	弥生中期～古墳 中世以降	自然石路3条、弥生土器・磨製石器・土器器 水路跡、志賀地	44
16	木脇遺跡 (9,967 m)	国富町 本脇	8 9	旧石器 A-T 上位 調文草創期 調文早期	縄文2基、ナイフ形石器・削刃丸頭器・角状石器・スクレイバー・ 縄文2基、ナイフ形石器・削刃丸頭器・角状石器・スクレイバー・ 土器（陶器文）	43
			8 9	弥生早期～中期 古墳後期 古代 中世	集石遺構83基・卯穴47基、土器（貝紋文・押型文、知恵式・下剥塗式・ 釜ノ火式・手向山式・平底式・茎ノ神式）・打製石器・磨石 石器丁（擦切・抉り）、磨製石器・土器（下城式・中城式） 堅穴埋物43（土器埋設物）、堅立柱埋物4件、土師器・漆器・瓦・鐵器・ 堅穴2件（鏡）・堅立柱柱物4件、土師器・漆器・軒用磚・布紋土器 土器窯1基、土師器・刀子	43
17	琴原遺跡 (3,300 m)	国富町 琴原	8 9	旧石器 A-T 上位 調文草創期 調文早期	細石核・磨石刃・刮削 集石遺構2基・埋納構築1、陰陽文（赤彩・ベンガラ）、局部磨製石斧 集石遺構11基・土器（貝紋文・押型文、知恵式・下剥塗式・手向山式） ・打製石器・磨石	44
			8 9	弥生前期～後期 古墳前期 古代	土器窯3基・大往遣2基・輕石製品（島・家）・磨製石器 古墳1基・土器器・鉄劍・刀子・鐵劍 堆積・杭・中世・水路跡	44
18	中別府遺跡 (4,100 m)	宮崎市 金崎	9	古代 中世	土器器・磨石器（芋寸）・男山山・布紋土器・須恵器 輪・圓筒形器・大日系器・縄引口	30
19	曾岡第2遺跡	宮崎市 金崎	9	調文初期 調文後期	土器（骨頭文）・調文後期・集石遺構1基・土器（縫口）・石椎 土器（孔吹文）・打製石斧	48
20	阿良敷遺跡 (32,600 m)	宮崎市 牟原	8 9	古墳 中世	水路跡・堆積・層（クソノキ）・律張部材・土師器・須恵器 水路跡・堆積・先史中期土器（唐破底名）	39
22	内道跡 (4,400 m)	宮崎市 高吉	19	古墳前期～後期 中世	古墳3基・瓶・瓶底2基・土師器・鉄劍・刀子・鐵劍・骨管 輪・輪・板瓦・磨盤・鐵鋸・鐵器（瓶蓋・釜蓋）・土師器・輪・圓筒形器	59
25	内谷田・柳迫遺跡 (2,820 m)	宮崎市 高麗・浮間	8	古代	水路跡（周壁）・水路（L, 1.270 ± 60）・土師器・布紋土器・須恵器	30
26	本城跡 (17,226 m)	宮崎市 古城町	8 9	調文早期 中世	集石遺構3基 曲面・堅切・土器・堅立柱埋物6條・土坑6基・土師器・石鍋 輪・圓筒形器（白磁・黑磁）・圓筒陶器（橢形・肥前）・貝貯	60
27	白ヶ野第2遺跡 白ヶ野第3遺跡 (5,700 m)	宮崎市 湊川町 船引	7 8	旧石器 A-T 上位 調文草創期 調文早期	細石刀核・磨石刃・石斧・スクレイバー・刮削 集石遺構6基・土器（瓜形文）・奈良子菊蟹壳斧 集石遺構90（8,220 ± 70）カタリ・貝配遺構1・土坑2・磨石埋納遺構・ 土器（貝紋式・押型文・撫糞文・知恵式・下剥塗式・釜ノ火式・ 下剥生口式・妙火式・平行式・茎ノ神式）・打製石器・局部磨製石器・ スクレイバー・石器・磨石・鐵狀石・圓筒形器 土器（西唇形式・骨盆式）・調文前期・土器（阿高式・大平式） 堅穴埋物6件・軒・隔・火風・火尾・土器（若崎式・市来式・丸尾式） 打製石器・スクレイバー・磨石・磨石・土器・圓筒形器・周文土器 瓶（柱柱）5個・土師器・内黒土器・青磁	52 62
28	上ノ瀬第1遺跡 (2,104 m)	宮崎市 湊川町 船引	7	調文早期	縄文2基・ナイフ形石器・スクレイバー・二次加工削片・石核・ 細石刀核（野猪・休憩型・縫合刃）・刮削 土坑2基・堅穴火爐1基・土器（押型文・手向山式・平底式） 打製石器・磨石・前周管強式・轟式・矛生・石劍・磨製石器	62
29	極境原第2遺跡 (1,200 m)	宮崎市 湊川町 船引	7	調文早期 調文後期	集石遺構8基（8,500 ± 60年BP）・土器（貝紋文・押型文・前平式・ 下剥塗式・茎ノ神式）・打製石器・磨石	33
30	極境原第1遺跡 (6,300 m)	宮崎市 湊川町 船引	7	調文早期	集石遺構8基（8,500 ± 60年BP）・土器（貝紋文・押型文・前平式・ 下剥塗式・茎ノ神式）・打製石器・磨石	47
31	杉本原遺跡 (7,140 m)	宮崎市 湊川町 今村	7	旧石器 A-T 上位 調文草創期 調文早期	ナイフ形石器・スクレイバー・石核・細石刃 土器（隨形器・瓜形文） 集石遺構2基・コナド・土器3個・穴1、土器（押型文・貝紋文・無文・ 下剥生口式・田村式・前平式・吉田式・下剥塗式・茎ノ火式・茎ノ神式） 打製石器・スクレイバー・磨石・磨石・台石	33
32	下星野遺跡 (4,146 m)	宮崎市 湊川町 今村	7	旧石器 A-T 上位 調文早期	縄文2基・細石刀核・磨石刃・スクレイバー・二次加工削片 集石遺構14基・土器（貝紋文・無文・前平式・茎ノ神式）・打製石器・ スクレイバー	47
			7	調文後期～古墳前期	土坑1基・土器（市来式・草野式）・石鍋・石舟・磨石・石排 堅穴埋物6件・軒・土器	47
33	永ノ原遺跡 (10,153 m)	宮崎市 湊川町 今村	7 8	旧石器 調文早期	細石刀核・磨石刃 集石遺構14基・土器（貝紋文・前平式・茎ノ神式） 打製石器・スクレイバー・凹石・磨石・石核	33

第24表 東九州自動車道（県境～清武間）発掘調査に伴う報告書刊行一覧

## 『宮崎県埋蔵文化センター発掘調査報告書』

## ① 東九州自動車道（県境～北川間）

道路名			刊行年 (刊行年度)
第 189 集	東九州 1	海原寺遺跡・市ノ中遺跡・中野内遺跡 森ノ上遺跡（寺内・古墳時代編）カラ石の元遺跡	2010 (21 年度)
第 196 集	東九州 2	野久灰呂島遺跡・森ノ上遺跡	2011 (22 年度)
第 198 集	東九州 3	室田古墳群・室田城跡	2011 (22 年度)

了遺跡 3 編

## ② 東九州自動車道（門川～日向間）

道路名			刊行年 (刊行年度)
第 139 集	東九州 1	分原遺跡	2006 (18 年度)
第 176 集	東九州 2	坂手遺跡	2008 (19 年度)
第 199 集	東九州 3	坂手遺跡（第 3・4 次調査）	2011 (22 年度)
第 210 集	東九州 4	福良城跡	2012 (23 年度)

了遺跡 4 編

第 132 集	東九州自動車道（門川～日向間）開拓埋蔵文化財発掘調査機要報告書 I	2006 (17 年度)
---------	-----------------------------------	--------------

## ③ 東九州自動車道（日向～都農間）

道路名			刊行年 (刊行年度)
第 200 集	東九州 1	熊石第 1 遺跡	2011 (22 年度)
第 201 集	東九州 2	平山下原遺跡	2011 (22 年度)
第 202 集	東九州 3	内野ヶ遺跡・内野ノ第 2・第 3 遺跡・内野ノ第 4 遺跡	2011 (22 年度)
第 212 集	東九州 4	岡原跡（第 6・7 次調査）・坂元第 2 遺跡	2012 (23 年度)
第 213 集	東九州 5	向原中尾第 1・2 遺跡・向原中尾第 4 遺跡	2012 (23 年度)
第 214 集	東九州 6	奈良第 2 遺跡	2012 (23 年度)
第 215 集	東九州 7	木本平原・2 遺跡	2012 (23 年度)
第 216 集	東九州 8	浜原第 1 遺跡（第 2 次調査）・佐名第 2 遺跡	2012 (23 年度)
第 223 集	東九州 9	岡原跡（第 9・13・15 次調査）	2013 (24 年度)
第 226 集	東九州 10	長野遺跡・舟川第 2 遺跡（舟川佐農遺跡）	2013 (24 年度)
第 229 集	東九州 11	向原中尾第 2 遺跡（第 3 次調査）・向原中尾第 5 遺跡・向原中尾第 6 遺跡	2014 (25 年度)
第 230 集	東九州 12	岡原跡（第 16 次調査）・馬込山遺跡第 2 遺跡	2014 (25 年度)

了遺跡 12 編

## ④ 東九州自動車道（都農～西都間）

道路名			刊行年 (刊行年度)
第 80 集	東九州 2	北牛乳第 5 遺跡・綱原第 3A 遺跡	2003 (15 年度)
第 81 集	東九州 1	吉明寺第 2 遺跡	2003 (15 年度)
第 82 集	東九州 3	西原第 1 遺跡・西原第 2 遺跡 D 区（鬼界アカヒヤ火山灰上位）	2004 (15 年度)
第 87 集	東九州 4	東原第 1 遺跡	2004 (15 年度)
第 92 集	東九州 5	城原戸ノ第 1 遺跡	2004 (16 年度)
第 94 集	東九州 6	吉明寺第 2 遺跡（二度調査）	2005 (16 年度)
第 95 集	東九州 7	森山第 2 遺跡	2005 (16 年度)
第 98 集	東九州 8	東原第 2 遺跡	2005 (16 年度)
第 100 集	東九州 9	城原戸ノ第 2 遺跡	2005 (16 年度)
第 102 集	東九州 10	吉明寺第 1 遺跡	2005 (16 年度)
第 103 集	東九州 11	羽川河跡	2005 (16 年度)
第 104 集	東九州 12	板内第 1 遺跡（第 4 次調査）	2005 (16 年度)
第 105 集	東九州 13	佐木戸第 3 遺跡	2005 (16 年度)
第 106 集	東九州 14	西原第 2 遺跡（第一次調査）	2005 (16 年度)
第 107 集	東九州 15	南原山遺跡（一次調査）	2005 (16 年度)
第 108 集	東九州 16	牧内第 2 遺跡	2005 (16 年度)
第 109 集	東九州 17	西原第 2 遺跡（二度・三次）	2005 (16 年度)
第 110 集	東九州 18	鷹子山遺跡（一次調査）	2005 (16 年度)
第 114 集	東九州 19	木手田第 1 遺跡	2005 (17 年度)
第 115 集	東九州 20	綱原第 2 遺跡	2005 (17 年度)
第 116 集	東九州 21	前ノ田村上第 1 遺跡	2005 (17 年度)
第 117 集	東九州 22	屋尻原遺跡（一次調査）	2005 (17 年度)
第 118 集	東九州 23	茅原坂上第 3 遺跡	2005 (17 年度)
第 119 集	東九州 24	向原第 1 遺跡	2006 (17 年度)
第 120 集	東九州 25	新原第 1 遺跡（一・二・三・四次調査）	2006 (17 年度)
第 121 集	東九州 26	市納上第 1 遺跡・市納上第 4 遺跡	2006 (17 年度)
第 122 集	東九州 27	市原魔免遺跡・市石・木津本遺跡	2006 (17 年度)
第 123 集	東九州 28	大津本第 2 遺跡・大内原遺跡	2006 (17 年度)
第 124 集	東九州 29	西ノ別府遺跡	2006 (17 年度)
第 125 集	東九州 30	下井原第 1 遺跡	2006 (17 年度)
第 126 集	東九州 31	佐木戸第 4 遺跡	2006 (17 年度)

第 127 集	東九州 32	東の原第 1 道路 (二次調査)	2006 (17 年度)
第 128 集	東九州 33	東の原第 1 道路 (+ - 四次調査)	2006 (17 年度)
第 129 集	東九州 34	上野開道跡	2006 (17 年度)
第 133 集	東九州 35	尾小屋道跡 (第 - 次調査)	2006 (18 年度)
第 134 集	東九州 36	五日市第 2 道路	2006 (18 年度)
第 140 集	東九州 37	東の原第 1 道路 (一次調査)	2006 (18 年度)
第 141 集	東九州 38	豊口第 1 道路 豊口第 2 道路	2007 (18 年度)
第 142 集	東九州 39	福山町第 1 道路	2007 (18 年度)
第 143 集	東九州 40	中ノ泊第 1 道路 (一 - 二)	2007 (18 年度)
第 144 集	東九州 41	中ノ泊第 3 道路	2007 (18 年度)
第 147 集	東九州 42	朝原原道跡 尾立第 3 道路	2007 (18 年度)
第 148 集	東九州 43	八幡第 2 道路	2007 (18 年度)
第 149 集	東九州 44	国原原道跡	2007 (18 年度)
第 150 集	東九州 45	尾小屋道跡 (第一次調査)	2002 (18 年度)
第 151 集	東九州 46	牛坂道跡	2002 (18 年度)
第 152 集	東九州 47	唐木原道跡 (一次調査)	2007 (18 年度)
第 153 集	東九州 48	鷺谷寺道跡 (一次調査)	2007 (18 年度)
第 156 集	東九州 49	立野第 5 道路 立野第 2 道路	2007 (18 年度)
第 157 集	東九州 50	野口第 1 道路	2007 (18 年度)
第 158 集	東九州 51	野口第 2 道路 (第一次調査) 後期旧石器時代～彌文時代早期	2007 (18 年度)
第 159 集	東九州 52	小金第 1 道路	2007 (18 年度)
第 161 集	東九州 53	南ノ田村上第 2 道路	2007 (19 年度)
第 162 集	東九州 54	南中原第 1 道路 (一)	2007 (19 年度)
第 163 集	東九州 55	牧内第 1 道路 (一 - 二 - 三次調査)	2007 (19 年度)
第 167 集	東九州 56	中ノ泊第 2 道路	2008 (19 年度)
第 169 集	東九州 57	尾立第 2 道路	2008 (19 年度)
第 170 集	東九州 58	布川上第 2 道路	2008 (19 年度)
第 172 集	東九州 59	野口第 2 道路 (第二分掛 異文時代後期 - 楕期、弥生時代、古墳時代、古代以降編)	2008 (19 年度)
第 173 集	東九州 60	百々東道跡	2008 (19 年度)
第 179 集	東九州 61	南中原第 1 道路 (一)	2008 (20 年度)
第 185 集	東九州 62	尾花 A 道路 (1) 古石器時代～彌文時代編	2009 (20 年度)
第 188 集	東九州 63	野口第 2 道路 (一 - 二 - 次調査)	2010 (21 年度)
第 194 集	東九州 64	細見第 1 道路 (五次調査)	2011 (22 年度)
第 195 集	東九州 65	尾花 A 道路 (弥生時代以降編)	2011 (22 年度)
第 197 集	東九州 66	南ノ田村上第 2 道路 (二 - 三)	2011 (22 年度)

29 道路 66 編

## ⑤ 東九州自動車道（西都～清武間）

道跡名	刊行年 (刊行年度)
第 29 集 東九州 I 平川道跡	2000 (11 年度)
第 30 集 東九州 II 内宮田道跡 椎道跡 中別府道跡	2001 (12 年度)
第 32 集 東九州 III 梅ヶ島道跡 大辻原敷道跡	2001 (12 年度)
第 33 集 東九州 IV 植穂原野 2 道路 佐木原道跡 木ノ原道跡	2001 (12 年度)
第 39 集 東九州 V 町原敷道跡	2001 (12 年度)
第 40 集 東九州 VI 上ノ泊道跡	2001 (12 年度)
第 41 集 東九州 VII 木脇道跡	2001 (12 年度)
第 44 集 東九州 VIII 松元道跡 井出口道跡 廉原道跡	2001 (12 年度)
第 47 集 東九州 IX 植穂原野 1 道路 上足野道跡	2001 (12 年度)
第 48 集 東九州 X 舟岡第 2 道路	2001 (12 年度)
第 52 集 東九州 XI 白ヶ野第 2 - 第 3 道路 (第 1 分掛 異文時代草創期 - 早期編)	2002 (13 年度)
第 56 集 東九州 XII 下原敷道跡	2002 (13 年度)
第 57 集 東九州 XIII 民衆原道跡	2002 (13 年度)
第 59 集 東九州 XIV 上ノ原道跡	2002 (13 年度)
第 59 集 東九州 XV 道内道跡	2002 (13 年度)
第 60 集 東九州 XVI 本城跡	2002 (13 年度)
第 61 集 東九州 XVII 別府原道跡 西ヶ原道跡 別府原第 2 道路	2002 (13 年度)
第 62 集 東九州 XVIII 白ヶ野第 2 - 第 3 道路 (第 2 分掛 異文前期～中 - 近世編) 上の原第 1 道路 (H 地区)	2002 (13 年度)

29 道路 18 編

# 図 版





調査区全景（西から）



作業風景（東から）



Tr1 土層断面（南西から）



Tr2 土層断面（南西から）



Tr3 土層断面（北西から）

図版 2



VI層 散礫（北東から）



SI1 （東から）



SI2 （東から）



SI3 （東から）



SI4 （南東から）



SP2 焼土検出状況（南東から）



SP1・2 完掘状況（南東から）



SP3 完掘状況（北から）

図版3



SP4-5・6・7・8 完掘状況（南東から）



SP9 完掘状況（西から）



SI5 （北東から）



SI6 （東から）



SI7 （東から）



II層下段 完掘状況（北から）

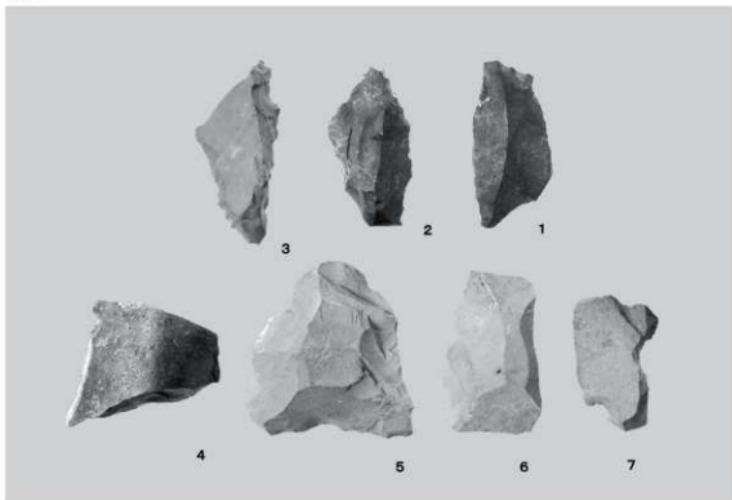


SE2 完掘状況（南から）

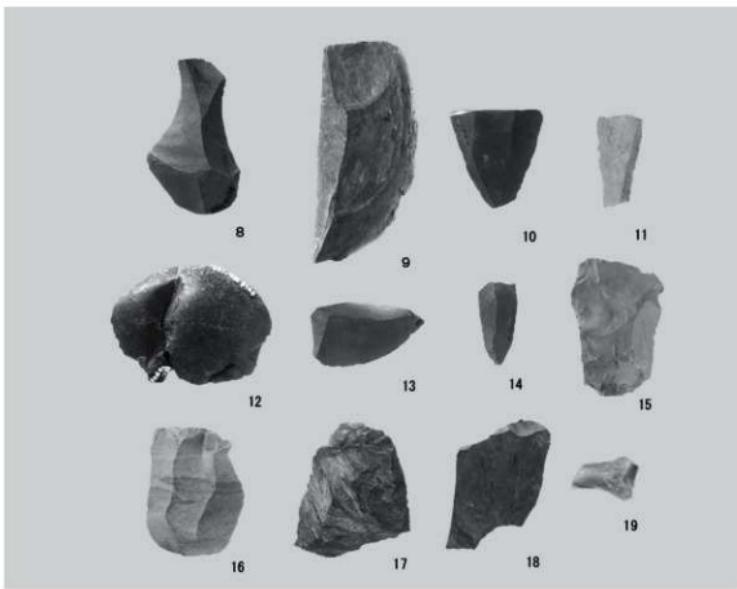


SC3 完掘状況（西から）

図版4

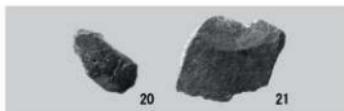


後期旧石器時代の遺物



後期旧石器時代の遺物

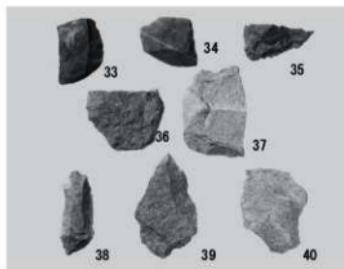
図版 5



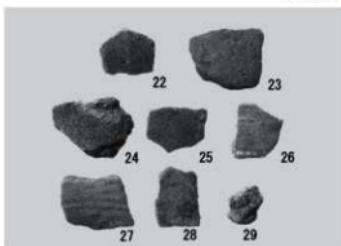
炉穴（第2群）出土遺物



縄文時代早期の石器



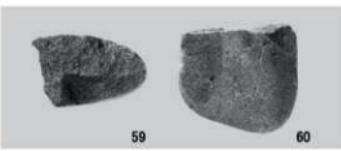
縄文時代早期の石器



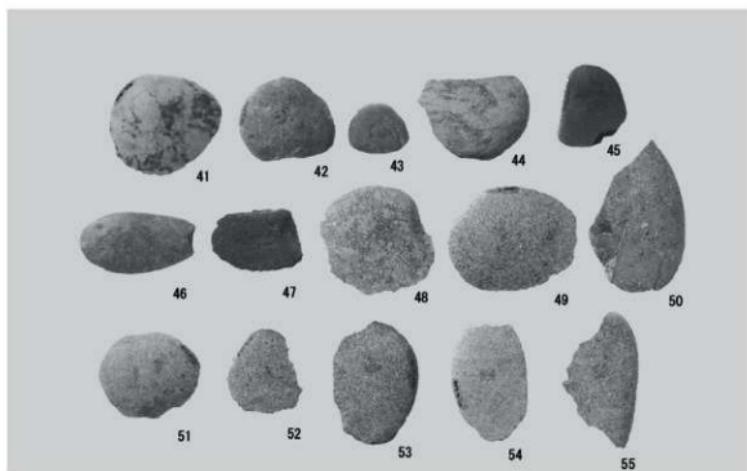
縄文時代早期の土器



縄文時代早期の石器

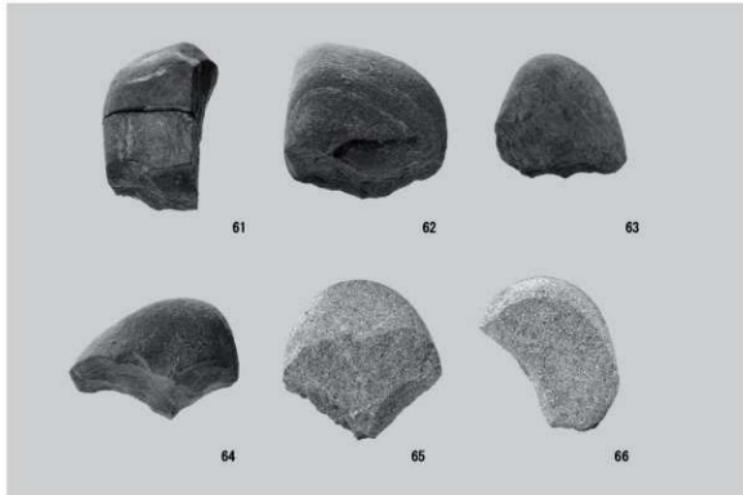


縄文時代早期の石器



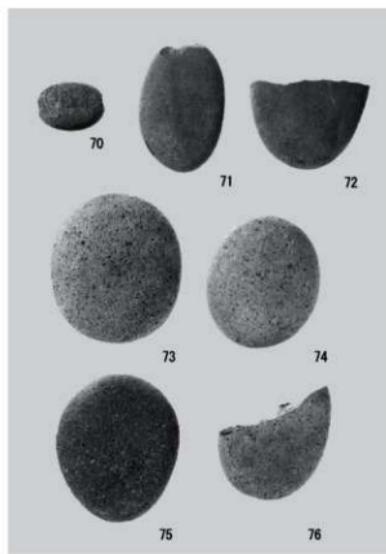
縄文時代早期の石器

図版 6

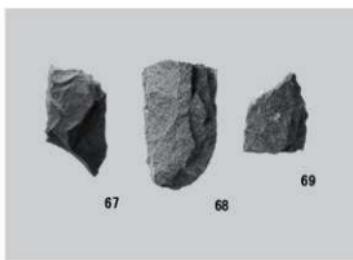


縄文時代早期の石器

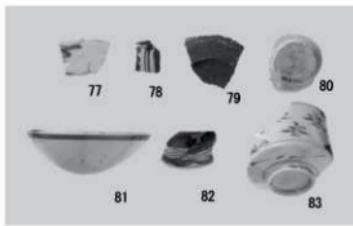
岡  
第16次



縄文時代早期の石器



縄文時代早期の石器



陶磁器



調査区全景



調査区（南より）



作業風景

図版 8



土層断面（北西より）



散礫（東より）



散礫（東より）



SI1 （東より）



SI1 完掘（北東より）



SI2~4 （北西より）



SI5~7 配石（西より）



SI5~7 配石（北より）



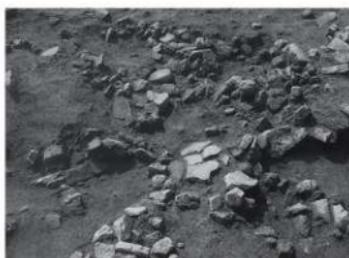
SI18 (南西より)



SI19 (北西より)



SI10-11 (北より)



SI12-22 (北西より)



SI12-22 完掘 (北西より)

図版10



SI12~22 配石（北西より）



SI24 （南西より）



SI24 配石（南西より）



SI23~24 完掘（北東より）



SI25 （北より）



SI26~28 （北西より）



SI26~28 配石（北西より）



SI26~28 完掘（北西より）



SI29 (北西より)



SI30 (南東より)



SI31-32 (南東より)



SI31-32 完掘 (北より)



SI33 (南より)



SI34 (南西より)



SI35 (南より)



SI36 (北より)

図版12



SI37~40 (南より)



SP1 完掘 (北より)



SC1 (南東より)



SZ1 (南東より)



埋納土坑出土遺物 (東より)

図版13



SZ1 土層断面図（東より）



SZ1 完掘（西より）



SZ1 完掘（北東より）

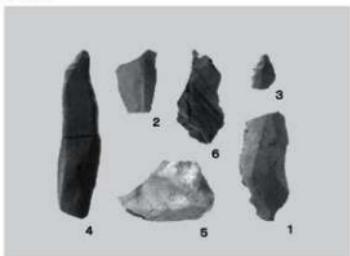


SE1 (西より)

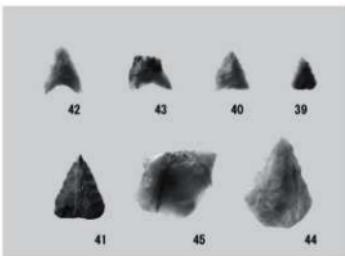


SE1・竪穴状遺構（北東より）

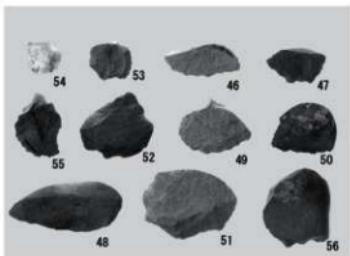
図版14



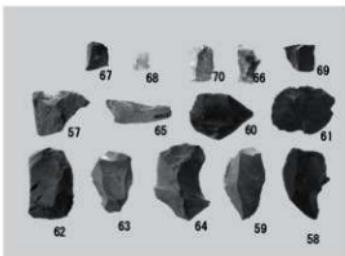
旧石器時代石器



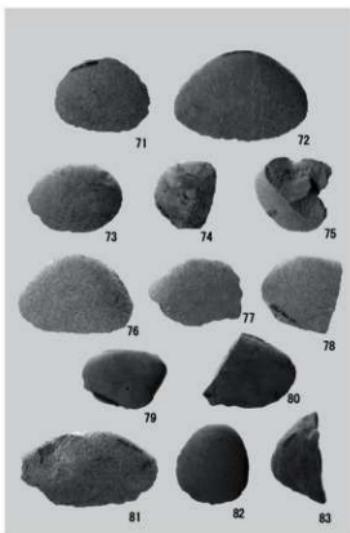
縄文時代早期石器（1）



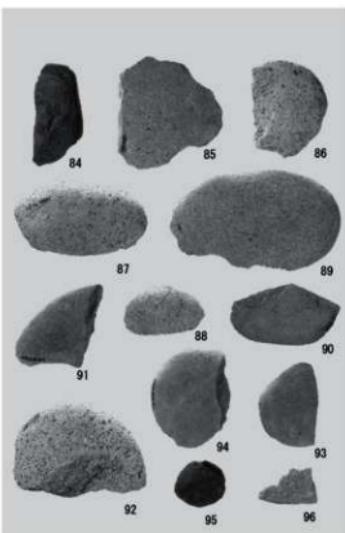
縄文時代早期石器（2）



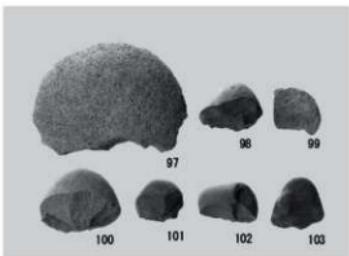
縄文時代早期石器（3）



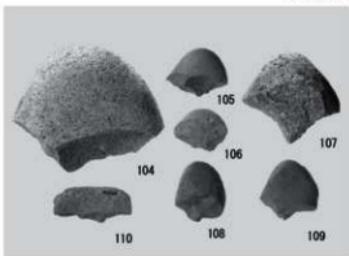
縄文時代早期石器（4）



縄文時代早期石器（5）



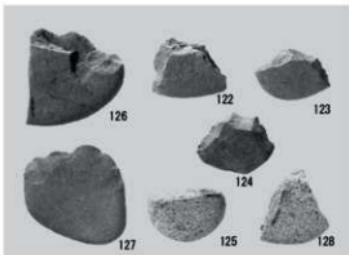
縄文時代早期石器（6）



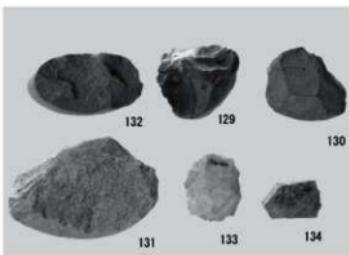
縄文時代早期石器（7）



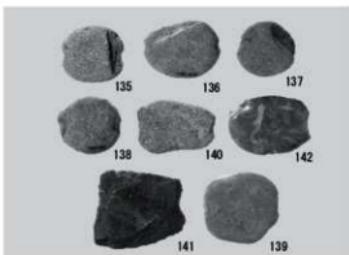
縄文時代早期石器（8）



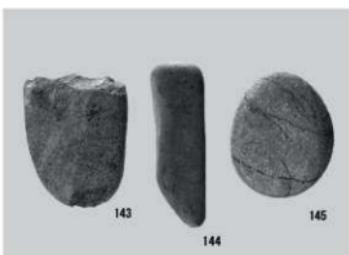
縄文時代早期石器（9）



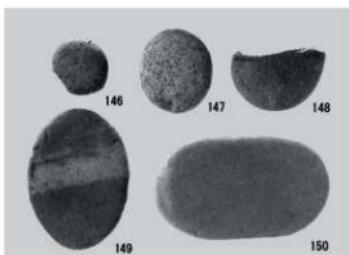
縄文時代早期石器（10）



縄文時代早期石器（11）



縄文時代早期石器（12）



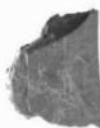
縄文時代早期石器（13）

図版16



151

縄文時代早期石器 (14)

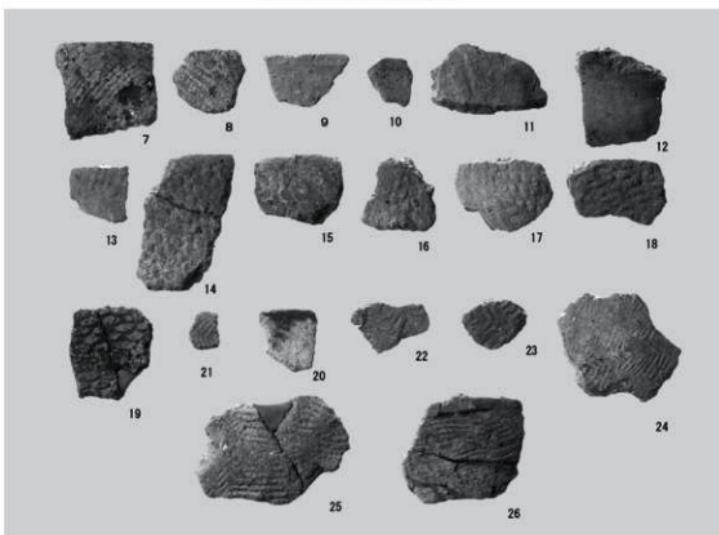


153

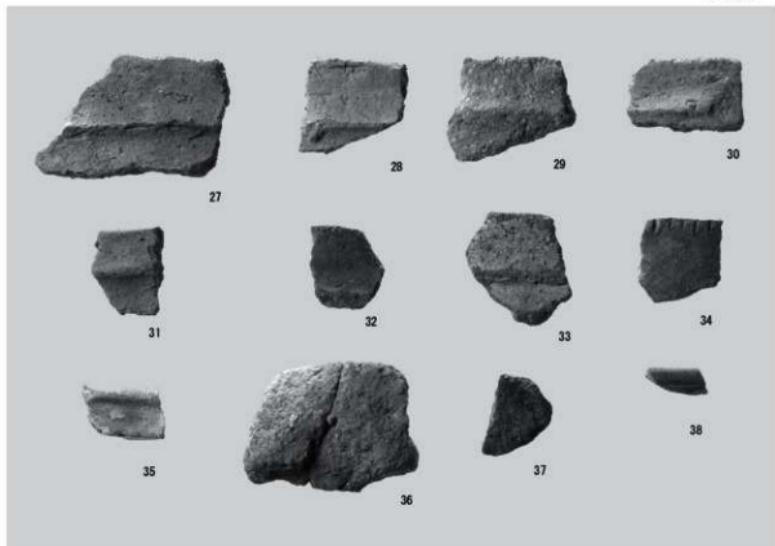


152

縄文時代早期石器 (15)



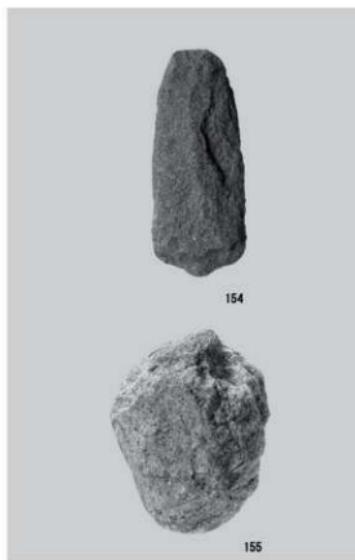
縄文時代早期土器



縄文時代晚期土器



SZ1埋納土坑出土遺物（1）



SZ1埋納土坑出土遺物（2）

图版18



弥生土器（1）



弥生土器（2）



弥生土器（3）



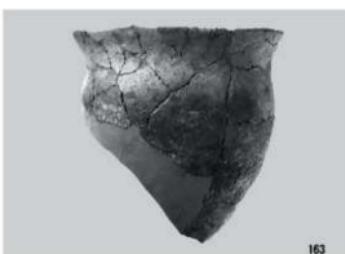
弥生土器（4）



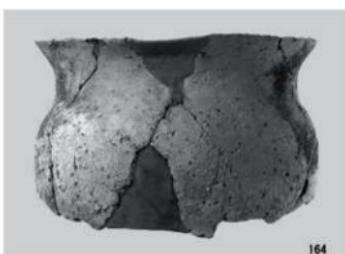
弥生土器（5）



弥生土器（6）



弥生土器（7）



弥生土器（8）



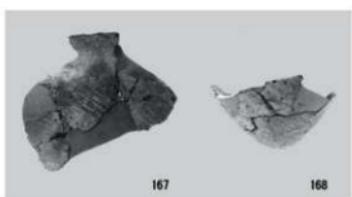
165

弥生土器（9）



166

弥生土器（10）



167

168

弥生土器（11）



169

弥生土器（12）



170

弥生土器（13）



171

弥生土器（14）

图版20



弥生土器 (15)



弥生土器 (16)



弥生土器 (17)



弥生土器 (18)



弥生土器 (19)



弥生土器 (20)



弥生土器 (21)



179

弥生土器 (22)



180

弥生土器 (23)



181

弥生土器 (24)



182

弥生土器 (25)



183

弥生土器 (26)



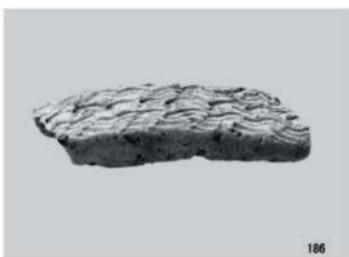
184

弥生土器 (27)



185

弥生土器 (28)



186

弥生土器 (29)

图版22



弥生土器 (30)



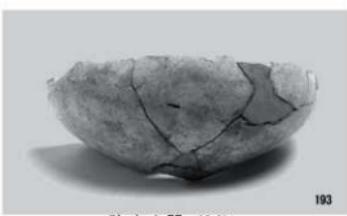
弥生土器 (31)



弥生土器 (32)



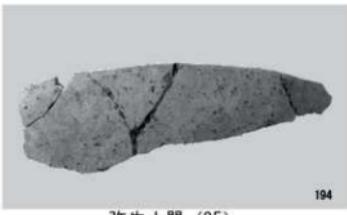
弥生土器 (33)



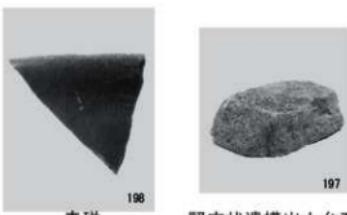
弥生土器 (34)



弥生土器 (36)



弥生土器 (35)



弥生土器 (37)

青磁

竖穴状遺構出土台石

## 報告書抄録

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第230集  
岡遺跡（第16次調査）  
馬込遺跡第2地点

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12  
2014年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地  
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660  
印刷 有限会社 いろは企画  
〒889-1603 宮崎市清武町正手3丁目19-2  
TEL 0985(85)5889 FAX 0985(85)5889

---